

宮城県文化財調査報告書第200集

宮城県文化財調査報告書第200集

角山遺跡

角山遺跡

—— 三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅳ ——

平成十七年三月

平成 17 年 3 月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

角 山 遺 跡

—— 三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅳ ——



1. 角山遺跡全景（南から）



2. 調査区全景（右が北）



3. 竖穴住居群（I区南区域）



4. S112竖穴住居跡出土土器

序 文

新たな世紀を迎え、ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに増加しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との保存協議に基づき、三陸縦貫自動車道の建設に先立って実施した桃生郡桃生町角山遺跡の発掘調査報告書です。本書が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあられた皆様に対し、厚く御礼申し上げます。次第です。

平成17年3月

宮城県教育委員会

教育長 白石 晃

例 言

1. 本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議に基づき実施した、三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設に伴う「角山遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、以下の方々および機関からご指導・ご助言、ご協力を賜った（敬称略）。

稲野裕介・君島武史・杉本 良（北上市立埋蔵文化財センター） 井上雅孝（滝沢村教育委員会） 日下和寿（岩手県教育委員会） 熊谷公男（東北学院大） 佐藤敏幸（矢本町教育委員会） 菅原祥夫（除福島県文化センター） 須田富士子（東北大院生） 高橋千晶・横山郁子（水沢市教育委員会） 中野裕平（河南町教育委員会） 西野 修（矢巾町教育委員会）
東北歴史博物館 宮城県多賀城跡調査研究所 桃生町教育委員会

4. 本書の第2図は、国土交通省国土地理院発行の「飯野川」「涌谷」「石巻」（1/25,000）の地形図を複製して使用した。
5. 本書で使用した測量原点の座標値は、日本測地系（改正前）に基づく平面直角座標第X系による。I区～III区の各測量原点は第III章に示した。なお、方位は座標北を表している。
6. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。遺構番号は、遺構の種別に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。

SI：竪穴住居跡 SX：鍛冶遺構・竪穴遺構・竪穴状遺構・周溝状遺構・その他 SB：掘立柱建物跡
SA：柵列跡・柱穴列 SD：溝跡 SK：土壇 SF：水田跡

7. 遺構平面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。
遺構全体図：1/400 竪穴住居跡：1/60 鍛冶遺構・竪穴遺構：1/60 竪穴状遺構・周溝状遺構：1/60
柵列跡：1/200 掘立柱建物跡：1/80・1/100 柱穴列：1/100 溝跡：1/60 土壇：1/40
8. 土色の記述にあたっては、『新版 標準土色帖 1994年版』（小山・竹原 1994）を用いている。
9. 本文中で使用した「灰白色火山灰」は、現在、10世紀前葉頃に降下したものと考えられている（白鳥 1980、井上・山田 1990）。

10. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

土器類：1/3 土製品：2/3・1/3・1/2 金属製品：1/2 石製品・石器：2/3・1/3・1/4

11. 遺物実測図では、以下のような場合にはスクリーン・トーンを貼って区別した。

土師器黒色処理 羽口熔着滓 土器炭化物付着

12. 本書の執筆・編集は、調査担当者との協議の後に佐久間光平が行った。
13. 本遺跡の調査成果については、現地説明会などでその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
14. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目 次

巻頭写真
序 文
例 言
目 次
調査要項

| | |
|--|-----|
| 第Ⅰ章 調査に至る経過 | 1 |
| 第Ⅱ章 遺跡の概要 | 2 |
| 1. 遺跡の位置と地理的環境 | 2 |
| 2. 周辺の遺跡 | 2 |
| 第Ⅲ章 発掘調査 | 5 |
| 1. 調査の方法と経過 | 5 |
| 敢 確認調査 | 7 |
| 柑 第1次調査 | 7 |
| 榎 第2次調査 | 8 |
| 棺 第3次調査 | 9 |
| 2. 検出遺構と遺物 | 10 |
| 敢 I 区 | |
| 1) 検出状況 | 10 |
| 2) 遺構と遺物 | 10 |
| A. 竪穴住居跡 B. 鍛冶遺構 C. 竪穴遺構 D. 竪穴状遺構・周溝状遺構 | |
| E. 柵列跡 F. 掘立柱建物跡 G. 柱穴列 H. 土壇 I. 溝跡 J. その他 | |
| K. 出土遺物 | |
| 柑 II 区 | |
| 1) 検出状況 | 134 |
| 2) 遺構と遺物 | 134 |
| A. 水田跡 B. 溝跡 C. その他 | |
| 榎 III 区 | |
| 1) 検出状況 | 137 |
| 2) 遺構と遺物 | 137 |
| A. 竪穴住居跡 B. 竪穴状遺構 C. 掘立柱建物跡 D. 柱穴列 E. 焼成遺構 | |

| | |
|---------------------|-----|
| 第IV章 考察 | 148 |
| 1. I区 | 148 |
| 敢 遺物について | 148 |
| 1) 土器類 | 148 |
| 及 分類 | 148 |
| 吸 各遺構出土土器の特徴と年代について | 157 |
| 2) その他の遺物 | 163 |
| 柑 遺構について | 164 |
| 1) 各遺構の年代について | 164 |
| 2) 各時期の様相について | 168 |
| 2. II区 | 181 |
| 3. III区 | 183 |
| 4. 角山遺跡の時期的様相について | 184 |
| 第V章 まとめ | 187 |

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

| | |
|--------------------------------|---|
| 第1図 角山遺跡の位置…………… 2 | 第44図 SI110竪穴住居跡柑……………65 |
| 第2図 角山遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 3 | 第45図 SI110住居跡出土土器敢……………66 |
| 第3図 角山遺跡と調査地点…………… 5 | 第46図 SI110住居跡出土土器柑……………67 |
| 第4図 調査区の位置…………… 6 | 第47図 SI119・SI120竪穴住居跡敢……………68 |
| 第5図 I区遺構全体図……………11・12 | 第48図 SI119・SI120竪穴住居跡柑……………69 |
| 第6図 SI02A・B竪穴住居跡と出土土器……………13 | 第49図 SI119・SI120住居跡出土土器……………70 |
| 第7図 SI03竪穴住居跡……………16 | 第50図 SI122竪穴住居跡と出土土器……………71 |
| 第8図 SI10竪穴住居跡……………17 | 第51図 SI123竪穴住居跡……………72 |
| 第9図 SI11・SI23竪穴住居跡……………18 | 第52図 SI123住居跡出土土器……………73 |
| 第10図 SI12竪穴住居跡……………20 | 第53図 SI130竪穴住居跡と出土土器……………75 |
| 第11図 SI12住居跡出土土器敢……………21 | 第54図 SI144竪穴住居跡と出土土器……………76 |
| 第12図 SI12住居跡出土土器柑……………22 | 第55図 SI148竪穴住居跡敢……………77 |
| 第13図 SI12住居跡出土土器櫃……………23 | 第56図 SI148竪穴住居跡柑……………78 |
| 第14図 SI15竪穴住居跡……………24 | 第57図 SI148住居跡出土土器……………79 |
| 第15図 SI27竪穴住居跡……………26 | 第58図 SI150・SI152・SI153竪穴住居跡……………80 |
| 第16図 SI27住居跡出土土器……………27 | 第59図 SI151竪穴住居跡と出土土器……………82 |
| 第17図 SI28竪穴住居跡敢……………29 | 第60図 SI154竪穴住居跡……………84 |
| 第18図 SI28竪穴住居跡柑……………30 | 第61図 SI154住居跡出土土器……………85 |
| 第19図 SI28住居跡出土土器……………31 | 第62図 SI155竪穴住居跡……………86 |
| 第20図 SI30竪穴住居跡……………33 | 第63図 SX24鍛冶遺構……………87 |
| 第21図 SI30住居跡出土土器……………34 | 第64図 SX25鍛冶遺構・SX26竪穴状遺構……………88 |
| 第22図 SI33竪穴住居跡……………35 | 第65図 SX121鍛冶遺構と出土土器……………90 |
| 第23図 SI33住居跡出土土器……………36 | 第66図 SX125・SX131鍛冶遺構……………91 |
| 第24図 SI51竪穴住居跡……………37 | 第67図 SX135鍛冶遺構と出土土器……………93 |
| 第25図 SI51住居跡出土土器……………38 | 第68図 SX35・SX39竪穴遺構……………94 |
| 第26図 SI52竪穴住居跡……………40 | 第69図 SX37竪穴遺構……………95 |
| 第27図 SI53竪穴住居跡……………41 | 第70図 SX104竪穴遺構……………96 |
| 第28図 SI54竪穴住居跡と出土土器……………43 | 第71図 SX26竪穴状遺構出土土器……………97 |
| 第29図 SI80竪穴住居跡……………44 | 第72図 SX04・SX29竪穴状・周溝状遺構……………98 |
| 第30図 SI85竪穴住居跡……………45 | 第73図 SX31・SX46竪穴状・周溝状遺構……………99 |
| 第31図 SI85住居跡出土土器……………46 | 第74図 SX58・SX63竪穴状・周溝状遺構……………101 |
| 第32図 SI87竪穴住居跡と出土土器……………48 | 第75図 SX73周溝状遺構……………102 |
| 第33図 SI89竪穴住居跡……………49 | 第76図 SX86・SX93竪穴状・周溝状遺構……………103 |
| 第34図 SI90竪穴住居跡と出土土器……………51 | 第77図 SX94・SX96竪穴状遺構と出土土器……………104 |
| 第35図 SI100竪穴住居跡と出土土器……………53 | 第78図 SX97・SX98・SX102竪穴状遺構……………105 |
| 第36図 SI101竪穴住居跡と出土土器……………54 | 第79図 SX115竪穴状遺構・SX116・SX134周溝状遺構と出土土器……………107 |
| 第37図 SI103竪穴住居跡……………55 | 第80図 SX117・SX118・SX128竪穴状遺構と出土土器……………108 |
| 第38図 SI106竪穴住居跡と出土土器……………57 | 第81図 SX136・SX139・SX142周溝状遺構……………110 |
| 第39図 SI108・SI158竪穴住居跡……………59 | 第82図 SA60柵列跡……………111 |
| 第40図 SI108・SI158住居跡出土土器……………60 | 第83図 SB50・SB71掘立柱建物跡……………113 |
| 第41図 SI109竪穴住居跡……………62 | 第84図 SB149・SB156掘立柱建物跡、SA157柱穴列……………114 |
| 第42図 SI109住居跡出土土器……………63 | 第85図 SA70柱穴列、南東部柱穴群……………117 |
| 第43図 SI110竪穴住居跡敢……………64 | 第86図 SK36・SK44 a・SK44 b土壇……………119 |

| | | | | | |
|-------|------------------------|-----|-------|---------------------|-----|
| 第87図 | SK62・SK66・SK92・SK124土壙 | 121 | 第108図 | SX1006焼成遺構 | 147 |
| 第88図 | SK126・SK129土壙 | 122 | 第109図 | 土師器分類図敢 | 149 |
| 第89図 | SK129土壙出土土器 | 123 | 第110図 | 土師器分類図柑 | 152 |
| 第90図 | SD49溝跡、SX01不明遺構と出土土器ほか | 125 | 第111図 | 土師器分類図栞 | 153 |
| 第91図 | 土製品 | 127 | 第112図 | 須恵器・赤焼土器分類図 | 156 |
| 第92図 | 金属製品 | 128 | 第113図 | 竪穴住居跡出土土器類敢 | 159 |
| 第93図 | 石製品敢 | 129 | 第114図 | 竪穴住居跡出土土器類柑 | 161 |
| 第94図 | 石製品柑 | 130 | 第115図 | 鍛冶遺構・土壙出土土器類 | 162 |
| 第95図 | 石製品栞 | 131 | 第116図 | I期の主な竪穴住居跡 | 170 |
| 第96図 | 石製品棺 | 132 | 第117図 | 東北部の特徴を持つ土器類 | 172 |
| 第97図 | その他の出土遺物 | 133 | 第118図 | II期の主な竪穴住居跡 | 174 |
| 第98図 | II区遺構全体図とSX40水田跡 | 135 | 第119図 | 東北部の特徴を持つ土器と関東系土器 | 175 |
| 第99図 | SD41溝跡出土遺物 | 136 | 第120図 | III期の竪穴住居跡とSI120カマド | 176 |
| 第100図 | 湿地出土土器 | 137 | 第121図 | III期の鍛冶遺構 | 177 |
| 第101図 | III区遺構全体図 | 138 | 第122図 | IV期の鍛冶遺構 | 178 |
| 第102図 | SI1001竪穴住居跡 | 139 | 第123図 | 時期が不確定な遺構 | 179 |
| 第103図 | SI1001住居跡出土遺物 | 140 | 第124図 | I区遺構の変遷図敢 | 181 |
| 第104図 | SX1012竪穴状遺構 | 142 | 第125図 | I区遺構の変遷図柑 | 182 |
| 第105図 | SB1002・SB1008掘立柱建物跡 | 143 | 第126図 | I～III区遺構の変遷 | 184 |
| 第106図 | SB1003・SB1004掘立柱建物跡 | 144 | 第127図 | 角山遺跡と関連遺跡の位置 | 184 |
| 第107図 | SB1010掘立柱建物跡、SA1007柱穴列 | 146 | | | |

表 目 次

| | | | | | |
|-----|---------------------|---|-----|-----------|-----|
| 第1表 | 三陸縦貫自動車道建設計画に伴う発掘調査 | 1 | 第3表 | 各遺構出土土器一覧 | 157 |
| 第2表 | 調査経過表 | 7 | 第4表 | 竪穴住居跡一覧 | 169 |

写真図版目次

| | | | | | |
|------|--------------------------|-----|------|-----------------------------|-----|
| 図版1 | 角山遺跡近景・調査区全景 | 193 | 図版14 | SI101・SI103竪穴住居跡 | 206 |
| 図版2 | 調査区全景（I区） | 194 | 図版15 | SI103・SI106竪穴住居跡 | 207 |
| 図版3 | 竪穴住居群・鍛冶遺構 | 195 | 図版16 | SI108・SI109・SI158竪穴住居跡 | 208 |
| 図版4 | SI02A・B・SI03・SI10竪穴住居跡 | 196 | 図版17 | SI110竪穴住居跡 | 209 |
| 図版5 | SI11・SI12・SI15・SI23竪穴住居跡 | 197 | 図版18 | SI119・SI120竪穴住居跡 | 210 |
| 図版6 | SI27・SI28・SI52竪穴住居跡 | 198 | 図版19 | SI120竪穴住居跡 | 211 |
| 図版7 | SI28竪穴住居跡 | 199 | 図版20 | SI122・SI123竪穴住居跡 | 212 |
| 図版8 | SI30・SI33竪穴住居跡 | 200 | 図版21 | SI130・SI144竪穴住居跡 | 213 |
| 図版9 | SI51・SI52竪穴住居跡 | 201 | 図版22 | SI148竪穴住居跡 | 214 |
| 図版10 | SI53・SI54竪穴住居跡 | 202 | 図版23 | SI150・SI152～SI154竪穴住居跡 | 215 |
| 図版11 | SI85・SI87竪穴住居跡 | 203 | 図版24 | SX24・SX25鍛冶遺構 | 216 |
| 図版12 | SI89竪穴住居跡 | 204 | 図版25 | SX25・SX121鍛冶遺構ほか | 217 |
| 図版13 | SI90・SI100竪穴住居跡 | 205 | 図版26 | SX121・SX125・SX131・SX135鍛冶遺構 | 218 |

| | | | | | |
|------|-----------------------|-----|------|-----------------------------------|-----|
| 図版27 | SX35・SX37・SX39竪穴遺構 | 219 | 図版42 | SI85・SI87・SI90・SI100・SI106住居跡出土土器 | 234 |
| 図版28 | SX104竪穴遺構、SX31竪穴状遺構ほか | 220 | 図版43 | SI106・SI158・SI108～SI110住居跡出土土器 | 235 |
| 図版29 | SX117竪穴状遺構、SA60柵列跡ほか | 221 | 図版44 | SI110住居跡出土土器 | 236 |
| 図版30 | SB50・SB71掘立柱建物跡ほか | 222 | 図版45 | SI119・SI120・SI122・SI123住居跡出土土器 | 237 |
| 図版31 | SK36土壇ほか、Ⅱ区SX40水田跡ほか | 223 | 図版46 | SI123住居跡出土土器 | 238 |
| 図版32 | Ⅲ区SI1001竪穴住居跡ほか | 224 | 図版47 | SI123・SI130・SI144・SI148住居跡出土土器 | 239 |
| 図版33 | SI02・SI12住居跡出土土器 | 225 | 図版48 | SI148・SI151・SI154住居跡出土土器 | 240 |
| 図版34 | SI12住居跡出土土器 | 226 | 図版49 | SX121・SX135鍛冶遺構ほか出土土器 | 241 |
| 図版35 | SI12住居跡出土土器 | 227 | 図版50 | SK129土壇出土土器 | 242 |
| 図版36 | SI12・SI27住居跡出土土器 | 228 | 図版51 | SX115竪穴状遺構ほか出土土器 | 243 |
| 図版37 | SI27・SI28住居跡出土土器 | 229 | 図版52 | I区土製品・金属製品ほか | 244 |
| 図版38 | SI28・SI30住居跡出土土器 | 230 | 図版53 | I区石製品 | 245 |
| 図版39 | SI33住居跡出土土器 | 231 | 図版54 | I区その他の出土遺物、Ⅱ区SD41溝跡出土遺物 | 246 |
| 図版40 | SI51住居跡出土土器 | 232 | 図版55 | Ⅱ区湿地、Ⅲ区SI1001住居跡出土土器 | 247 |
| 図版41 | SI51・SI54・SI85住居跡出土土器 | 233 | 図版56 | Ⅲ区SI1001住居跡出土遺物 | 248 |

調 査 要 項

遺 跡 名：角山遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号70029）

遺跡記号：SL

所 在 地：宮城県桃生郡桃生町太田字角山

調査原因：三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間・面積：

| | | |
|-------|--------------------|--------|
| 確認調査 | 平成13年10月16日～10月25日 | 1,200㎡ |
| 第1次調査 | 平成14年4月8日～6月17日 | |
| | 10月15日～12月10日 | 2,900㎡ |
| 第2次調査 | 平成15年7月2日～12月2日 | 7,400㎡ |
| 第3次調査 | 平成16年8月2日～8月3日 | 95㎡ |

調 査 員：

| | | | | | | |
|-------|------|-------|-------|------|------|------|
| 確認調査 | 須田良平 | 吉野 武 | 引地弘行 | | | |
| 第1次調査 | 須田良平 | 相原淳一 | 奥山芳明 | 天野順陽 | 白崎恵介 | 千葉直樹 |
| 第2次調査 | 相原淳一 | 岩見和泰 | 佐久間光平 | 奥山芳明 | | |
| | 村田晃一 | 三好秀樹 | 白崎恵介 | 田中政幸 | | |
| 第3次調査 | 須田良平 | 佐久間光平 | | | | |

調査協力：桃生町教育委員会

第 I 章 調査に至る経過

太平洋沿岸の仙台市を起点として岩手県宮古市に至る三陸縦貫自動車道路整備事業計画が立案・検討される中で、三陸縦貫自動車道「矢本石巻道路」については平成8年度から工事に着手する事業計画が決定した。この「矢本石巻道路」は、石巻河南ICを起点に石巻市・河南町を通り、さらに旧北上川を渡って桃生町の桃生IC（仮称）に至るものである。事業計画では、幅23.5mの4車線を整備するにあたり、地形の起伏に沿って大規模な切土や盛土を行うものであった。こうした経緯を受けて、宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局は、予定路線の範囲に含まれる周知の遺跡について保存協議を進め、遺跡への影響を避けるために一部区間についてはルートの変更を行った。また、分布調査を実施して新たな遺跡の有無を確認するとともに周知遺跡については確認調査を行い、これらの結果に基づいて再協議を重ね、遺跡保存と道路整備事業との調整を図ってきた。

こうした中で、平成12年度から予定路線内の遺跡の発掘調査に順次着手した。平成12年度は河北町沢田山西遺跡・新田東遺跡の確認調査を実施し、平成13年度からは両遺跡の事前調査、およびこれと並行して桃生町太田窯跡・桃生城跡・角山遺跡などの確認調査も順次進めた。平成14・15年度には角山遺跡など8遺跡の事前調査を実施した（第1表）。この間、新田東遺跡や沢田山西遺跡などについては調査成果の報告を行っている。

なお、この三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設に伴う発掘調査は平成16年度以降も継続されており、並行して「桃生登米道路」建設関連の協議と調査も一部実施されている。

第1表 三陸縦貫自動車道建設計画に伴う発掘調査

| 調査年度 | 遺跡名 | 所在地 | 調査面積 (㎡) | 調査期間 | 報告書 |
|-------------|--------|-----|----------|-----------------------|---------------|
| 2001 (平成13) | 沢田山西遺跡 | 河北町 | 2,080 | 4.09~4.20 10.01~10.13 | 宮城県教育委員会 2002 |
| | 新田東遺跡 | 河北町 | 8,500 | 4.23~12.10 | 宮城県教育委員会 2003 |
| 2002 (平成14) | 角山遺跡 | 桃生町 | 2,900 | 4.08~6.17 10.15~12.10 | (本報告書) |
| | 沢田山西遺跡 | 河北町 | 1,000 | 6.03~10.22 | 宮城県教育委員会 2004 |
| | 崎山B遺跡 | 河北町 | 6,000 | 6.03~7.23 | 宮城県教育委員会 2004 |
| 2003 (平成15) | 太田窯跡 | 桃生町 | 2,000 | 6.17~8.01 | |
| | 角山遺跡 | 桃生町 | 7,400 | 7.02~12.02 | (本報告書) |
| | 沢田山西遺跡 | 河北町 | 1,200 | 5.18~7.18 | 宮城県教育委員会 2004 |
| | 八幡遺跡 | 桃生町 | 2,540 | 7.17~8.07 9.01~10.08 | 宮城県教育委員会 2004 |
| | 細谷B遺跡 | 桃生町 | 900 | 11.12~12.11 | |
| | 万歳山C遺跡 | 桃生町 | 700 | 4.07~5.16 | 宮城県教育委員会 2004 |
| 2004 (平成16) | 桃生城跡 | 桃生町 | 1,500 | 4.30~6.06 | |
| | 角山遺跡 | 桃生町 | 95 | 8.02~8.03 | (本報告書) |

宮城県教育委員会

2002『沢田山西遺跡―三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ―』宮城県文化財調査報告書第189集

2003『新田東遺跡―三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ―』宮城県文化財調査報告書第191集

2004『沢田山西遺跡ほか―三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ―』宮城県文化財調査報告書第196集

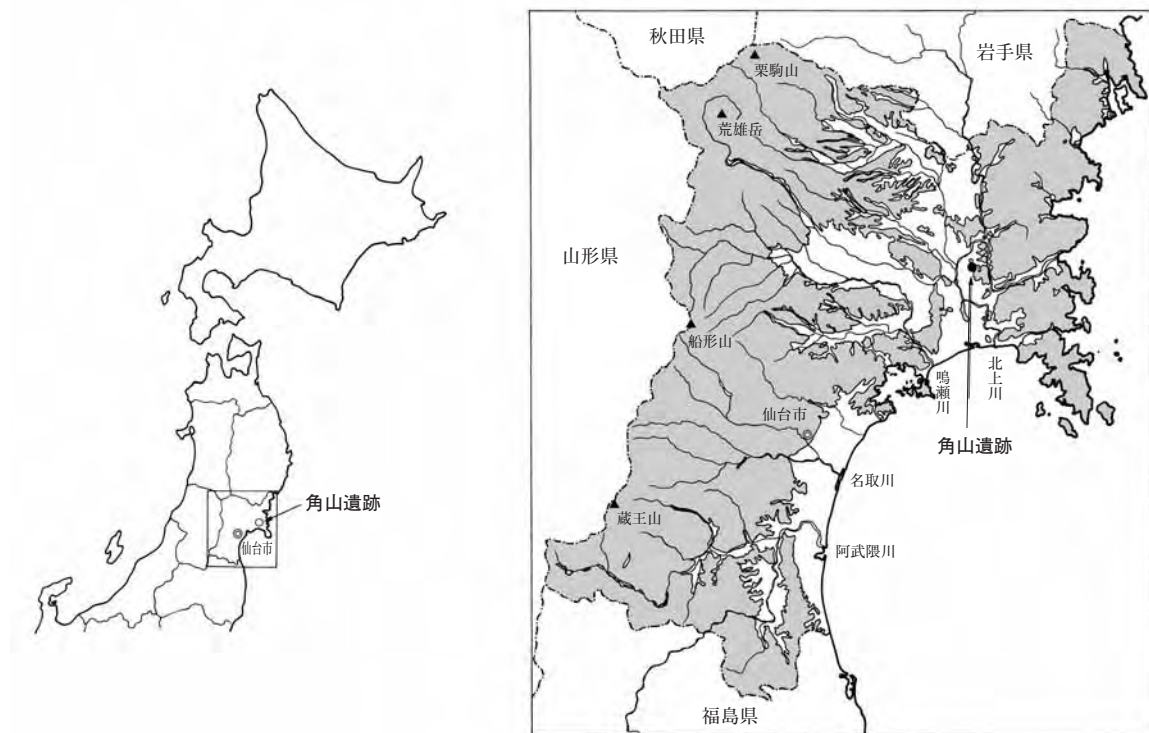
第Ⅱ章 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

角山遺跡は宮城県桃生郡桃生町太田字角山に所在する。桃生町は宮城県の北東部に位置し、地形的には北上川と旧北上川で囲まれた石巻平野に属する沖積地と北上山地の南端にあたる丘陵地帯からなっている。遺跡は、旧北上川沿いにある町中心部から東へ約1.6km、町東部を流れる北上川によって分断された丘陵地帯から派生する小さな狭い丘陵上に立地している（第1図・第2図）。この丘陵は南西から北東方向に細長く伸びた標高25mほどの小丘陵で、南東側や北西側からは小さな沢が入り、平坦地の少ない地形となっている。

遺跡は、この小丘陵の南東斜面部から頂部にかけて南北450m・東西250mほどの広がりをもっている。現況では畑地や水田として利用されている区域が多い。一方、遺跡の立地する丘陵周辺の低地には沖積地が広がり、遺跡の南東側にも狭い沖積地が丘陵に沿って北東へと伸びている。

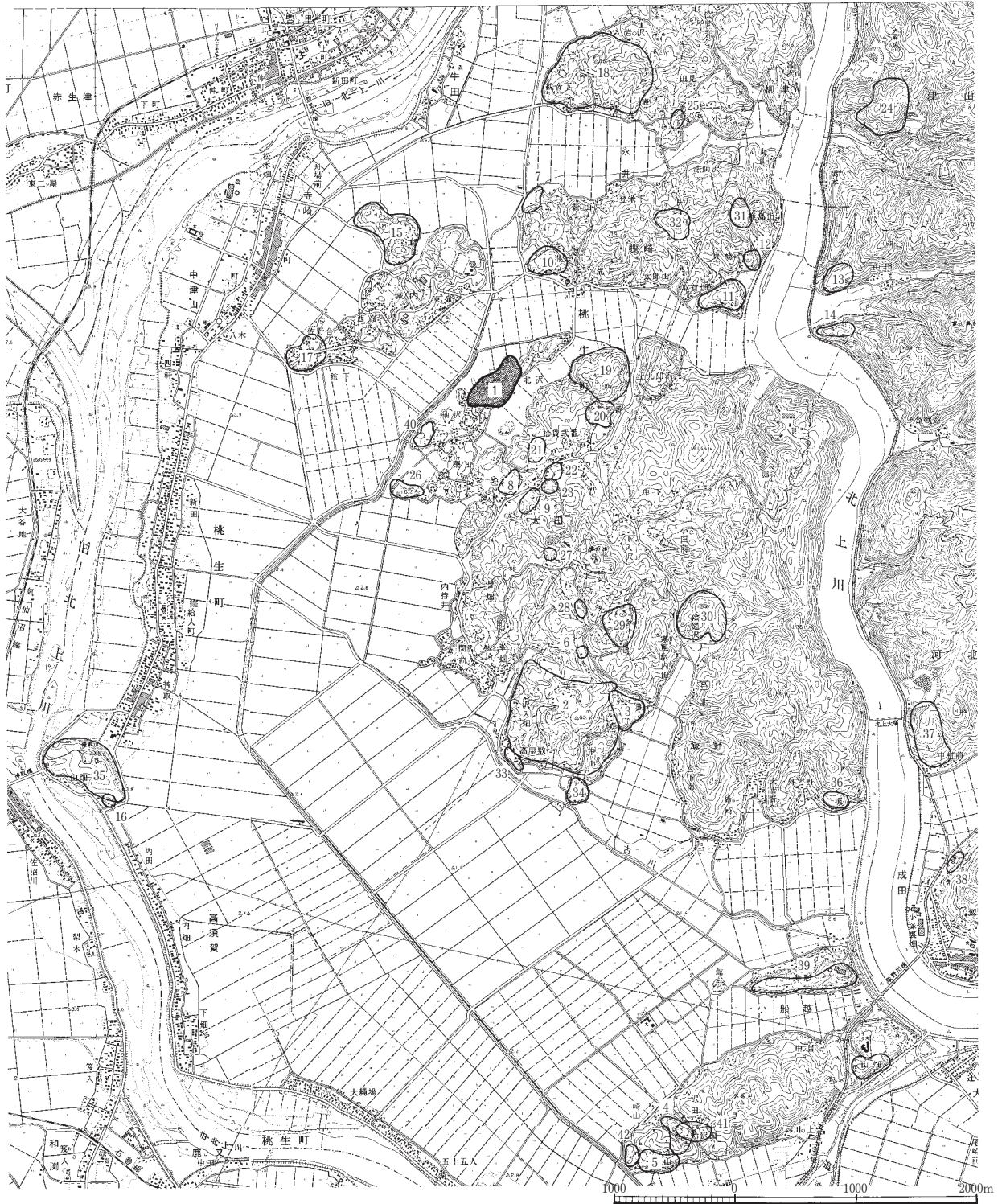
なお、本遺跡は奈良・平安時代を中心とする遺跡として登録されているが、本格的な発掘調査は今回が初めてである。



第1図 角山遺跡の位置

2. 周辺の遺跡

本遺跡周辺の沖積地には遺跡はほとんどみられないが、丘陵やその縁辺部には点在している（第2図）。時期的には古代の遺跡が中心である。



| No. | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | No. | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | No. | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 |
|-----|-----------|------|--------|------------------|-----|---------|------|--------|----------|-----|-------|------|-------|---------|
| 1 | 角山遺跡 | 丘陵 | 集落・水田 | 縄文・古墳後・奈良・平安・中近世 | 15 | 沢山城跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 | 29 | 問答山遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 古代 |
| 2 | 桃生城跡 | 丘陵 | 城柵 | 奈良・平安 | 16 | 神取御殿山窯跡 | 丘陵斜面 | 窯跡 | 近世 | 30 | 赤間館遺跡 | 丘陵斜面 | 城館 | 中世 |
| 3 | 新田東遺跡 | 丘陵 | 包含層・集落 | 縄文前・古墳前・奈良・平安・近世 | 17 | 中津山城跡 | 丘陵 | 城館 | 中世・近世 | 31 | 陣ヶ峯館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 |
| 4 | 沢田山西遺跡 | 丘陵 | 集落 | 縄文・奈良・平安・近世 | 18 | 永井館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 | 32 | 黄竜淵館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 |
| 5 | 崎山B遺跡 | 丘陵 | 墓地・散布地 | 平安・近世 | 19 | 阿倍館跡 | 丘陵麓 | 城館 | 中世 | 33 | 高屋敷遺跡 | 丘陵麓 | 散布地 | 古代 |
| 6 | 万歳山C遺跡 | 丘陵 | 集落 | 縄文中・後・古代 | 20 | 日高見神社遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文・古墳後 | 34 | 飯野館跡 | 丘陵麓 | 城館 | 中世 |
| 7 | 八幡遺跡 | 丘陵 | 集落・水田 | 縄文・平安 | 21 | 拾貫老番遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 奈良・平安・近世 | 35 | 神取山城跡 | 丘陵 | 城館・窯跡 | 中世・近世 |
| 8 | 太田窯跡 | 丘陵 | 窯跡・集落 | 奈良・平安・近世 | 22 | 宗全山遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文・古代 | 36 | 外吉野遺跡 | 丘陵麓 | 散布地 | 古代 |
| 9 | 細谷B遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 縄文中・奈良・平安 | 23 | 細谷遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文晩期・古代 | 37 | 山崎館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 |
| 10 | 壇ノ森館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 | 24 | 館ヶ森館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 | 38 | 成田遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 |
| 11 | 櫻崎館跡 | 丘陵麓 | 城館 | 中世 | 25 | 十所貝塚 | 丘陵斜面 | 貝塚・散布地 | 縄文早・中・古代 | 39 | 後谷地遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 |
| 12 | 櫻崎貝塚 | 丘陵麓 | 貝塚 | 縄文早・中 | 26 | 太田館跡 | 丘陵麓 | 城館 | 中世 | 40 | 袖沢古墳群 | 丘陵 | 古墳 | 古墳 |
| 13 | 山田館跡(館山城) | 丘陵 | 城館・散布地 | 古代・中世 | 27 | 万歳山B遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 奈良・平安 | 41 | 沢田山貝塚 | 丘陵斜面 | 貝塚 | 縄文後期・晩期 |
| 14 | 山田開古墳 | 丘陵斜面 | 古墳 | 古墳後 | 28 | 万歳山A遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文 | 42 | 崎山A遺跡 | 丘陵麓 | 散布地 | 縄文 |

第2図 角山遺跡の位置と周辺の遺跡

縄文時代の遺跡としては、北上川沿いに早期の檜崎貝塚甘がある。1950年代に発掘調査が行われ、カキ・ハマグリ・ヤマトシジミなどを主体とする貝層、人骨などが発見されている。貝塚では他に、早期の十所貝塚諫、中期～晩期の深山貝塚などが知られている。また、丘陵地には中期の細谷B遺跡澗、晩期の細谷遺跡莞などがみられる（桃生町史編纂委員会 1996）。

弥生時代の遺跡はほとんど知られていない。古代を主体とする新田東遺跡榎や本遺跡で弥生土器の破片が若干数出土しているが、遺構については確認されていない。

古墳時代もほぼ同様であるが、唯一、新田東遺跡では前期の竪穴住居跡が1軒発見されている（柳沢・茂木・西村 2003）。また、本遺跡から南西約700mの地点には、埴輪をもつ袖沢古墳群玩^{（註1）}がある。

これに対して、古代を主体とする遺跡は比較的多く分布する。中でも、本遺跡の南方約2.8 kmにある桃生城跡柵は著名な城柵遺跡である。『続日本紀』によれば、桃生城は天平宝字2年（758）頃から造営が始まり、翌3年（759）秋頃には完成し、宝亀5年（774）7月には海道蝦夷の攻撃によって一部が破壊されたことなどが知られる。宮城県多賀城跡調査研究所が昭和49・50年度、平成6～13年度まで継続的に調査し、遺跡の概要が明らかになってきている（阿部・佐藤 1998、阿部・吾妻 2002 ほか）。この桃生城跡の東隣には、平成13年度に発掘調査が行われた新田東遺跡榎がある。桃生城の存続期（8世紀第3四半期頃）を中心とする大規模な集落跡で、5軒の焼失住居跡を含む42軒の竪穴住居跡や15棟の掘立柱建物跡などが発見され、桃生城の造営・維持に関わった人々（柵戸や鎮兵）の集落跡と考えられている（柳沢・茂木・西村 2003）。また、この新田東遺跡から南へ約3.5 kmの丘陵地には、奈良（8世紀後半）と平安時代（9世紀頃～10世紀前葉以前）の集落跡が発見された沢田山西遺跡棺（須田 2002、須田・相原 2004）がある。

この他、本遺跡の北方約1.5kmには2軒の竪穴住居跡と灰白色火山灰に覆われた水田跡が発見された八幡遺跡汗（須田・相原 2004）、南方約1.5kmには桃生城に須恵器や瓦を供給したとみられる太田窯跡漢などがある。

中世では、太田館跡貫、安部館跡缶、壇ノ森館跡灌、沢山城跡竿などが、周辺の丘陵先端部に点在している。

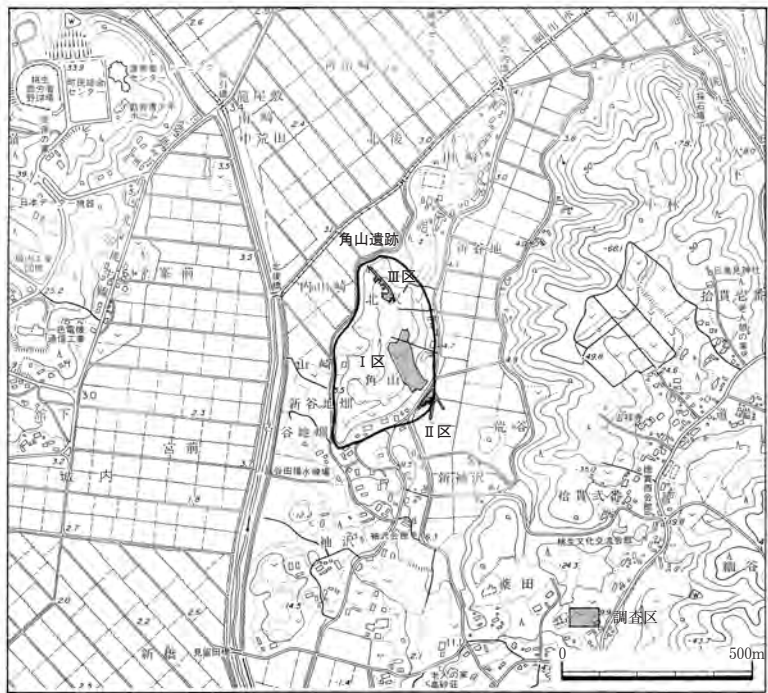
註1. 2004年3月に発見された遺跡である。開田や土取りで大部分が削平されているが、現状では少なくとも古墳2基の存在が認められ、周溝などが一部残存していることが確認されている。採集された埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪があり、年代は5世紀後半頃と推定される（2004年度に報告予定）。

第三章 発掘調査

1. 調査の方法と経過

三陸縦貫自動車道「矢本石巻道路」の本線は、角山遺跡が立地する狭長な小丘陵を斜めに横断する計画であることから、調査区は地形と遺構の分布状況などをもとに3区分し、Ⅰ区：丘陵頂部～南斜面部、Ⅱ区：沖積部、Ⅲ区：丘陵北側頂部とした（第3図・第4図）。

最も調査面積の広いⅠ区では、工事用のコンクリート杭を測量原点BM1とし、これと道路の中央杭BM2を結ぶ線を東西の基準線に設定して、東西の基準線およびこれと直交する南北軸をもとに3m方眼を組み、グリッドラインは先の測量原点を(0, 0)にして東西・南北方向の距離で表した。N100・E100とした場合は、原点からそれぞれ北へ100m、東へ100mの距離であることを示す。遺構の実測図は、平・断面図とも基本的に1/20の縮尺で作成した。また、調査区や等高線などの作図には電子平板による測量を取り入れた。

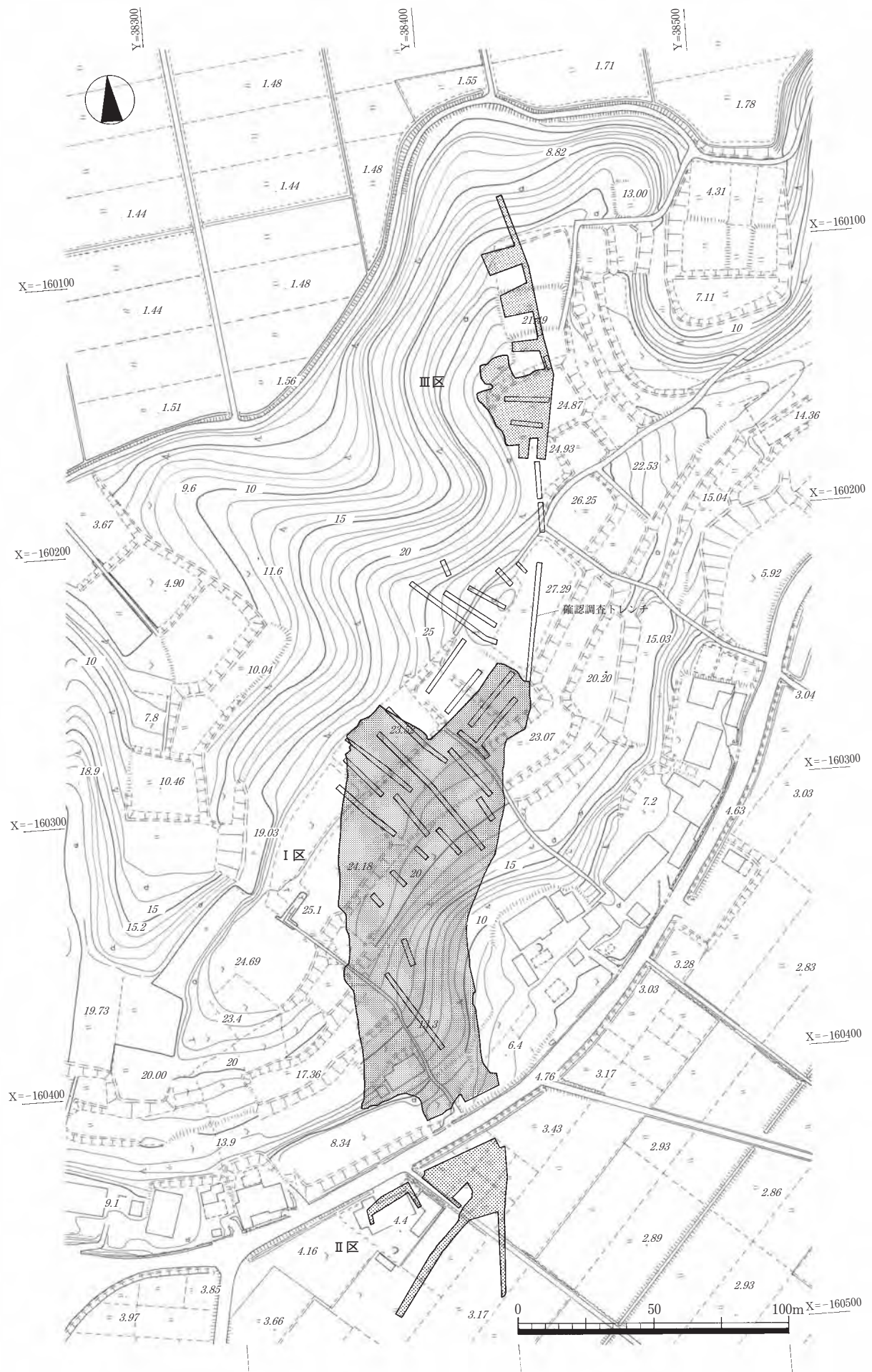


第3図 角山遺跡と調査地点

Ⅱ区では、遺構が水田跡や溝跡に限られていたため、水田区域については任意の点(T1・T2)を基準にして3m方眼を組んで遺構の実測図(S=1/20)を作成し、調査区全体や溝跡については工事用のコンクリート杭(R3・R2)をそれぞれBM3・BM4の基準点として設定し、平板測量(S=1/100)を採用した。

Ⅲ区では、工事用のコンクリート杭(R23・R26)をそれぞれBM5・BM6の基準点として設定し、Ⅰ区と同様に3m方眼を組んで遺構の実測図作成(S=1/20)を行ったが、遺構がほとんど見られなかった北斜面については平板測量(S=1/100)を用いた。

| | | | | |
|-----|-----|-----|-----------------|---------------|
| 基準点 | Ⅰ区： | BM1 | X = -160409.466 | Y = 38357.295 |
| | | BM2 | X = -160402.842 | Y = 38374.032 |
| | Ⅱ区： | BM3 | X = -160425.558 | Y = 38403.240 |
| | | BM4 | X = -160445.351 | Y = 38402.643 |
| | Ⅲ区： | BM5 | X = -160170.613 | Y = 38436.388 |
| | | BM6 | X = -160131.106 | Y = 38439.202 |



第4図 調査区の位置

なお、記録写真は、6×7サイズのモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルを使用した。また、デジタルカメラ（210万画素）も適宜用いた。

発掘調査は、平成13年度～15年度にかけて第2表のような経過で行われた。それぞれの調査の概要は以下の通りである。

第2表 調査経過表

| | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005年 |
|------|--------|------|------|------|-------|
| 確認調査 | I・III区 | | | III区 | |
| 1次調査 | I区 | | | | |
| 2次調査 | I～III区 | | | | |
| 3次調査 | | | | | II区 |

敢 確認調査（2001年度）

確認調査は、2001年10月17日～25日に実施した。丘陵部の本線予定区域を対象に、長さ5～30m・幅2mのトレンチを東西・南北方向に35本設定した。これらのトレンチは、地形を考慮して丘陵頂部の平坦面や南斜面部を中心に設定した（写真1）。

この調査の結果、畑作や開田のために丘陵頂部の平坦面では遺構がほとんど残っていないが、南側の斜面部では古代の竪穴住居跡や土壇などが分布することが判明した。また、小さな谷を挟んだ北側の頂部にも、数は少ないが古代の竪穴住居跡や時期不明の掘立柱建物跡などが分布することがわかった。

出土した遺物は、主に古代の土師器や須恵器であった。ただし、縄文土器・石器などもわずかながら含まれており、当遺跡は少なくとも縄文と古代の複合遺跡であることがわかった。また、この確認調査から本線予定区域にかかる遺跡の面積はI区：約8,200㎡、III区：約1,000㎡になることが明らかになった。



写真1 確認調査状況（I区）

柑 第1次調査（2002年度）

前年度の確認調査の結果を受けて、2002年度からは自動車道建設予定地内の事前調査に入るようになった。河北町の沢田山西遺跡など他遺跡の発掘調査も進める必要があったことから、第1次調査は4月8日～6月17日と10月15日～12月10日の期間に分けて行った。

4月8日にはI区の丘陵南斜面側から表土剥ぎに入った。当初、遺構の分布は少ないと予想していた傾斜がややきつい南斜面下から、竪穴住居跡や鍛冶遺構などが多く検出された。しかし、いずれの遺構も削平を受けており、半分程度しか残存しないものが多かった。表土剥ぎおよび遺構の精査が進

むにつれ、南斜面側には予想以上に遺構が多く分布し、遺構が重複する例も多いことが判明した。こうした遺構の分布状況に加え、排土置き場の確保などの問題が生じたため、本年度はⅠ区南半部に限定して調査を進め、Ⅰ区北半部については次年度以降に調査を行うことにした。結局、Ⅰ区については事前対象面積約8,200㎡のうち4,700㎡について表土剥ぎを行い、約2,200㎡について精査を行った。この段階では竪穴住居跡25軒、鍛冶遺構（炉跡）2基、竪穴遺構3基、掘立柱建物跡2棟、土壇22基などを検出した。

6月10日～17日には、丘陵下の低地部Ⅱ区の確認調査と事前調査約700㎡を実施した。調査の結果、10世紀前葉頃に降灰した「灰白色火山灰」に覆われた古代の水田跡や中世の溝跡などを検出した。

Ⅲ区（丘陵北側頂部：約1,000㎡）については、Ⅰ区の調査日程が変更になったことを受けて、次年度に調査を行うことになった。

Ⅱ 第2次調査（2003年度）

Ⅰ区については、まず、前年度の未調査区域約3,500㎡の表土剥ぎを行うことにした。そして、この区域と前年度に表土剥ぎのみにとどまっていた区域をあわせた約6,000㎡について、あらためて遺構の密度を確認した上で本年度に調査可能な面積を算出し、その範囲に限定して調査を行うことにした。また、Ⅰ区南西側の側道部分の調査約400㎡が新たに付け加わることになり、この区域についても表土剥ぎを行い、遺構の状況を確認することになった。Ⅱ区（低地部）では旧個人住宅区域（約100㎡）、Ⅲ区（丘陵北側頂部）では未買収地を除いた区域（約1,000㎡）の事前調査を行う予定であった。

7月2日からⅢ区の調査を開始した。調査の結果、古代の竪穴住居跡1軒、中・近世以降の掘立柱建物跡3棟などを検出した。Ⅲ区の調査は7月24日に終了した。その後、Ⅱ区の調査に入った。しかし、盛土のため遺構面までは3m近い深さがあり湧水も激しいことから、この区域については次年度に対応することになった。

Ⅰ区の調査（約6,400㎡）は、8月4日から開始した（写真2）。調査予定範囲の表土を除去した結果、遺構は予想より多く確認された。しかし、遺構の残りが悪いことから、当年度中にⅠ区の調査を終了することが可能と判断し、急遽、全域を対象に事前調査を進めることになった。結局、南斜面部や東の谷部斜面から竪穴住居跡16軒、鍛冶遺構4基、竪穴遺構1基、柵列跡1条、掘立柱建物跡2棟、土壇4基などを新たに検出した。調査終了は12月10日であった。



写真2 2次調査の状況（西から）

なお、11月8日松には、一般を対象とし

た現地説明会（参加者約120名）を開催した。

棺 第3次調査（2004年度）

前年度に調査を中断したⅡ区の旧個人住宅区域の調査約100㎡である。事前に厚い盛土を除去して調査を進めた結果、前々年度に検出した水田跡の延びをごく一部確認できた。しかし、全体的には西側へ向かって徐々に傾斜して湿地になることがわかった。調査は8月2日～3日の2日間で終了した。

なお、Ⅲ区では、未買収地であった南西区域の調査が可能になったことから確認調査を実施（11月15日～19日）し、古代の竪穴住居跡1軒などを検出している。この区域については2005年度以降に事前調査が実施される予定である。

2. 検出遺構と遺物

敢 I 区

1) 検出状況

I 区は標高25mほどの低平な小丘陵上にあり、東側から入る小さな谷を含んだ斜面部と丘陵頂部からなっている。水田と畑地の造成のために丘陵頂部はかなり削平を受け、斜面部は部分的に段々に削られていた。遺構は、この丘陵斜面部から頂部にかけて分布していた（第5図）。検出面は、表土（厚さ20～40cm）下のにぶい黄褐色シルト～砂質シルト層面である。この層の下は、丘陵基盤の凝灰岩の風化した小礫を多く含む層～基盤凝灰岩になる。

丘陵頂部では、検出できた遺構数は少ない。削平のために残存状況も不良であった。一方、小さな谷を含む南斜面部では、竪穴住居跡をはじめとして遺構が多数確認された。竪穴住居跡には重複するものも多く、3～5軒の重複関係がみられる場合もあった。しかし、傾斜が急な斜面部に立地するために斜面下部側は削られ、半分程度しか残存していないものが多かった。中には、竪穴住居跡の壁面あるいは周溝に類似する部分が残っていても、残存する部分のみでは竪穴住居跡に含めてよいものかあるいはほかの遺構として扱うべきなのか判断がつかなかったもの（以下では竪穴状遺構・周溝状遺構として扱った）も多くみられた。

2) 遺構と遺物

検出遺構は、竪穴住居跡41軒、鍛冶遺構6基、竪穴遺構4基、竪穴状遺構・周溝状遺構24基、柵列跡1条、掘立柱建物跡4棟、柱穴列7条、土壙32基、溝跡9条などである（第5図）。

これらの遺構の時期は古墳時代後期～奈良・平安時代を主体とするが、掘立柱建物跡や土壙・溝跡などの一部には中・近世以降や時期不明なものがある。

遺物は、古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器や須恵器・赤焼土器、土製品（土玉・羽口など）、石製品（砥石など）、金属製品（鉄鎌・刀子など）、その他（鉄滓）が出土している。また、この時期の遺構堆積土などから縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器、古墳時代中期の土器・石製模造品などが若干数出土している。

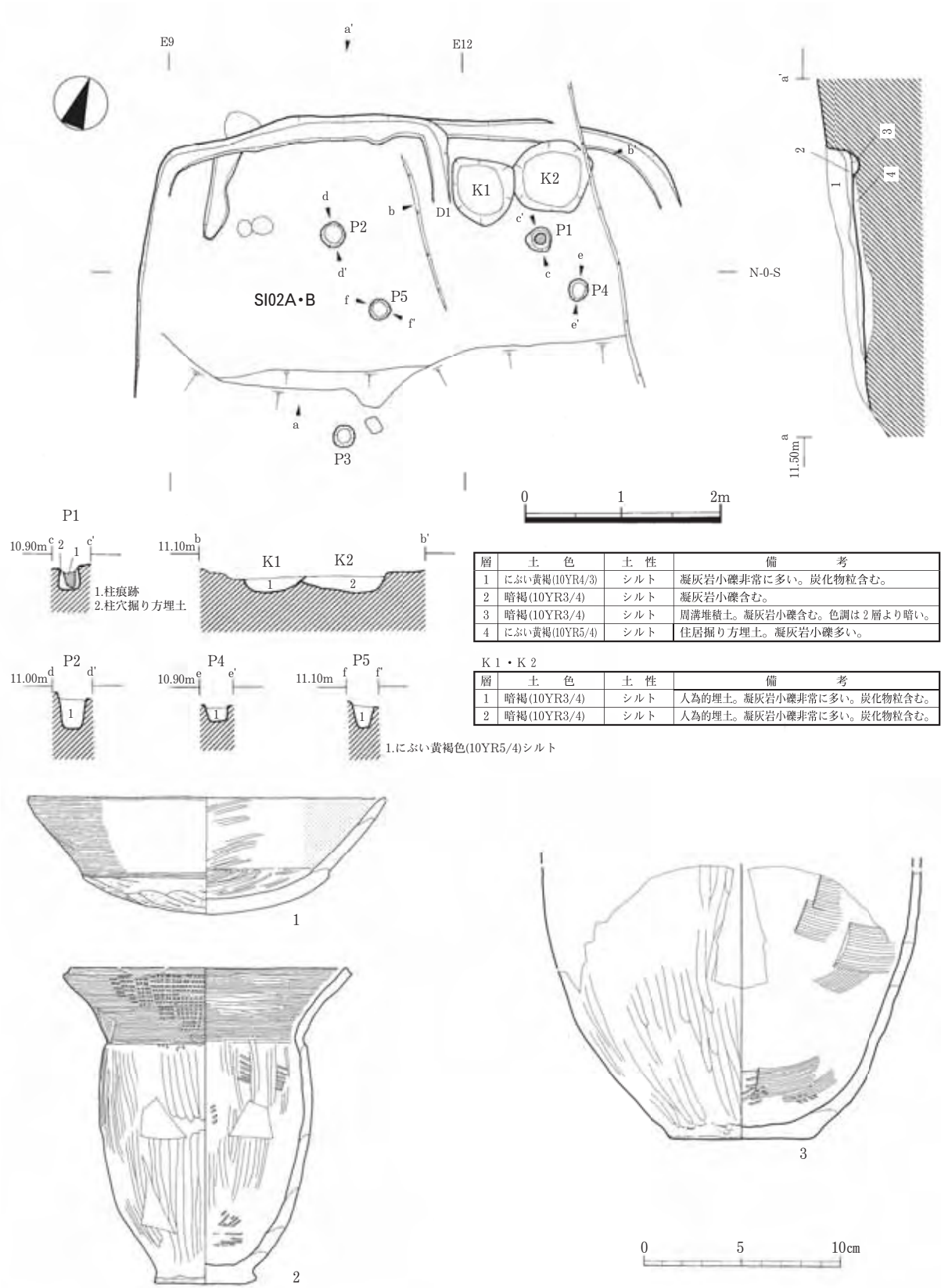
以下、各遺構と遺物の説明を行う。なお、遺構の位置を示す際に北区域・南区域などとしているが、概ね調査区中央の谷を境に分けている。また、土器の説明では、製作にロクロを使用しているものを「ロクロ調整」、使用していないものを「非ロクロ調整」としている。

A. 竪穴住居跡

【SI02A・B住居跡】（第6図、図版4-1）

南区域の南斜面で検出した。後世の削平のために残存は不良で、北半部のみを確認した。他遺構との重複はない。

この住居跡は西へ50cmほど拡幅（SI02A→SI02B）している。住居を拡張する際には、東辺はそのまま利用し、古い住居の周溝北辺を中央付近から造り直している。同時に、貯蔵穴状土壙を若干西側へ移動（K2→K1）したとみられる。主柱穴とみられる柱穴は3個（P1～P3）検出できた。主柱穴



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-----------------|-----|--------------------------|
| 1 | にぶい黄褐色(10YR4/3) | シルト | 凝灰岩小礫非常に多い。炭化物粒含む。 |
| 2 | 暗褐色(10YR3/4) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 3 | 暗褐色(10YR3/4) | シルト | 周溝堆積土。凝灰岩小礫含む。色調は2層より暗い。 |
| 4 | にぶい黄褐色(10YR5/4) | シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩小礫多い。 |

| K1・K2 | | 土色 | 土性 | 備考 |
|-------|--------------|-----|--------------------------|----|
| 1 | 暗褐色(10YR3/4) | シルト | 人為的埋土。凝灰岩小礫非常に多い。炭化物粒含む。 | |
| 2 | 暗褐色(10YR3/4) | シルト | 人為的埋土。凝灰岩小礫非常に多い。炭化物粒含む。 | |

1. にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト

| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|------|-----|---------|-------|--------|---|------|-----|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 坏 | B床面 | 3/5 | 18.4 | — | 6.0 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 33-1 | I-1 |
| 2 | 土師器 甕 | B床面 | 1/2 | 14.7 | 5.2 | 16.1 | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 底:ケズリ 内:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(胴)ハケメ→ヘラミガキ | 33-2 | I-2 |
| 3 | 土師器 甕 | B堆1層 | 1/4 | — | (7.4) | (13.8) | 外:ヘラミガキ 底:木葉痕あり 内:ハケメ→ヘラナデ | | I-3 |

第6図 SI02A・B 竪穴住居跡と出土土器

はSI02A・Bとも同位置であった可能性がある。カマドはおそらく東辺側に付設されていたものとみられるが、削平のために検出されていない。

[SI02A]〔平面形・規模〕南側が削平されているため全体の平面形や規模は不明であるが、東西は4.8mほどで、方形状になるものとみられる。

〔方向〕北辺でみると東で北へ約20° 偏する。

〔壁〕床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北東隅で床面から28cmである。

〔床面〕地山を床面にしていたとみられる。床面には多少凹凸があり、南側に緩やかに傾斜している。

〔柱穴〕主柱穴はB期と同位置であった可能性がある。

〔カマド〕カマドは不明である。

〔周溝〕わずかに残る西辺部分以外はSI02Bの周溝とほぼ同位置である。西辺は上幅が14～30cm、深さが1～6cmで、底面はほぼ平坦である。断面形はU字状を呈する。堆積土は地山凝灰岩小礫やブロックを含んだ暗褐色シルトの人為的なものである。

〔貯蔵穴状土壌〕貯蔵穴状の土壌（K2）は北東隅にある。SI02Bの貯蔵穴とみられるK1と一部重複し、これより古い。平面形はやや歪んだ円形を呈する。径は75～80cm、深さは21cmほどで、断面形は皿状を呈する。底面はやや東側に傾斜している。堆積土は炭化物を含んだ暗褐色シルトで、凝灰岩小礫を非常に多く含んでおり、人為的に埋め戻されたものとみられる。

〔その他〕ピットを2個（P4・P5）検出した。いずれにも柱痕跡は確認されていない。平面形はほぼ円形で、径20～22cm、深さは16～35cmほどである。埋土はやや粘性を帯びた褐色シルトを基調としており、地山の凝灰岩小礫を含んでいる。

〔出土遺物〕貯蔵穴状土壌（K2）堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕の小破片が出土しているのみである。

[SI02B]〔平面形・規模〕南側が削平されているため全体の平面形や規模は不明であるが、東西は5.2mほどで、方形状を呈するとみられる。

〔方向〕SI02Aと同様に、北辺でみると東で北へ約20° 偏する。

〔壁〕床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北壁の北西隅で床面から42cmである。

〔床面〕西辺から貯蔵穴状土壌（K1）付近にかけては住居掘り方埋土、これ以外は地山を床面にしていたとみられる。床面はほぼ平坦であるが、南側にむかってやや傾斜している。住居掘り方埋土の厚さは3～10cmほどである。

〔柱穴〕主柱穴とみられる柱穴は3個（P1～P3）検出した。南東隅柱穴は削平のために失われている。3個の柱穴のうち1個（P1）では柱痕跡を確認したが、他の2個（P2・P3）では明確には確認できなかった。柱穴は円形を呈し、径は24～28cm、深さは17～32cmである。柱穴の埋土はやや粘性を帯びたしまりのあるにぶい黄褐色シルトを基調としており、径2～5cmの地山凝灰岩小礫を含んでいる。P1の柱痕跡は径12cmの円形を呈しており、堆積土はしまりのないにぶい黄褐色シルトである。

〔カマド〕カマドは不明である。

〔貯蔵穴状土壙〕貯蔵穴状土壙（K1）は北辺側やや東寄りで検出された。SI02Aの貯蔵穴状土壙（K2）と一部重複する。K1はやや歪んだ円形状を呈する。径76cmほどで、深さは18cmである。断面形は皿状を呈し、底面は西側にやや傾斜している。埋土は炭化物を含んだ暗褐色シルトで、凝灰岩礫を多く含んでいる。

〔周溝〕残存する北辺と西辺・東辺の一部で検出している。上幅14～26cm、深さ4～7cmで、断面形はU字状を呈する。堆積土は径4cm以下の凝灰岩小礫を含んだ暗褐色シルトである。

〔堆積土〕堆積土は2層に大別される。1層は炭化物を含んだにぶい黄褐色シルトで、凝灰岩小礫を多く含んでいる。2層は径4cm以下の凝灰岩礫を含んだ暗褐色シルトである。いずれも自然堆積である。

〔その他〕北辺の中央部から南へ延びる小溝（D1）は、住居を西側へ拡張する際、SI02Aの周溝を西側へ延長する時に同時に掘り込んだものとみられる。この小溝は、長さ95cm・上幅18～24cm・下幅12～18cm、深さ7～9cmである。断面形はU字状を呈する。堆積土は周溝と同様に凝灰岩小礫や地山シルトブロックを含む暗褐色シルトである。

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器坏（第6図-1）・甕（第6図-2）、頁岩製大型砥石（第94図-8）、すり石（第95図-16）、住居堆積土からは非ロクロ調整の土師器坏・小型壺・甕（第6図-3）などの破片、金属製品の小片などが出土した。土師器坏は体部外面に段を持ち、甕類も頸部に段を持つ。2の土師器甕は頸部が長く、口縁端部は平坦に仕上げられ、浅くくぼんでいる。

【SI03住居跡】（第7図、図版4-2）

南区域の南斜面で検出した。前述のSI02A・B住居跡のすぐ南側に位置する。南半部が削平されており、北辺部と支柱穴などを確認したのみである。位置的にSI02A・B住居跡と一部重なるが、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕全体の平面形や規模は不明であるが、東西4.3m、南北0.6m以上の方形状になるとみられる。

〔方向〕北辺で見ると東で北へ約20°偏する。

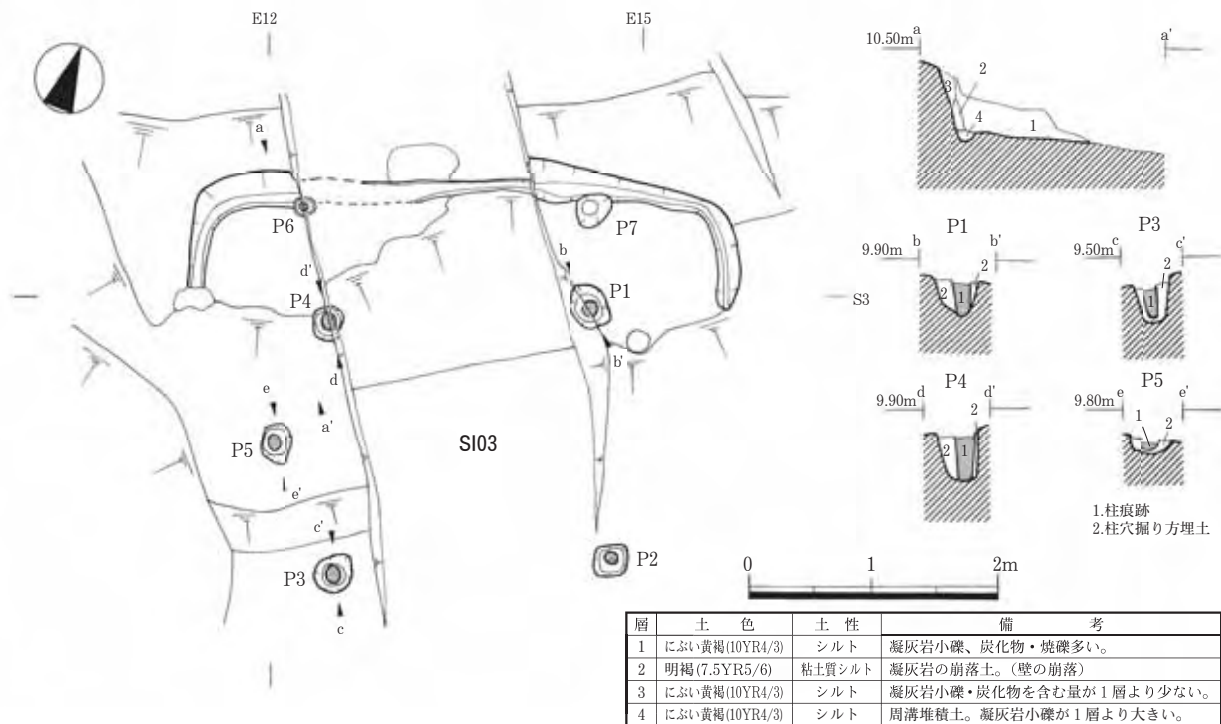
〔壁〕壁は周溝底面から外側にやや傾斜をもって立ち上がる。壁高は最も残りのよい北壁で床面から55cmである。

〔床面〕床面はほぼ平坦であるが、標高の低い南側に向かってわずかに傾斜している。中央から西壁にかけては住居掘り方埋土を、それ以外の部分は地山を床面としている。

〔柱穴〕支柱穴は住居平面形の対角線上に4個（P1～P4）検出した。柱穴は楕円形～隅丸長方形を呈し、長軸26～36cm・短軸24～28cm、深さ16～44cmほどである。埋土は凝灰岩小礫を多く含むにぶい黄褐色シルトである。いずれの柱穴にも柱痕跡が認められる。径10～14cmの円形で、堆積土は凝灰岩小礫、炭化物、焼土を含むにぶい黄褐色シルトである。

支柱穴の他に、床面で3個の柱穴（P5～P7）を検出した。P6・P7は北西隅・北東隅からそれぞれ0.9～1.0m離れた北壁際にある。

〔カマド〕カマドは不明である。



第7図 SI03竪穴住居跡

〔周溝〕残存する壁際で認められた。上幅12~20cm、深さ2~10cmで、断面形はU字状を呈する。堆積土は凝灰岩小礫を多く含んだにぶい黄褐色シルトで、人為的なものである。

〔堆積土〕1層認められる。凝灰岩小礫を多く含むにぶい黄褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器坏・甕、P2・P7柱穴掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器坏などの破片がわずかに出土している。また、住居堆積土からも非ロクロ調整の土師器坏・甕などの破片が少量出土している。

【SI10住居跡】(第8図、図版4-3)

南区域の南斜面中央付近で検出した。全体的に削平を受けているため残存は不良である。住居跡の西辺~北辺部の一部、支柱穴と見られる柱穴4個などを確認した。位置的にSI11・SI80住居跡などと重複するが、新旧関係は不明である。

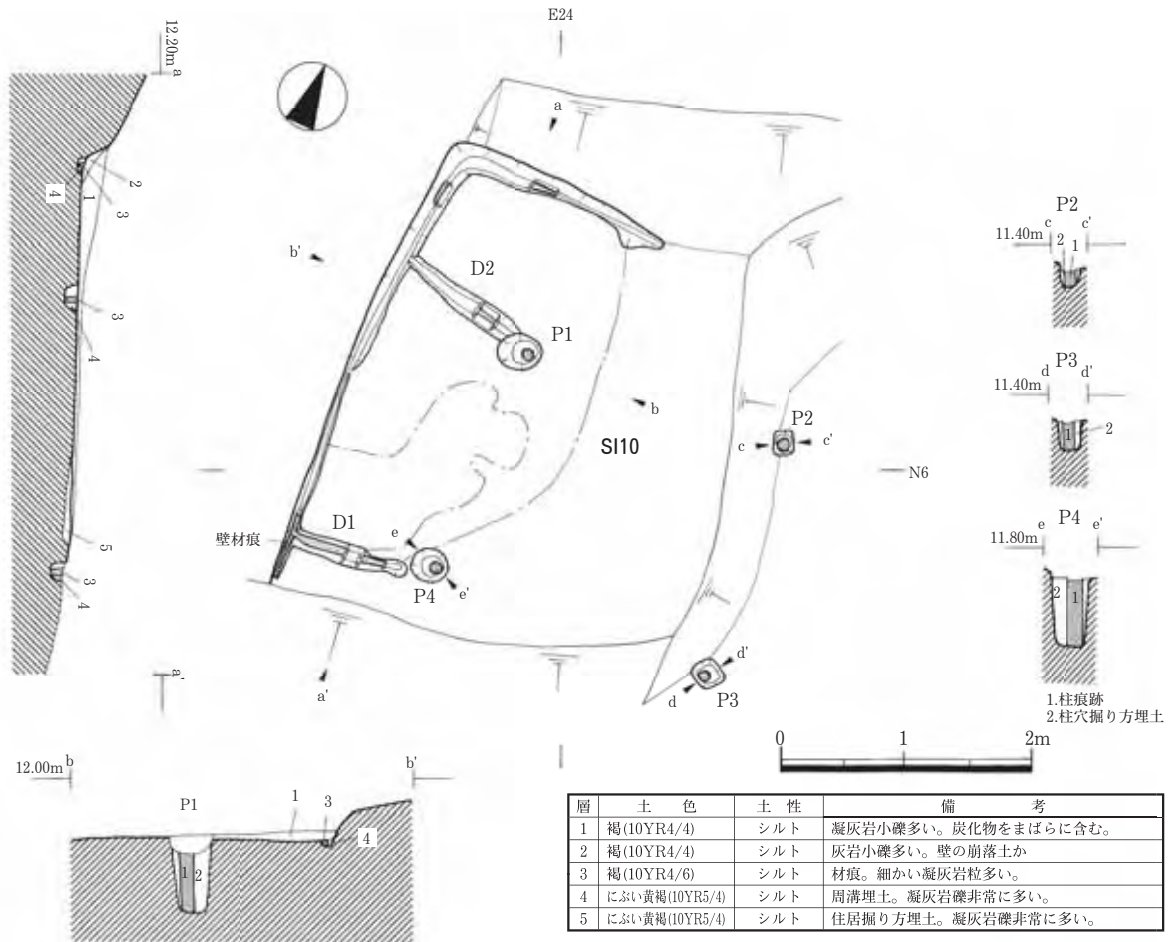
〔平面形・規模〕全体的な平面形や規模は不明であるが、南北3.8m以上、東西3.5m以上の方形状を呈するとみられる。

〔方向〕西辺でみると北で東へ約5°偏する。

〔壁〕床面からやや斜めに立ち上がっている。壁高は残りのよい西壁で床面から22cmである。

〔床面〕南側の間仕切り(D1)から北側の一部が住居掘り方埋土、その他の部分は地山を床面としている。床面はほぼ平坦である。

〔柱穴〕支柱穴は住居平面形の対角線上に4個(P1~P4)検出した。いずれの柱穴にも柱痕跡が認められる。平面形はP1・P4が径30~36cmのほぼ円形で、P2・P3が一辺18~22cmの隅丸方形状である。深さはP1・P4が床面から49~58cm、P2・P3が検出面から20~23cmである。柱穴掘り方埋土は、径5mm以下の凝灰岩粒を含むしまりのあるにぶい黄褐色シルトである。柱痕跡は径9~12cmのほぼ円



第8図 SI10竪穴住居跡

形を呈し、堆積土は凝灰岩粒を少量含む灰黄褐色シルトである。

〔カマド〕カマドは不明である。

〔周溝〕西辺から北辺にかけて残存する壁際では巡っている。周溝は上幅6～22cm、深さ4～6cmで、断面形はU字状を呈する。底面はほぼ平坦である。埋土は径5mm以下の凝灰岩粒を非常に多く含んだにぶい黄褐色シルトである。壁材痕が認められ、幅約6cm、深さ6～10cm前後で、堆積土は褐色シルトである。

〔その他〕西辺の壁際から支柱穴P1・P4に向かってそれぞれほぼ垂直に延びる間仕切りとみられる小溝を2条(D1・D2)検出した。長さはD1が西辺から約90cm、D2が約100cmである。D1・D2とも深さは5～10cmほどで、断面形はU字状を呈する。埋土は周溝埋土と同様である。溝内には材痕とみられる幅5cmほどの褐色土が認められた。

〔堆積土〕堆積土は2層に大別される。1層は径1cm以下の凝灰岩小礫を多く含む褐色のシルトで、炭化物を少量含んでいる。2層も褐色土であるが、1層よりも大きい凝灰岩礫を多く含み、壁面の崩落土とみられる。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕住居堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕などの小破片が少量出土したのみである。

【SI11住居跡】(第9図、図版5-1)

南区域の南斜面上のやや東寄りで検出した。削平が大きく及んでおり、北西辺部の周溝と支柱穴と

みられる柱穴2個を確認したのみである。SI23住居跡、SB156建物跡、SA157柱穴列と重複し、SI23よりも新しく、SB156・SA157よりも古い。

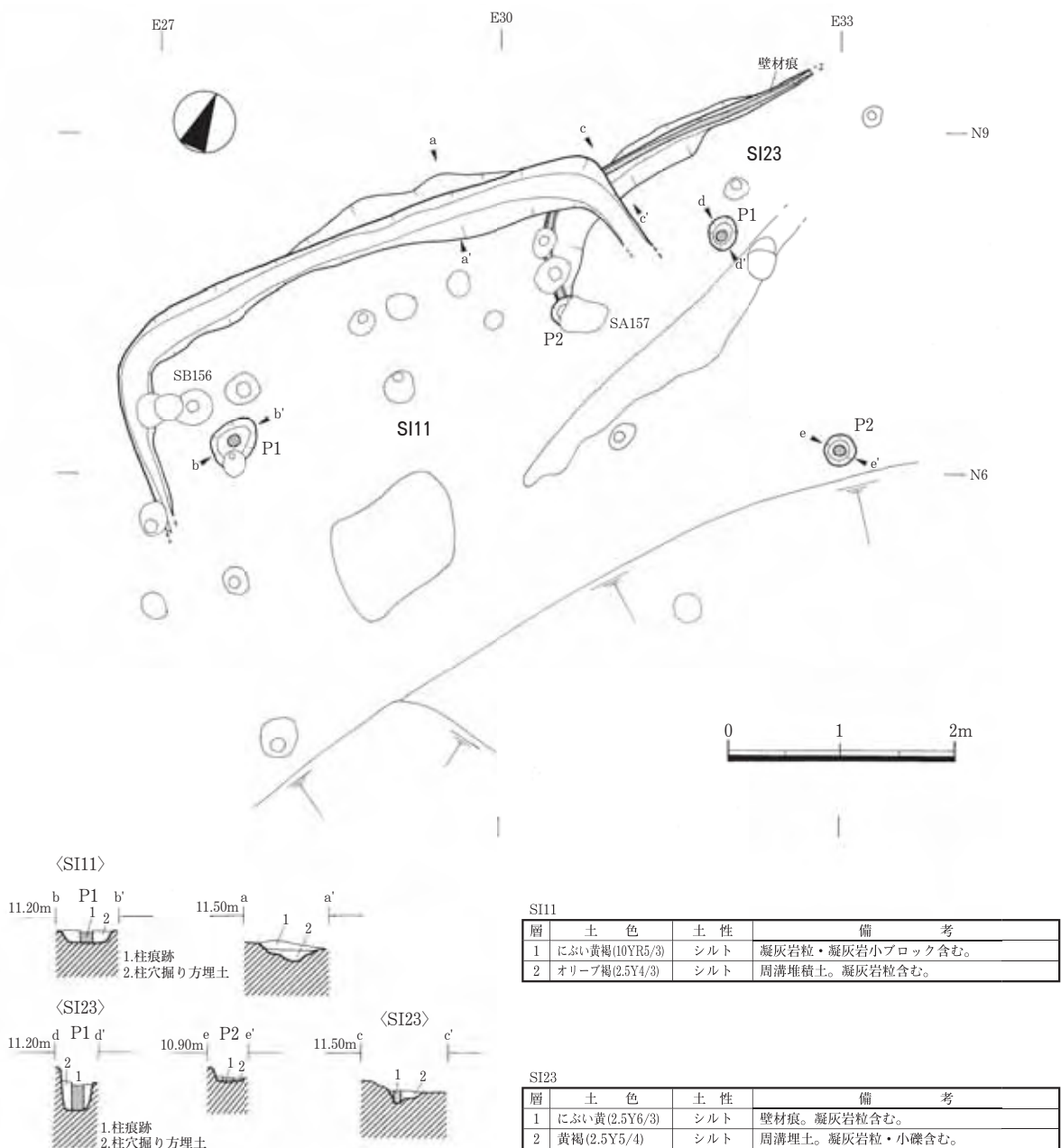
〔平面形・規模〕全体の平面形や規模は不明であるが、北東-南西4.6m、北西-南東2m以上の方形形状を呈するとみられる。

〔方向〕北西辺でみると東で北へ約42°偏する。

〔壁〕床面からやや斜めに立ち上がっている。北西壁の一部は崩落している。壁高は残りのよい北西壁西側で床面から9cmである。

〔床面〕ごく一部しか残っていないが、地山を床面としている。

〔柱穴〕主柱穴は北西辺側で2個(P1・P2)検出した。本来は住居平面形の対角線上に4個配置さ



第9図 SI11・SI23竪穴住居跡

れていたものとみられる。P1は長軸42cm・短軸35cmの楕円形状で、深さは10cmである。径12cmほどの柱痕跡が認められる。P2はSA157柱穴に切られているが、径30cmほどの円形状を呈するものとみられる。深さは42cm、柱痕跡は不明である。

〔カマド〕カマドは不明である。

〔周溝〕壁面が残存している北西辺側には巡っている。上幅は22～44cm、深さは5～10cmで、断面形はやや歪んだ皿状を呈している。堆積土は凝灰岩粒・小礫を含んだオリーブ褐色シルトである。

〔堆積土〕1層認められる。凝灰岩粒・小礫を含むにぶい黄褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕周溝堆積土から非ロクロ調整の土師器杯・甕などの小破片が出土しているのみである。

【SI12住居跡】(第10図～第13図、図版5-1～3)

南区域の南東斜面で検出した。南側が大きく削平を受けており、北半部のみが残存している。SI80・SI151住居跡と重複しており、これらよりも新しい。

〔平面形・規模〕全体の平面形や規模は不明であるが、北東-南西6.9m、北西-南東2.7m以上の隅丸形状を呈するものとみられる。

〔方向〕北西辺で見ると東で北へ約41°偏する。

〔壁〕やや斜めに立ち上がっている。壁高は残りの良い北壁で床面から約20cmである。

〔床面〕北側では地山面、南側では住居掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

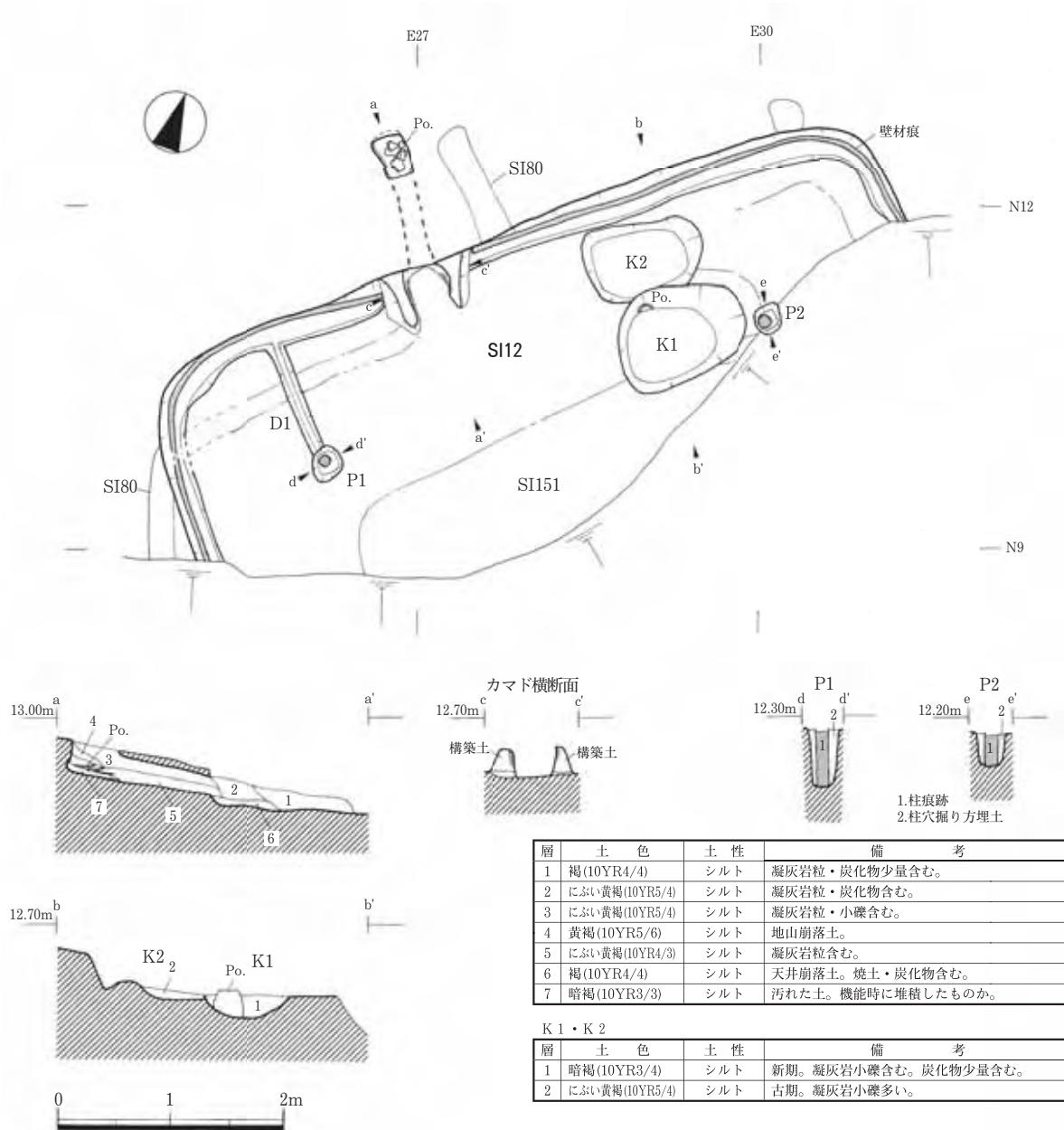
〔柱穴〕支柱穴とみられる2個(P1・P2)を検出した。本来は住居平面形の対角線上に4個配置されていたものとみられる。P1・P2は一辺30cmのやや歪んだ方形形状を呈する。柱穴掘り方埋土は凝灰岩小礫を含む暗褐色シルトである。柱痕跡は円形で、径10～20cm、深さ40～50cmほどある。堆積土は黒褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央からやや西寄りに付設されている。燃焼部と煙道、煙道の天井部が残る。燃焼部の大きさは、幅30cm・奥行き50cmである。奥壁は住居の壁と一致する。燃焼部底面はわずかに浅くくぼむ。カマド側壁の構築土は地山粘土を含む黄褐色シルトである。カマド部分では壁際を巡る周溝を埋め戻している。奥壁で高さ5cmほどの段が付いて煙道へ至る。煙道は長さ110cm・幅24cm、深さ10cmで、底面は煙出しへ向けてやや斜めに上がる。煙出し部分からは土師器甑の破片がまとまって出土した。

〔周溝〕残存する壁際では全体に巡っている。上幅20～25cm、深さ6cmほどで、埋土は褐色シルトである。周溝内には幅5cmほどの壁材痕が認められる。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴とみられる土壇(K1・K2)はカマドの右隣にある。新旧あり、K1が新しく、K2が古い。K1は楕円形状で、長軸110cm・短軸80cm、深さ20cm、K2も楕円形状を呈し、長軸100cm・短軸70cm、深さ10cmほどの大きさである。堆積土は、K1が凝灰岩小礫を多く含むにぶい黄褐色シルト、K2が凝灰岩小礫・炭化物を含む暗褐色シルトである。

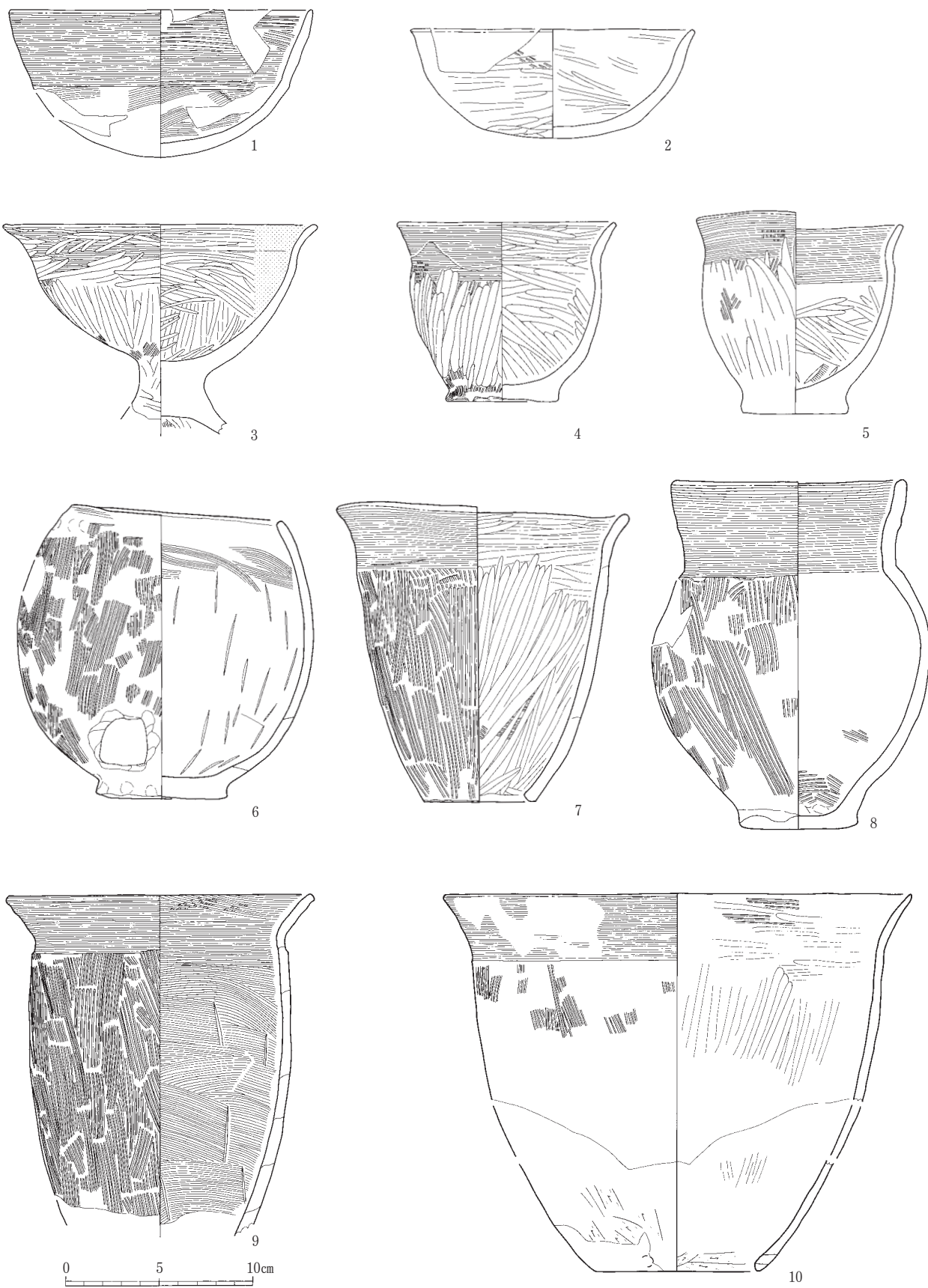
〔その他〕間仕切りとみられる小溝(D1)が北壁際からP1(支柱穴)へと延びている。この小溝は幅12cm、深さ2cmである。材の痕跡は確認できなかった。堆積土は凝灰岩小礫を多く含む暗褐色シルトである。なお、東側のP2(支柱穴)付近では同様の小溝は確認できなかった。



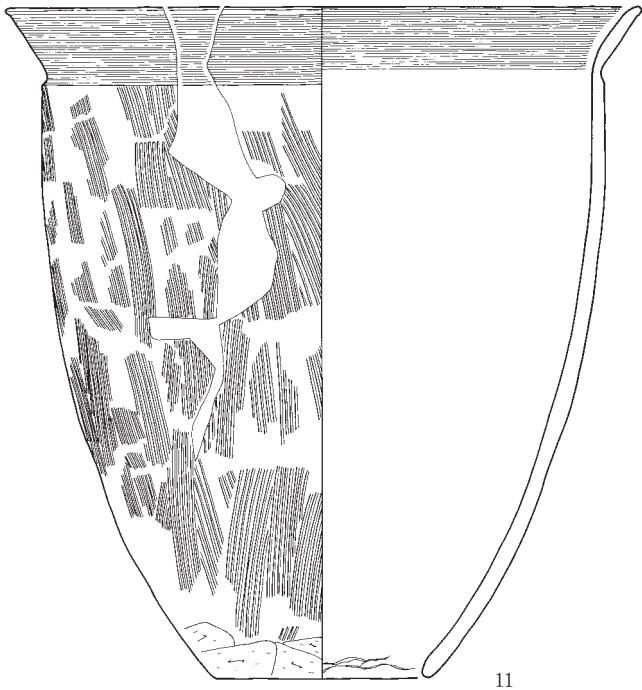
第10図 SI12竪穴住居跡

〔堆積土〕 1層のみ認められる。凝灰岩粒・小礫や炭化物を含む褐色シルトで、自然堆積である。

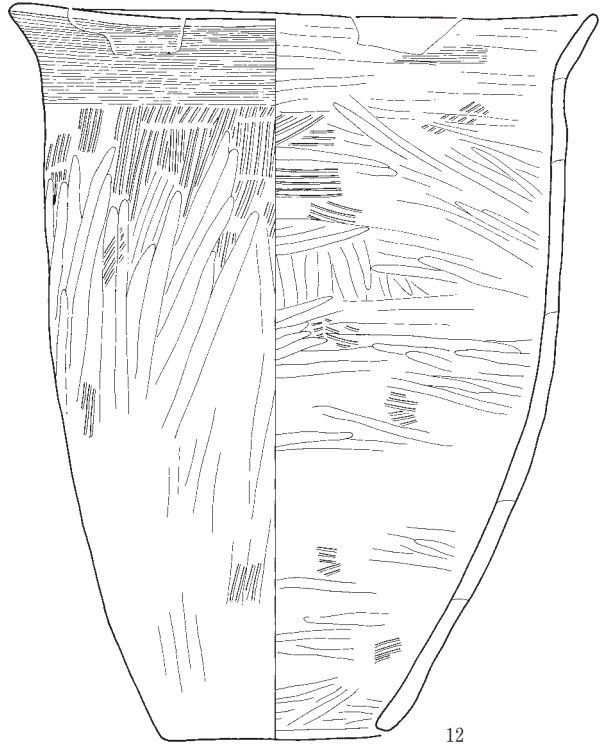
〔出土遺物〕 住居跡の中では最も多く出土している。住居床面からは非ロクロ調整の土師器杯（第11図－1・2）・高坏（第11図－3）・鉢（第11図－6）・壺（第11図－8）・甑（第11図－7、第12図－11・12）・甕（第11図－4・5・9、第12図－13～15）、鉄製品の断片、カマド煙出しピットから非ロクロ調整の土師器甑（第11図－10）、貯蔵穴（K1）から土師器甕（第13図－16・17）などが出土している。また、住居堆積土からは非ロクロ調整の土師器杯・甕などの破片が出土している。土師器杯は体部外面に段や稜を持つものと持たないものがあり、土師器甑・甕類も頸部に段や稜を持つものと持たないものがある。1・2の土師器杯は内面に黒色処理が施されていないが、3の高坏には黒色処理が施されている。6の土師器鉢は、体部下半に内部から孔が穿たれている。また、10の土師器甑の胴部下端には小孔が認められる。



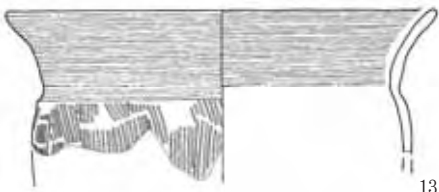
第11図 SI12住居跡出土土器敢



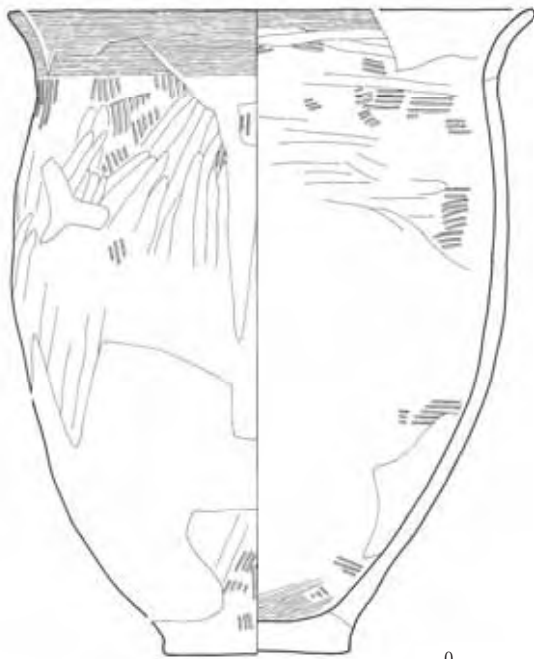
11



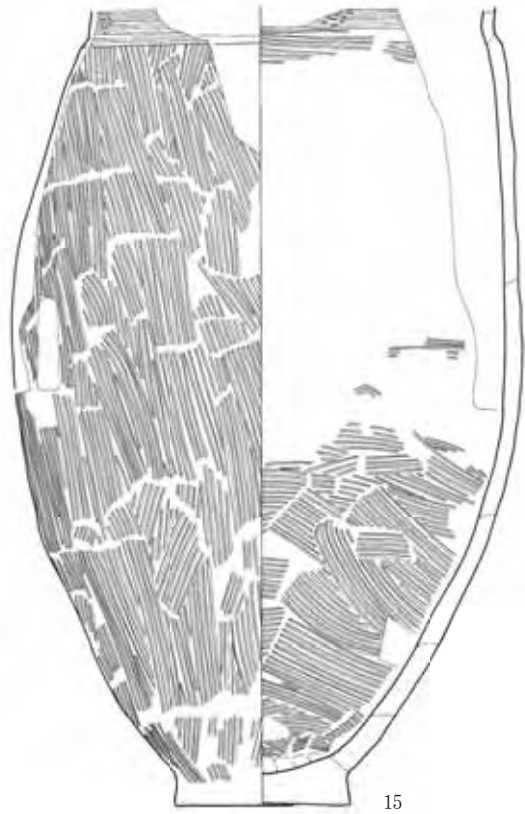
12



13



14

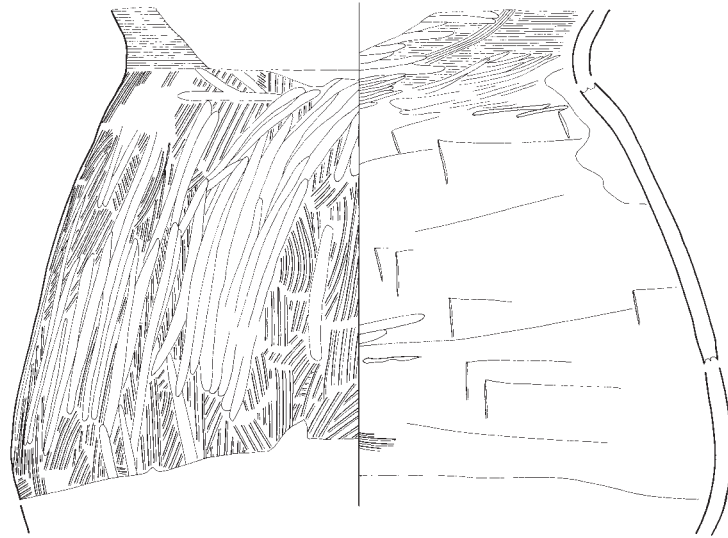


15

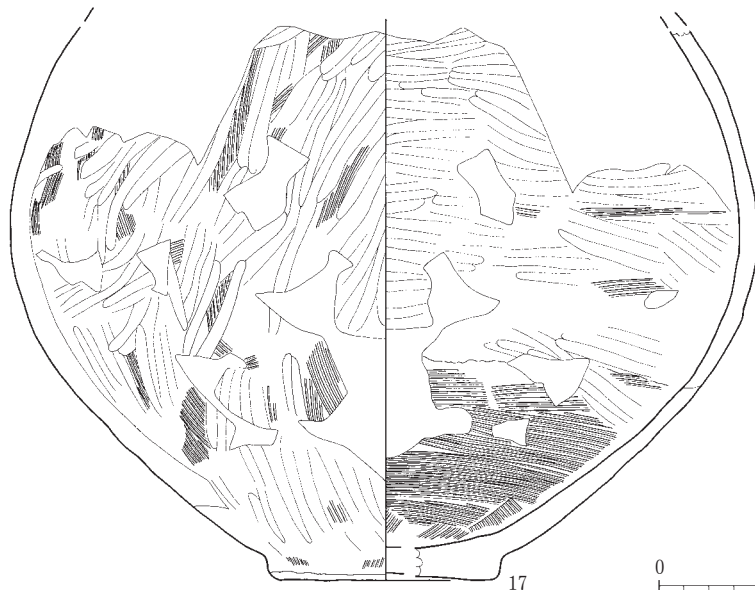
0 5 10cm



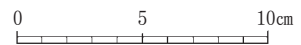
第12図 S112住居跡出土土器(2)



16



17



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|--------|---------|---------|---------|-------|--------|---|------|--------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 坏 | 床面 | 1/3 | (16.2) | — | 7.9 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ナデ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(体)ヘラナデ | 33-3 | I-8 |
| 2 | 土師器 坏 | 床面+堆1層 | 7/8 | 15.2 | — | 6.9 | 外:(体~底)ハケメ→ヘラミガキ 内:ヘラミガキ | 33-4 | I-7 |
| 3 | 土師器 高坏 | 床面 | 有部鉄 陶土 | 16.8 | — | — | 外:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(体~底)ハケメ→ヘラミガキ(脚)ヘラミガキ 内:ハケメ→ヘラミガキ→黒色処理 | 34-1 | I-11 |
| 4 | 土師器 甕 | 床面 | 4/5 | (11.7) | 6.0 | 9.5 | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 底:ナデ 内:ヘラミガキ | 33-6 | I-10 |
| 5 | 土師器 甕 | 床面 | ほぼ完形 | 11.0 | 5.6 | 10.4 | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 底:ナデ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ→ヘラミガキ | 33-5 | I-9 |
| 6 | 土師器 鉢 | 床面 | 2/3 | 11.2 | 7.0 | 15.4 | 外:ナデ(一部オサエ)・ハケメ 体下部に穿孔 底:ナデ 内:ナデ・ヘラナデ | 34-2 | I-13 |
| 7 | 土師器 甕 | 床面 | 完形 | 15.6 | 6.0 | 15.8 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ 内:ハケメ→ヘラミガキ | 35-1 | I-14 |
| 8 | 土師器 壺 | 床面 | 8/9 | (12.6) | 6.3 | 18.6 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ 底:ナデ 内:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→ナデ | 34-3 | I-12 |
| 9 | 土師器 甕 | 床面 | 1/2 | 16.4 | — | (18.2) | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ヘラナデ | 35-4 | I-18 |
| 10 | 土師器 甕 | 煙出し底面 | 1/3 | (25.0) | (8.6) | (20.2) | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ、下部ヘラズリ→部ヘラミガキ 内:ハケメ→ヘラミガキ(下部部ヘラズリ)胴部下端に孔 | 35-2 | I-17 |
| 11 | 土師器 甕 | 床面 | 2/3 | (25.4) | 8.6 | 27.0 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→下部ヘラズリ 内:(口)ヨコナデ | 33-7 | I-16 |
| 12 | 土師器 甕 | 床面 | 完形 | 23.6 | 9.0 | 29.2 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ(胴)ハケメ→ヘラミガキ | 34-4 | I-15 |
| 13 | 土師器 甕 | カマド付近床面 | 口~胴部1/4 | (17.2) | — | (7.0) | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ヨコナデ | 35-3 | I-19 |
| 14 | 土師器 甕 | 床面 | 3/4 | (21.1) | 7.5 | 25.8 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 底:ナデ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ(胴)ハケメ→部ヘラミガキ | 34-5 | I-21 |
| 15 | 土師器 甕 | カマド付近床面 | 2/3 | — | 7.0 | (32.0) | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 底:本葉痕あり 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→底部ナデ | 35-5 | I-22 |
| 16 | 土師器 甕 | K1貯蔵穴底面 | 1/3 | — | — | — | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(胴)ヘラナデ→部ヘラミガキ | 36-1 | I-20 a |
| 17 | 土師器 甕 | K1貯蔵穴底面 | 2/3 | — | (9.0) | — | 外:(胴)ハケメ→ヘラミガキ 底:ナデ 内:(胴)ハケメ→ヘラミガキ(底)ハケメ | 36-2 | I-20 b |

第13図 S112住居跡出土土器櫃

【SI15住居跡】（第14図、図版5 - 4）

南端部の南斜面で検出した。削平を受けており、また、現代の井戸跡に壊されているため残存は不良である。北西隅および北東隅の周溝跡、支柱穴とみられる柱穴3個を確認したのみである。SX04周溝状遺構と重複しており、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕全体の平面形や規模は不明であるが、東西は3.7mほどの大きさとみられる。

〔方向〕北辺で見ると東で北へ約28° 偏する。

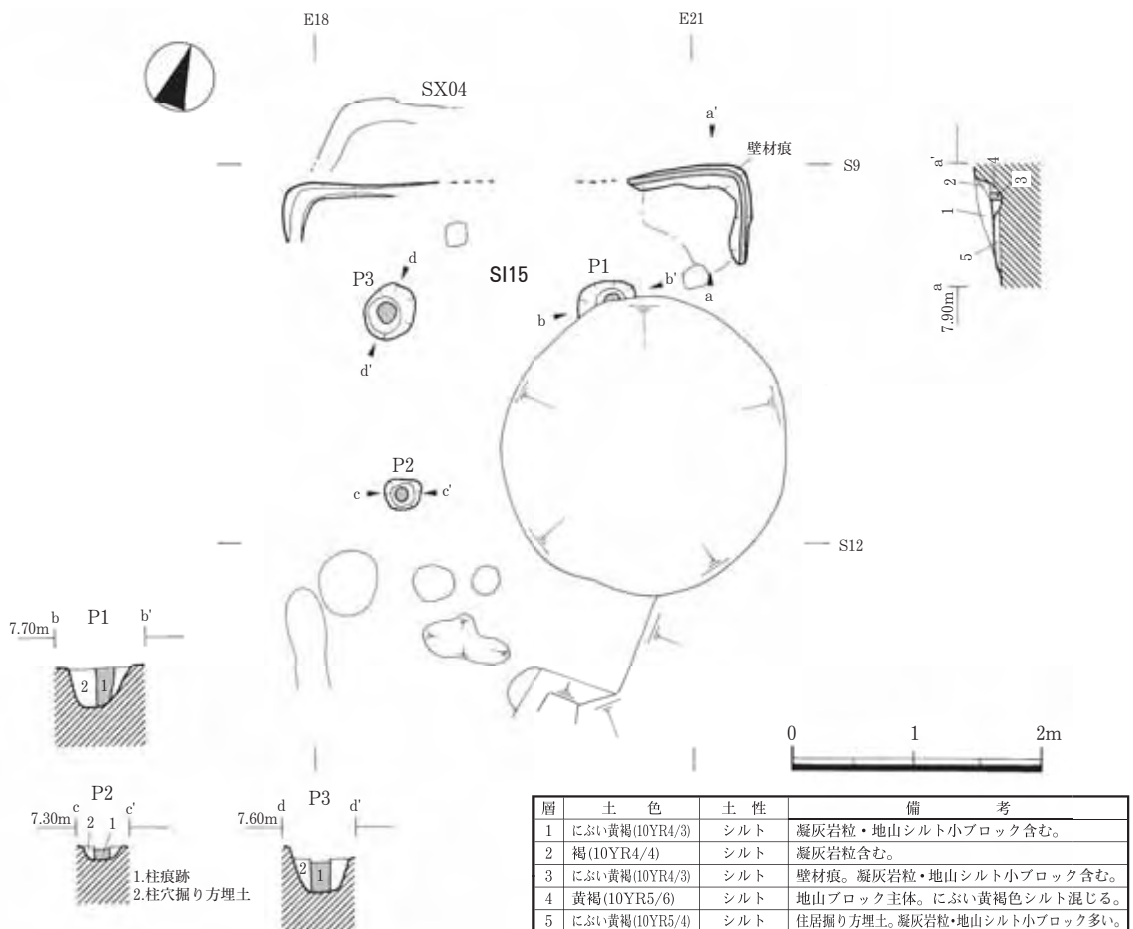
〔壁〕床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北壁の残りの良い北東隅で床面から12cmである。

〔床面〕残存する北東隅付近では住居掘り方埋土を床面にしている。

〔柱穴〕支柱穴とみられる3個（P1～P3）を検出した。P3は現代の井戸跡によって半分壊されている。柱穴の平面形はP1が長軸45cm・短軸40cmの楕円形、P2・P3が径14～45cmの隅丸方形を呈している。深さは11～36cmである。柱穴掘り方埋土は凝灰岩粒・小礫、地山シルト小ブロック主体のにぶい黄橙色シルトである。P1～P3には柱痕跡が認められ、14～15cmの円形を呈している。柱痕跡の堆積土は凝灰岩粒・小礫や地山シルトブロックを含んだ褐色シルトで、炭化物粒を少量含んでいる。

〔カマド〕カマドは不明である。

〔周溝〕上幅9～20cm、深さ8～10cmほどで、断面形はU字状を呈している。埋土は地山ブロックが



第14図 SI15竪穴住居跡

主体となった黄褐色シルトである。北東隅部分では壁材痕が認められた。幅6cm、深さ8cm前後である。堆積土はしまりのないにぶい黄褐色シルトで、凝灰岩粒・小礫や地山シルトブロックを含んでいる。

〔堆積土〕2層認められる。1層はにぶい黄褐色シルトで、凝灰岩粒・小礫や地山シルトブロックを含んでいる。2層は褐色シルトで、凝灰岩粒・小礫を含んでいる。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕住居床面やP2（支柱穴）掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器甕の破片、住居堆積土から非ロクロ調整の土師器甕の小片が少量出土している。

【SI23住居跡】（第9図、図版5-1）

南区域の南東斜面で検出した。削平により残存は不良である。北西端付近の周溝の一部と支柱穴とみられる柱穴2個を確認したのみである。SI11住居跡と重複しており、これよりも古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形や規模は不明であるが、少なくとも北東-南西は2.8m以上である。

〔方向〕住居の方向は北西辺でみると東で北へ約45°偏する。

〔壁・床面〕壁や床面はほとんど残存していない。

〔柱穴〕西側の支柱穴とみられる2個（P1・P2）のみを検出した。柱穴の平面形はやや不整な円形を呈しており、径は25cm～30cm、深さは11cm～36cmである。柱穴掘り方埋土はオリーブ褐色シルトで、凝灰岩粒・小礫を含んでいる。両柱穴とも柱痕跡が認められ、径10cmほどの円形を呈している。

〔カマド〕カマドは不明である。

〔周溝〕残存する壁際では周溝が巡っている。上幅は8～16cm、深さは1～7cmで、埋土は凝灰岩粒・小礫を含んだにぶい黄褐色シルトである。周溝内には壁材痕が認められ、幅3cm、深さ10cm前後である。堆積土は凝灰岩粒・小礫や地山シルトブロックを含んだ黄褐色シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI27住居跡】（第15図・第16図、図版6-1・2）

南区域中央付近の南東斜面で検出した。住居跡の南東側は削平されている。カマドや貯蔵穴の造り直しが認められる。SI52住居跡、SX131鍛冶遺構と重複し、いずれよりも古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形は隅丸方形状を呈するとみられる。規模は東西5.7m、南北3.4m以上である。

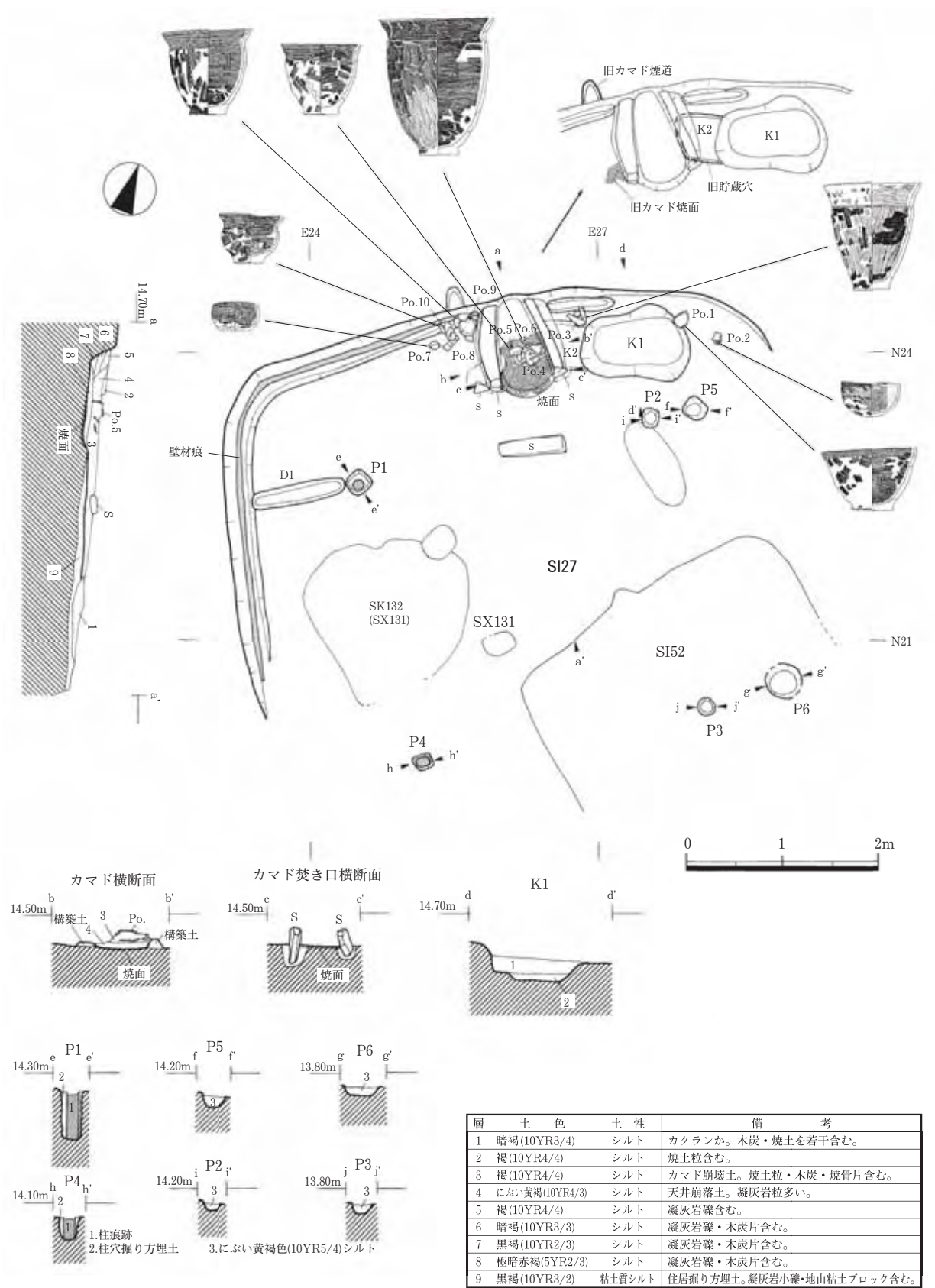
〔方向〕北辺でみると東で北へ約37°偏する。

〔壁〕やや斜めに立ち上がっている。壁高は北西隅で床面から34cmである。

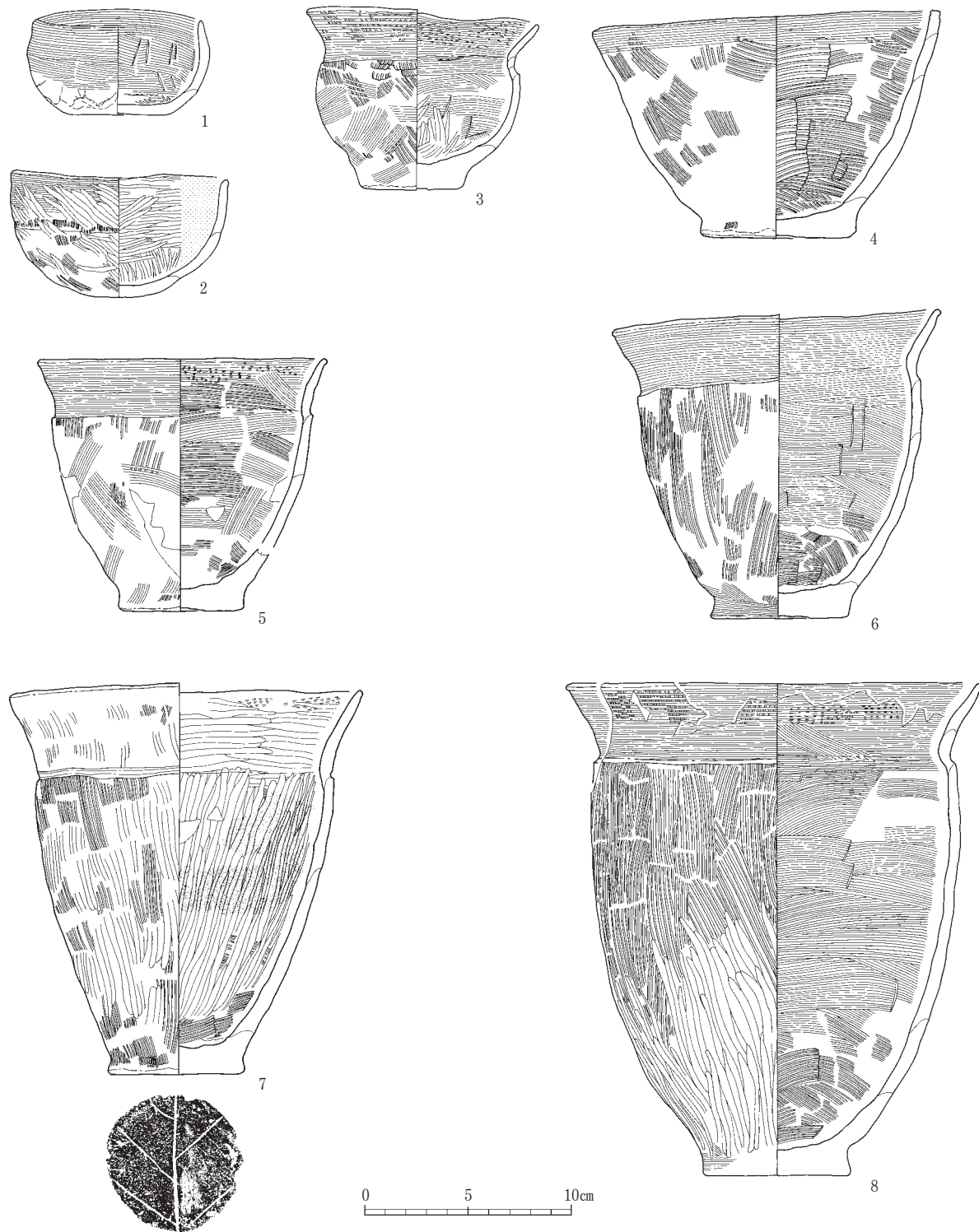
〔床面〕住居掘り方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕支柱穴は住居平面形の対角線上に4個（P1～P4）あるが、ほかに柱穴が2個（P5・P6）認められる。いずれも20～30cmほどの隅丸方形～隅丸長方形を呈しており、西側のP1・P2には柱痕跡が認められる。P1は深さが50cmほどある。

〔カマド〕北辺の中央部に付設されている。燃焼部は残存するが、煙道は削平されて残っていない。燃焼部には天井部崩落土や煙道からの流入土などが堆積している。燃焼部側壁はにぶい黄褐色～褐色シルトによって構築されており、焚き口部分の両側には柱状の角礫が据えられている。焚き口部前の



第15図 SI27竪穴住居跡



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|-----------|------|---------|-----|------|--|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 環 | カマド脇Po.7 | 完形 | 8.2 | 5.2 | 5.1 | 外:ヨコナデ(下部ナデか) 底:ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ(体)ヘラナデ・ヨコナデ(底)ヘラミガキ | 36-3 | I-23 |
| 2 | 土師器 壺 | 床面Po.2 | 完形 | 10.4 | — | 5.8 | 外:(口)ヨコナデ→部ヘラミガキ(体~底)ハケメ→ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 36-4 | I-24 |
| 3 | 土師器 鉢 | カマド脇Po.10 | ほぼ完形 | 11.2 | 4.7 | 8.8 | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(体)ハケメ→ナデ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(体)ヘラナデ→(下部)ヘラミガキ | 36-5 | I-25 |
| 4 | 土師器 鉢 | 床面Po.1 | ほぼ完形 | 11.9 | 7.2 | 10.8 | 外:(口)ヨコナデ(体)ハケメ 内:(口)ヨコナデ(体)ハケメ | 36-7 | I-26 |
| 5 | 土師器 甕 | カマドPo.5 | 1/3 | (14.4) | 6.0 | 12.3 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→ナデ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→部分的にナデ | 36-6 | I-27 |
| 6 | 土師器 甕 | カマド脇Po.9 | ほぼ完形 | 15.8 | 6.7 | 14.8 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→下部ナデ 内:(口)ヨコナデ(胴上)ヘラナデ(胴下)ハケメ | 36-8 | I-28 |
| 7 | 土師器 甕 | 床面Po.3 | ほぼ完形 | 17.2 | 6.6 | 18.7 | 外:(口)ハケメ→ヘラミガキ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 底:木葉痕 内:ハケメ→ヘラミガキ 胴部上位に炭化物附着 | 37-1 | I-29 |
| 8 | 土師器 甕 | カマドPo.6 | 3/4 | (20.2) | 7.2 | 24.0 | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴上)ハケメ(胴下)ハケメ→ヘラミガキ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ヘラナデ(底)ハケメ | 37-2 | I-30 |

第16図 SI27住居跡出土土器

床面には大型の柱状角礫（長さ70cm）があるが、これには被熱の痕跡があり、焚き口部の構築材であったものとみられる。燃烧部底面は楕円形状（幅52cm・奥行き96cm・深さ4cm）に浅く窪んでおり、赤変し硬化している。奥壁は住居の壁面とほぼ一致する。燃烧部からは土師器甕がまとまって出土している。また、カマド左側壁付近からは土師器坏・甕・支脚などが出土している。なお、カマド右側壁下からは旧貯蔵穴（K2）、左側壁下から旧カマド燃烧部の焼面が検出されている。また、カマド左側の壁際からは煙道の痕跡が長さ24cmほど確認されている。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴（K1）はカマドの右側に配置されている。長軸114cm・短軸80cmの不整楕円形状を呈し、深さは14cmである。堆積土は暗褐色シルトの自然堆積である。旧貯蔵穴（K2）と重複する。旧貯蔵穴（K2）は新期のカマドと貯蔵穴（K1）によって壊されており、短軸50cmほどの大きさである。

〔周溝〕壁面には北東隅を除いて周溝が巡っており、幅5～6cmほどの壁材痕が認められる。周溝は幅20～26cm、深さ4～5cmほどで、埋土は凝灰岩小礫を多く含む褐色シルトである。

〔その他〕住居西辺部では、北西主柱穴（P1）へのびる間仕切りとみられる幅20cmほどの小溝（D1）が検出されている。堆積土は地山粘土ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトである。材痕は確認されなかった。

〔堆積土〕1層認められる。焼土粒を含む褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕比較的多く出土している。住居床面から非ロクロ調整の土師器壺（第16図-2）・鉢（第16図-4）・甕（第16図-7）、カマド側壁際から土師器坏（第16図-1）・鉢（第16図-3）・甕（第16図-6）、土製支脚（第91図-8）、すり石（第96図-18）、カマド燃烧部から土師器甕（第16図-5・8）、土製支脚（第91図-7）、K1貯蔵穴からは土師器坏・鉢・甕などが出土している。土師器坏は体部外面に段や稜を持ち、土師器甕も頸部に段や稜が認められる。また、住居堆積土からは土師器坏・甕類のほか、須恵器提瓶の胴部片、すり石や不明石製品（第97図-18）などが出土している。なお、縄文土器の小破片も数片出土している。

【SI28住居跡】（第17図～第19図、図版6-3、7-1～6）

南区域中央付近の南斜面に位置する。削平のために南西隅が失われている。住居床面上には多数の炭化材・炭化物粒の分布が認められ、焼失住居の可能性がある。SI154住居跡、SA70柱穴列、SX29・SX63周溝状遺構と重複し、SA70、SX29・SX63よりも古く、SI154よりも新しい。

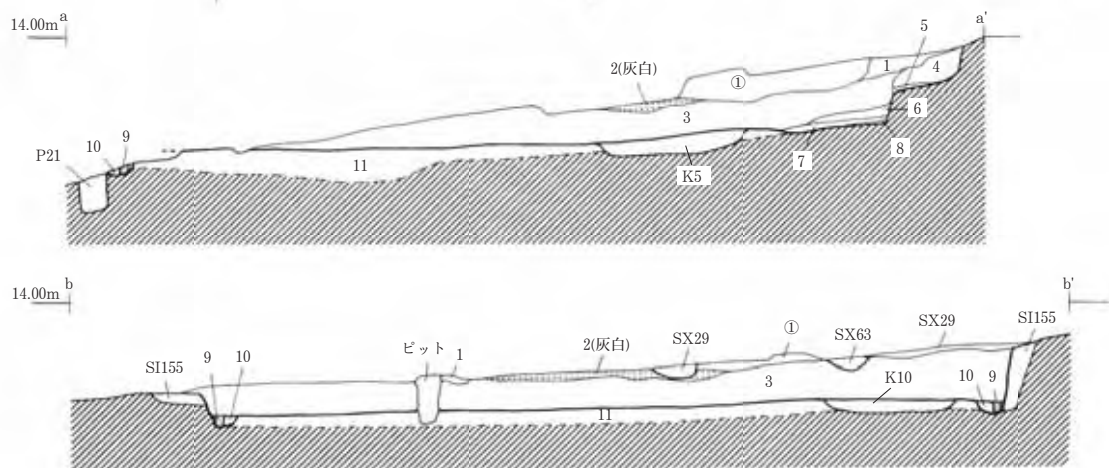
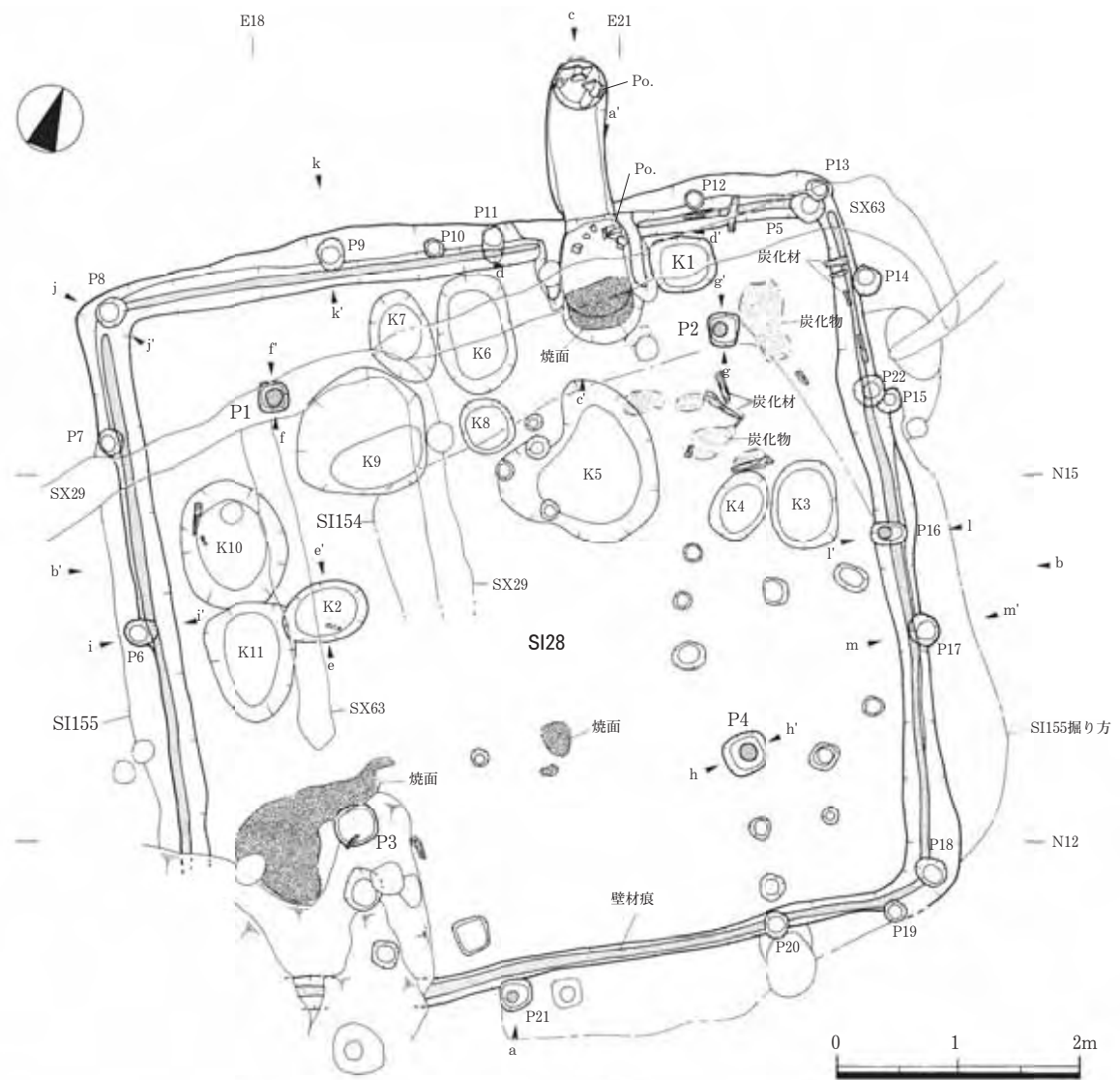
〔平面形・規模〕平面形は正方形状で、規模は北辺6.4m、東辺6.1mである。

〔方向〕北辺で見ると東で北へ約30°偏する。

〔壁〕やや斜めに立ち上がっている。壁高は最も残りのよい北壁西側で床面から65cmである。

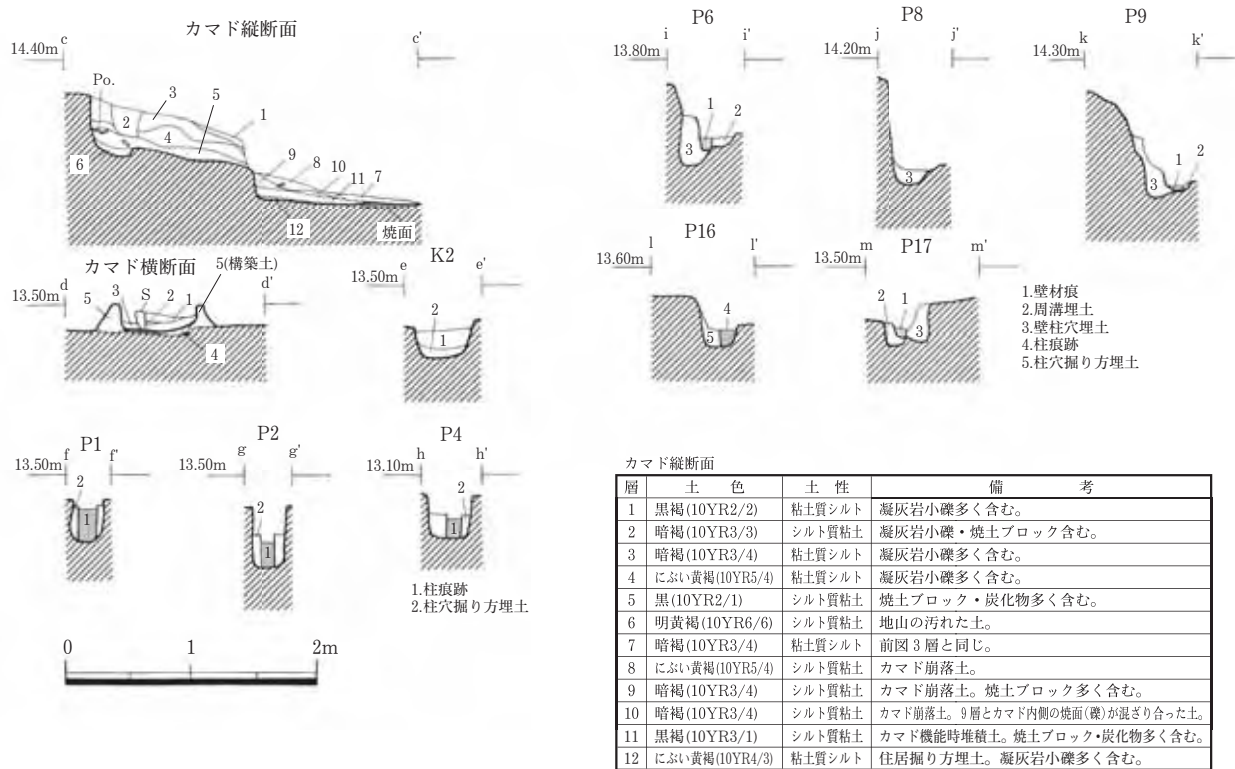
〔床面〕ほぼ平坦であるが、標高の低い南に向かって緩やかに傾斜している。住居掘り方埋土を床面としている。床面上では北東隅を中心に炭化材を検出した。多くの炭化材は棒状を呈する。壁際のもは周溝埋土上面から検出された。また、床面南西隅付近で焼面を3ヶ所検出した。西端の焼面が最大で、長軸1.5m・短軸1.0mの不整形を呈する。

〔柱穴〕主柱穴は住居平面形の対角線上に4個（P1～P4）検出した。また、壁柱穴を伴っており、



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 | 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|--------|------------------|----|----------------|--------|-------------------------|
| ① | 黒褐(10YR2/2) | 粘土質シルト | SX63か。凝灰岩小礫少量含む。 | 6 | 暗褐(10YR3/4) | シルト質粘土 | 崩落土。焼土ブロック多く含む。 |
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫多く含む。 | 7 | 黒褐(10YR3/1) | シルト質粘土 | カマド機能時堆積土。焼土ブロック・炭化物多い。 |
| 2 | — | — | 灰白色火山灰層。 | 8 | にぶい黄褐(10YR4/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩礫多く含む。 |
| 3 | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫多く含む。 | 9 | 黒褐(10YR3/2) | シルト質粘土 | 壁材痕。炭化物含む。 |
| 4 | にぶい黄褐(10YR5/4) | シルト質粘土 | 地山崩落土。下面が焼けて赤変。 | 10 | 暗褐(10YR3/3) | シルト質粘土 | 周溝埋土。凝灰岩小礫多く含む。 |
| 5 | 黒(10YR2/1) | シルト質粘土 | 焼土ブロック・炭化物多く含む。 | 11 | 褐(10YR4/6) | 粘土質シルト | 住居掘り方埋土。地山土と暗褐色土が混ざった土。 |

第17図 SI28竪穴住居跡敢



カマド横断面

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|--------|---------------------------|
| 1 | にぶい黄褐(10YR5/4) | シルト質粘土 | カマド崩落土。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/4) | シルト質粘土 | カマド崩落土。カマド内側の焼面(礫)が混じる。 |
| 3 | 黒褐(10YR3/1) | シルト質粘土 | カマド機能時堆積土。焼土ブロック・炭化物多く含む。 |
| 4 | にぶい黄褐(10YR4/3) | 粘土質シルト | カマド床面土。凝灰岩小礫多く含む。 |
| 5 | にぶい黄褐(10YR4/3) | 粘土質シルト | カマド構築土。凝灰岩小礫多く含む。 |

カマド縦断面

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|------------|
| 1 | 暗赤褐(5YR3/4) | シルト | 炭化物・焼土粒含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/2) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 |

K2

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|------------|
| 1 | 暗赤褐(5YR3/4) | シルト | 炭化物・焼土粒含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/2) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 |

第18図 SI28竪穴住居跡相

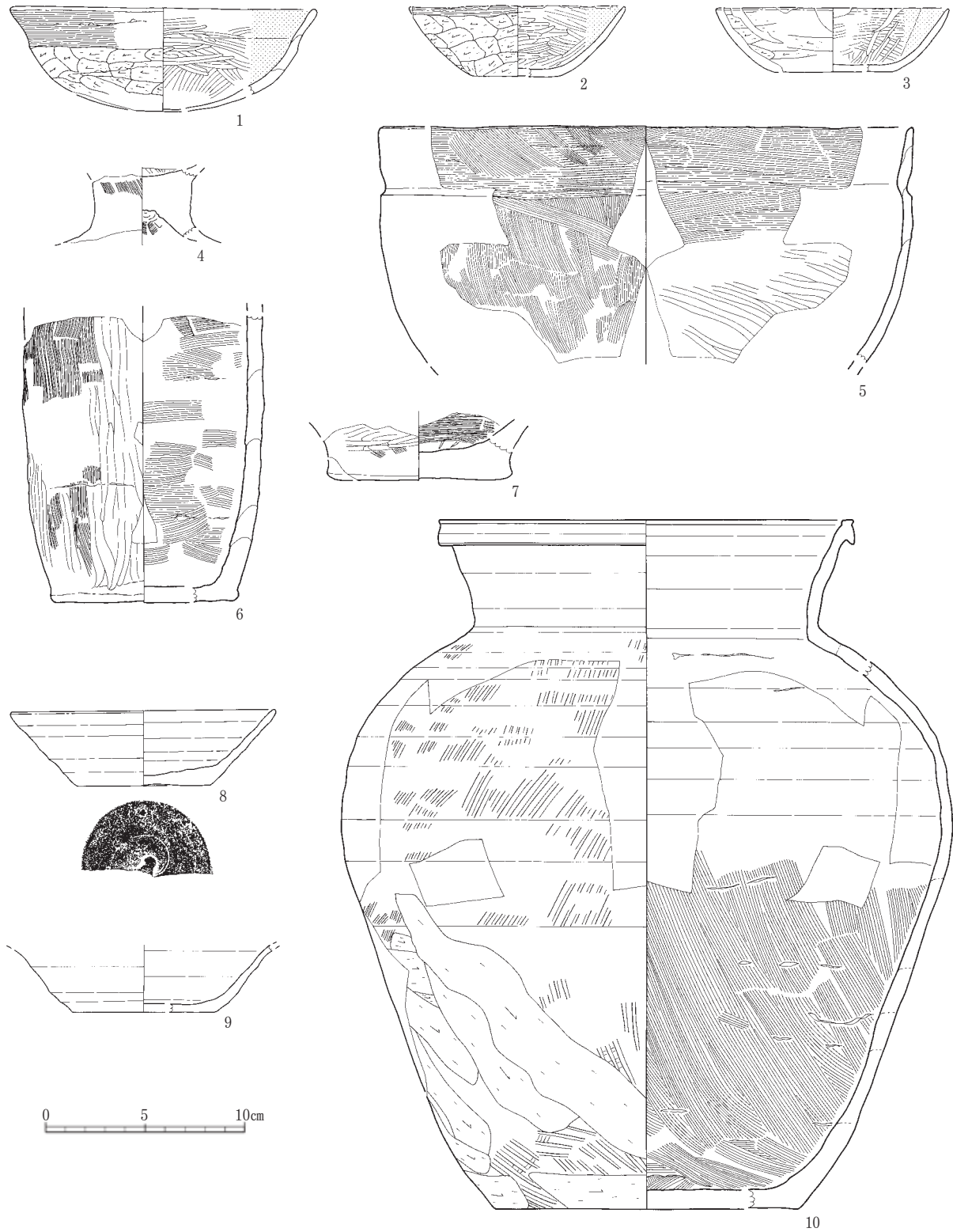
全部で18個 (P5～P22) 検出した。主柱穴は一辺25～34cmほどの隅丸方形形状を呈する。深さは30～45cmである。柱穴掘り方埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含むにぶい黄褐色シルトである。柱痕跡は3個の主柱穴 (P1・P2・P4) にあり、径12～14cmの円形状を呈する。埋土は暗褐色シルトである。壁柱穴は、削平されている南西隅を除くと、各隅と一辺に3～4個ずつ配置されている。径18～25cmほどの円形もしくは楕円形状を呈する。

〔周溝〕周溝は全周しており、全体に幅5～6cmの壁材痕が認められる。周溝は上幅20～48cm、深さ3～9cmで、断面形は皿状を呈する。埋土は凝灰岩小礫を多く含んだ黒褐色のシルト質粘土である。

〔カマド〕北壁中央から東に寄った位置にある。燃烧部と煙道が残存する。燃烧部の大きさは、幅50cm・奥行き70cmである。燃烧部底面は浅く窪んでいる。奥壁は住居の壁と一致する。カマド側壁は地山粘土を含む暗褐色シルトで構築しており、奥壁部分では壁際を巡る周溝を埋め戻している。奥壁で高さ16cmほどの段が付いて煙道へと至る。煙道は長さ130cm・幅45cm、深さ20cmほどで、底面は緩やかに上がり、先端には煙出しピット (径40cm、深さ45cm) が取り付く。この煙出しピットからは須恵器甕が出土した。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴 (K1) はカマド右側に配置されている。長軸50cm・短軸45cmの隅丸方形形状を呈する。深さは約10cmである。堆積土は焼土・炭化物粒を含む暗赤褐色シルトである。

〔その他〕住居北半側では土壌を10基 (K2～K11) 確認した。長軸50cm・短軸40cmの楕円形状のもの



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|--------|--------|------|---------|-------|--------|--|-------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 坏 | 住居掘方埋土 | 1/4 | (15.5) | — | (5.3) | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 37-3 | I-31 |
| 2 | 土師器 坏 | 周溝埋土 | 1/4 | (11.0) | (4.5) | 3.5 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 37-4 | I-32 |
| 3 | 土師器 坏 | カマド | 1/6 | (11.8) | (6.0) | 3.2 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 37-5 | I-33 |
| 4 | 土師器 高坏 | 堆1,2層 | 脚部 | — | — | — | 坏部内面ヘラミガキ→黒色処理 脚部内外面ハケメ | 37-6 | I-35 |
| 5 | 土師器 鉢 | P5+煙道 | 1/10 | (27.0) | — | — | 外:ナデ、口縁部に煤付着 内:(口)ナデ(体)ヘラミガキ | 37-7 | I-36 |
| 6 | 土師器 甕 | カマド | 1/5 | — | (9.4) | — | 外:ハケメ→ヘラミガキ 底:ナデ 内:ハケメ・ナデ | 37-8 | I-37 |
| 7 | 土師器 甕 | 床面 | 底部 | — | 9.2 | — | 外:ハケメ→ヘラミガキ 底:植物の茎痕・糊痕などの痕跡あり 内:ハケメ | 37-9 | I-38 |
| 8 | 須恵器 坏 | 床面+堆2層 | 1/3 | (13.4) | (8.0) | 3.8 | 内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り | 37-10 | I-41 |
| 9 | 須恵器 坏 | 住居掘方埋土 | 1/5 | — | (7.2) | — | 内外:ロクロナデ 底:切り離し不明→ナデ | — | I-40 |
| 10 | 須恵器 甕 | 煙道P | 2/3 | (21.0) | 15.0 | (34.9) | 外:(口)ロクロナデ(胴)平行タタキ→(胴上)ロクロナデ(胴下)ヘラケズリ 底:平行タタキ→ナデ 内:(胴上)ロクロナデ(胴下)ナデ | 38-1 | I-44 |

第19図 SI28住居跡出土土器

のや径130cmほどの不整円形状のものがある。深さは5～10cmと浅い。K2以外の9基には堆積土上面に褐色シルトの人為的埋土が認められる。また、床面では小ピットが20個ほど認められる。

〔堆積土〕3層に大別される。1・3層が凝灰岩小礫を多く含む暗褐色粘土質シルト、2層が灰白色火山灰を含む層である。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕比較的多く出土している。住居床面から土師器坏・甕（第19図－7）、すり石（第95図－13）、カマド燃焼部および煙道や煙出しピットから土師器坏（第19図－3）・鉢（第19図－5）・甕（第19図－6）、須恵器坏（第19図－8）・甕（第19図－10）、周溝堆積土から土師器坏（第19図－2）、住居掘り方埋土から土師器坏（第19図－1）・甕・甕、丸玉（第91図－5）、鉄鏟（第92図－4）などが出土している。住居堆積土からは、土師器坏・高坏（第19図－4）・鉢・甕・甕、ミニチュア土器（第91図－1）、砥石（第93図－2・5）などが出土している。土師器類はいずれも非ロクロ調整である。1の土師器坏は丸底で体部外面に段をもち、2・3の土師器坏は平底である。6は口縁部を失っているが、胴部が円筒状に立ち上がる甕とみられる。なお、住居堆積土などから縄文時代の石鏟・石匙・剥片（第97図－8・9・12）なども出土している。

【SI30住居跡】（第20図・第21図、図版8－1）

南区域の南斜面で検出した。前述のSI28住居跡の西隣にある。南側は削平が大きく及んでおり、北辺部のみを確認した。SX29周溝状遺構と重複し、SX29よりも古い。

〔平面形・規模〕全体の平面形・規模は不明であるが、北東－南西7.0m、北西－南東1.3m以上で、方形状を呈していたものと推定される。

〔方向〕北辺でみると東で北へ約41°偏する。

〔壁〕ほぼ垂直であるが、北辺はやや斜めに立ち上がっている。壁高は北辺で床面から72cmある。

〔床面〕床面はほぼ平坦である。カマド付近の壁際は地山を、それ以外は厚さ2～5cmの住居掘り方埋土を床面としている。

〔柱穴〕支柱穴などは不明である。

〔カマド〕北西辺の中央部に付設されている。焼面と煙道が残存するが、燃焼部側壁は残っておらず、人為的に取り壊されたものとみられる。燃焼部の焼面はほぼ平坦であり、長軸65cm・短軸43cmの不整形を呈する。この焼面と北壁の間には、カマドの構築材が堆積していた。煙道は長さ90cm・幅18～24cm、深さ38cmで、断面形は半円形状である。地形に沿って約15°の角度で傾斜している。

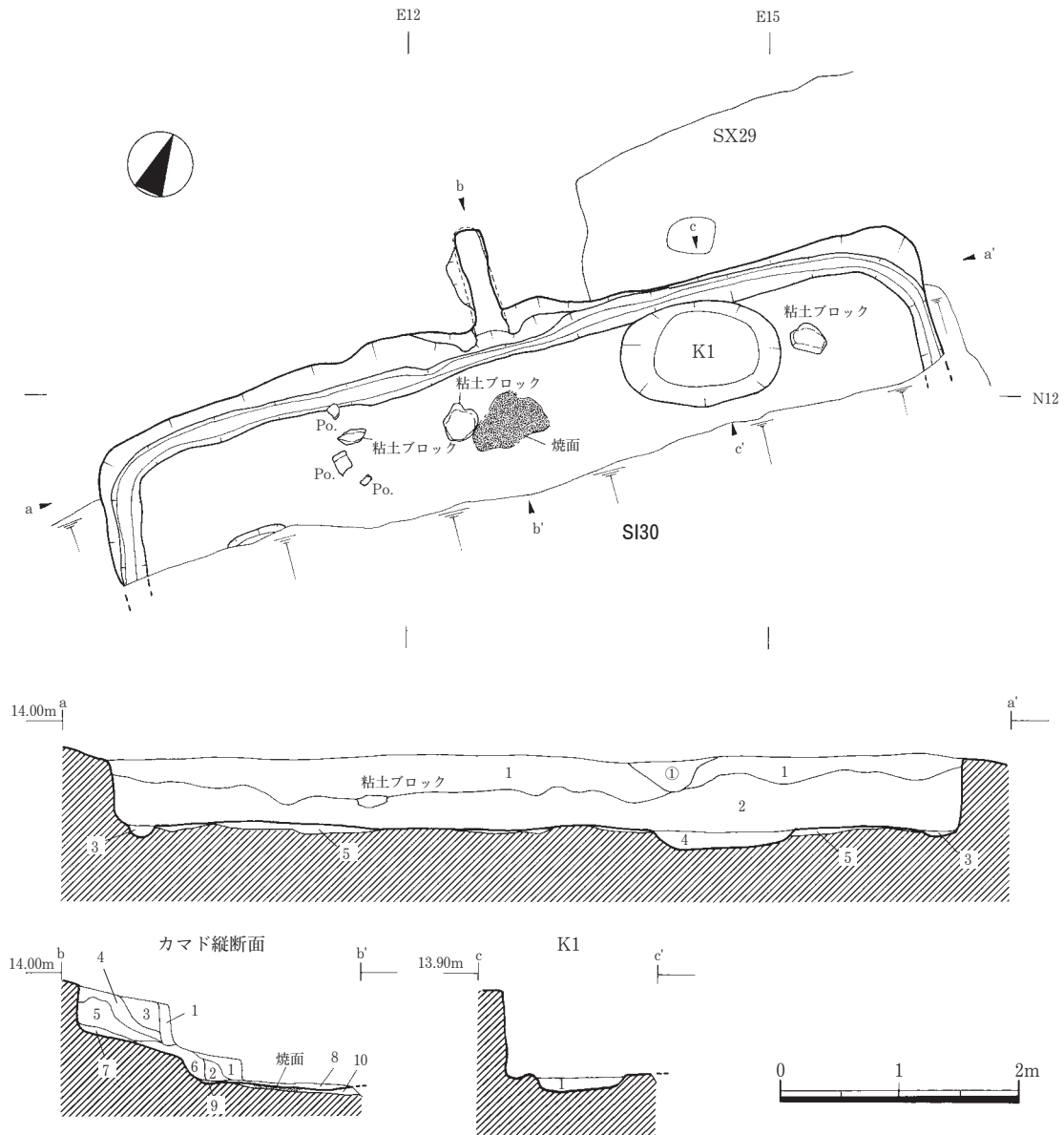
〔貯蔵穴〕貯蔵穴（K1）はカマド右脇の北辺壁際で検出した。長軸133cm・短軸89cmのやや歪んだ楕円形を呈しており、深さは10cmである。堆積土は地山シルトブロックと黒色土が混ざり合った褐色のシルト質粘土で、人為的なものである。

〔周溝〕残存する壁際の全周で認められた。上幅18～24cm、深さ2～10cmで、断面形はほぼU字状を呈する。堆積土は凝灰岩粒・小礫を多く含んだにぶい黄褐色シルト質粘土で、人為的な埋土である。なお、カマド付近は幅9～12cm、深さ2cmと幅が狭く、深さも浅くなっている。

〔堆積土〕2層に大別される。1層はにぶい黄褐色の砂質シルトで、2層は暗褐色の砂質シルトである。ともに凝灰岩小礫を多く含み、人為的なものである。2層上部では最大35×30×10cmほどの白色

粘土ブロックが数個体認められた。

〔出土遺物〕 遺物は比較的多く、カマド付近の床面から非ロクロ調整の土師器甕（第21図-3）・甌・ミニチュア土器（第91図-2）、その他床面から非ロクロ調整の土師器高坏（第21図-1）・鉢・甕、砥石、貯蔵穴（K1）から非ロクロ調整の土師器坏・鉢、住居堆積土から非ロクロ調整の土師器



カマド縦断面

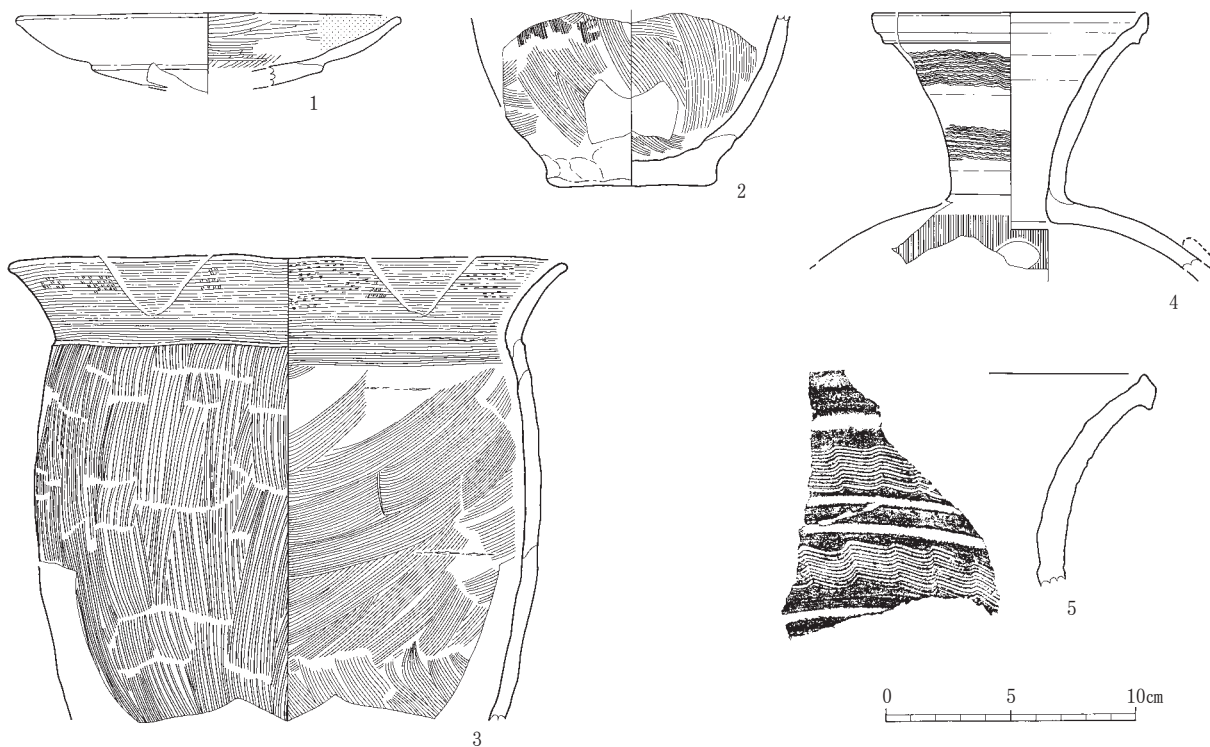
| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|----------------|--------|------------------------------|
| 1 | 褐(10YR4/4) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫多い。焼土・炭化物含む。 |
| 2 | 褐(10YR4/4) | 粘土質シルト | カマド崩落土。地山ブロック含む。5層と同時の可能性あり。 |
| 3 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 地山の汚れた土。凝灰岩小礫多い。 |
| 4 | 暗褐(10YR3/4) | シルト質粘土 | 煙道自然流入土。凝灰岩小礫・焼土多い。 |
| 5 | 褐(10YR4/4) | 粘土質シルト | 煙道崩落土。地山ブロック多い。2層と同時の可能性あり。 |
| 6 | 褐(10YR4/4) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫非常に多い。炭化物・焼土多い。 |
| 7 | 暗褐(10YR3/4) | シルト質粘土 | 煙道。炭化物多い。 |
| 8 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト質粘土 | 凝灰岩礫・焼土非常に多い。炭化物少量含む。 |
| 9 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト質粘土 | 周溝堆積土。凝灰岩小礫・焼土多い。 |
| 10 | 灰黄褐(10YR4/2) | 粘土質シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩小礫多い。炭化物・焼土含む。 |

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|--------|---------------------------|
| ① | にぶい黄褐(10YR4/3) | 砂質シルト | 新しい溝跡。凝灰岩小礫多い。炭化物少量含む。 |
| 1 | にぶい黄褐(10YR4/3) | 砂質シルト | 人為。凝灰岩礫非常に多い。炭化物少量含む。 |
| 2 | 暗褐(7.5YR3/4) | 砂質シルト | 人為。凝灰岩小礫非常に多い。炭化物少量含む。 |
| 3 | 暗褐(7.5YR3/4) | 粘土質シルト | 周溝堆積土。凝灰岩粒・焼土・炭化物多い。 |
| 4 | 褐(10YR4/6) | シルト質粘土 | 貯蔵穴堆積土。凝灰岩土と黒褐色土の混ざり合った土。 |
| 5 | 灰黄褐(10YR4/2) | 粘土質シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩小礫多い。炭化物・焼土含む。 |

K1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|------------|--------|----------------------|
| 1 | 褐(10YR4/6) | シルト質粘土 | 人為。地山土と黒褐色土の混ざり合った土。 |

第20図 SI30竪穴住居跡



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|--------|------------|------|---------|-------|----|--|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 高坏 | 床面+堆1層 | 1/4 | (15.4) | — | — | 外:摩滅不明 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 38-2 | I-45 |
| 2 | 土師器 甕 | カマド・煙道・堆1層 | 底部半分 | — | (6.8) | — | 外:ハケメ→ナデ、一部オサエ 底:木葉痕 内:ナデ | 38-3 | I-49 |
| 3 | 土師器 甕 | カマド | 1/5 | (22.4) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ヘラナデ・ナデ | 38-6 | I-47 |
| 4 | 須恵器 提瓶 | 堆1.2層 | 口縁部 | 10.9 | — | — | 外:(頸部)ロクロナデ→櫛描波状文(2段) (肩部)ボタン状の貼り付け(胴部)カキ目 内:ロクロナデ | 38-5 | I-43 |
| 5 | 須恵器 甕 | 堆1.2層 | 口縁部片 | — | — | — | 外:(頸部)平行沈線間に櫛描波状文 | 38-4 | I-46 |

第21図 SI30住居跡出土土器

坏・甕・甔の破片、須恵器坏・提瓶（第21図-4）・甕（第21図-5）、鉄鏃（第92図-1）などが出土している。なお、住居堆積土からは縄文土器・石器（剥片）も若干数出土している。

【SI33住居跡】（第22図・第23図、図版8-2・3）

南区域の中央やや東寄りの南東斜面で検出した。削平や後世の溝で壊されており、北西部分のみが残存している。SB72掘立柱建物跡・SD32溝跡と重複し、これらよりも古い。

〔平面形・規模〕平面形は方形状を呈するとみられ、規模は北東-南西2.9m以上、北西-南東2.0m以上である。

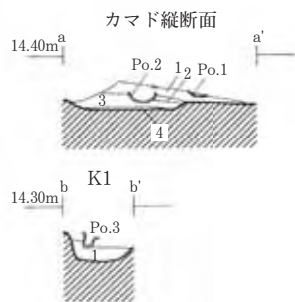
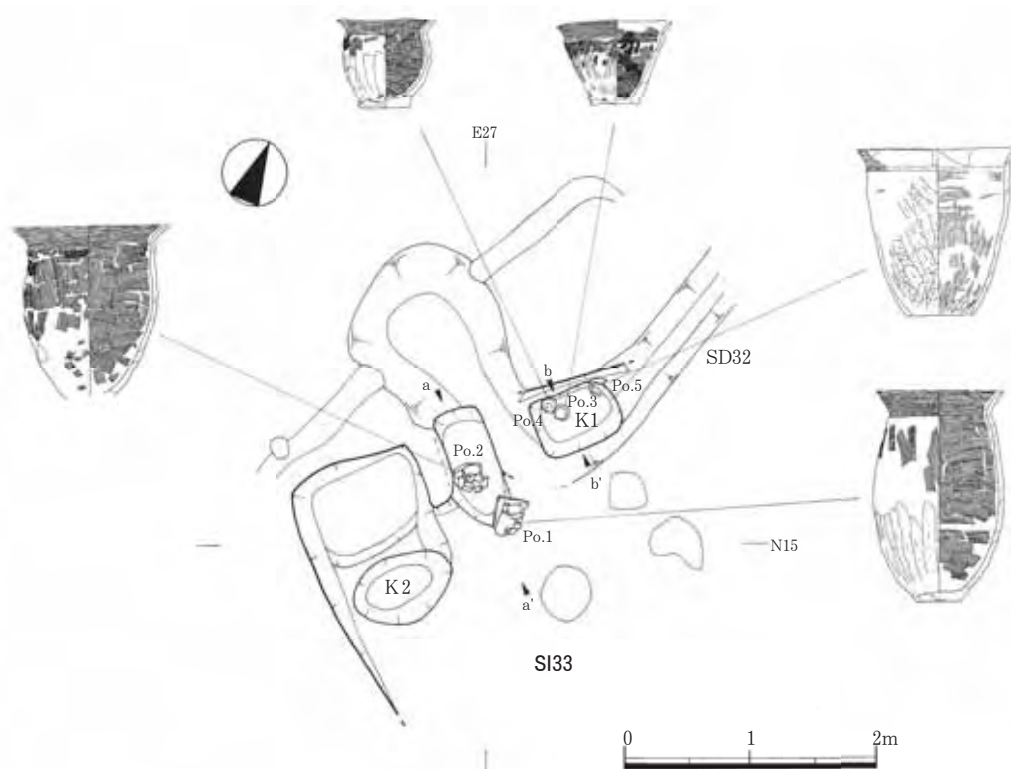
〔方向〕北西辺でみると東で北へ約38°偏する。

〔壁〕やや斜めに立ち上がっている。壁高は残りの良い北西隅で床面から35cmである。

〔床面〕地山を床面とし、ほぼ平坦である。北西隅部分は長形状に他の床面よりも2~3cm深く掘り窪められている。

〔柱穴〕支柱穴などは不明である。

〔カマド〕北西辺に付設されている。煙道・燃烧部右側壁は削平されて残っていない。燃烧部側壁は地山の削り出しによって造られている。燃烧部底面には顕著な焼面は認められず、厚さ1~2cmの炭化物層が認められた。底面は楕円形状（幅42cm・奥行96cm・深さ7cm）に浅く窪んでいる。奥壁は住居の壁面とほぼ一致する。燃烧部からは土師器甕が出土している。



カマド縦断面

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-----------------|-----|-------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 2 | にぶい赤褐(2.5YR4/3) | シルト | 天井部崩落土。 |
| 3 | 暗赤褐(2.5YR3/3) | シルト | 炭化物含む。焼土含む。 |
| 4 | 黒(7.5YR2/1) | シルト | 炭化物層。 |

K1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|-------------------|
| 1 | 褐(7.5YR4/3) | シルト | 地山シルトブロック・凝灰岩礫含む。 |

第22図 SI33竪穴住居跡

〔貯蔵穴〕貯蔵穴（K1）は、カマド右側に配置されている。長軸70cm・短軸48cmの長形状を呈し、深さは20cmである。堆積土は地山シルトブロックや凝灰岩小礫混じりの褐色シルトで、自然堆積である。土師器甕・甕が正位（1点）、倒位（2点）の状態出土している。

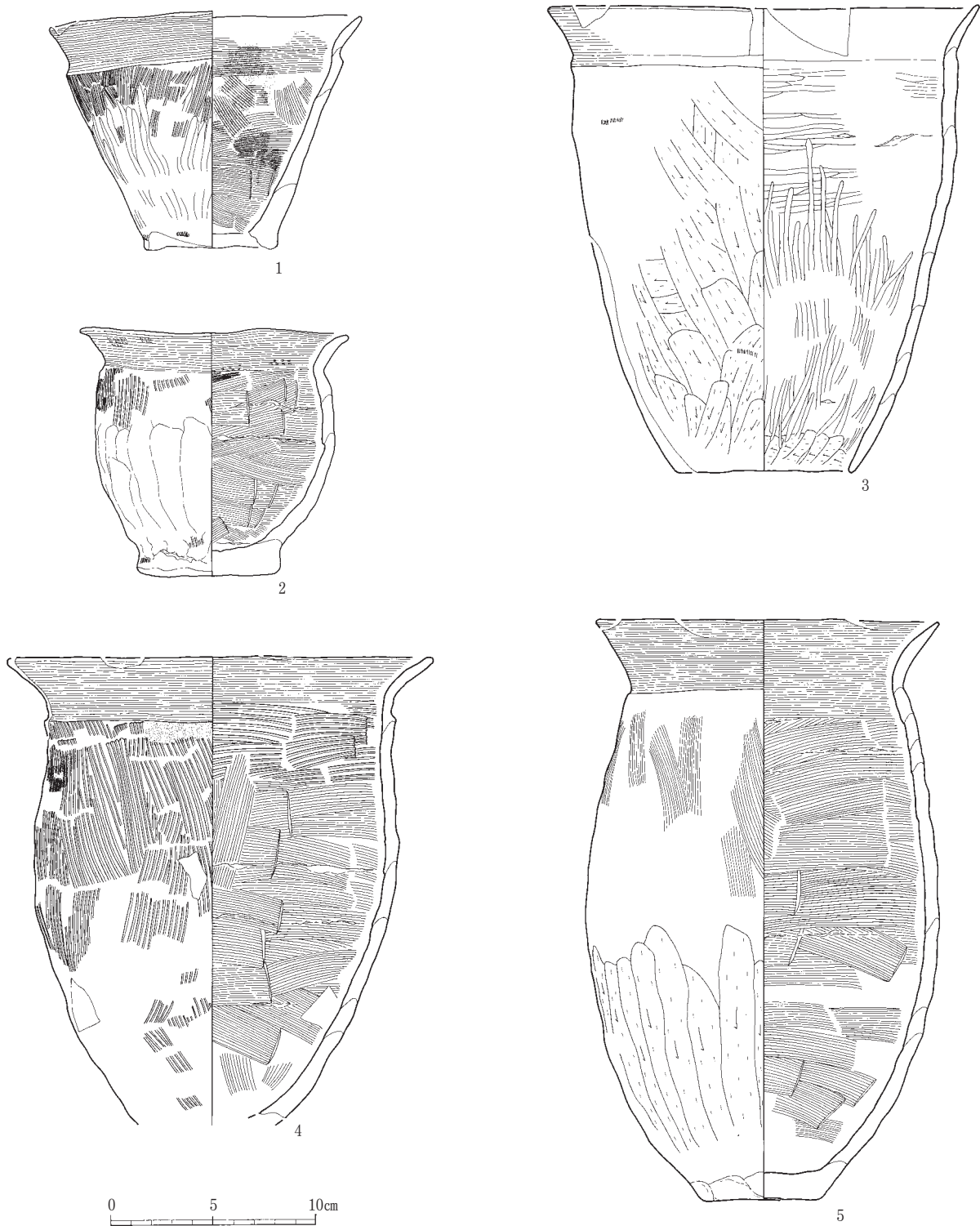
その他、カマド左側に楕円形状の小土壇（K2）が検出された。大きさは、長軸82cm・短軸54cm、深さ8cmほどである。堆積土は地山シルトブロックや凝灰岩小礫を含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

〔周溝〕周溝は認められなかった。

〔堆積土〕1層認められる。凝灰岩小礫を含む暗褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕カマド内から土師器甕（第23図-4・5）、貯蔵穴から土師器甕（第23図-1・2）・甕（第23図-3）などが出土した。いずれも非ロクロ調整で、頸部に段や稜を持つものである。1の土師器甕は、内面中位に炭化物が付着している。なお、住居や貯蔵穴の堆積土から縄文土器片も出土している。

【SI51住居跡】（第24図・第25図、図版9-1・2）



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|----------|------|---------|-------|--------|---|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 甕 | 貯蔵穴 Po.3 | ほぼ完形 | 15.3 | 6.5 | (11.5) | 外:(口)ヨコナデ(胴上)ハケメ(胴下)ハケメ→ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ・ナデ 煤付着 甕に転用? | 39-1 | I-50 |
| 2 | 土師器 甕 | 貯蔵穴 Po.4 | ほぼ完形 | 13.6 | 6.7 | 12.0 | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→ナデ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ヘラナデ・ナデ | 39-2 | I-53 |
| 3 | 土師器 甕 | 貯蔵穴 Po.5 | 1/2 | (21.2) | (8.6) | 22.9 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラケズリ 内:(胴)ヘラミガキ(底)ヘラケズリ | 39-3 | I-51 |
| 4 | 土師器 甕 | カマド Po.2 | 2/3 | (20.8) | — | — | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ、炭化物付着 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴上)ハケメ(胴下)ヘラナデ→ナデ | 39-5 | I-52 |
| 5 | 土師器 甕 | カマド Po.1 | 4/5 | 16.8 | 5.6 | 25.5 | 外:(口)ヨコナデ(胴上)ナデ(胴下)ヘラケズリ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ・ナデ | 39-4 | I-54 |

第23図 SI33住居跡出土土器

南区域、やや西側の南斜面で検出した。住居南側は削平を受けており、北半部が残存している。また、住居跡の中央部分には現代の溝によって壊されている。他遺構との重複はない。

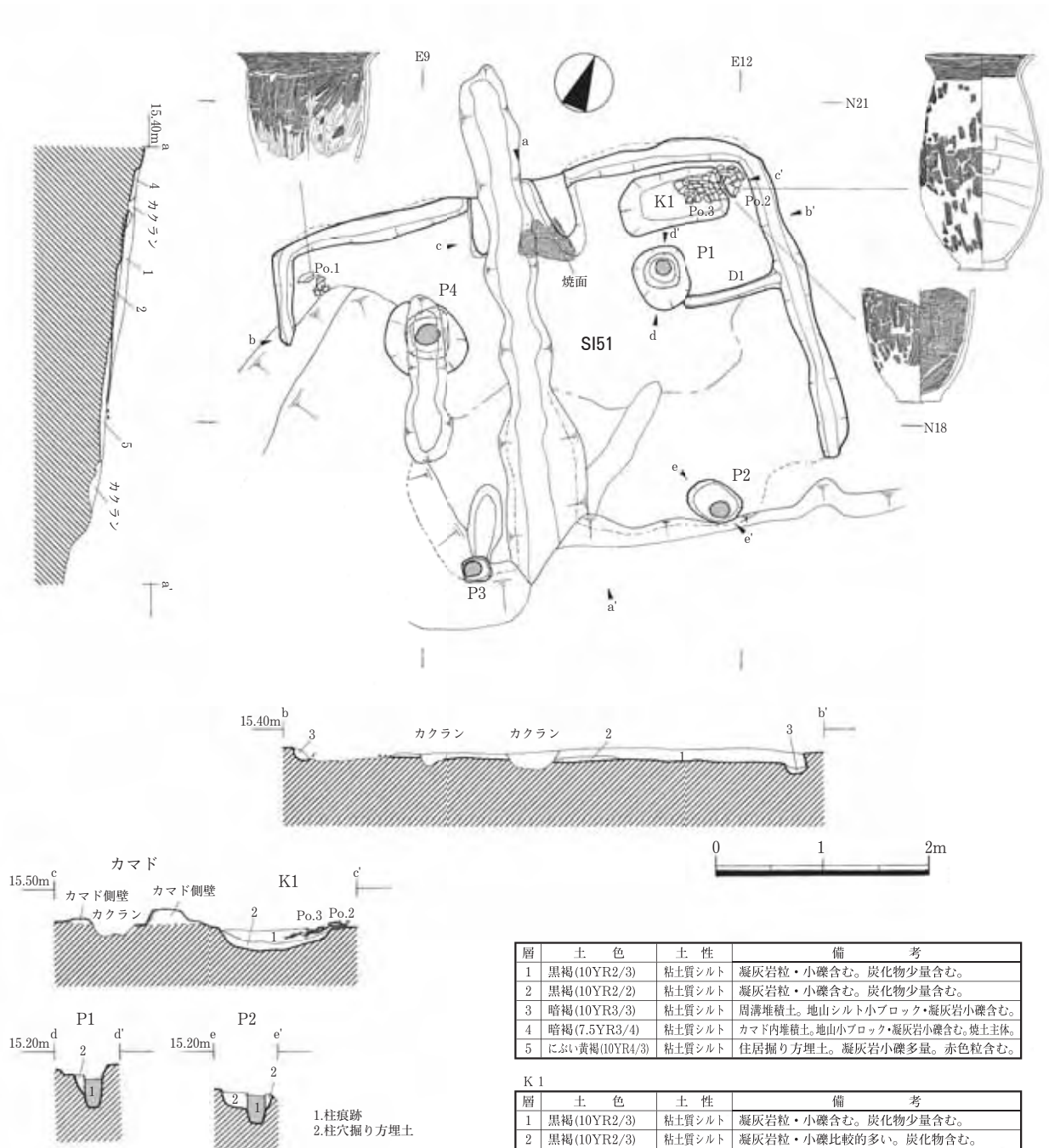
〔平面形・規模〕平面形は方形状を呈するとみられ、規模は北東—南西4.9m、北西—南東3.7m以上である。

〔方向〕北西辺で見ると東で北へ約35° 偏する。

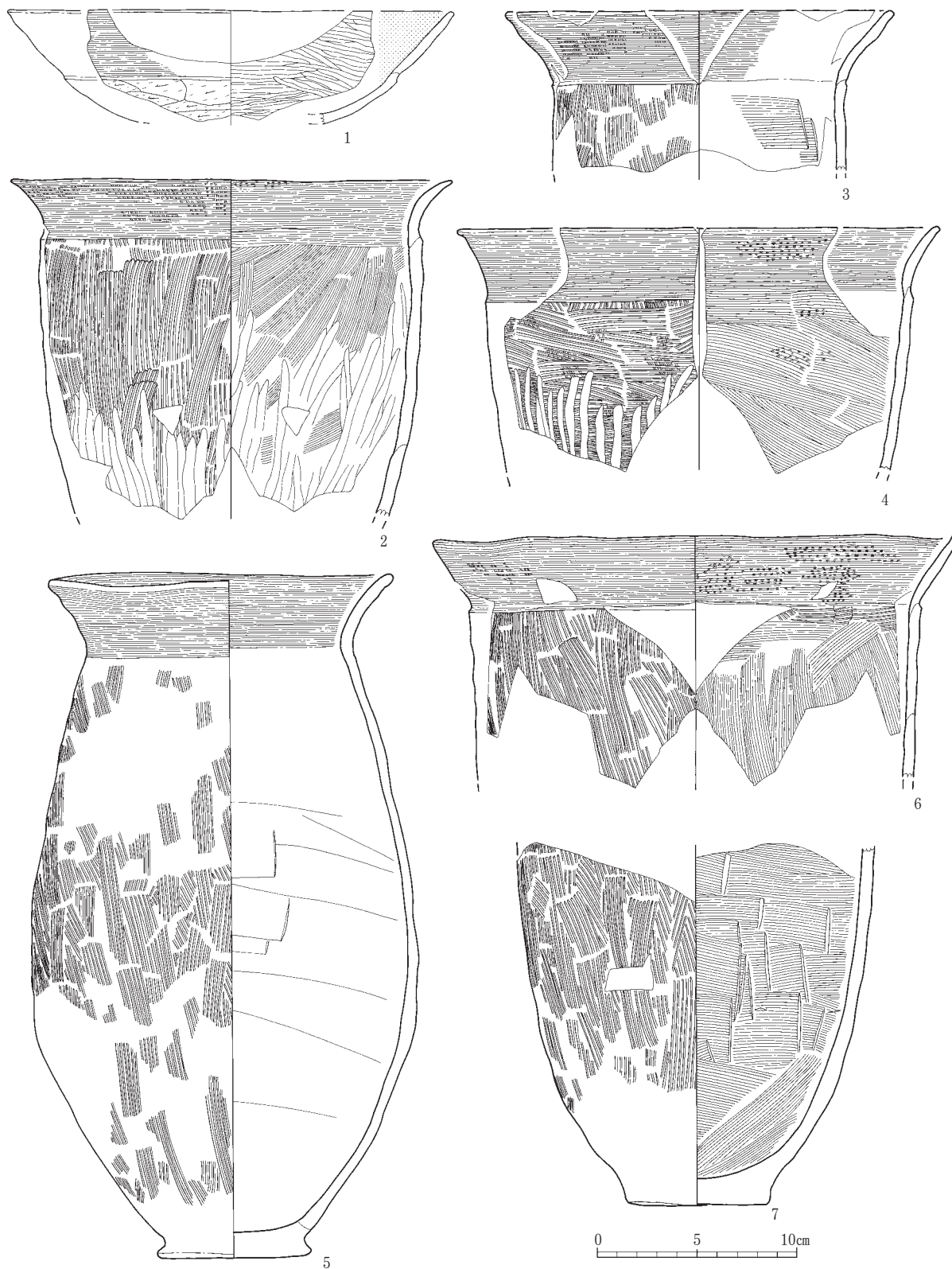
〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北西隅で床面から18cmである。

〔床面〕北側が地山を、南側が住居掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕支柱穴は住居平面形の対角線上に4個（P1～P4）あり、いずれも柱痕跡が認められる。柱



第24図 SI51 竪穴住居跡



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特 徴 | 写真図版 | 登 録 |
|-----|-------|----------|------|---------|-----|--------|--|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 坏 | 床面 | 1/8 | (22.5) | — | — | 外:(口)ヨコナデ(体)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 40-1 | I-55 |
| 2 | 土師器 甗 | 床面 Po.1 | 1/6 | (22.2) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ下部にヘラミガキ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ナデ下部にヘラミガキ | 40-5 | I-58 |
| 3 | 土師器 甗 | 床面 | 1/12 | (19.6) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ | 40-2 | I-57 |
| 4 | 土師器 甗 | 床面 | 1/12 | (24.2) | — | — | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→ナデ | 40-3 | I-56 |
| 5 | 土師器 甗 | 貯蔵穴 Po.2 | ほぼ完形 | 17.4 | 7.8 | 34.5 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ 底:ナデ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ | 40-4 | I-61 |
| 6 | 土師器 甗 | 床面 | 1/12 | (26.4) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→ナデ | 40-6 | I-59 |
| 7 | 土師器 甗 | 貯蔵穴 Po.3 | 胴・底 | — | 6.9 | (18.4) | 外:ハケメ 底:ナデ? 内:ヘラナデ・ナデ | 41-1 | I-60 |

第25図 SI51住居跡出土土器

穴掘り方は径32～40cmほどの円形～隅丸形状で、埋土は凝灰岩粒・小礫を多量に含む暗褐色シルトである。柱痕跡は径16～18cmほどの円形で、堆積土は凝灰岩礫や炭化物を含む黒褐色シルトである。

〔カマド〕北西辺の中央部に付設されている。煙道やカマド燃焼部は現代の溝によって壊されている。燃焼部側壁は地山の削り出しによって造られている。燃焼部底面は浅く窪んでおり、部分的に焼面が認められる。奥壁は住居の壁面とほぼ一致する。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴（K1）はカマド右側に配置されている。長軸102cm・短軸50cmの長形状を呈し、深さは18～20cmである。堆積土は地山シルト小ブロック、凝灰岩礫や炭化物粒が混じる黒褐色粘土質シルトで、自然堆積である。堆積土の上部からは土師器甕2個体分の破片がまとまって出土した。

〔周溝〕残存する3辺では認められる。幅20～28cmで、深さは5～8cmほどである。堆積土は地山シルトブロックや凝灰岩小礫を含む暗褐色シルトで、自然堆積である。

〔その他〕北東辺の周溝から支柱穴（P1）へと延びる小溝（D1：幅5cm、深さ3cm）がある。

〔堆積土〕2層に大別される。1・2層とも地山シルト小ブロックや凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕住居床面から土師器坏（第25図－1）・甑（第25図－2）・甕（第25図－3・4・6）、砥石（第93図－3）、貯蔵穴（K1）の堆積土から土師器甕（第25図－5・7）・ミニチュア土器（第91図－3）などが出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は体部外面に段や稜をもち、甕類も頸部に段や稜を持つものである。

【SI52住居跡】（第26図、図版9－3）

南区域中央付近の南東斜面で検出された。住居跡の北側部分が残存している。SI27住居跡と重複し、これよりも古い。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸形状を呈するとみられる。規模は北東－南西3.1m、北西－南東2.2m以上である。

〔方向〕北西辺で見ると東で北へ約55°偏する。

〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は残りの良い北西辺で床面から32cmである。

〔床面〕ほぼ平坦である。凝灰岩小礫を多く含む黄褐色シルトで一部貼床がなされている。

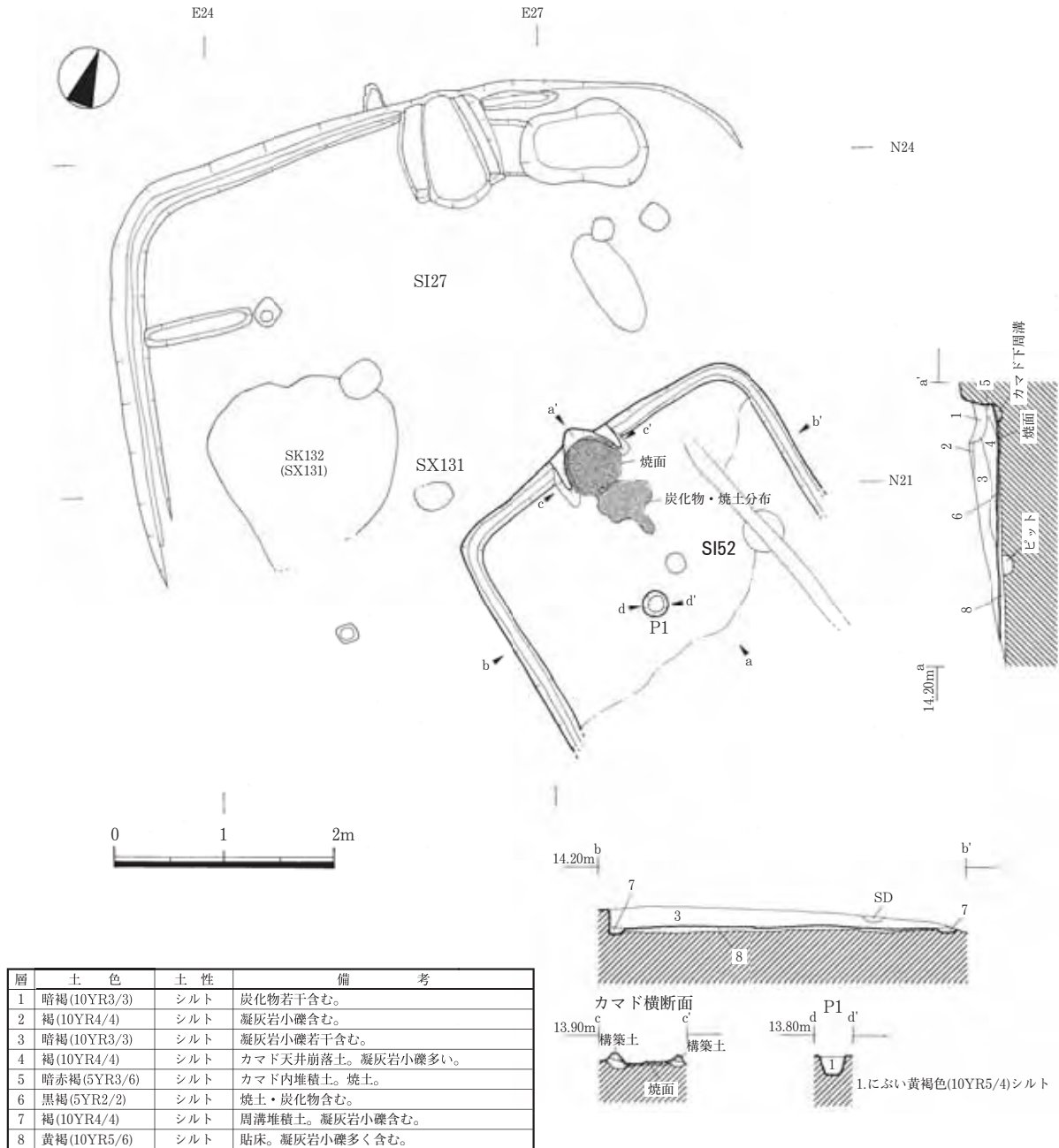
〔柱穴〕支柱穴と明確に言えるものは検出されていない。ただし、床面中央でピット1個（P1）を検出している。柱痕跡は確認されていない。大きさは径22cm、深さ18cmで、堆積土は凝灰岩小礫を含むにふい黄褐色シルトである。

〔カマド〕北西辺の中央部に付設されている。煙道部は削平されて残っていない。カマド側壁は褐色～にふい黄褐色シルトによって構築されている。カマド底面には顕著な焼面が認められる。カマド底面は幅44cm・奥行52cmの大きさである。カマド前面には、厚さ1～2cmの炭化物層が認められた。

〔貯蔵穴〕検出されなかった。

〔周溝〕各辺を幅約20cmの周溝がめぐる。深さは10～12cmほどで、壁材痕は認められなかった。堆積土は、カマド部以外は褐色シルトの自然堆積土であり、機能時は開渠であったと考えられる。

〔堆積土〕2層に大別される。いずれも凝灰岩小礫を含む褐色シルト～暗褐色シルトである。



第26図 SI52竪穴住居跡

〔出土遺物〕住居堆積土から非ロクロ調整の土師器坏や甕の小片が若干出土したのみである。

【SI53住居跡】(第27図、図版10-1~3)

南区域中央付近の南東斜面で検出した。南半部が削平されており、カマドが付設されている北半部が残存している。他の遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は全体では方形状を呈するとみられるが、北西隅は弧状になっている。規模は北東-南西3.5m、北西-南東2.2m以上である。

〔方向〕北西辺で見ると東で北へ約45°偏する。

〔壁〕やや斜めに立ち上がっている。壁高は残りの良い北東隅で床面から32cmである。

〔床面〕厚さ2~4cmの住居掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

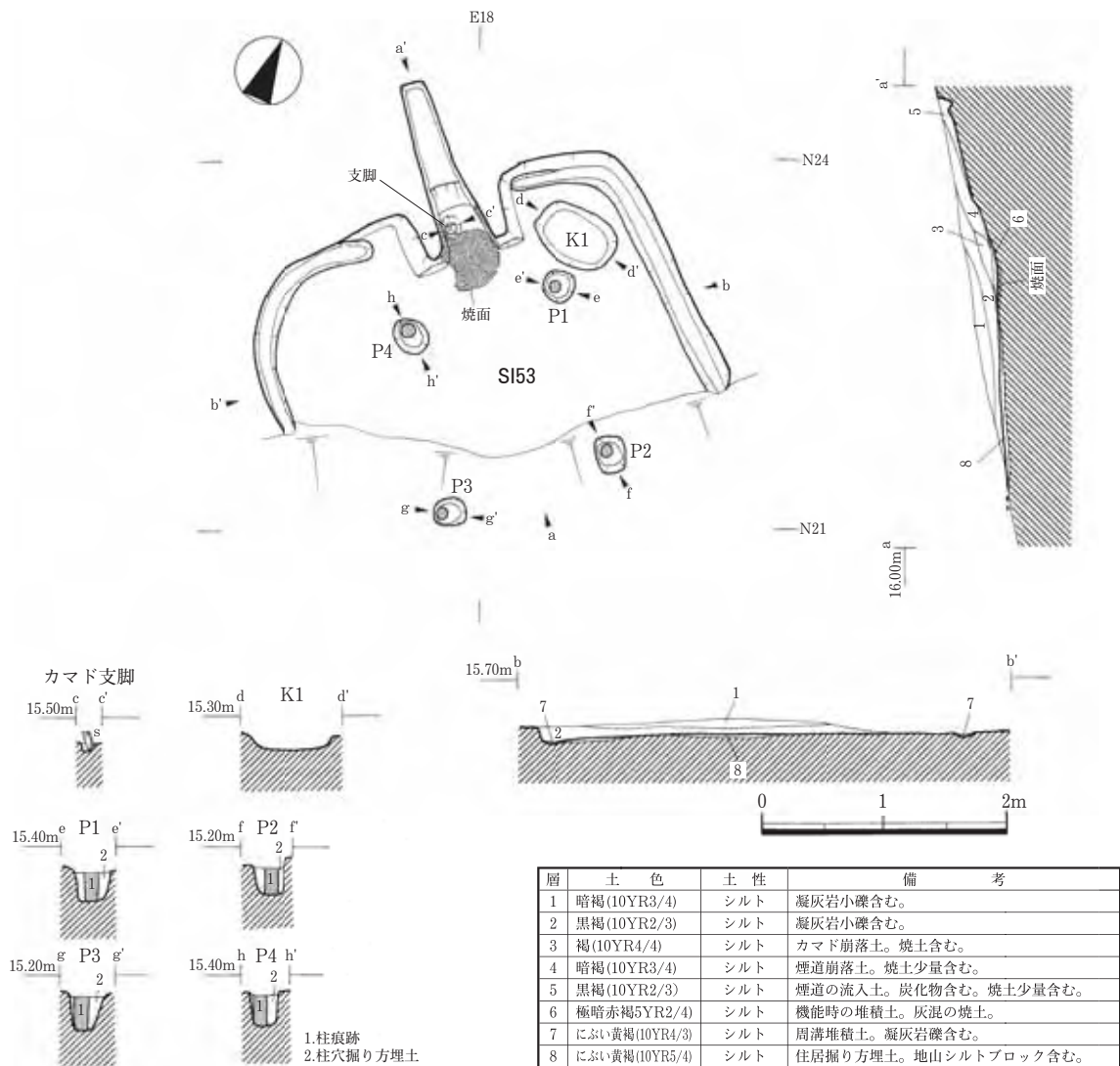
〔柱穴〕 主柱穴は住居平面形の対角線上に4個（P1～P4）検出された。柱穴掘り方は長軸30cm・短軸20cmほどの隅丸長方形で、埋土は凝灰岩小礫を多く含む褐色シルトである。いずれも直径12～16cmの柱痕跡が認められる。

〔カマド〕 北西辺の中央部に付設されている。燃烧部と煙道が残存している。燃烧部は幅38cm、奥行28cmである。燃烧部底面は住居床面とほぼ水平であり、底面には顕著な烧面が認められる。左奥には柱状の石製支脚が埋め込まれている。燃烧部側壁は地山を削り出して造られている。奥壁は傾斜をもって立ち上がり、煙道へと至る。煙道の長さは85cmで、底面は緩やかに傾斜して上がる。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴（K1）はカマドの右側に設置されている。長軸68cm・短軸44cmの楕円形状を呈し、深さは11cmである。

〔周溝〕 カマド付近の一部を除いて巡っている。幅15～18cm、深さ4～5cmほどである。堆積土は凝灰岩小礫を含むふい黄褐色シルトで、自然堆積である。壁材痕は認められなかった。

〔堆積土〕 2層に大別される。凝灰岩小礫を含む暗褐色シルトおよび黒褐色シルトで、自然堆積である。



第27図 SI53竪穴住居跡

る。

〔出土遺物〕住居床面や貯蔵穴から非ロクロ調整の土師器甕・甕などの破片、住居堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器壺などの破片が少量出土している。なお、住居堆積土から縄文土器の破片も出土している。

【SI54住居跡】(第28図、図版10-4)

南区域中央のやや西寄りで見出した。南東側は削平されている。床面下からは北辺と平行する幅12～18cmの溝跡(D1:旧周溝か)が見出されたことから、住居跡は北東側に50cmほど拡張されている可能性もある。他遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は方形状で、規模は南北4.7m、東西2.9m以上である。

〔方向〕西辺で見ると北で東へ約20° 偏する。

〔壁〕やや斜めに立ち上がっている。壁高は西辺で床面から22cmである。

〔床面〕北側部分では住居掘り方埋土を床面としているが、その他は地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕主柱穴は3個(P1～P3)見出した。柱穴掘り方はP1が長軸44cm・短軸36cm、P2が長軸29cm・短軸26cmの楕円形、P3が長軸46cm・短軸34cmの楕円形である。埋土は凝灰岩小礫を含むにふい黄褐色～褐色シルトである。柱痕跡は径15～20cmほどの円形で、堆積土は暗褐色～黒褐色シルトである。

〔カマド〕西辺の中央部に付設されている。燃焼部は幅66cm・奥行き58cmほどである。底面には顕著な焼面は認められず、側壁内面上部が焼けて赤変している。また、底面には薄い炭化物と灰が堆積し、さらに焼土ブロック・粒を含む層やにふい黄褐色のカマド天井部崩壊土が堆積していた。燃焼部側壁は礫混じりのにふい黄褐色粘土によって構築されている。奥壁は壁面よりもやや奥へ掘り込まれている。長さ22cm・幅28cm、深さ30cmである。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は見出されなかった。

〔周溝〕カマド部分を除く壁際で確認された。幅14～16cm、深さ3～10cmほどである。堆積土は凝灰岩小礫を含むにふい黄褐色シルトで、自然堆積である。

〔堆積土〕1層認められる。凝灰岩小礫を含む暗褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器甕(第28図-1)、大型砥石(第94図-9)、住居堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕などの破片が出土している。1の土師器甕は他の土師器類と異なり、胎土にはやや砂粒が多く、全体的に赤褐色を呈している。

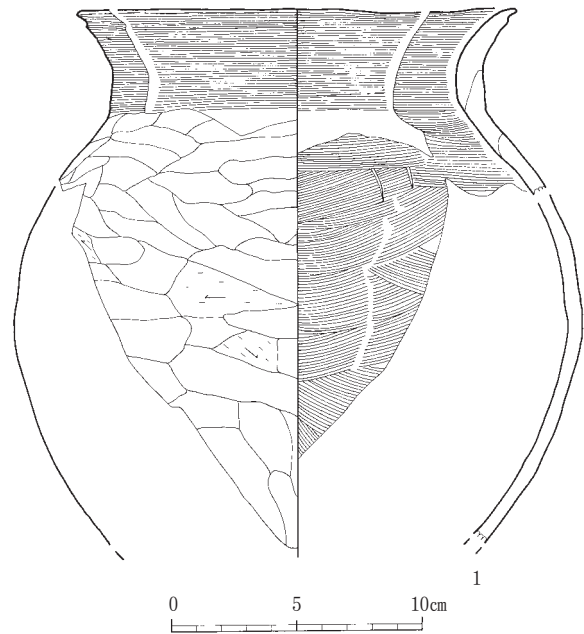
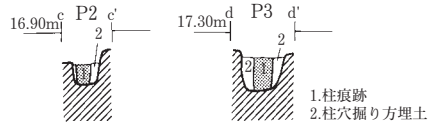
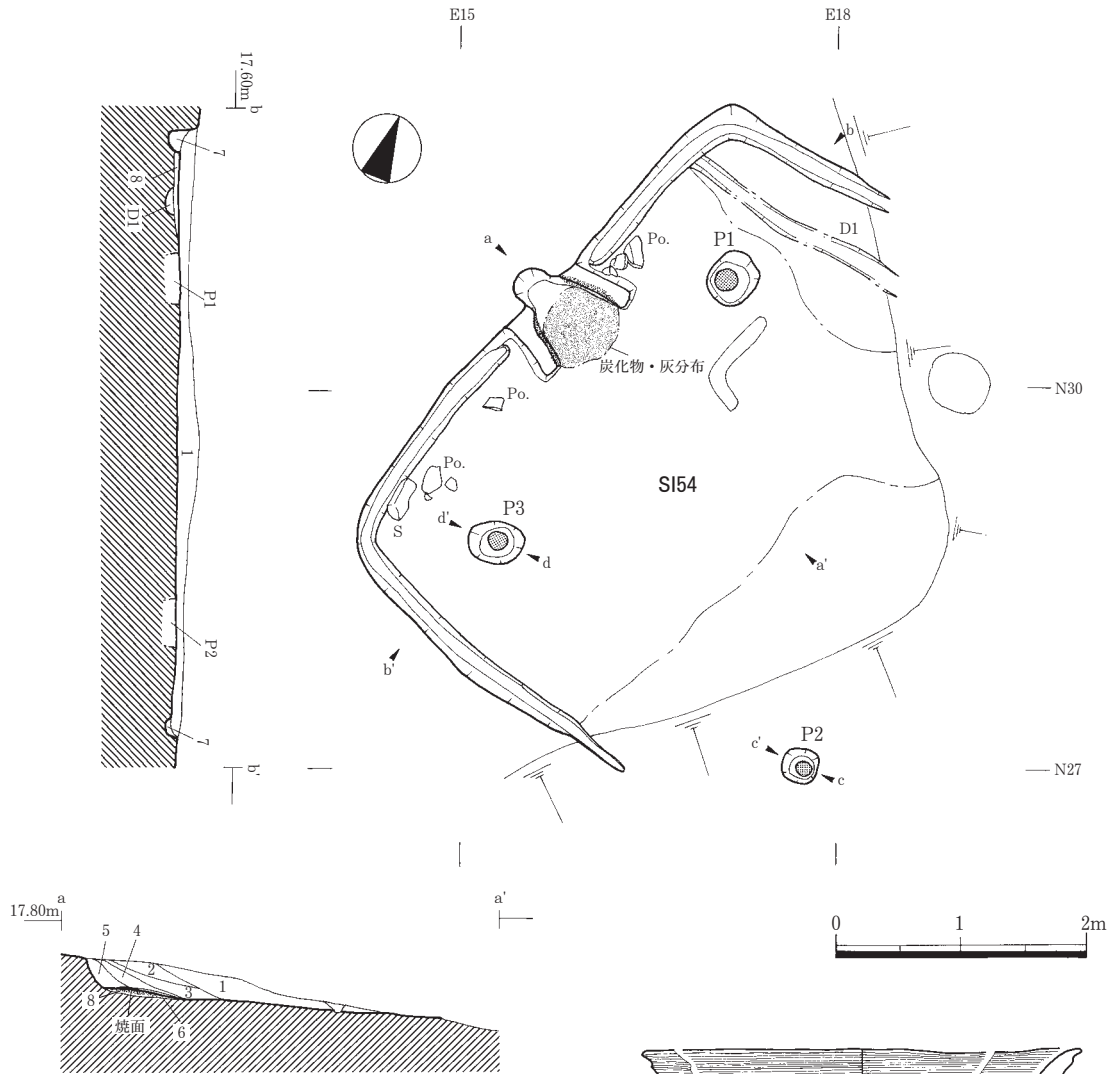
【SI80住居跡】(第29図)

南区域中央付近やや西寄りで見出した。削平や他の遺構との重複のために痕跡的にしか残存していない。SI12・SI151住居跡と重複し、SI12より古く、SI151より新しい。

〔平面形・規模〕平面形は方形状とみられ、規模は北東-南西6.7m、北西-南東2.2m以上である。

〔方向〕北西辺で見ると東で北へ約47° 偏する。

〔壁〕ほとんど残っていない。わずかに残る北西辺では深さが20cmほどある。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|-----------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 2 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | カマド崩落土。凝灰岩小礫含む。 |
| 3 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | カマド内流入土。凝灰岩小礫含む。焼土含む。 |
| 4 | 黄褐(5YR4/6) | シルト | カマド内流入土。焼土ブロック・焼土粒含む。 |
| 5 | にぶい褐(7.5YR5/3) | シルト | 煙道流入土。焼土粒含む。 |
| 6 | 黒(7.5YR1.7/1) | シルト | 炭化物層。 |
| 7 | にぶい黄褐(10YR5/4) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 8 | にぶい褐(7.5YR5/4) | シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩粒を含む。 |

| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|------|------|---------|----|----|---|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 甕 | 床面 | 1/10 | 17.6 | — | — | 外:(口)ヨコナデ(胴)ヘラケズリ→ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ・ナデ 全体的に赤褐色を呈す。 | 41-2 | I-62 |

第28図 SI54竪穴住居跡と出土土器

〔床面〕重複しているSII12住居跡とほぼ同じである。

〔柱穴〕主柱穴とみられるピットを1個（P1）検出した。径20～25cmのやや歪んだ円形で、柱痕跡は不明である。深さは60cmほどある。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトである。

〔カマド〕北西辺の中央に付設されている。燃焼部の痕跡と煙道の一部が残る。燃焼部の大きさは、幅60cm以上・奥行き50cmとみられる。燃焼部底面には焼面の痕跡がごくわずかに認められる。側壁は右側壁の痕跡のみ確認した。煙道は長さ110cm・幅24cm、深さ10cmほどである。煙道の底面は先端に向けて緩やかに傾斜して上がる。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴とみられる土壙（K1）はカマド右側で検出した。SI12の貯蔵穴と重複しており、わずかに残存する。堆積土は凝灰岩粒を多く含む暗褐色シルトである。

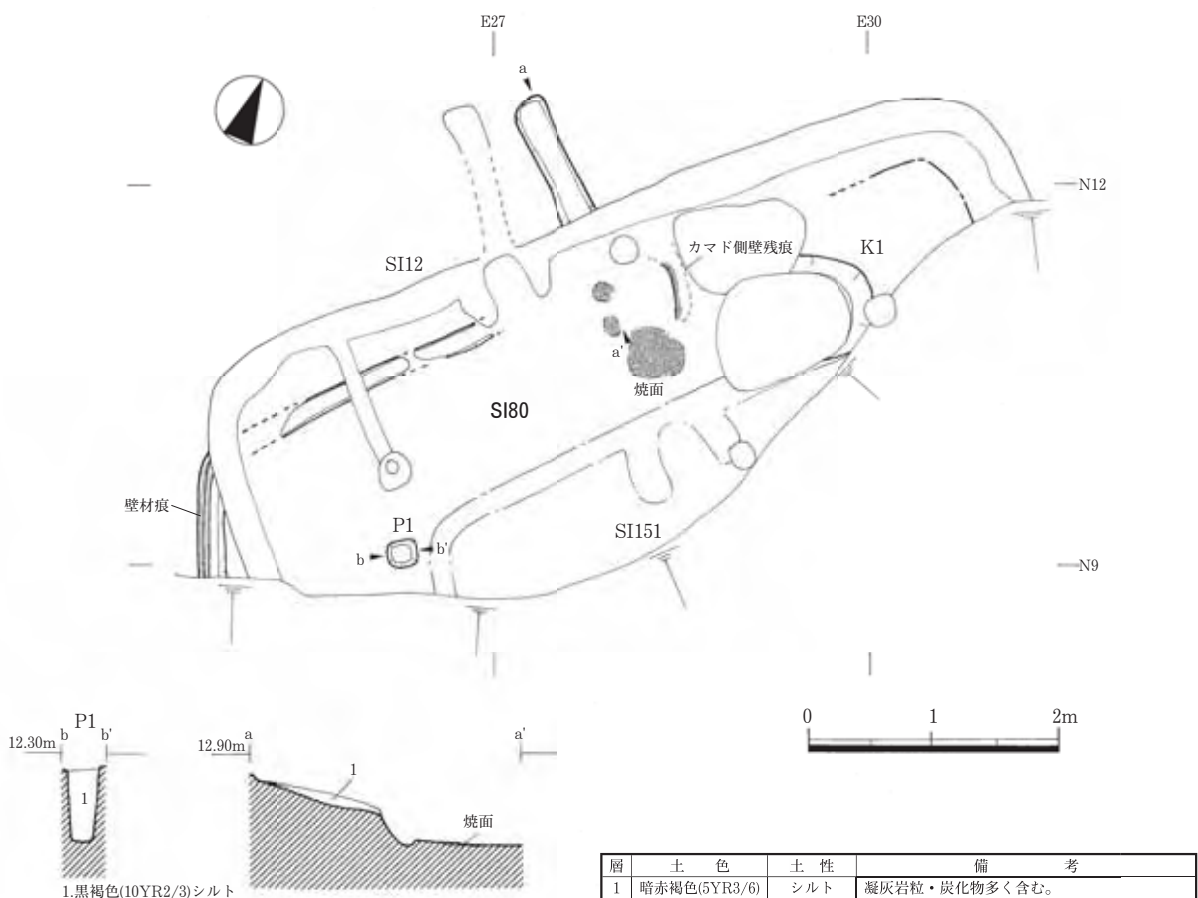
〔周溝〕部分的に検出した。南西辺には幅5cm前後の壁材痕が認められる。周溝は幅22cm、深さ3cmで、埋土は凝灰岩小礫を多く含む暗褐色シルトである。

〔堆積土〕SI12住居跡と重複しない南西壁部に黒褐色シルトがわずかに残存している。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI85住居跡】（第30図・第31図、図版11-1・2）

南区域の西端に位置する。住居西側は調査区外にあり、また、南半部が削平されているため、検出できたのは北東部分のみである。



第29図 SI85竪穴住居跡

〔平面形・規模〕 全体の平面形は方形状を呈するとみられる。規模は東西2.2m以上、南北3.5m以上である。

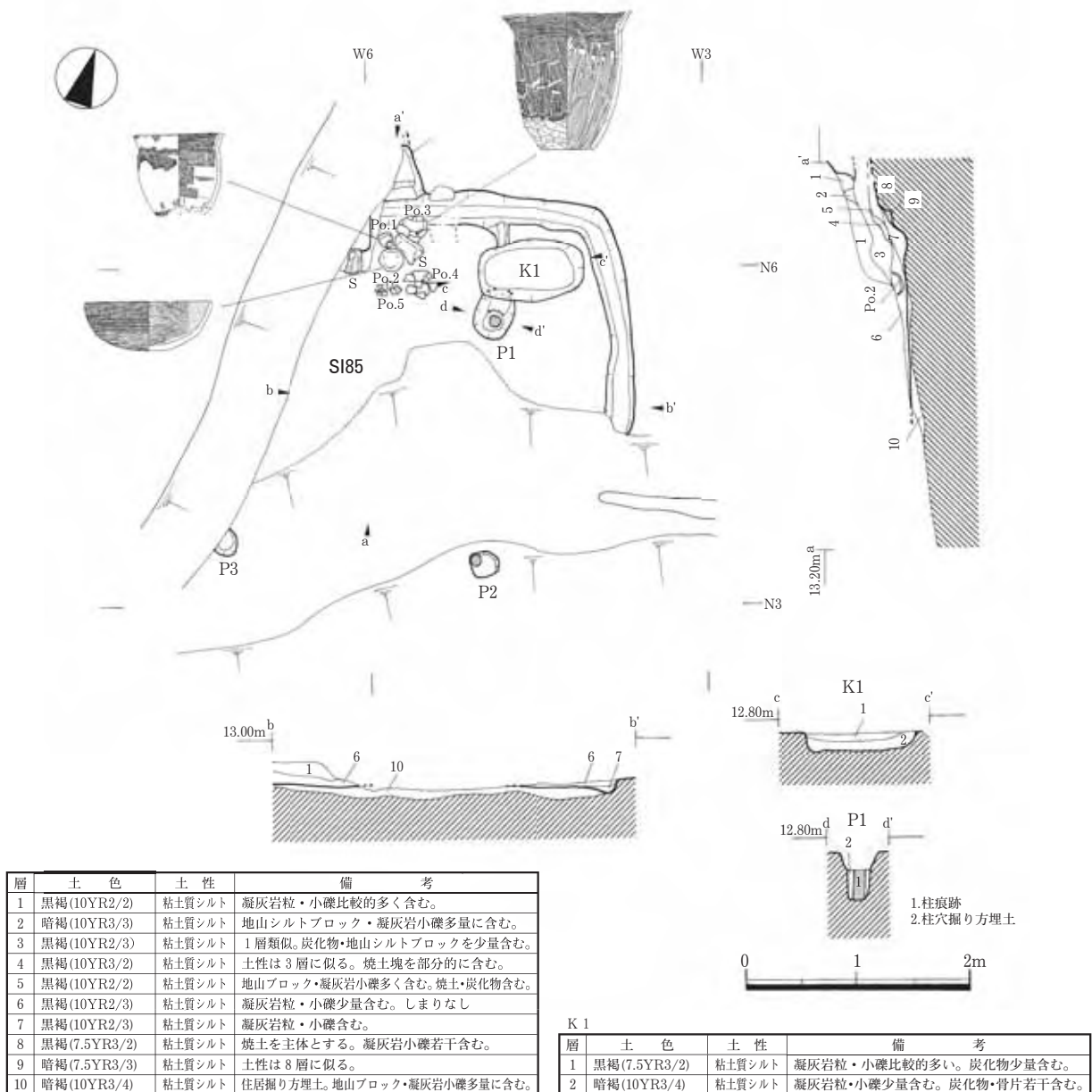
〔方向〕 北辺で見ると東で北へ約20° 偏する。

〔壁〕 壁上部は崩落してやや斜めになっている。壁高は北東隅の壁際では床面から35cmほどある。

〔床面〕 住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 住居平面形の対角線上に支柱穴を3個（P1～P3）検出した。径25～42cmほどの円形あるいは楕円形で、深さは40cmほどである。埋土は凝灰岩小礫を多く含む暗褐色粘土質シルトである。柱痕跡は2個の支柱穴（P1・P2）に認められる。径10cmほどの円形状で、堆積土は凝灰岩小礫を含む黒褐色粘土質シルトである。

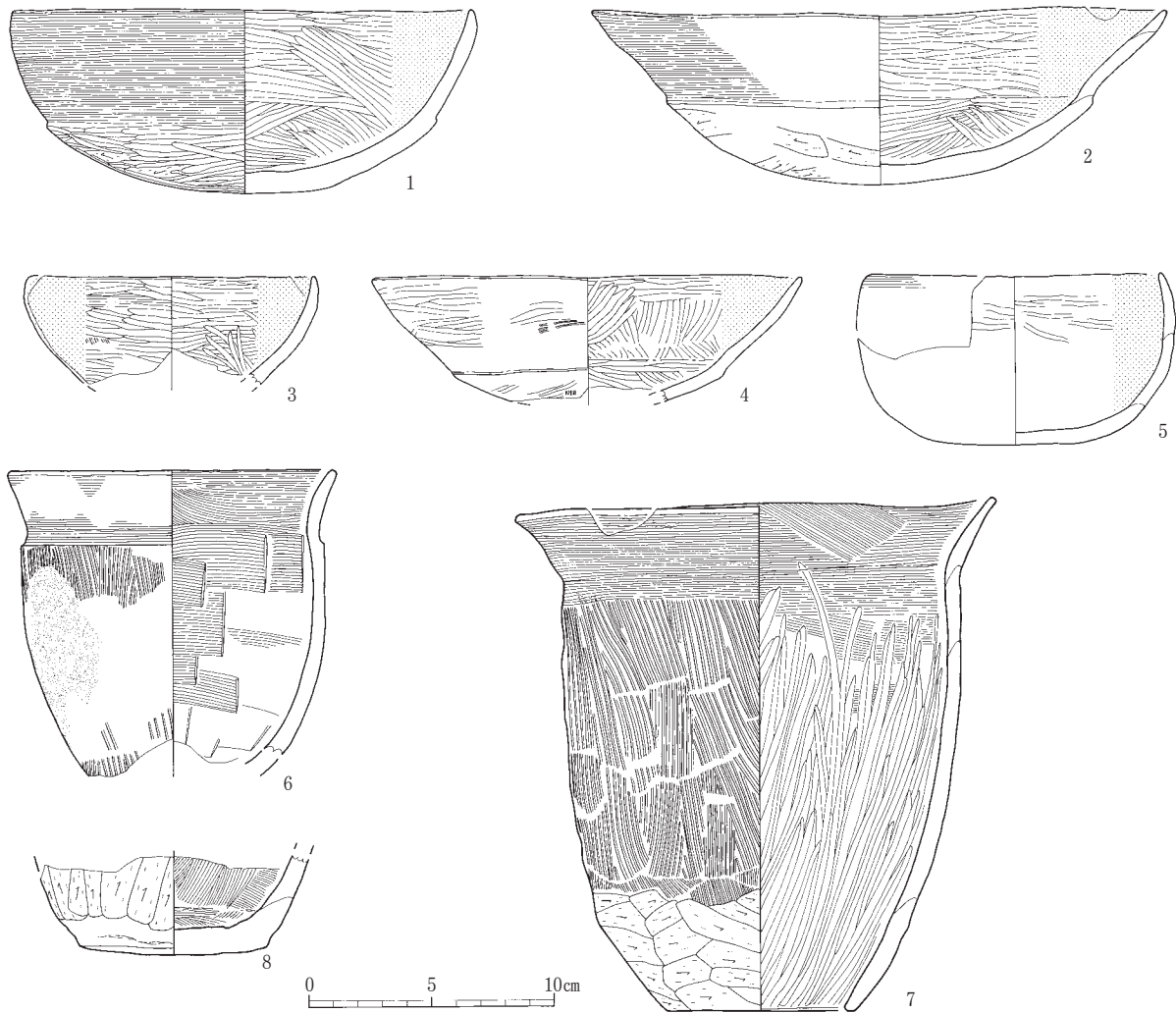
〔カマド〕 カマドは北辺に付設されている。燃焼部と煙道の一部を確認した。燃焼部は幅50cm・奥行



第30図 SI85竪穴住居跡

き60cmほどとみられる。底面は浅く窪んでいる。燃烧部側壁は左側のみ残存しており、右側壁は人為的に取り壊されたものとみられる。左側壁は凝灰岩小礫を含む褐色粘土などで構築しており、焼き口部には粘板岩角礫を据えている。奥壁は住居壁面と一致するが、段状になって煙道へと続く。煙道部底面は緩やかに傾斜して上がり、調査区外へと延びている。燃烧部底面とその前面からは土師器坏・土師器甕・甕などが5個体まとまって出土している。土師器大型坏はほぼ完形に近いものである。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴(K1)はカマドの右側で検出された。隅丸長形状を呈し、大きさは長軸95cm・短軸48cm、深さは16~18cmほどである。堆積土は炭化物粒を少量含む黒褐色粘土質シルトが自然堆積したものである。



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|---------|----------|------|---------|-----|--------|---|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 大型坏 | カマド Po.2 | ほぼ完形 | 18.8 | — | 7.5 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ→ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 41-4 | I-63 |
| 2 | 土師器 大型坏 | 床面 | 2/3 | 23.5 | — | 7.2 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 41-3 | I-64 |
| 3 | 土師器 坏 | P1→P2 | 1/8 | (11.8) | — | — | 外:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(体)ハケメ→ヘラミガキ 内:ヘラミガキ 内外面黒色処理 | — | I-66 |
| 4 | 土師器 高坏 | カマド前床面 | 1/3 | (17.6) | — | — | 外:ハケメ→ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 41-6 | I-67 |
| 5 | 土師器 壺 | カマド前床面 | 1/2 | (12.0) | — | 7.0 | 外:(口)ヨコナデ(体)ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 41-5 | I-65 |
| 6 | 土師器 甕 | カマド Po.1 | 5/6 | 13.4 | — | (12.5) | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ、炭化物付着 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ | 41-7 | I-68 |
| 7 | 土師器 甕 | カマド Po.3 | ほぼ完形 | 19.7 | 7.6 | 20.7 | 外:(口)ヨコナデ(胴上)ハケメ(胴下端)ヘラケズリ 内:(口)ヨコナデ(胴)ナデ→ヘラミガキ | 42-1 | I-70 |
| 8 | 土師器 甕 | 床面 | 底部 | — | 7.5 | — | 外:ヘラケズリ 底:ヘラケズリ 内:ナデ | — | I-69 |

第31図 SI85住居跡出土土器

〔周溝〕残存する北辺と東辺で確認できた。上幅22～30cm、深さ4～5cmほどで、堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色粘土質シルトの自然堆積である。

〔堆積土〕凝灰岩小礫を多く含む黒褐色粘土質シルトの自然堆積層が北辺付近に残っている。

〔出土遺物〕住居床面やカマド燃焼部付近から非ロクロ調整の土師器杯（第31図－3）・高杯（第31図－4）・大型杯（第31図－1・2）・碗（第31図－5）・甌（第31図－7）・甕（第31図－6・8）、大型砥石（第94図－10）・すり石（第96図－19）、貯蔵穴の堆積土から非ロクロ調整の土師器杯・甕の破片などが出土している。土師器杯は体部外面に段や稜をもち、土師器甌・甕類も頸部に段や稜をもち、3の土師器杯は両面に黒色処理が施されている。なお、住居堆積土から縄文土器の小片が出土している。

【SI87住居跡】（第32図、図版11－3）

南区域の西端に位置する。大半は調査区外にあり、また、南側が削平されているため、検出できたのは東辺部のカマド付近のみである。

〔平面形・規模〕全体の平面形や規模は不明であるが、少なくとも南北は3.2m以上ある。

〔方向〕東辺でみると北で西へ約40°偏する。

〔壁〕壁上部はやや崩落して斜めになっている。壁高は調査区の壁際では床面から50cmほどある。

〔床面〕住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。調査区壁際の床面上には板状の粘板岩礫が数個体認められる。

〔柱穴〕支柱穴とみられるものが1個（P1）検出された。径35cmほどの円形で、深さは約30cmである。柱穴掘り方埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含むにぶい黄褐色シルトである。中央に径15cmの円形の柱痕跡が認められる。

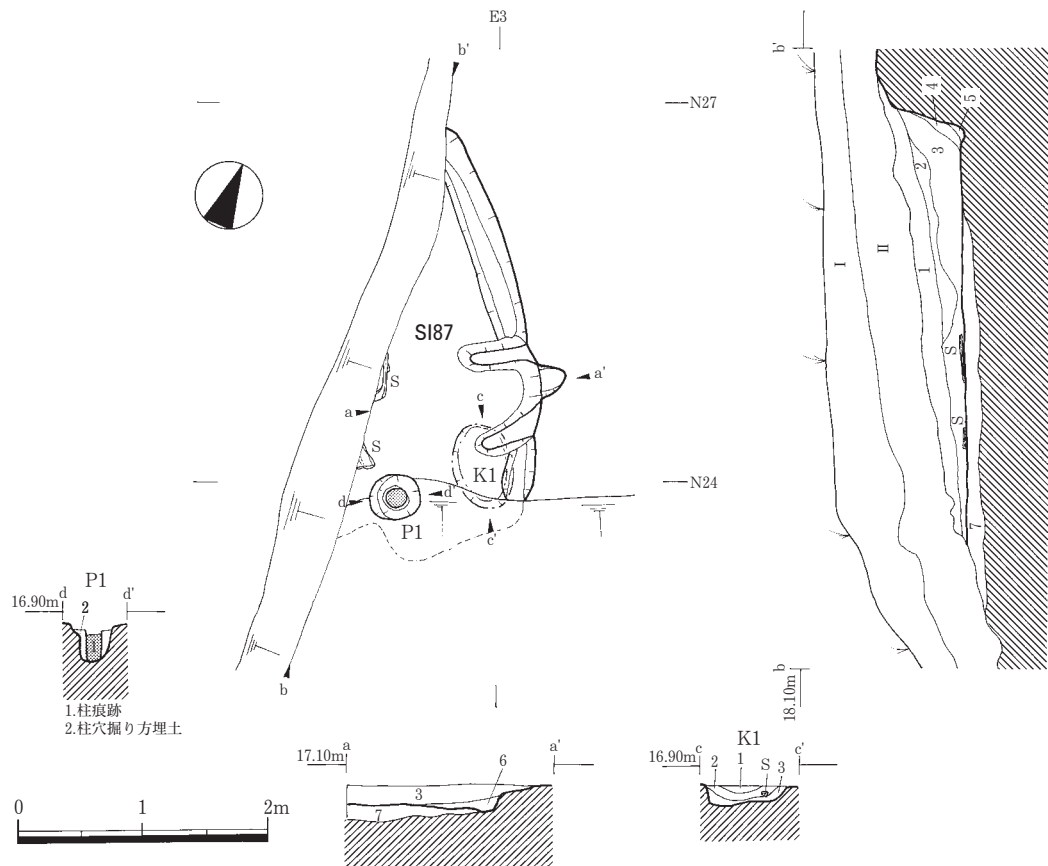
〔カマド〕東辺に付設されている。燃焼部が残存している。燃焼部は幅50cm・奥行き40cmほどである。底面はごく浅く窪んでいる。焼面は明瞭には残っていない。側壁は褐色シルトとにぶい黄褐色シルトブロックが不均質に混じる土で構築されている。奥壁は住居の壁面とほぼ一致する。煙道は削平されているが、奥壁の段から緩やかに傾斜して上がっていたものとみられる。

〔貯蔵穴状土壌〕貯蔵穴とみられる土壌（K1）は、カマド右側壁下で検出された。楕円形状を呈し、大きさは長軸70cm・短軸48cm、深さは12～14cmほどである。堆積土上部は人為的な埋め戻し土とみられることから、この土壌を埋め戻してからカマドを造り直した可能性がある。

〔周溝〕残存する東辺では巡っている。上幅30cm、深さ4～5cmほどで、堆積土は凝灰岩粒・小礫を多く含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔堆積土〕3層に大別される。1層は凝灰岩小礫を多く含む黒褐色シルト、2・3層は凝灰岩小礫・地山シルトブロックを多く含む黒褐色シルトである。いずれも自然堆積である。

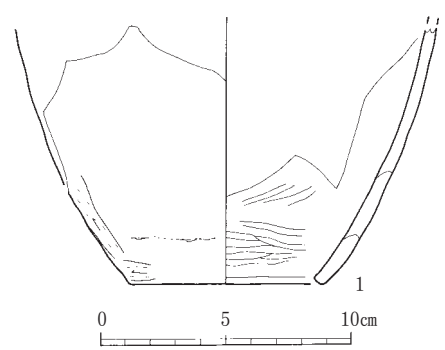
〔出土遺物〕住居床面やカマド内堆積土から非ロクロ調整の土師器壺・甌（第32図－1）・甕の破片、貯蔵穴状土壌堆積土から非ロクロ調整の土師器甕の破片、砥石（第93図－7）などが出土している。また、住居堆積土からは非ロクロ調整の土師器杯・甌・甕などの破片が出土した。なお、住居堆積土・掘り方埋土などから縄文土器片や赤彩を施した土師器の小片（第97図－15）が出土している。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|----------------|-----|--------------------------------|
| I | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 基本層I層(表土)。凝灰岩小礫(凝灰岩)多量に含む。 |
| II | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 基本層II層。凝灰岩小礫多量に含む。赤色岩粒比較的多い。 |
| 1 | 黒褐(7.5YR3/2) | シルト | 凝灰岩小礫多量に含む。I・II層に比べ色調の黒みが強い。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 凝灰岩小礫・地山シルトブロック多量に含む。 |
| 3 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 凝灰岩小礫・地山シルトブロック多量。下部に炭化物粒若干あり。 |
| 4 | 黒褐(10YR2/2) | シルト | 壁際のみ堆積。凝灰岩小礫比較的多く含む。 |
| 5 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 周溝内堆積土。凝灰岩小礫比較的多く含む。 |
| 6 | 極暗褐(7.5YR2/3) | シルト | カマド内堆積土。焼土粒・炭化物粒多量に含む。 |
| 7 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩小礫不均質に多量含む。 |

K1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|----------------------------|
| 1 | 褐(10YR4/4) | シルト | 人為。凝灰岩小礫多量。地山シルトブロック比較的多い。 |
| 2 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 凝灰岩小礫比較的多く含む。炭化物・焼土粒若干含む。 |
| 3 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 凝灰岩小礫・地山シルトブロック比較的多く含む。 |



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量(cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|----|-------|--------|----|--------|-----|----|-----------------|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 甕 | 床面+堆2層 | 底部 | - | 7.8 | - | 外:ヘラケズリ 内:ヘラミガキ | 42-2 | I-71 |

第32図 SI87竪穴住居跡と出土土器

【SI89住居跡】(第33図、図版12-1~6)

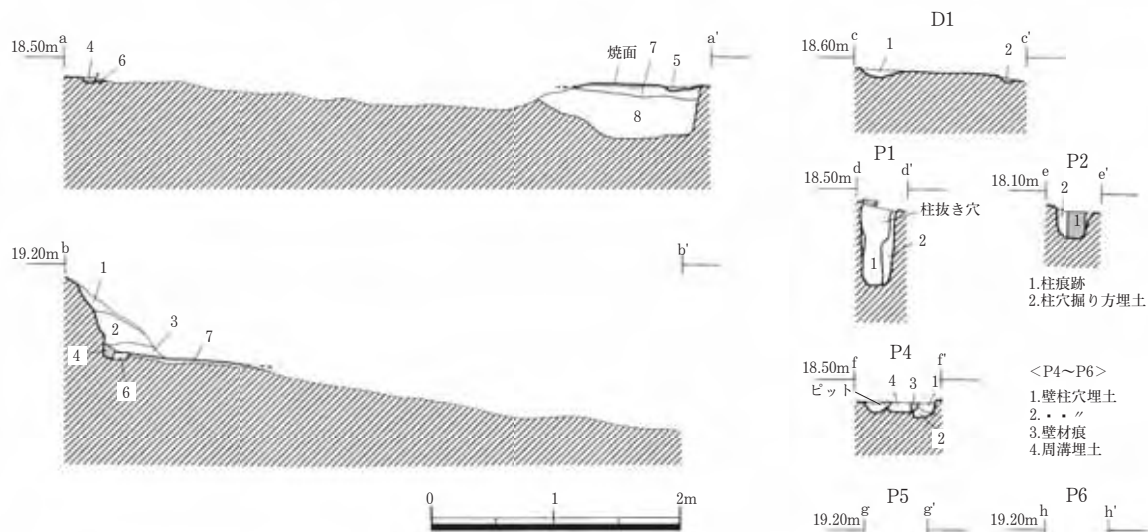
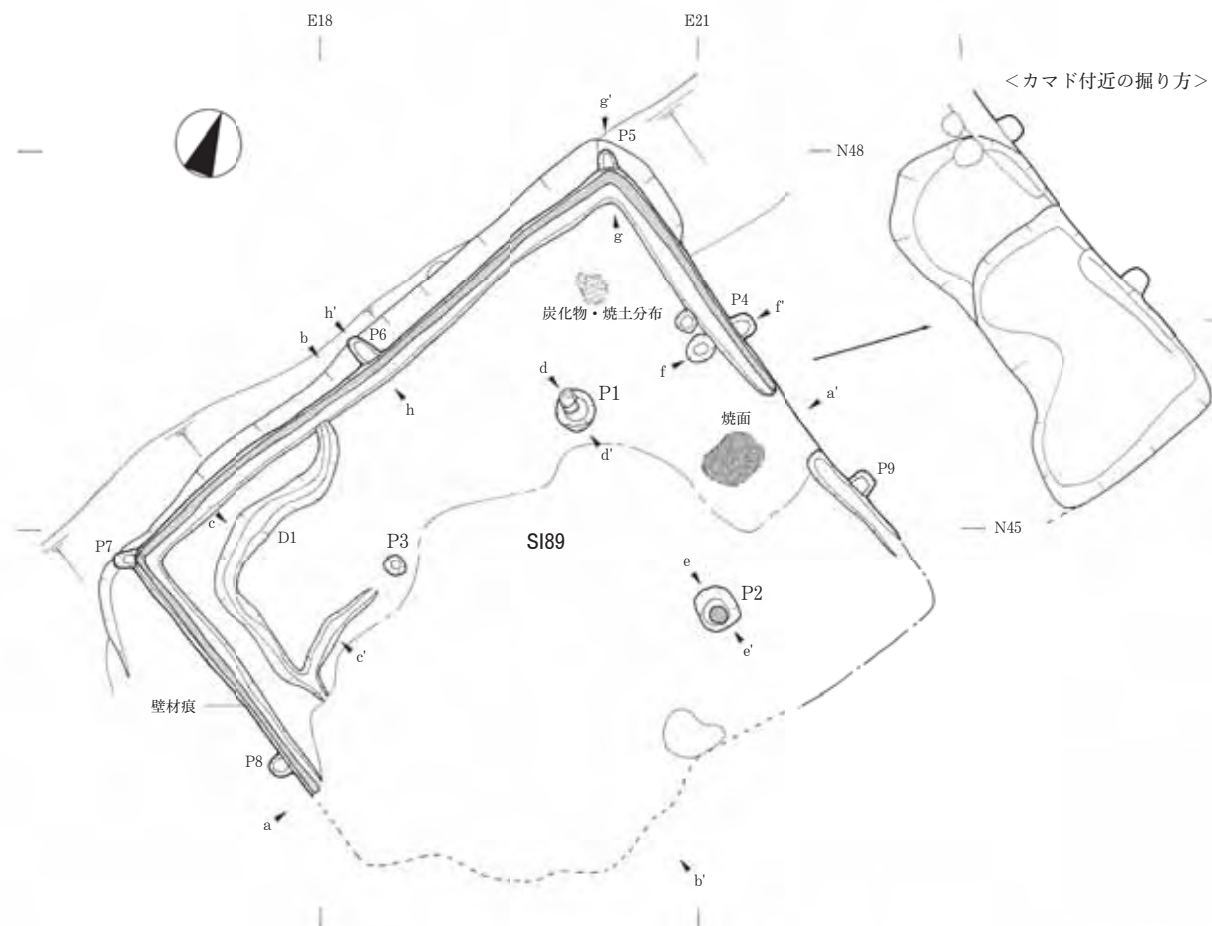
南区域の北西部南斜面に位置する。南東半部が削平されており、カマド部分も痕跡的に残存するのみである。他の遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は北東-南西4.9m、北西-南東4.5mほどと推定される。

〔方向〕北西辺で見ると北で東へ約31°偏する。

〔壁〕上部がやや崩落しており斜めになっている。壁高は北西辺側では床面から50cmほどある。

〔床面〕住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-------|------------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 凝灰岩粒・小礫比較的多く含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩粒・小礫極めて多く含む。 |
| 3 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 凝灰岩粒・小礫比較的多く含む。炭化物若干含む。 |
| 4 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 壁材痕。凝灰岩粒比較的多く含むが3層より少ない。 |
| 5 | 暗褐(7.5YR3/4) | シルト | カマド内堆積土。焼土粒多量。赤化した凝灰岩小礫多く含む。 |
| 6 | 褐(10YR4/4) | シルト | 周溝埋土。凝灰岩礫多量に含む。 |
| 7 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩粒・小礫多量。 |
| 8 | にぶい黄褐(10YR4/3) | 砂質シルト | カマド下の埋土。凝灰岩中礫を極めて多量に含む。 |

D 1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|-------------------|
| 1 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 凝灰岩粒多く含む。炭化物若干含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 凝灰岩粒多く含む。炭化物若干含む。 |

第33図 S189竪穴住居跡

〔柱穴〕北東側に主柱穴とみられるものが2個（P1・P2）検出された。また、壁柱穴が6個（P4～P9）確認できた。P1は径20cmの円形で、深さは60cmほどある。柱抜き取り穴が認められる。P2は径30cmの円形で、深さは25cmほどである。柱穴掘り方埋土はいずれも凝灰岩礫を多く含む黄褐色シルトである。P1・P2とも径14～15cmほどの円形の柱痕跡がある。壁柱穴は、本来は住居の四隅と各辺中央に1個（カマドのある北辺は2個）ずつ規則的に配置されていたものとみられる。長軸25～30cm、短軸15～20cmほどの長楕円形を呈し、掘り方は壁の外側に張り出している。柱痕跡は明瞭には確認できなかった。

〔周溝〕残存する壁際には全体に巡っている。幅15～20cm、深さ5～6cmほどで、埋土は凝灰岩小礫を多く含む褐色シルトである。一部を除いて壁材痕が確認されている。幅5～6cm、深さ5～6cmほどで、堆積土はややしまりのない黒褐色シルトである。

〔カマド〕北東辺の中央部に付設されている。削平されており、燃焼部底面の焼面のみが残存している。焼面は長軸50cm・短軸35cmほどの楕円形を呈しており、この焼面が接する住居北東辺の周溝はちょうどこの部分で途切れている。焼面の下は大きく掘り窪められ、礫混じり土が充填されている。これは防湿機能を図るためのものと考えられる。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出されなかった。

〔その他〕小ピット3個（P3ほか）、北西側で不整な浅い小溝跡（D1：幅15～30cm、深さ5cm）を確認した。また、住居北隅の床面には焼土・炭化物粒が分布する部分が認められた。

〔堆積土〕3層に大別される。1層は黒褐色シルト、2層は暗褐色シルト、3層は黒褐色シルトで、いずれも凝灰岩小礫を多く含む。

〔出土遺物〕住居床面からは出土しておらず、壁材痕堆積土やP1柱抜き取り穴から非ロクロ調整の土師器甕などの小破片がわずかに出土したのみである。住居堆積土からは非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が少量出土し、他に羽口（第91図-16）や黒曜石の剥片などもみられる。

【SI90住居跡】（第34図、図版13-1・2）

中央付近の南東斜面に位置する。南東側半分は大きく削平を受けている。他遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は長形状、規模は南北5.1m、東西2.3m以上とみられる。

〔方向〕西辺で見ると北で東へ約15°偏する。

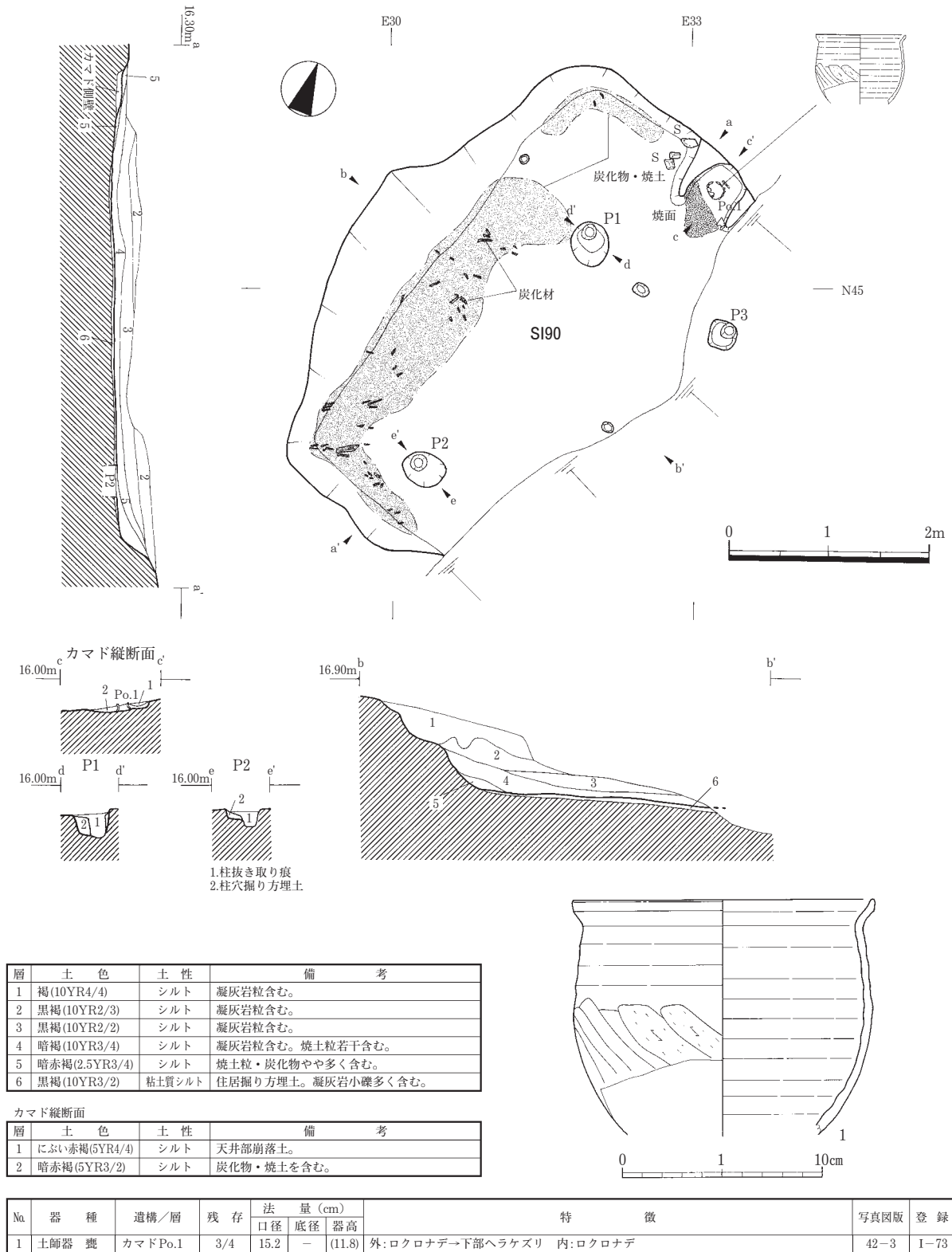
〔壁〕やや斜めに立ち上がるが、上部は崩落したものとみられる。壁高は西辺では床面から80cmほどある。

〔床面〕住居掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕主柱穴は住居平面形の対角線上に3個（P1～P3）検出した。柱穴掘り方はP1が長軸45cm・短軸38cm、P2が長軸44cm・短軸32cmの楕円形である。P3は径30cmほどの不整な円形である。いずれも柱が抜き取られている。埋土は凝灰岩小礫を含む暗褐色～褐色シルトである。抜き穴には木炭・焼土混じりの暗赤褐色～黒褐色土が堆積していた。

〔カマド〕カマドは北辺に付設されている。煙道は削平されて残っていない。燃焼部は幅50cm・奥行き70cmほどである。底面はごく浅く窪んでいる。焼面はカマド焚き口～底面・側壁に及び、長軸60

cm・短軸50cmの不整形を呈する。焼面上には、焼土・炭化材やカマド天井部崩落土などが堆積していた。燃焼部左側壁際にはカマド本体の構築材の一部とみられる角礫が3点ある。燃焼部底面からは支脚に転用されたとみられる土師器甕が倒位で出土した。奥壁は住居壁面とほぼ同じである。



第34図 SI90竪穴住居跡と出土土器

〔貯蔵穴・周溝〕貯蔵穴および周溝は検出されなかった。

〔堆積土〕5層に大別される。1～3層は凝灰岩小礫を含む褐色～黒褐色シルトで、4・5層は焼土粒・炭化物を含む暗褐色～暗赤褐色シルトである。すべて自然堆積である。なお、床面を覆う4・5層には焼土や炭化材などが比較的多く含まれていた。

〔出土遺物〕カマド内からロクロ調整の土師器甕（第34図-1）、住居堆積土からは土師器坏・甕、須恵器坏などの破片が少量出土している。また、鉄滓や縄文土器片などが数点含まれていた。

【SI100住居跡】（第35図、図版13-3）

北区域の西端、丘陵頂部付近に位置する。北西～北半部分が削平されている。他遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は正形状を呈するとみられ、規模は北東-南西4.0m以上、北西-南東4.0m以上である。

〔方向〕南東辺でみると北で東へ約36°偏する。

〔壁〕わずかに残存するのみであるが、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は南西辺側では床面から10cmほどである。

〔床面〕残存する部分では、住居掘り方埋土を床面にしている。

〔柱穴〕支柱穴などは検出されなかった。

〔カマド〕北辺の東寄りに付設されていたものとみられる。削平のために壊されており、燃焼部に堆積したとみられる焼土・炭化物粒の薄層の分布のみを確認した。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出されなかった。

〔周溝〕残存する南西辺・南東辺では巡っている。幅15～30cm、深さは8cmほどである。堆積土は凝灰岩小礫・炭化物を含む黒褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

〔堆積土〕わずかに残っており、凝灰岩小礫を含む暗褐色粘土質シルトである。

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器高台坏（第35図-1・2）などが出土している。1の須恵器高台坏は、口縁部に油煙状の付着物が認められる。

【SI101住居跡】（第36図、図版14-1～3）

北区域の北端、丘陵頂部付近に位置する。検出された住居跡ではもっとも標高が高い地点にある。南～南東部分が削平されている。他の遺構との重複はない。

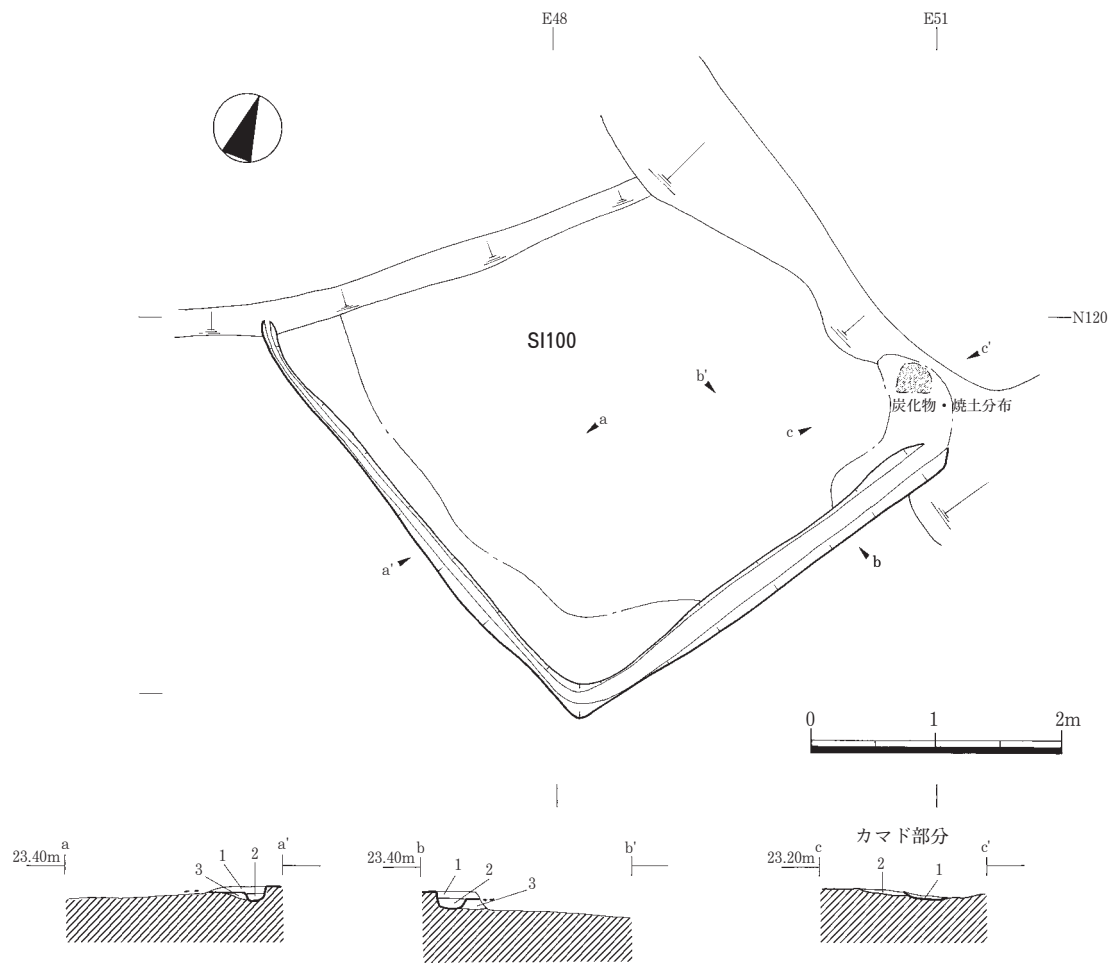
〔平面形・規模〕平面形は正形状を呈するとみられる。規模は北西-南東4.0m以上、北東-南西3.8m以上である。

〔方向〕北西辺でみると北で東へ34°偏する。

〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は北西辺側で床面から20cmほどある。

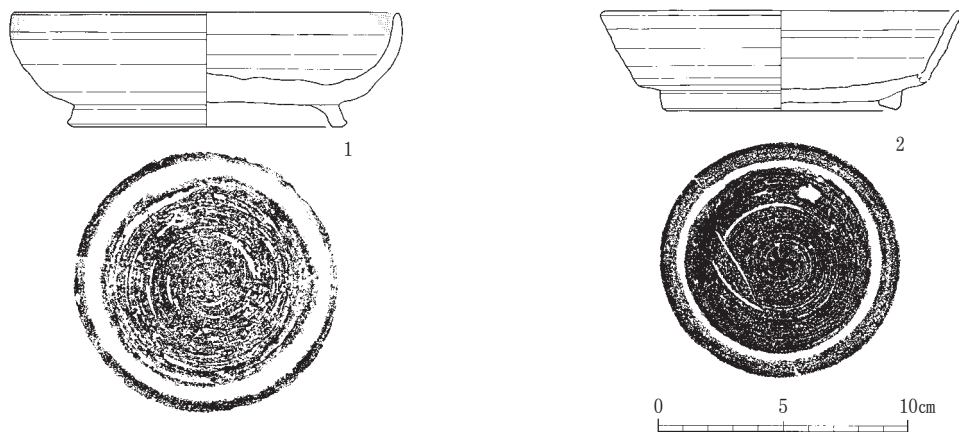
〔床面〕住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居平面形の対角線上に支柱穴を4個（P1～P4）検出した。不整形形状で、大きさは径35cm～40cm、深さは20cm～25cm、埋土は凝灰岩小礫を多く含むにふい黄褐色シルトである。いずれも径12～15cmほどの円形状の柱痕跡が認められる。堆積土は凝灰岩小礫を含む暗褐色シルトである。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|---------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/2) | 粘土質シルト | 周溝堆積土。炭化物・凝灰岩小礫含む。 |
| 3 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩小礫(1層より小)多く含む。 |

| カマド部分 | | | |
|-------|-------------|--------|------------------------|
| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
| 1 | 褐(7.5YR4/6) | シルト | 燃焼部か。焼土粒多量に含む。炭化物粒干含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 住居掘り方埋土。 |



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|---------|------|-----|---------|--------|-----|---|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 須恵器 高台環 | 床面 | 1/2 | (15.2) | (11.2) | 4.6 | 内外:ロクロナデ 底:切り離し不明→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ 口縁部に油煙状附着物 | 42-4 | I-77 |
| 2 | 須恵器 高台環 | 床面 | 1/3 | (14.4) | (9.6) | 4.0 | 内外:ロクロナデ 底:切り離し不明→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ | 42-5 | I-78 |

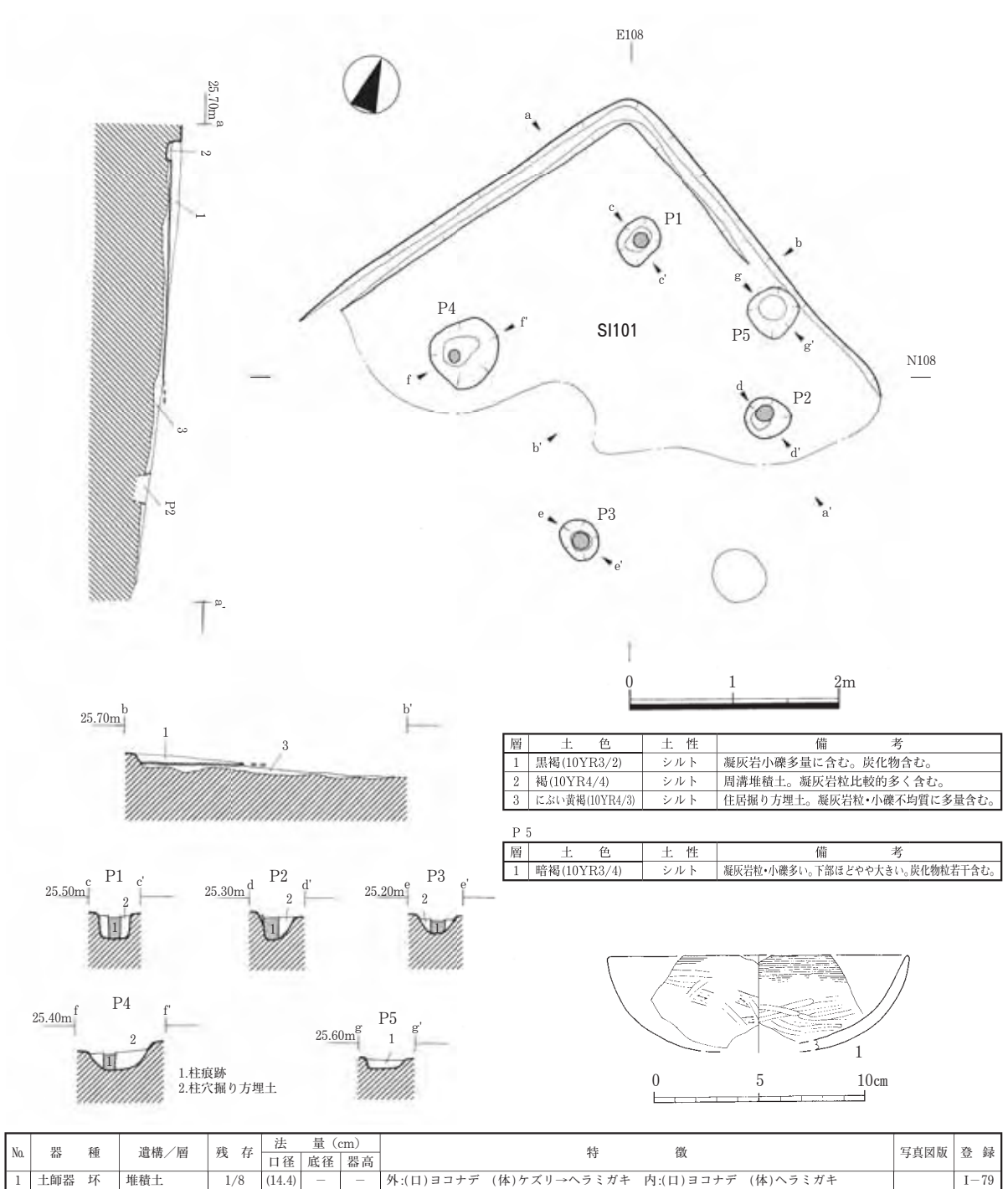
第35図 SI100竪穴住居跡と出土土器

〔カマド〕 カマドは不明である。

〔周溝〕 残存する北西辺・北東辺では巡っている。幅18~25cm、深さ5~8cmほどで、堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む褐色シルトである。

〔その他〕 北東辺際でピット1個（P5）を確認した。やや不整な円形で、径40cm、深さ10cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・小礫を多く含む暗褐色シルトで、自然堆積したものである。

〔堆積土〕 1層残存している。凝灰岩粒・小礫を多く含む黒褐色シルトで、自然堆積である。



第36図 SI101堅穴住居跡と出土土器

〔出土遺物〕 住居床面から非ロクロ調整の土師器杯・甕など、堆積土から土師器杯（第36図-1）・甕などの破片が少量出土した。1の土師器杯は外面調整が口縁部ヨコナデ、体部はケズリの後にヘラミガキ、内面は口縁部ヨコナデ、体部がヘラミガキであり、黒色処理は施されていない。

【SI103住居跡】（第37図、図版14-4～6、15-1・2）

丘陵頂部に近い北区域中央付近の南東斜面部に位置する。削平および攪乱のために南東半部分が消失している。他の遺構との重複はない。

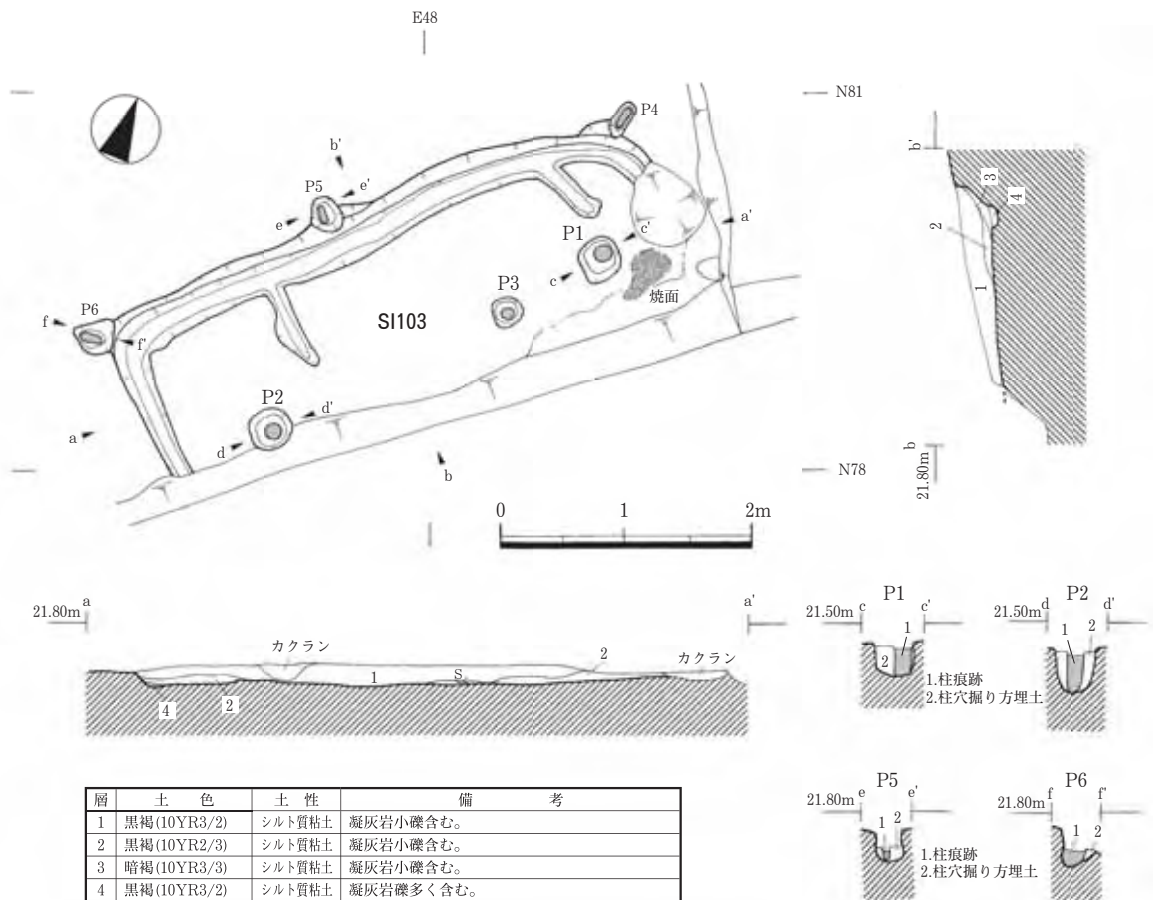
〔平面形・規模〕 平面形は方形状を呈するものとみられる。規模は北東-南西4.5m、北西-南東1.5m以上である。

〔方向〕 北西辺でみると北で東へ約43° 偏する。

〔壁〕 上部はやや崩落しており斜めになっている。壁高は北西辺側で床面から30cmほどある。

〔床面〕 地山を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 主柱穴が2個（P1・P2）、壁柱穴3個（P4～P5）、その他1個（P3）が検出された。主柱穴は住居平面形の対角線上に4個配置されていたものとみられる。残存する2個（P1・P2）は、径32cmほどの円形状もしくは隅丸方形状で、深さは30～35cmである。埋土は凝灰岩小礫を多く含む暗褐色シルトである。径12～14cmの円形状の柱痕跡が認められる。堆積土は黒褐色シルトである。壁柱穴は北東隅・北西隅・北西辺中央にみられる。やや不整な長楕円形状の掘り方で、大きさは長軸30～34



第37図 SI103竪穴住居跡

cm・短軸12～24cm、深さは26～30cmほどある。中央に長楕円形状の柱痕跡がある。長軸18～20cm・短軸6～7cmほどの大きさである。これら以外では、支柱穴を結ぶ線上の東寄りに柱穴が1個（P3）ある。掘り方は径22cmの円形状で、深さは28cm、中央に径12cmの円形の柱痕跡が認められる。

〔カマド〕カマド本体は残存していないが、東辺側に燃焼部の焼け面とみられる赤化した硬化面が認められることから、カマドは北東辺に付設されていたものとみられる。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出できなかった。

〔周溝〕残存する壁際では巡っている。幅20～25cm、深さ約5～6cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルト質粘土で、自然堆積である。

〔その他〕北西辺の周溝から南へ延びる短い小溝が2条ある。幅12～16cm、深さ4～5cmほどである。

〔堆積土〕3層に大別される。1・2層はともに凝灰岩小礫を多く含む黒褐色粘土質シルト、3層は壁際のみ認められる暗褐色シルトである。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器甕の小片、住居堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏などの小破片が少量出土したのみである。なお、住居堆積土からは縄文土器の小破片も出土している。

【SI106住居跡】（第38図、図版15－3～5）

北区域中央の丘陵頂部付近の南東斜面部に位置しており、前述のSI103住居跡の東隣に位置する。南半部が削平されている。他遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は方形状とみられる。規模は北東－南西5.2m、北西－南西1.5m以上である。

〔方向〕北西辺でみると東で北へ約40°偏する。

〔壁〕やや斜めに立ち上がっている。壁高は北西辺側で床面から30cmほどある。

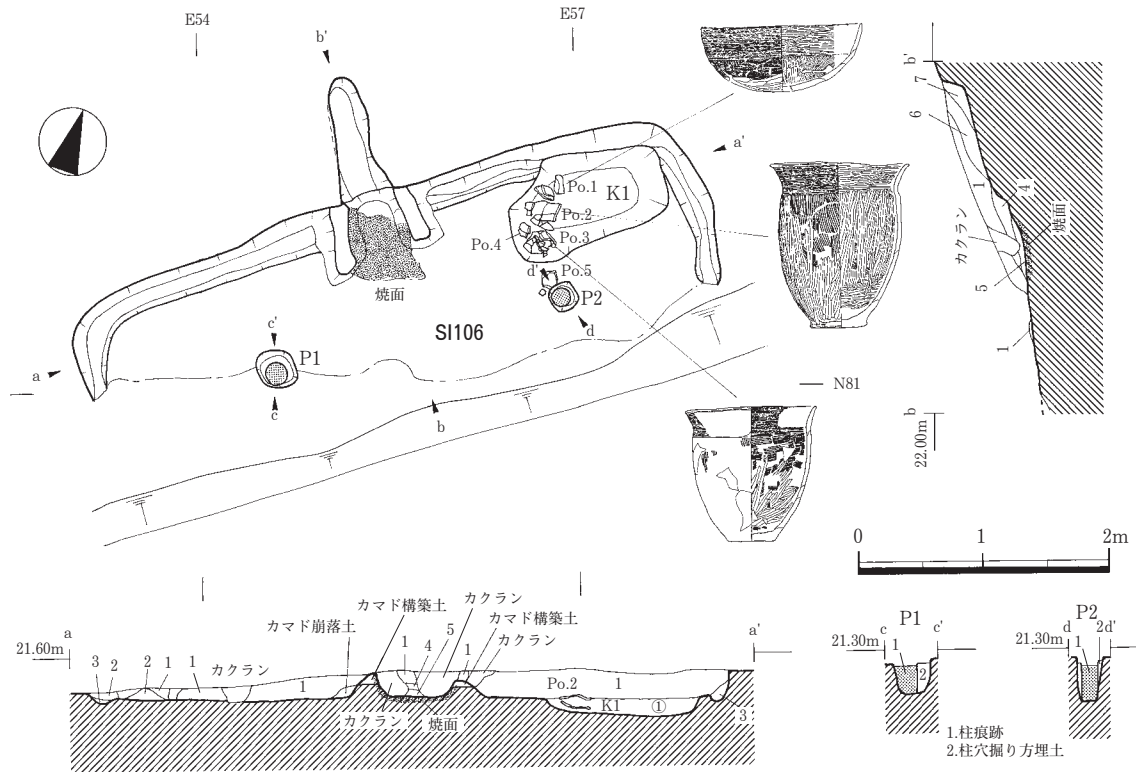
〔床面〕地山を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕支柱穴2個（P1・P2）を検出した。支柱穴は住居平面形の対角線上に4個配置されていたものとみられる。柱穴掘り方は一辺22～28cmの隅丸方形状を呈する。深さは24～32cmほどある。埋土は凝灰岩小礫や地山小ブロックを多く含む褐色シルトである。径14～18cmほどの円形の柱痕跡が認められる。堆積土は暗褐色シルトである。

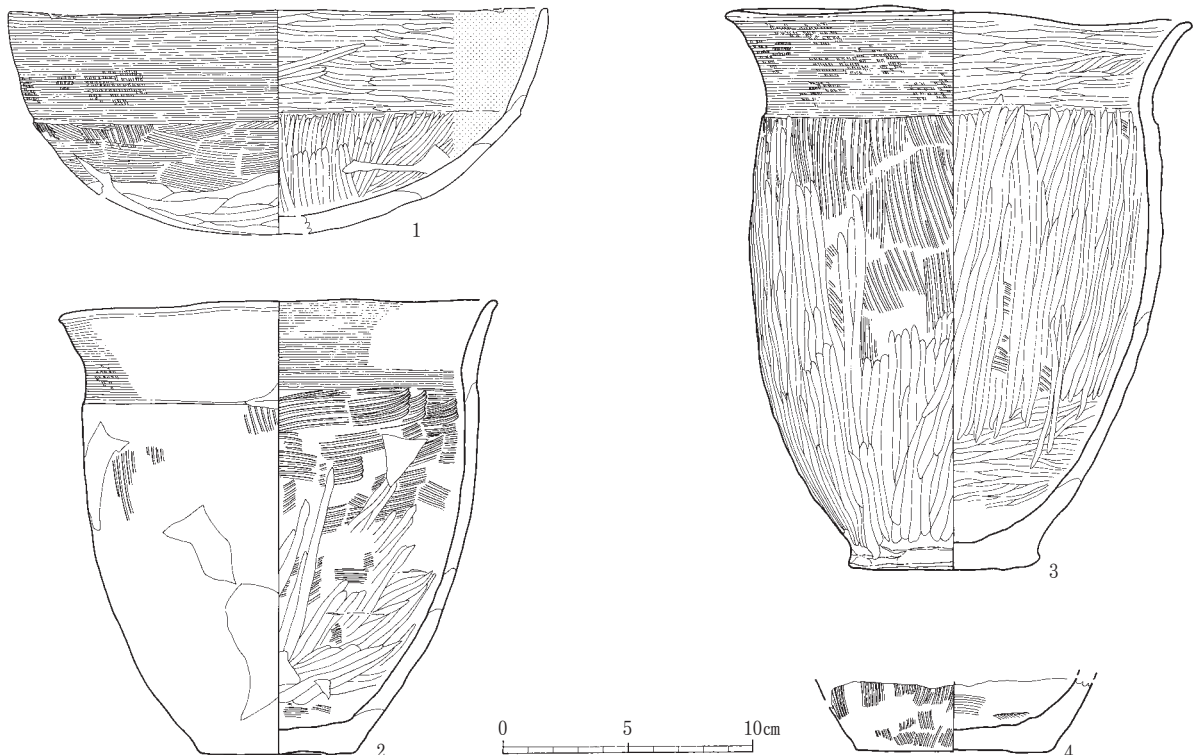
〔カマド〕北西辺の中央部に付設されている。燃焼部と煙道が残る。燃焼部は幅40cm・奥行き50cmほどである。床面はごく浅く窪んでいる。側壁は地山を削り出してその上部に褐色シルトを貼り付けて構築している。奥壁は住居壁面と一致する。奥壁の高さは10cmほどで、煙道は奥壁からやや傾斜をもって1.0mほど北へ延びている。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴（K1）はカマド右側の北東隅で検出された。やや不整な長方形状で、大きさは長軸130cm・短軸70cm、深さは15cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・小礫や炭化物粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積である。西壁面側からは土師器坏と甕が出土している。

〔周溝〕残存する壁際には巡っている。幅22～25cm、深さ4～5cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 | 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|--------------|--------|--------------------------|---|--------------|--------|------------------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR3/2) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫多く含む。 | 5 | 暗褐(7.5YR3/4) | シルト質粘土 | カマド内堆積土。凝灰岩小礫僅かに含む。焼土粒・焼土ブロック多く含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/3) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫少量含む。 | 6 | 暗褐(10YR3/2) | 砂質シルト | 〃。凝灰岩小礫多く含む。 |
| 3 | 暗褐(10YR3/3) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫含む。 | 7 | 黒褐(10YR3/2) | シルト質粘土 | 〃。凝灰岩小礫含む。 |
| 4 | 黒褐(7.5YR3/2) | シルト質粘土 | カマド内堆積土。凝灰岩小礫少量含む。焼土粒含む。 | ① | 黒褐(10YR3/2) | シルト質粘土 | 貯蔵穴堆積土。凝灰岩小礫含む。炭化粒少量含む。 |



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|---------|------------|-----|---------|-----|-------|--|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 大型環 | 貯蔵穴Po.1 | 1/3 | (21.6) | — | (9.0) | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(体~底)ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 42-6 | I-80 |
| 2 | 土師器 甕 | 床面Po.3 | 4/5 | 17.5 | 6.3 | 18.2 | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ | 42-7 | I-84 |
| 3 | 土師器 甕 | 貯蔵穴+床面Po.2 | 4/5 | 18.6 | 7.6 | 22.4 | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 底:ヘラケズリ? 内:ハケメ→ヘラミガキ | 43-1 | I-83 |
| 4 | 土師器 甕 | 床面Po.5 | 底部 | — | 7.6 | — | 外:ハケメ 底:ナデ 内:ヘラナデ・ナデ | | I-81 |

第38図 SI106竪穴住居跡と出土土器

小礫を含む暗褐色シルト質粘土で、自然堆積である。

〔堆積土〕 2層に大別される。1・2層とも凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルトで、いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕 住居床面から非ロクロ調整の土師器甕（第38図－2・4）、貯蔵穴から非ロクロ調整の土師器大型坏（第38図－1）・甕（第38図－3）・甑、住居堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕などの破片、砥石などが出土している。土師器坏は体部外面に段や稜を持ち、土師器甑・甕類も頸部に段や稜を持つものである。

【SI108住居跡】（第39図・第40図、図版16－1）

北区域南側の斜面に位置し、中央の谷に面している。南半部が削平されている。SI158住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕 平面形は正形状とみられる。規模は北東－南西4.2m、北西－南東3.9m以上である。

〔方向〕 北西辺でみると東で北へ約46° 偏する。

〔壁〕 南西辺側がSI158の堆積土、ほかは地山である。北西辺側の壁上部がやや崩落しており斜めになっている。壁高は北西辺側では床面から70cmほどある。

〔床面〕 住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 住居平面形の対角線上に支柱穴が4個（P1～P4）検出された。円形状で、大きさは径25～30cm、深さ35～40cmほどである。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含むにぶい黄褐色シルトである。柱痕跡はいずれの柱穴でも確認された。径10～12cmほどの円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

〔カマド〕 北西辺側の中央部に付設されている。燃烧部が残存している。燃烧部は幅40cm・奥行き60cmほどで、底面はごく浅く窪んでいる。奥壁は住居壁面よりわずかに外へ張り出し、急角度で立ち上がっている。燃烧部側壁は凝灰岩小礫を含む暗褐色シルトを貼り付けて構築している。カマド前庭部には焼土や炭化物の分布が認められる。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴は検出されなかった。

〔周溝〕 削平されている部分以外では全体に巡っている。幅20～25cm、深さ10～15cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む灰黄褐色シルトで、自然堆積によるものである。

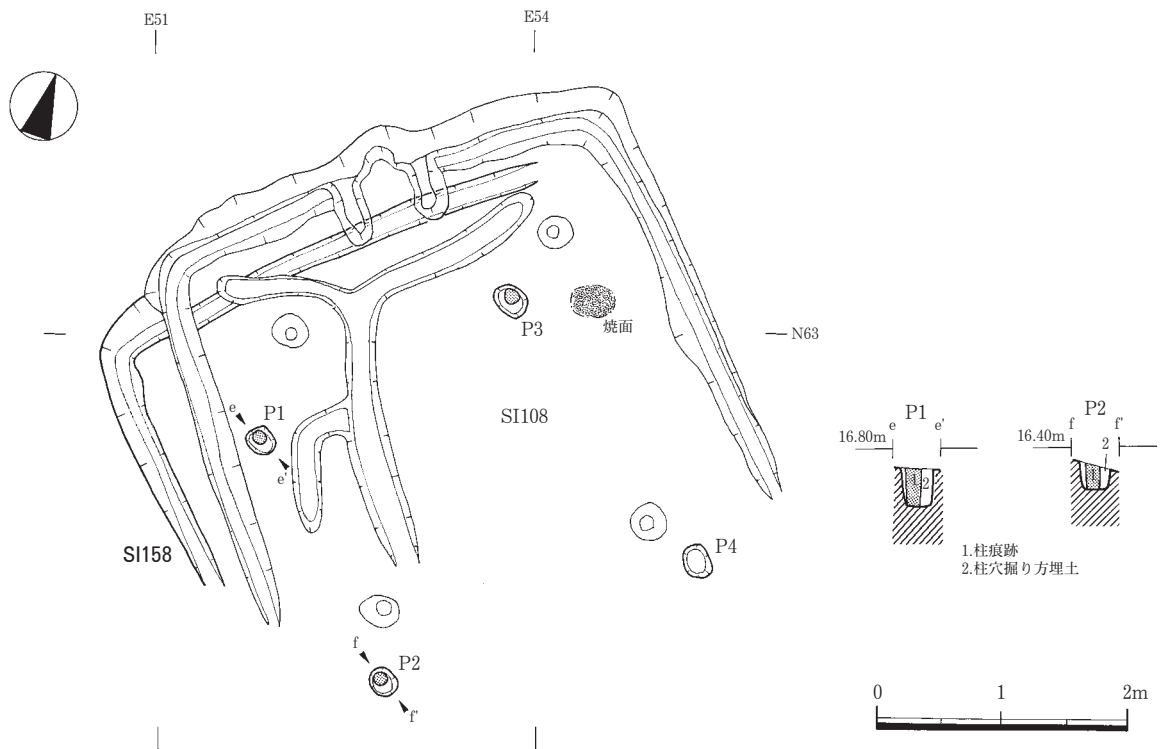
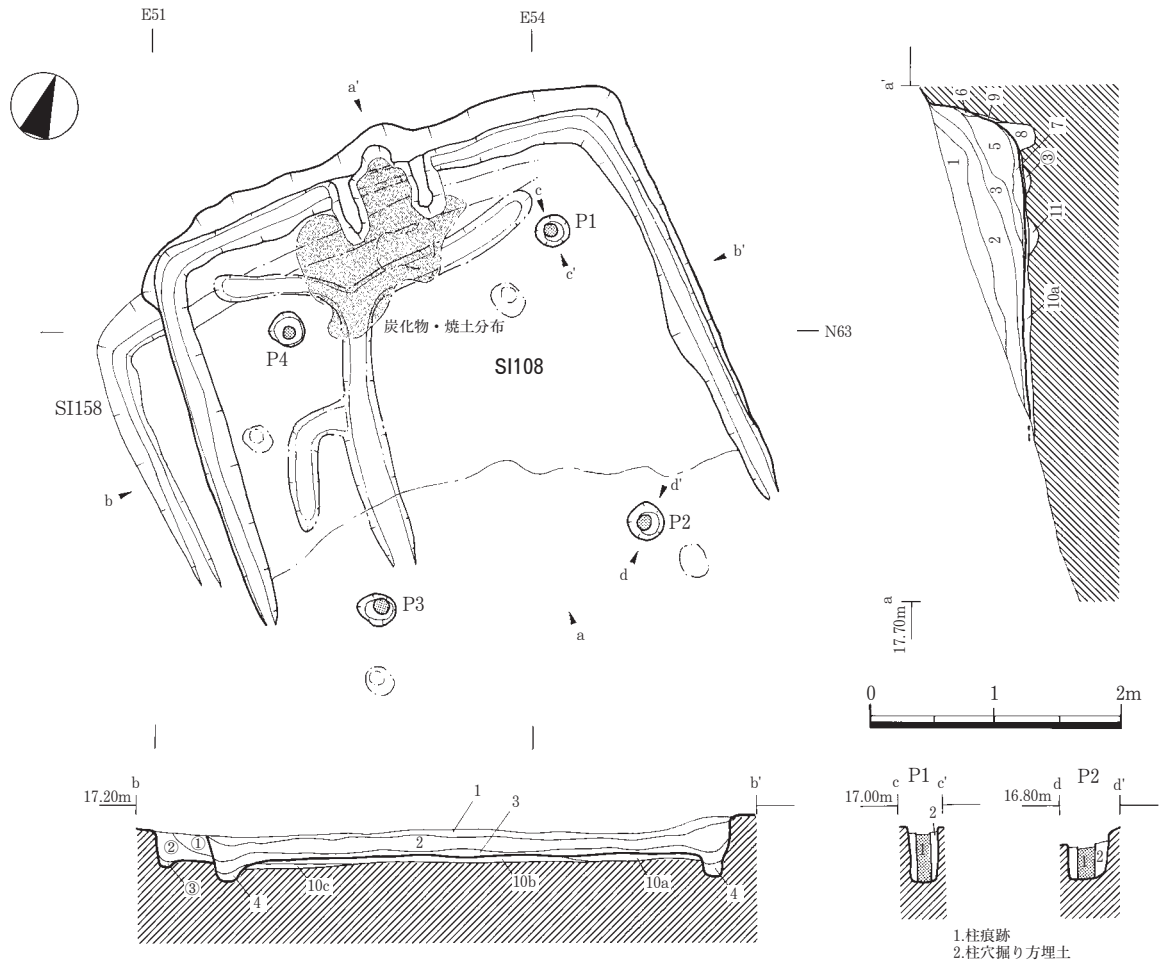
〔その他〕 住居掘り方埋土の下から、枝分かれする不整な溝状遺構が確認された。幅22～30cm、深さ8～10cmほどで、埋土は焼土・炭化物粒を多く含む黒褐色粘質シルトである。暗渠の可能性はある。

〔堆積土〕 3層に大別される。いずれも凝灰岩粒・小礫を多く含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕 住居床面や周溝、カマド堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕（第40図－3）、住居堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕（第40図－2）、須恵器坏などの破片が出土している。なお、住居堆積土からは剥片などの石器も数点出土している。

【SI158住居跡】（第39図・第40図、図版16－1）

北区域南側の斜面に位置し、中央の谷に面している。前述のSI108住居跡と重複し、これよりも古

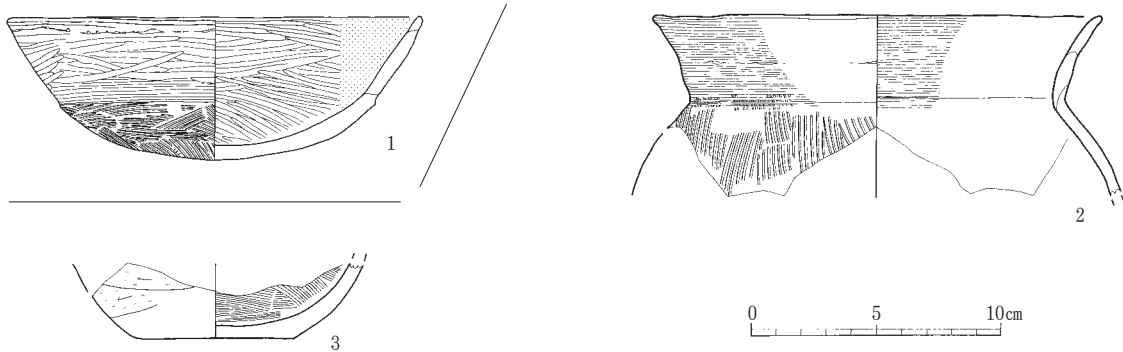


第39図 SI108・SI158竪穴住居跡

SI108・SI158土層注記表

SI108

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 | 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|--------|--------------------------|-------|-------------|--------|--------------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 凝灰岩粒・小礫多量に含む。 | 10a | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩礫・小ブロック主体。焼土・炭化物含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/2) | シルト | 凝灰岩粒・小礫多量。1・3層に比べ黒味が強い。 | 10b | 黒褐(10YR2/3) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩礫多く含む。 |
| 3 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 凝灰岩粒・小礫比較的多い。1・2層よりは少ない。 | 10c | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫含む。 |
| 4 | 灰黄褐(10YR4/2) | シルト | 周溝内堆積土。凝灰岩小礫比較的多く含む。 | 11 | 黒褐(10YR2/2) | 粘土質シルト | 暗渠状遺構(D1)埋土。焼土・炭化物多く含む。 |
| 5 | にふい黄褐(10YR4/3) | 粘土質シルト | カマド崩落土。凝灰岩粒・小礫比較的多く含む。 | SI158 | | | |
| 6 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 凝灰岩粒若干含む。 | 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
| 7 | — | — | 炭化物層・焼土層の互層。 | ① | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 凝灰岩粒多量に含む。 |
| 8 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | カマド下の周溝埋土。焼土・炭化物含む。 | ② | 黒褐(10YR2/2) | シルト | 凝灰岩凝灰岩粒多量。赤色岩粒若干含む。1層に比べ黒味あり。 |
| 9 | にふい黄褐(10YR4/3) | 粘土質シルト | 煙道奥壁貼付土。焼土粒・炭化物粒含む。 | ③ | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 周溝堆積土。凝灰岩粒多い。赤色岩粒若干含む。 |



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量(cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|-----------|-----|--------|-----|-----|--------------------------------------|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 環 | SI158 堆2層 | 1/2 | 16.6 | — | 5.7 | 外:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(体~底)ハケメ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 43-2 | I-85 |
| 2 | 土師器 甕 | SI108 堆3層 | 口縁 | (18.0) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ヨコナデ | 43-3 | I-86 |
| 3 | 土師器 甕 | 〃 床面 | 底部 | — | 8.6 | — | 外:ヘラケズリ 底:ヘラケズリ? 内:ナデ | 43-4 | I-87 |

第40図 SI108・SI158住居跡出土土器

い。主柱穴と周溝の一部が残存する。

〔平面形・規模〕平面形は方形状を呈するとみられる。規模は北東-南西4.0m以上、北西-南東3.5m以上である。

〔方向〕北西辺でみると東で北へ約46°偏する。

〔壁〕上半部はやや斜めに立ち上がる。壁高は南西辺側では床面から20cmほどある。

〔床面〕残存する部分では地山を床面にしている。

〔柱穴〕住居平面形の対角線上に主柱穴が4個(P1~P4)検出されている。やや楕円形状で、大きさは25~30cm、深さは20~30cmほどある。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含む黒褐色シルトである。柱痕跡は3個(P1~P3)に認められた。径12cmほどの円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

〔カマド〕東辺に付設されていたとみられ、燃焼部付近の焼面とみられる痕跡が一部残存している。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出されなかった。

〔周溝〕壁が残存している部分では認められる。幅20~25cm、深さは約5cmで、堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルトで、自然堆積によるものである。

〔堆積土〕2層に大別される。いずれも凝灰岩粒・小礫を多く含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器甕、住居堆積土からは非ロクロ調整の土師器環(第40図-1)・甕などの破片がわずかに出土している。1の土師器環は体部外面に段を持ち、体~底部

の調整にはハケメが施されている。

【SI109住居跡】（第41図・第42図、図版16-2～4）

丘陵頂部付近の北区域南側の中央付近に位置する。前述のSI106住居跡の東隣になる。南半部分が削平されている。南側のSI144住居跡とはその位置関係から重複していたものと思われるが、削平のため新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕平面形は正形状を呈するものとみられる。規模は北東-南西5.7m、北西-南東5.0m以上である。

〔方向〕北西辺で見ると東で北へ約52° 偏する。

〔壁〕上部がやや崩落しており斜めになっている。壁高は北西辺側で床面から50cmほどある。

〔床面〕住居掘り方埋土と地山を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居平面形の対角線上に支柱穴が4個（P1～P4）検出された。不整な円形状で、大きさは40～45cm、深さは28～40cmである。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含む暗褐色シルトである。いずれにも径12～14cmの円形状の柱痕跡が認められる。堆積土は黒褐色シルトである。

〔カマド〕カマドは北東辺に付設されている。削平のために壊されており、燃焼部付近の焼面と煙道の一部・煙出しピットが残存しているのみである。側壁は残っていなかった。煙出しピットは径45cmほどの円形状で、深さは35～40cmである。底面近くの堆積土から須恵器坏が出土している。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出されなかった。

〔周溝〕残存する壁際では全体に巡っている。幅20～25cm、深さ約5～6cmで、堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む暗褐色シルトで、自然堆積によるものである。

〔その他〕小ピット3個（P5～P7）が認められた。また、北西辺側では床面下から平行する2条の浅い小溝（D1・D2：長さ3m・2.3m、幅10～15cm、深さ1～3cm）が検出された。

〔堆積土〕4層に大別される。1・2・4層は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルト～暗褐色シルト、3層は壁崩落土とみられるにふい黄褐色シルトである。1層と2層の境には灰白色火山灰の小ブロックがわずかに認められる。

〔出土遺物〕住居床面から土師器甕・甌、砥石（第95図-11）、煙出しピット底面近くの堆積土から底部が回転糸切りの須恵器坏（第42図-3）などが出土している。住居堆積土からはロクロ調整の土師器坏（第42図-1・2）・甕・甌、須恵器壺・甕などの破片が比較的多く出土している。なお、住居堆積土からは縄文土器の破片や石匙（第97図-11）なども出土している。

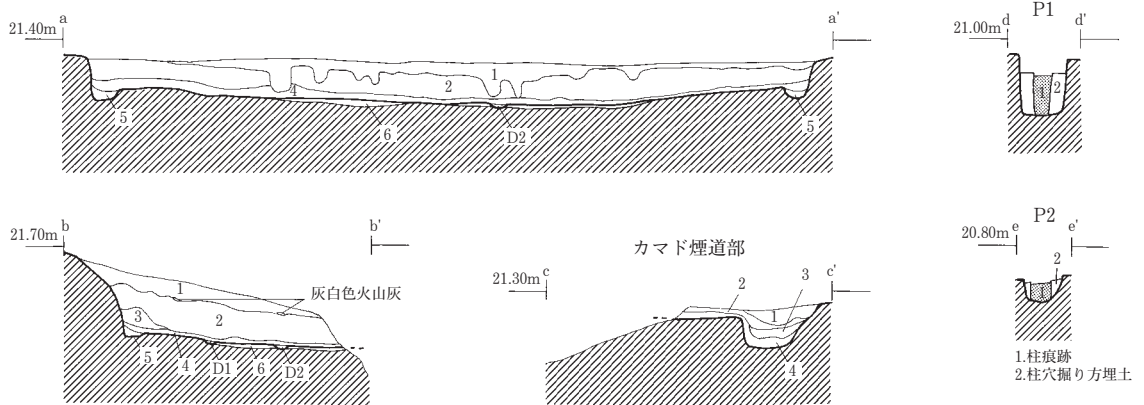
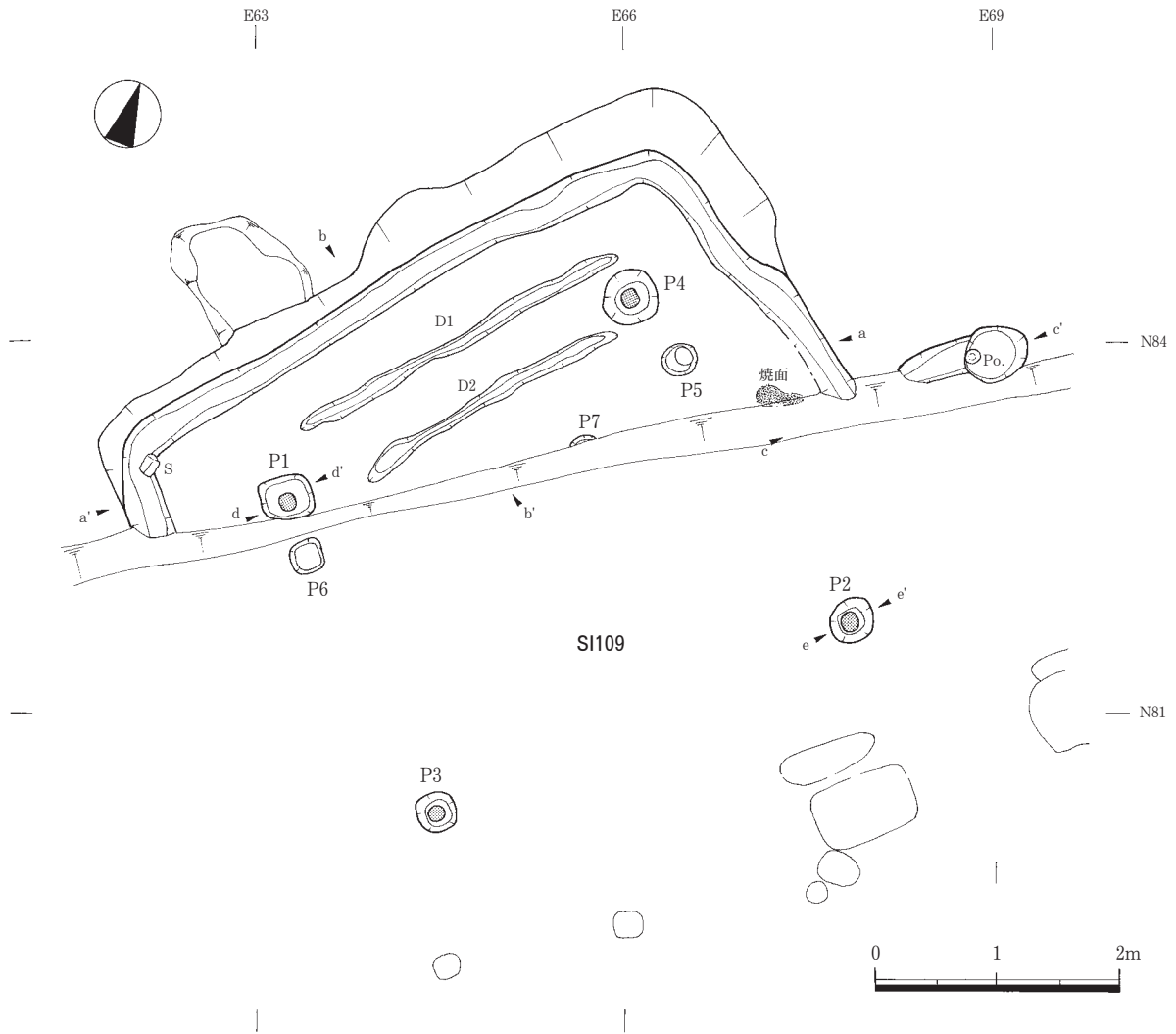
【SI110住居跡】（第43図～第46図、図版17-1～5）

北区域南側の南斜面部に位置し、中央の谷に面している。南半部が削平されている。SX135鍛冶遺構、SI148住居跡と重複し、SX135より古く、SI148よりも新しい。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸形状とみられる。規模は東西7.2m、南北5.3m以上である。

〔方向〕北辺で見ると東で北へ約15° 偏する。

〔壁〕全体的にやや斜めに立ち上がっており、北辺側はより斜めである。壁高は北辺側で床面から50cmほどある。

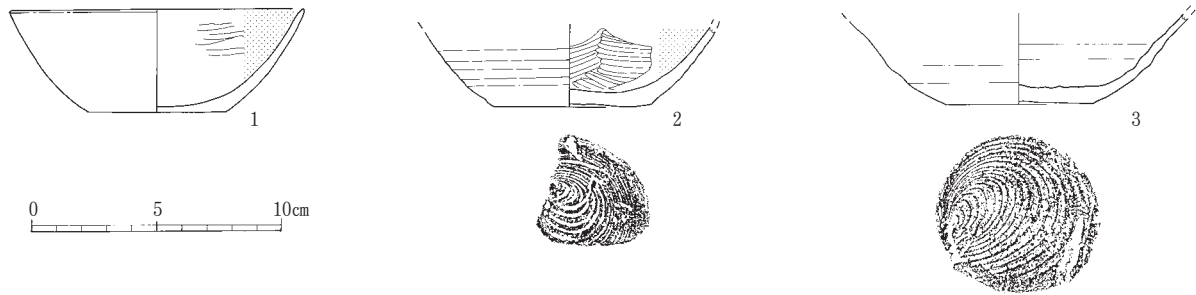


| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|------|----------------|--------|-------------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR2/2) | シルト | 凝灰岩粒・赤色岩粒比較的多い。下部に灰白色火山灰ブロック。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩粒・小礫・赤色岩粒多量に含む。 |
| 3 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 壁崩落土か。凝灰岩小礫多量に含む。北側壁で確認。 |
| 4 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 凝灰岩粒・赤色岩粒比較的多い。炭化物粒若干含む。 |
| 5 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 周溝内堆積土。凝灰岩粒比較的多く含む。 |
| DI-2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩粒比較的多い。赤色岩粒・炭化物含む。 |
| 6 | 黒褐(10YR2/3) | 粘土質シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩粒・赤色岩粒含む。薄く分布。 |

カマド煙道部

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|-------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩粒・赤色岩粒多量に含む。 |
| 2 | にぶい黄褐(10YR5/4) | シルト | 天井部崩落土か。凝灰岩粒・小礫比較的多く含む。 |
| 3 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩粒比較的多く含む。炭化物粒やや多く含む。 |
| 4 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 炭化物粒・焼土粒多量に含む。凝灰岩粒若干含む。 |

第41図 SI109竪穴住居跡



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|----|-------|------|-----|---------|-------|-----|------------------------------|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 環 | 堆2層 | 1/4 | (11.8) | (5.6) | 4.1 | 外:摩滅不明 底:摩滅不明 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 43-5 | I-89 |
| 2 | 土師器 環 | 堆2層 | 1/5 | - | (6.2) | - | 外:ロクロナデ 底:回転糸切り 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 43-6 | I-88 |
| 3 | 須恵器 環 | 煙出P | 1/3 | - | 6.0 | - | 内外:ロクロナデ 底:回転糸切り | 43-7 | I-90 |

第42図 SI109住居跡出土土器

〔床面〕地山および住居掘り方埋土を床面にしている。古いSI148と重複する部分は床面がやや窪んでいる。

〔柱穴〕主柱穴を住居平面形の対角線上に4個（P1～P4）、その他のピットを3個（P5～P7）検出した。主柱穴の掘り方は径25～34cmの円形状で、深さは24～33cmほどある。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含むぶい黄褐色シルトである。径12～14cmほどの円形の柱痕跡が認められる。堆積土は黒褐色シルトである。

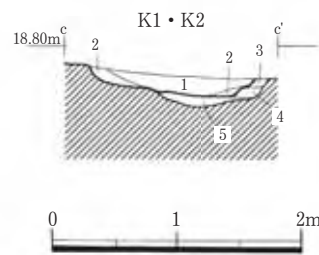
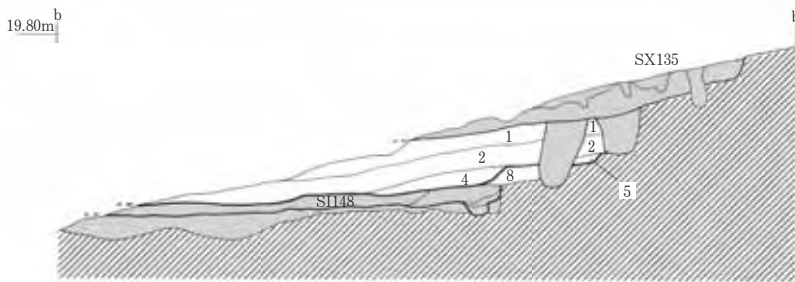
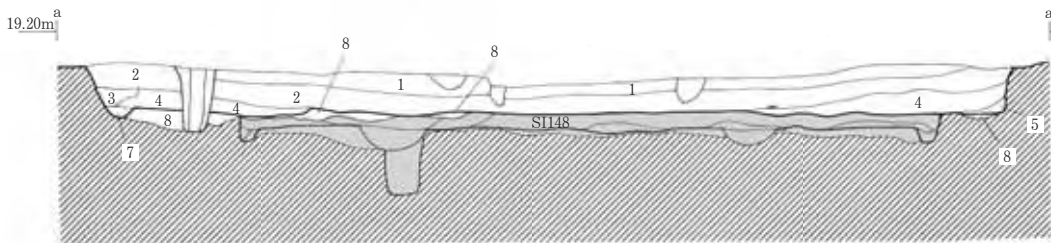
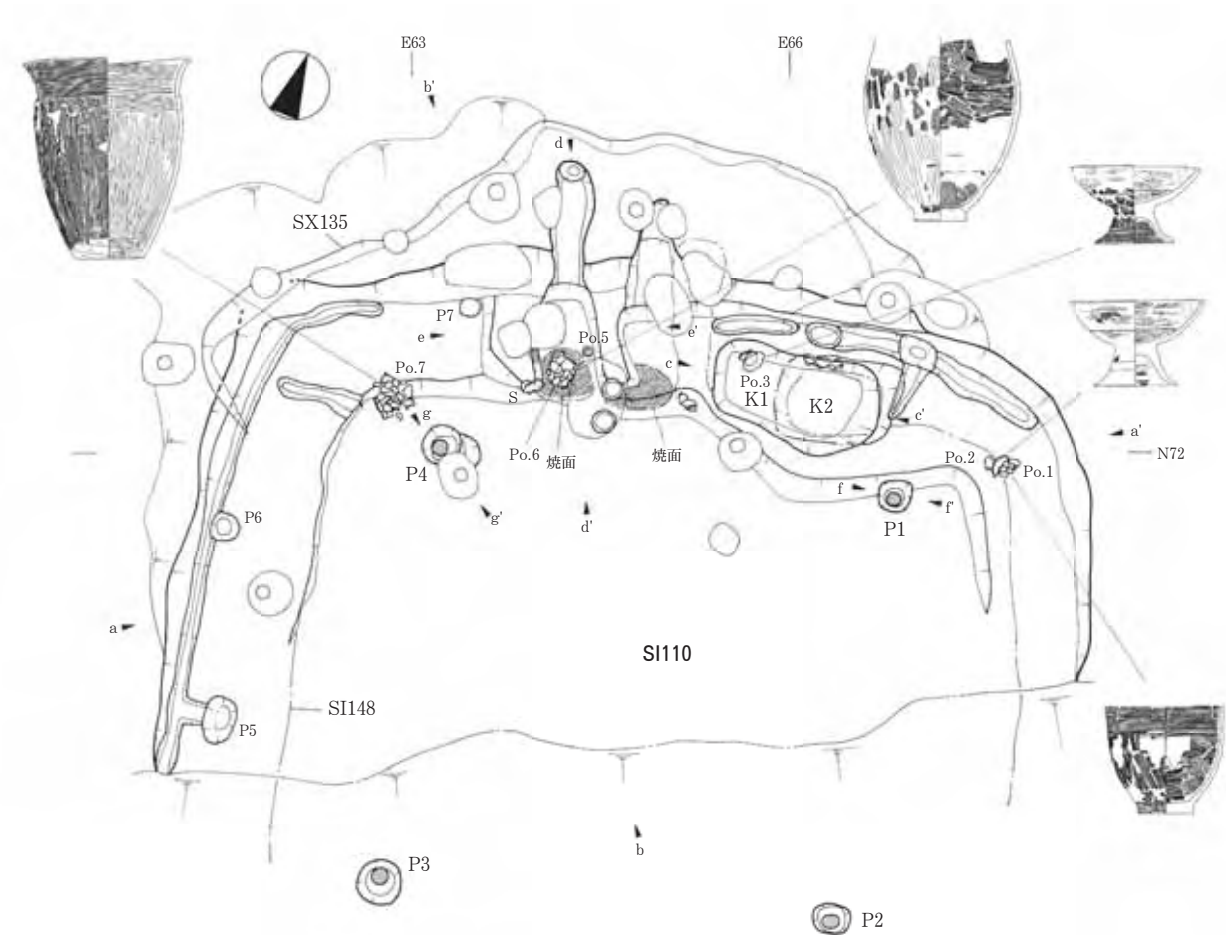
〔カマド〕カマドは新旧2時期あり、旧カマドは北辺中央部、新カマドは中央やや西寄り（旧カマドの左側）に付設されている。旧カマドは煙道と燃焼部の焼面が一部残存している。新カマドの燃焼部は幅50cm・奥行70cmほどである。奥壁部分で段が付き、煙道はやや傾斜をもって1.0mほど延び、先端には煙出しピットが取り付く。燃焼部側壁は凝灰岩小礫や地山シルト小ブロックを多く含む褐色シルトを貼り付けて構築している。左側壁の焚き口部先端には角柱礫（粘板岩製）が据えられている。旧カマドは燃焼部の焼面が新カマド右側壁下から検出されている。煙道は長さ85cmほど残存する。

〔貯蔵穴〕カマド右側で検出された。新旧2時期ある。旧貯蔵穴（K2）は長軸100cm・短軸70cmほどの隅丸形状で、深さは約25cmである。堆積土は凝灰岩小礫や地山シルト小ブロックを多く含む暗褐色～褐色シルトの人為的埋土である。新貯蔵穴（K1）は旧貯蔵穴とほぼ重複しており、長軸130cm・短軸70cmほどのやや不整な隅丸長形状で、深さは約15cmである。堆積土は凝灰岩小礫や炭化物粒を含む暗褐色～黒褐色シルトの自然堆積である。それぞれの位置関係から、K1が新カマド段階、K2が旧カマド段階の貯蔵穴とみられる。

〔周溝〕西辺と北辺の一部に巡っている。幅14～22cm、深さ4～5cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

〔堆積土〕4層に大別される。凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色～暗褐色シルトで、いずれも自然堆積である。壁際の一部には壁の崩落土とみられる地山シルト主体の堆積土が認められる。

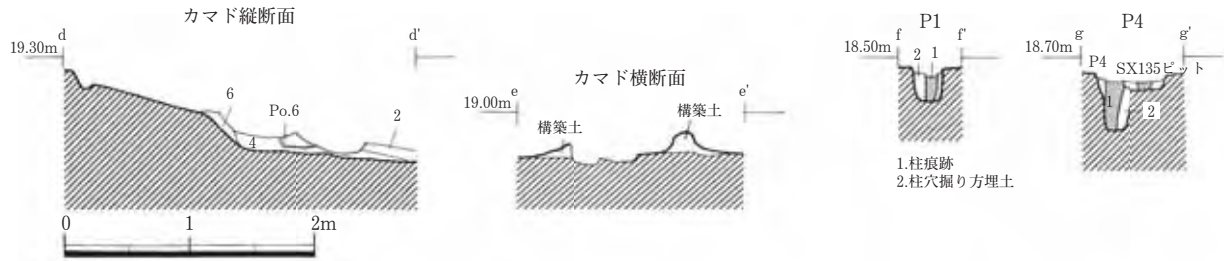
〔出土遺物〕遺物は比較的多く出土している。住居床面からは非ロクロ調整の土師器環・大型環（第45図-2）・高環（第45図-4・5）・鉢（第45図-6）・甌（第45図-8）・甕（第46図-10）、土製



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|--------|---------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫・炭化物若干含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫・炭化物若干含む。 |
| 3 | 褐(10YR4/6) | 粘土質シルト | 地山主体。壁崩落土か。炭化物僅かに含む。 |
| 4 | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫・炭化物若干含む。 |
| 5 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 6 | にぶい黄褐(10YR4/3) | 粘土質シルト | 煙道部の貼り付けか。凝灰岩小礫多く含む。 |
| 7 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 周溝堆積土。凝灰岩小礫含む。 |
| 8 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 住居掘り方埋土。地山ブロックと凝灰岩小礫多く含む。 |

| K1・K2 | | | |
|-------|-------------|--------|---------------------------|
| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
| 1 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | K1。凝灰岩小礫含む。炭化物若干含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫含む。しまりやなし |
| 3 | 褐(10YR4/4) | 粘土質シルト | K2。人為。凝灰岩小礫・地山ブロックを主体とする。 |
| 4 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 〃。人為。凝灰岩小礫・地山ブロック含む。 |
| 5 | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 〃。人為。凝灰岩小礫・地山ブロック多量に含む。 |

第43図 SI110竪穴住居跡敢



第44図 SI110竪穴住居跡相

支脚（第91図－9）、新カマド内から土師器甕（第45図－7）、新貯蔵穴（K1）から非ロクロ調整の土師器高坏（第45図－3）・甕、旧貯蔵穴（K2）から非ロクロ調整の土師器坏（第45図－1）・甕（第46図－9）・甕が出土している。また、住居堆積土からは非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片、須恵器坏・壺の破片などが出土している。土師器類は体部外面や頸部に段や稜を持つものがほとんどである。なお、住居堆積土から羽口（第91図－15）や鉄滓が若干数出土しているが、これらは後述するSX135鍛冶遺構に伴う遺物とみられる。

【SI119住居跡】（第47図～第49図、図版18－1～4）

北区域の南東端の斜面部に位置し、中央の谷に面している。削平およびSI120住居跡との重複で中央～南東部を消失している。SI120・SI150・SI152・SI153住居跡、SX125鍛冶遺構、SK126土壇と重複し、SI150・SI152・SI153、SK126より新しく、SI120、SX125よりも古い。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ隅丸方形状とみられる。規模は東西7.0m、南北4.6m以上である。

〔方向〕北辺で見ると東で北へ約14° 偏する。

〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がっているが、壁上部は崩落して斜めになっている。壁高は残りのよい北側で床面から40～50cmほどある。

〔床面〕住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居平面形の対角線上に支柱穴4個（P1～P4）を検出した。うち1個（P4）はSI120住居跡のカマド側壁を取り除いた段階で検出した。円形～隅丸方形状を呈する。大きさは径もしくは一辺が30～40cm、深さは40～44cmほどある。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含む褐色シルトである。いずれにも径12～15cmほどの円形の柱痕跡が認められる。堆積土は暗褐色シルトである。

〔カマド〕北辺やや東寄りに付設されている。燃烧部と煙道が残存している。燃烧部は幅45cm・奥行き50cmほどである。燃烧部底面は住居床面からほぼ水平であり、焼けて赤変・硬化している。両側には柱状の石製支脚が据えられている。燃烧部側壁は明黄褐色シルトで構築されており、右側壁はSI120の煙出しピットに壊されている。奥壁は傾斜して立ち上がり煙道へと続くが、奥壁と煙道の境には若干の高まりがある。煙道は奥壁からやや傾斜して上がりながら1.0mほど延びている。

〔貯蔵穴〕カマドの右側で検出された。長形状で、大きさは長軸95cm・短軸60cm、深さは10cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・小礫、炭化物を含む暗褐色シルト～褐色シルトの自然堆積土である。

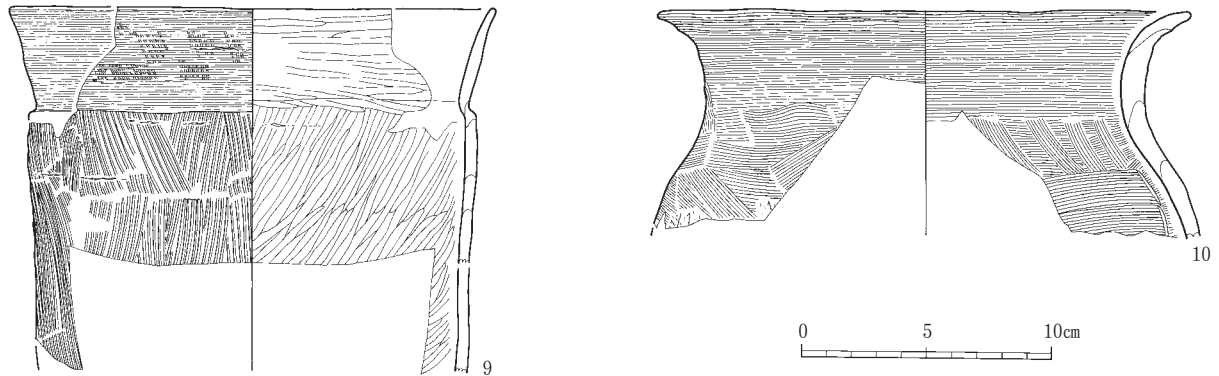
〔周溝〕削平されている南辺を除いて全体に巡っている。幅20～25cm、深さ5～10cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・小礫を比較的多く含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

〔その他〕北東側の床面で小溝跡を4条（D1～D4）検出した。これらのうち、D1・D2は支柱穴P1



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|---------|-----------|--------|---------|--------|--------|--|-------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 環 | K2貯藏穴 | 2/3 | 18.2 | — | 5.6 | 外:(口)ヘラミガキ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 43-8 | I-91 |
| 2 | 土師器 大型環 | 床面+カマド | 1/4 | (22.4) | (13.2) | 4.1 | 外:ヘラミガキ 底:ナデ? 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 43-9 | I-95 |
| 3 | 土師器 高環 | K1貯藏穴Po.3 | 8/9 | 17.3 | 10.5 | 10.7 | 環部外:ハケメ→(上部)ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 脚部外:ハケメ→(裾部)ヨコナデ内:ナデ・ヨコナデ | 43-10 | I-92 |
| 4 | 土師器 高環 | 床面Po.2 | 3/4 | (18.0) | 11.0 | 11.6 | 環部外:ハケメ→ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 脚部外:ハケメ 内:指ナデ・ハケメ・ヨコナデ | 43-11 | I-93 |
| 5 | 土師器 高環 | 床面+カマド | 1/4 | (19.4) | — | — | 環部外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 44-1 | I-96 |
| 6 | 土師器 鉢 | 床面Po.1 | 1/3 | (15.8) | 7.4 | 14.5 | 外:(口)ヨコナデ(体)ハケメ→ナデ 底:木葉痕あり 内:(口)ヨコナデ(体)ハケメ→ナデ | 44-2 | I-97 |
| 7 | 土師器 甕 | カマド底面 | 胴中位~底部 | — | 7.0 | (24.7) | 外:ハケメ→ヘラミガキ 底:木葉痕あり 内:ハケメ→部分的にナデ(底)ナデ | 44-3 | I-99 |
| 8 | 土師器 甕 | 床面Po.7 | ほぼ完形 | 22.4 | 8.7 | 26.9 | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→(下端部)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ | 44-6 | I-100 |

第45図 SI110住居跡出土土器散



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|---------|------|---------|----|----|--|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 9 | 土師器 甕 | K2貯蔵穴底面 | 1/12 | 19.6 | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:ヘラミガキ | 44-4 | I-94 |
| 10 | 土師器 甕 | 床面 | 口縁部片 | 21.4 | — | — | 外:(口)ヨコナデ (胴)ヘラケズリ→ナデ 内:(口)ヨコナデ (胴)ナデ・ヘラナデ | 44-5 | I-98 |

第46図 SI110住居跡出土土器相

から東西・南北方向へ直線的に延びている。幅8cm、深さは8~10cmほどで、断面形は狭いU字状もしくはV字状を呈する。

〔堆積土〕4層に大別される。1層は黒褐色シルト、2層~4層は凝灰岩粒・小礫を多く含む黒褐色~暗褐色シルトである。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器大型坏(第49図-1)・甕、周溝やカマド煙道内堆積土から非ロクロ調整の土師器甕などの破片が出土している。土師器坏・甕類は、体部外面や頸部に段や稜を持つものである。また、住居堆積土からは非ロクロ調整の土師器壺(第49図-2)・双耳坏・甕、須恵器坏・壺・甕などの破片、鉄鏃(第92図-3)・刀子(第92図-8)などが出土している。

【SI120住居跡】(第47図~第49図、図版18-1、19-1~7)

北区域の東端斜面部に位置し、前述のSI119住居跡と重複する。南辺部分は削平されている。SI119・SI150・SI152・SI153住居跡、SX125鍛冶遺構と重複し、これらよりも新しい。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形状を呈する。規模は東西4.6m、南北4.5m以上である。

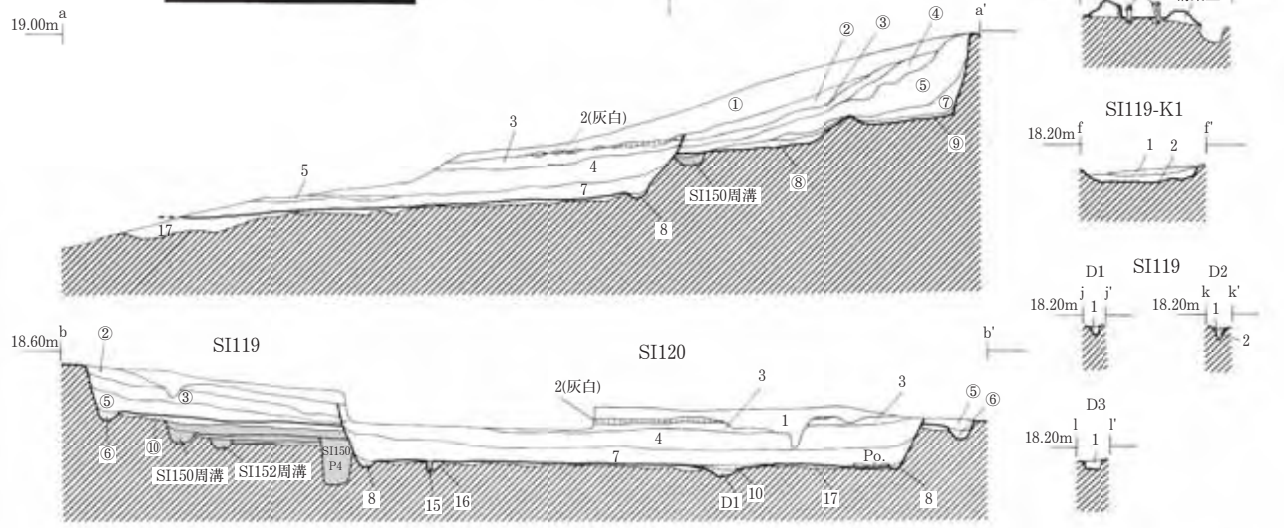
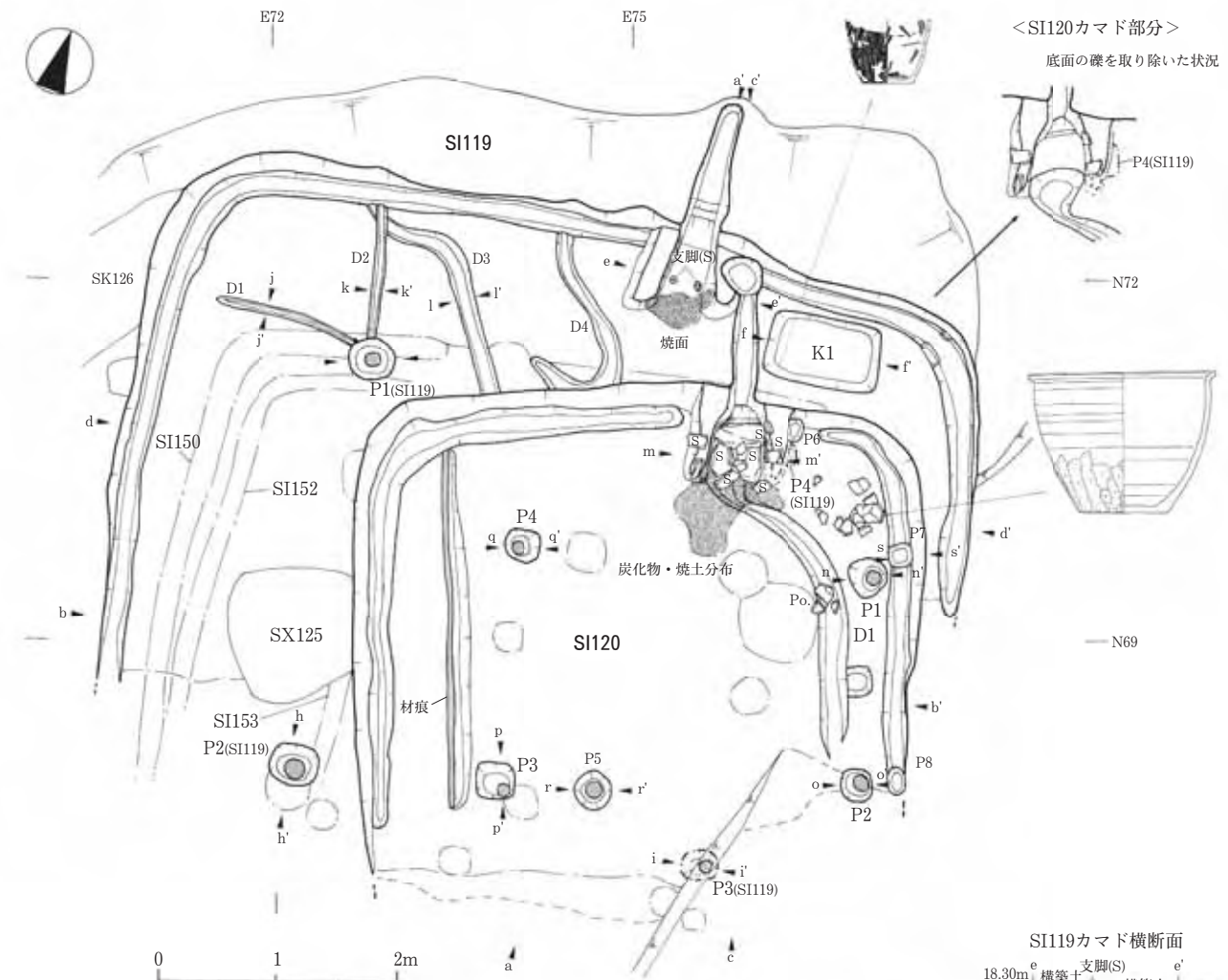
〔方向〕北辺で見ると東で北へ約23°偏する。

〔壁〕古い住居跡(SI119・SI150・SI152)の堆積土および地山を壁にする。壁はやや斜めに立ち上がる。壁高は北辺では床面から35~40cmほどである。

〔床面〕住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居平面形の対角線上に支柱穴が4個(P1~P4)検出された。円形から隅丸方形状で、大きさは径もしくは一辺が28~32cm、深さは14~32cmである。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含む褐色シルトである。いずれにも径10~12cmほどの柱痕跡が認められ、堆積土は暗褐色シルトである。この他、ピットが北辺から東辺の壁際に3個(P6~P8)、床面に1個(P5)認められたが、P5以外は柱痕跡が確認できなかった。

〔カマド〕北辺の東寄りに付設されている。燃焼部と煙道が残存している。燃焼部は幅45cm・奥行き60cmほどである。底面には扁平でやや大きな粘板岩礫を敷き詰めている。この礫の下は若干掘り窪め



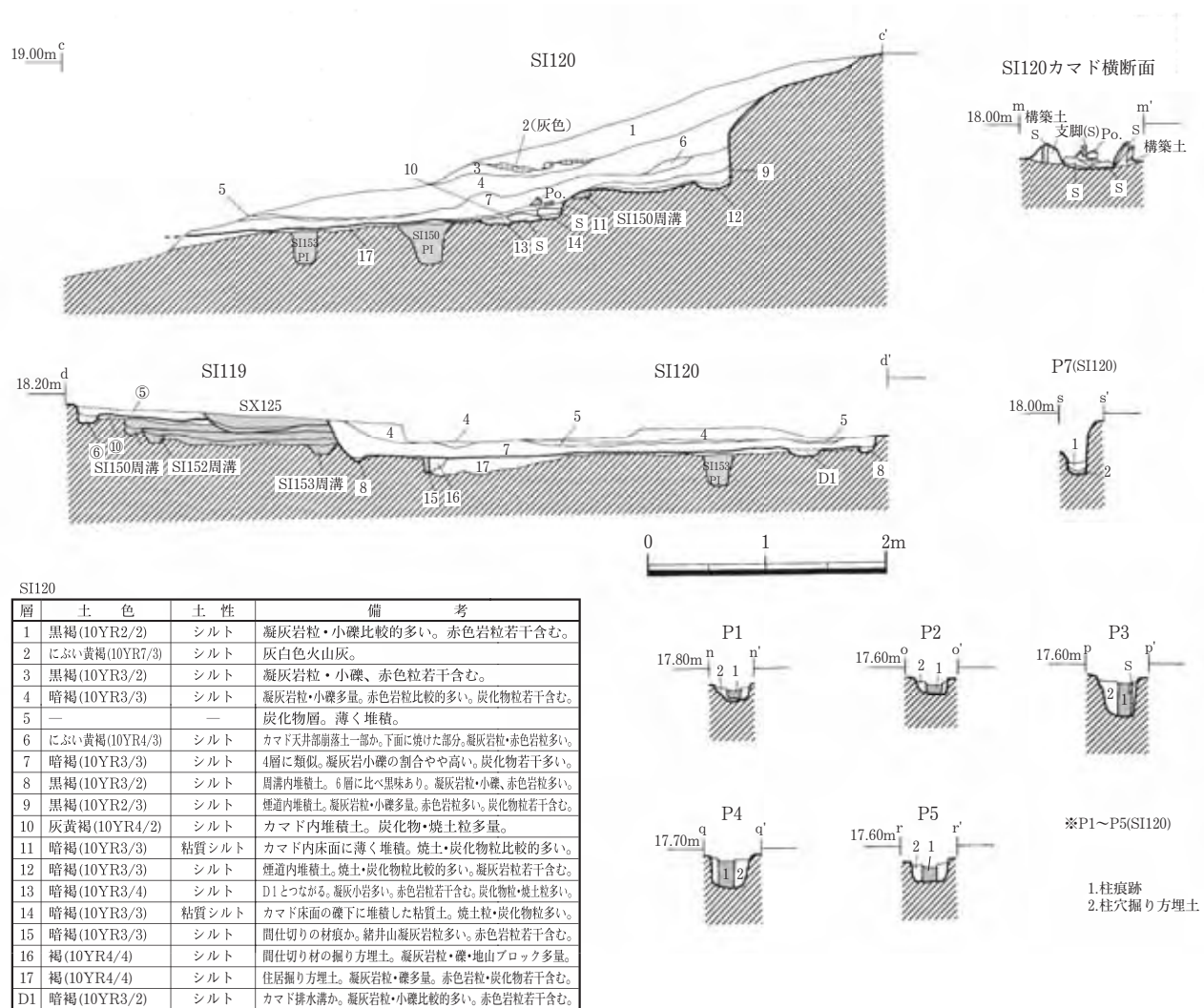
SI119

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|------------------------------------|
| ① | 黒褐(10YR2/2) | シルト | SI120の1層と同じ黒褐色土。 |
| ② | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩粒・小礫、赤色岩粒を比較的多く含む。 |
| ③ | 黒褐(10YR3/2) | シルト | ②層・④層に比べ黒味がある。凝灰岩粒・小礫多量に含む。 |
| ④ | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 煙道天井部の一部か。凝灰岩粒・小礫やや多く含む。 |
| ⑤ | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩粒・小礫多量、赤色岩粒比較的多く含む。炭化物粒若干含む。 |
| ⑥ | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 周溝内堆積土。凝灰岩粒・小礫比較的多い。赤色岩粒若干含む。 |
| ⑦ | 褐(10YR4/4) | シルト | カマド内堆積土。凝灰岩粒・小礫比較的多い。炭化物・焼土粒若干含む。 |
| ⑧ | 褐(7.5YR4/4) | シルト | カマド内堆積土。凝灰岩粒・小礫比較的多い。炭化物・焼土粒多量に含む。 |
| ⑨ | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 煙道底面に薄く堆積。凝灰岩粒・小礫若干含む。 |
| ⑩ | 褐(10YR4/4) | シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩粒・礫不均質に多量含む。赤色岩粒やや多く含む。 |

K 1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|-------------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 凝灰岩粒・小礫含む。赤色岩粒、炭化物含む。 |
| 2 | 褐(10YR4/4) | シルト | 凝灰岩粒・小礫多く含む。赤色岩粒少量、炭化物ごく少量含む。 |

第47図 SI119・SI120竪穴住居跡畧



第48図 SI119・SI120竪穴住居跡相

られており、ここから排水溝（開渠）とみられる小溝（D1）が南辺へと延びている。燃焼部側壁は、板状の粘板岩を芯材に利用してにぶい黄褐色シルトで構築している。燃焼部底面に敷き詰めた礫の上からは柱状の石製支脚と土師器甕の底部が出土している。奥壁は住居の壁面とほぼ一致し、奥壁で段が付いて煙道へと至る。煙道は奥壁から1.0mほど北へ延び、先端には径30cmほどの円形状の煙出しピットが取り付け。煙道底面は浅く窪んでいる。

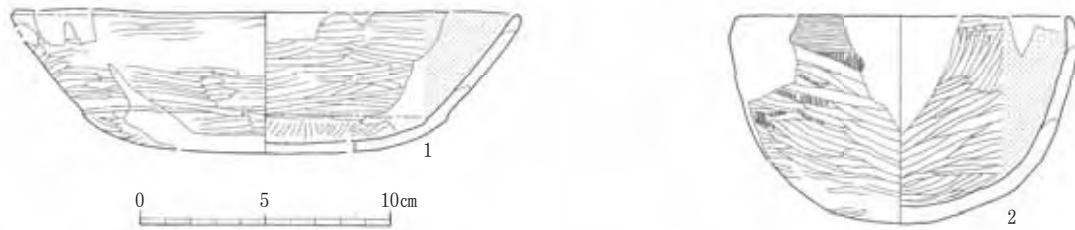
〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出されなかった。

〔周溝〕削平されている南辺を除いて全体に巡っている。幅20～25cm、深さ5cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルトの自然堆積である。

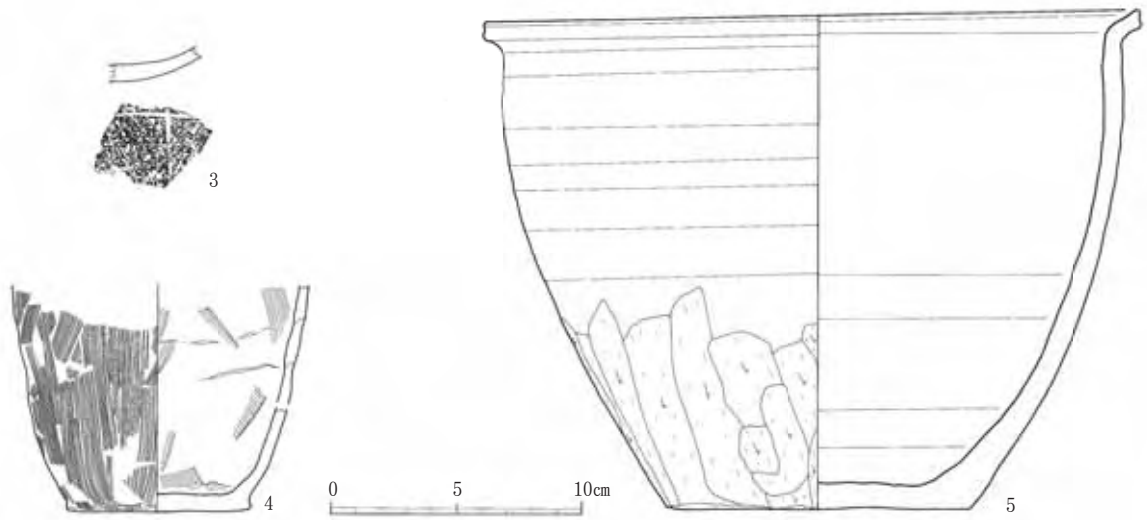
〔その他〕西辺から50cm～60cmほど離れた位置で、西辺と並行するように東西方向の板材痕が認められた。長さ約3m・幅5cm、深さ8～12cmほどで、堆積土はややしまりのない暗褐色シルトである。

〔堆積土〕7層に大別される。1層は黒褐色シルト、2層は灰白色火山灰、3層は黒褐色シルト、4・6・7層は凝灰岩粒・小礫を多く含む暗褐色シルト、5層は炭化物の薄層である。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕遺物は比較的多く出土しているが、図示できる資料は少ない。住居床面からは土師器



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|----|---------|-----------|-----|---------|----|-------|--------------------------------------|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 大型坏 | SI119床+周溝 | 1/2 | (20.4) | — | (5.7) | 外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 45-1 | I-102 |
| 2 | 土師器 碗 | 〃 堆4層 | 1/6 | (13.6) | — | 8.3 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ハケメ→ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 45-2 | I-103 |



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|----|-------|------------|-----|---------|------|------|-------------------------------------|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 3 | 土師器 坏 | SI120掘り方埋土 | 破片 | — | — | — | 底部に焼成前刻書「×」 | 45-3 | I-106 |
| 4 | 土師器 甕 | 〃 カマドPo.3 | 1/2 | — | 7.1 | — | 外:ハケメ 底:ヘラケズリ 内:ヘラナデ・ナデ | 45-4 | I-105 |
| 5 | 須恵器 鉢 | 〃 床面Po.1 | 4/5 | 26.4 | 12.2 | 19.8 | 外:ロクロナデ→下部にヘラケズリ 底:ヘラケズリ・ナデ 内:ロクロナデ | 45-5 | I-104 |

第49図 SI119・SI120住居跡出土土器

坏・甕、須恵器坏・鉢（第49図－5）・甕など、カマド内堆積土からは土師器坏・壺・甕（第49図－4）などが出土している。また、住居掘り方埋土からは底面に「×」の刻書が施された土師器坏（第49図－3）、住居堆積土からは土師器坏・高台坏・鉢・甕、須恵器坏・高台坏・甕の破片、砥石などが出土している。土師器坏や甕類はロクロ調整のものが多い。なお、住居堆積土などから羽口（第91図－17）や鉄滓などが若干数出土しているが、これらはSX125鍛冶遺構に由来する資料とみられる。なお、住居堆積土からは土製勾玉（第97図－16）や凝灰岩製の剥片なども出土している。

【SI122住居跡】（第50図、図版20－1）

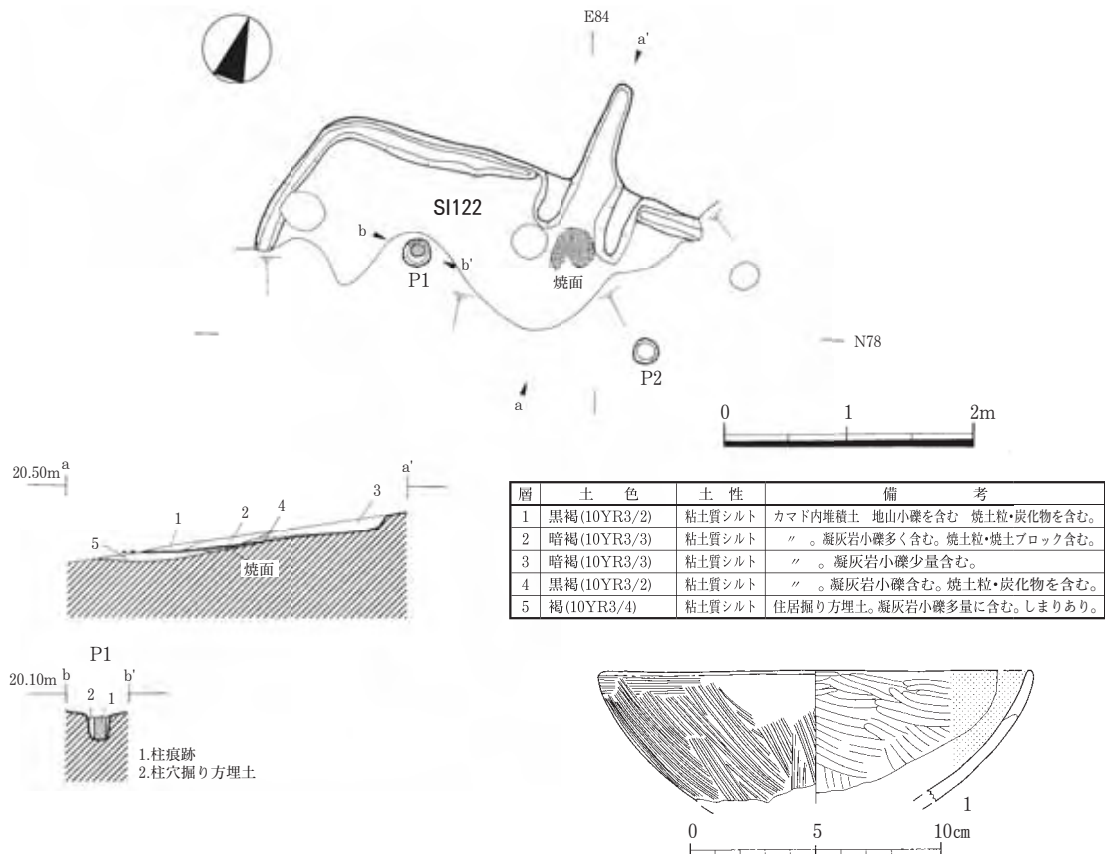
北区域南東端の南斜面部に位置し、中央の谷に面している。全体的に削平を受けており、住居の北西隅とカマド部分を残すのみである。他遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕 平面形は方形状とみられる。規模は東西3.5m以上、南北1.5m以上である。

〔方向〕 北辺でみると東で北へ約7° 偏する。

〔壁〕 残りは悪いが、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は北西隅で床面から10～12cmである。

〔床面〕 地山と住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|-----------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | カマド内堆積土。地山小礫を含む。焼土粒・炭化物を含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫多く含む。焼土粒・焼土ブロック含む。 |
| 3 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫少量含む。 |
| 4 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫含む。焼土粒・炭化物を含む。 |
| 5 | 褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩小礫多量に含む。しまりあり。 |

| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|----|--------|------|-----|---------|----|----|------------------------------|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 高坏 | 床面 | 1/4 | (17.4) | - | - | 外:(口)ヨコナデ(体)ハケメ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 45-6 | I-107 |

第50図 SI122竪穴住居跡と出土土器

〔柱穴〕 主柱穴 2 個 (P1・P2) を検出した。柱穴掘り方は径20~22cmの円形状を呈する。深さは16~20cmである。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含むに黄褐色シルトである。P1では径10cmほどの円形の柱痕跡が認められる。堆積土は黒褐色シルトである。

〔カマド〕 カマドは北辺に付設されている。燃焼部と煙道が残る。燃焼部は幅40cm・奥行き60cmほどである。底面はごく浅く窪んでおり、焼けて赤変している。燃焼部側壁は凝灰岩小礫を含むに黄褐色シルトを貼り付けて構築している。煙道は燃焼部底面からやや傾斜をもって0.8mほど北へ延びている。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴は検出されていない。

〔周溝〕 残存する壁際には巡っている。幅12~20cm、深さ3~4cmほどである。堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む暗褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

〔堆積土〕 住居堆積土はほとんど残っていないが、凝灰岩小礫や炭化物粒を含む黒褐色シルトの自然堆積土がわずかに認められる。

〔出土遺物〕 住居床面から非ロクロ調整の土師器坏・高坏(第50図-1)・甕などの破片が出土している。

【SI123住居跡】(第51図・第52図、図版20-2~4)

北区域中央のやや東寄りに位置する。周溝は全周するが、全体的には上部が削平を受けている。他の遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸形状を呈し、規模は北辺3.6m、東辺3.1mである。

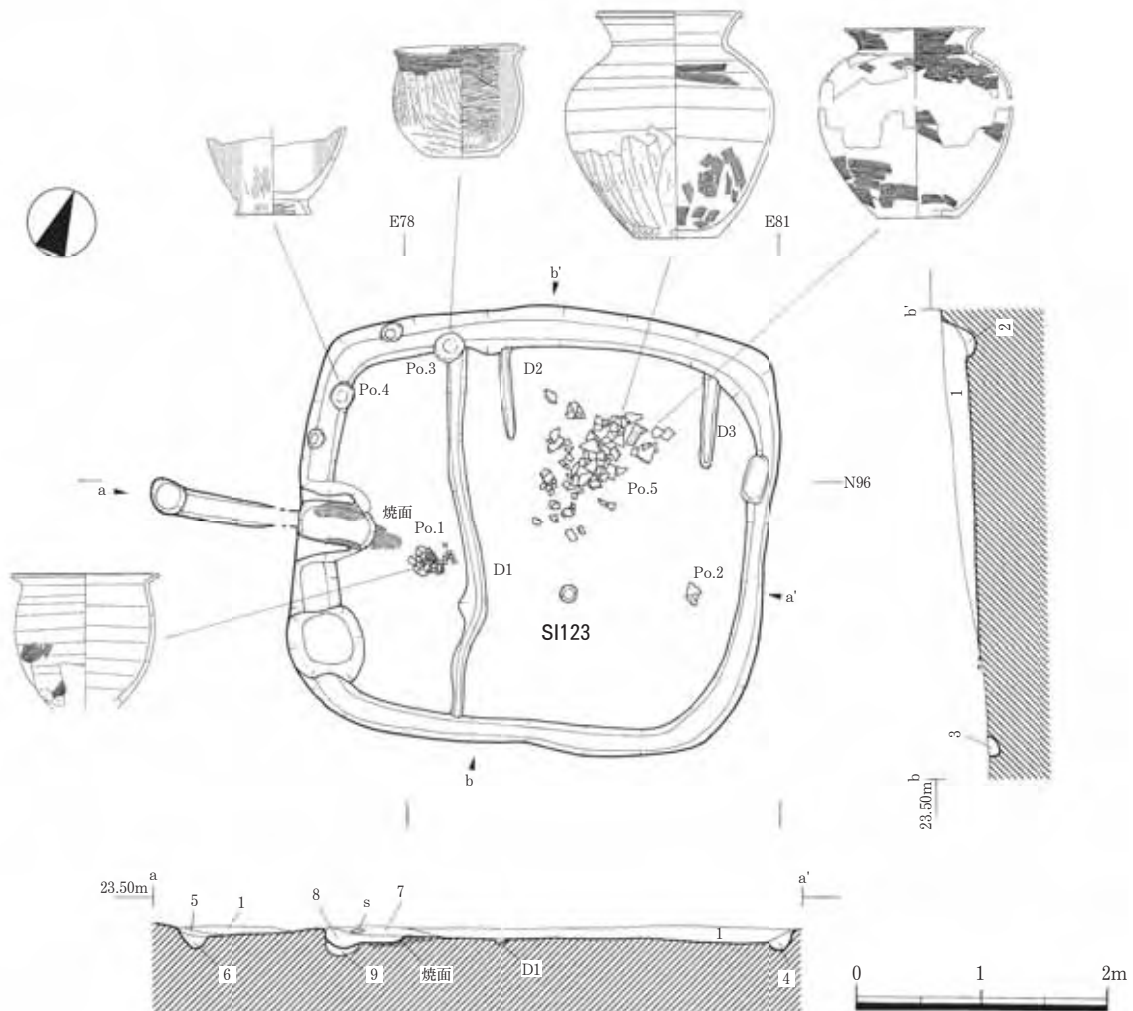
〔方向〕 北辺で見ると東で北へ約15° 偏する。

〔壁〕 全体的にやや斜めに立ち上がっている。壁高は北辺で床面から20cmである。

〔床面〕 床面はほぼ平坦である。地山を床面としている。床面上からは須恵器甕や土師器甕などの破片がまとまって出土している。

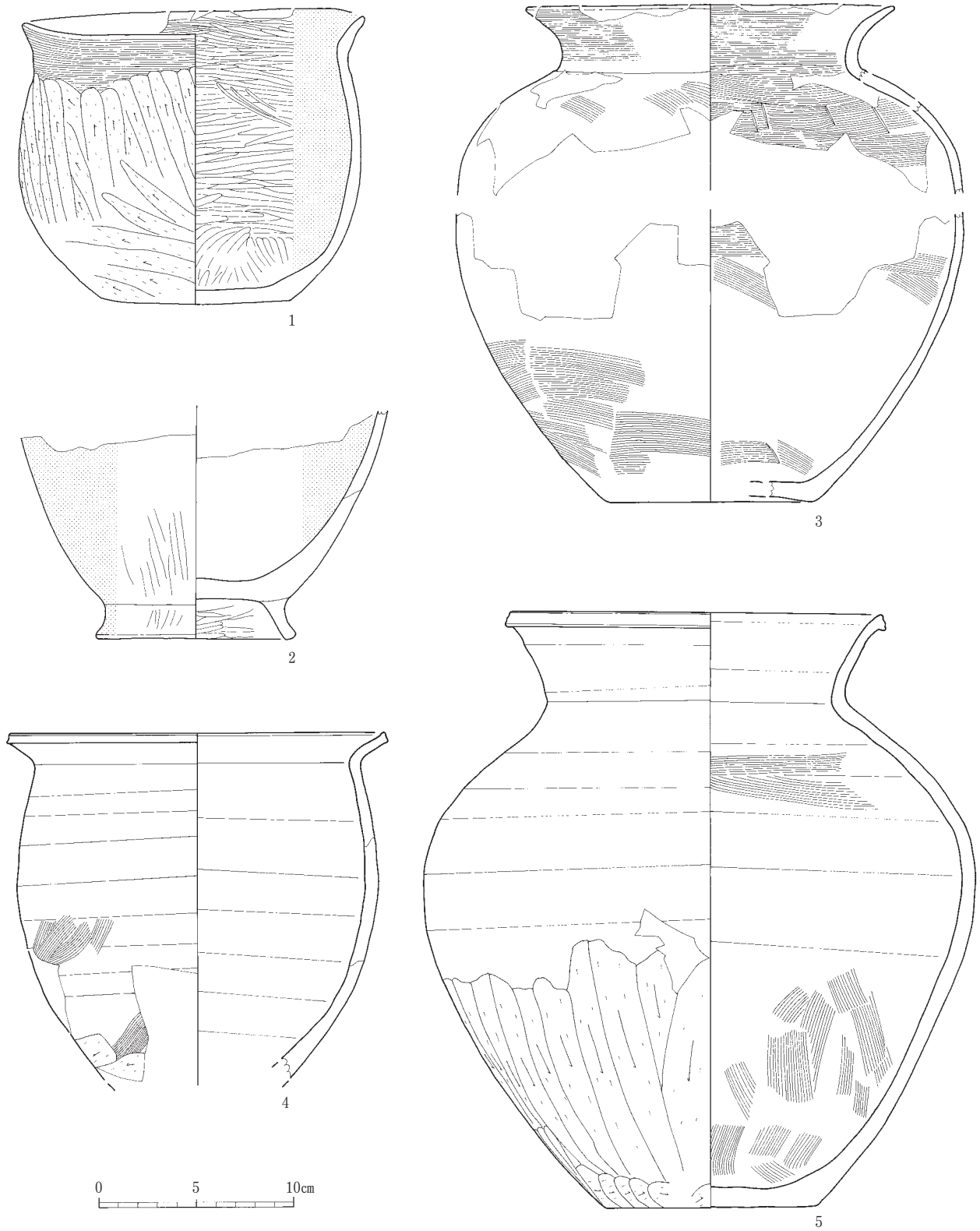
〔柱穴〕 支柱穴などは検出されなかった。

〔カマド〕 西辺の中央部に付設されている。燃焼部と煙道が残存している。燃焼部は幅30cm・奥行き55cmほどである。底面は浅く窪んでおり、焼面は燃焼部底面～焚き口・側壁に認められる。焼面上に



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 | 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|-------------------|---|----------------|-----|------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 | 6 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 煙出しピット。地山粒多い。 |
| 2 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 周溝堆積土。凝灰岩小礫含む。 | 7 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | カマド崩落土。地山ブロック多い。 |
| 3 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 〃。凝灰岩礫含む。焼土粒若干含む。 | 8 | 暗赤褐(2.5YR3/4) | シルト | カマド内堆積土。焼土粒多い。 |
| 4 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 〃。凝灰岩小礫含む。 | 9 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | カマド暗渠内埋土。焼土粒多い。 |
| 5 | 黒褐(10YR2/2) | シルト | カマド煙道内堆積土。炭化物粒多い。 | | | | |

第51図 SI123竪穴住居跡



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|--------------|--------|---------|------|--------|---|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 鉢 | 床面 Po.3 | ほぼ完形 | 17.6 | 9.7 | 15.1 | 外:(口)ヨコナデ (体)ヘラケズリ 底:ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 45-7 | I-108 |
| 2 | 土師器 壺 | 床面 Po.4 | 胴下半~底部 | - | 10.2 | (11.8) | 外:ヘラミガキ 底:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ 内外面黒色処理 内外面剥落著しい。 | 45-8 | I-109 |
| 3 | 土師器 甕 | 床面 Po.5 | 1/3 | (19.0) | 11.0 | (25.5) | 外:(口)ヨコナデ(胴)ナデ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ・ナデ | 46-1 | I-112 |
| 4 | 土師器 甕 | 床面 Po.1 | 1/3 | 19.8 | - | - | 外:ロクロナデ→(下部)一部ナデ・ヘラケズリ 内:ロクロナデ | 47-1 | I-111 |
| 5 | 須恵器 甕 | 床面 Po.2+Po.5 | 2/3 | 19.5 | 10.8 | 30.6 | 外:ロクロナデ→(下部)ヘラケズリ 内:ロクロナデ→一部ナデ | 46-2 | I-110 |

第52図 SI123住居跡出土土器

は焼土粒を含む暗赤褐色シルト、カマドの崩落土が堆積していた。奥壁は住居の壁面と一致する。高さ10cmほどの奥壁から煙道へと至るが、煙道は長さ122cm・幅20～22cm、深さ10cmで、断面形はU字状を呈する。東側に向かって若干傾く。煙道部端には直径26cm、深さ18cmの円形状の煙出しピットを伴う。カマド下の周溝部は埋め戻されている。

〔貯蔵穴状土壌〕貯蔵穴状土壌（K1）は、カマド左脇の南西隅で検出した。長軸72cm・短軸60cmのやや歪んだ楕円形を呈しており、深さは15cmである。堆積土は焼土粒・炭化物粒混じりの黒褐色～暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔周溝〕壁際の全周に巡っている。上幅18～24cm、深さ2～10cmで、断面形はほぼU字状を呈する。また、周溝と接続する南北方向の溝（D1）、北辺側に周溝と接続する長さ72cmと76cmの溝（D2・D3）が検出された。堆積土はいずれも暗褐色シルトの自然堆積土である。なお、周溝底面では正位・倒位の立った状態で土師器鉢・壺、床面から斜めに周溝に落ち込む台石などが検出されている。

〔その他〕周溝北西側ではごく浅いピットが見つかったが、柱痕跡は確認されていない。

〔堆積土〕1層認められる。凝灰岩粒・小礫を含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は比較的多く出土しており、住居床面（周溝）では非ロクロ調整の土師器鉢（第52図-1）・甕（第52図-3）、ロクロ調整の土師器壺（第52図-2）・甕（第52図-4）、須恵器甕（第52図-5）、台石など、住居堆積土からはロクロ調整の土師器坏・甕などの小破片が出土した。2の土師器壺は、二次被熱のためか内外面とも器面の剥落が著しい。なお、住居堆積土からは縄文土器の破片や剥片なども出土している。

【SI130住居跡】（第53図、図版21-1）

中央の東へ下がる谷の南斜面に位置している。大きく削平を受けており、住居の北辺部とカマド部分を残すのみである。他遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は方形状とみられる。規模は東西が4.0mほどである。

〔方向〕北辺で見ると東で北へ約30°偏する。

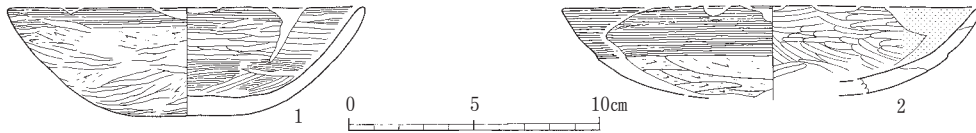
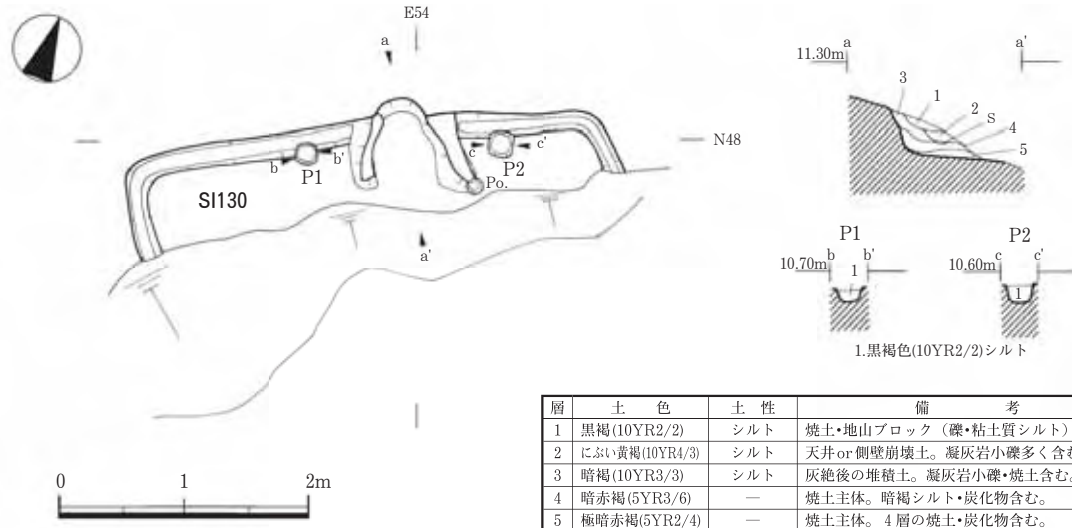
〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がっているが、上部はやや斜めになっている。壁高は残りの良い北辺で床面から30cmほどである。

〔床面〕地山と住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕カマド両側に柱穴とみられる小ピットが2個（P1・P2）検出された。径20～22cmの円形状を呈し、深さは10cmほどである。埋土は凝灰岩小礫を含むにぶい黒褐色シルトである。柱痕跡は明確には認められなかった。

〔カマド〕北辺の中央部に付設されている。煙道は奥へ延びていないが、削平のために消失したというより本来的に短かった可能性もある。奥壁は住居壁面よりもわずかに外へ張り出している。燃烧部は幅50cm・奥行き55cmほどで、底面はほぼ平坦である。燃烧部側壁は凝灰岩小礫や地山シルトブロックを多く含む褐色シルトで構築している。右側壁の焚き口部先端には土師器甕の底部が据えられている。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出されていない。



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|----|-------|------|-----|---------|----|-----|---|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 坏 | 床面 | 1/3 | (14.4) | — | 4.4 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ→ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(体)ナデ→ヘラミガキ 全体的に赤褐色。 | 47-2 | I-114 |
| 2 | 土師器 坏 | 床面 | 1/6 | (17.0) | — | — | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 47-3 | I-115 |

第53図 SI130竪穴住居跡と出土土器

〔周溝〕残存する壁際には巡っている。幅16~18cm、深さ4~5cmほどである。堆積土は凝灰岩粒、炭化物・焼土粒を含む黒褐色シルトの自然堆積土である。

〔堆積土〕住居堆積土はほとんど残っていないが、凝灰岩小礫を含む暗褐色シルトの自然堆積土がわずかに認められる。

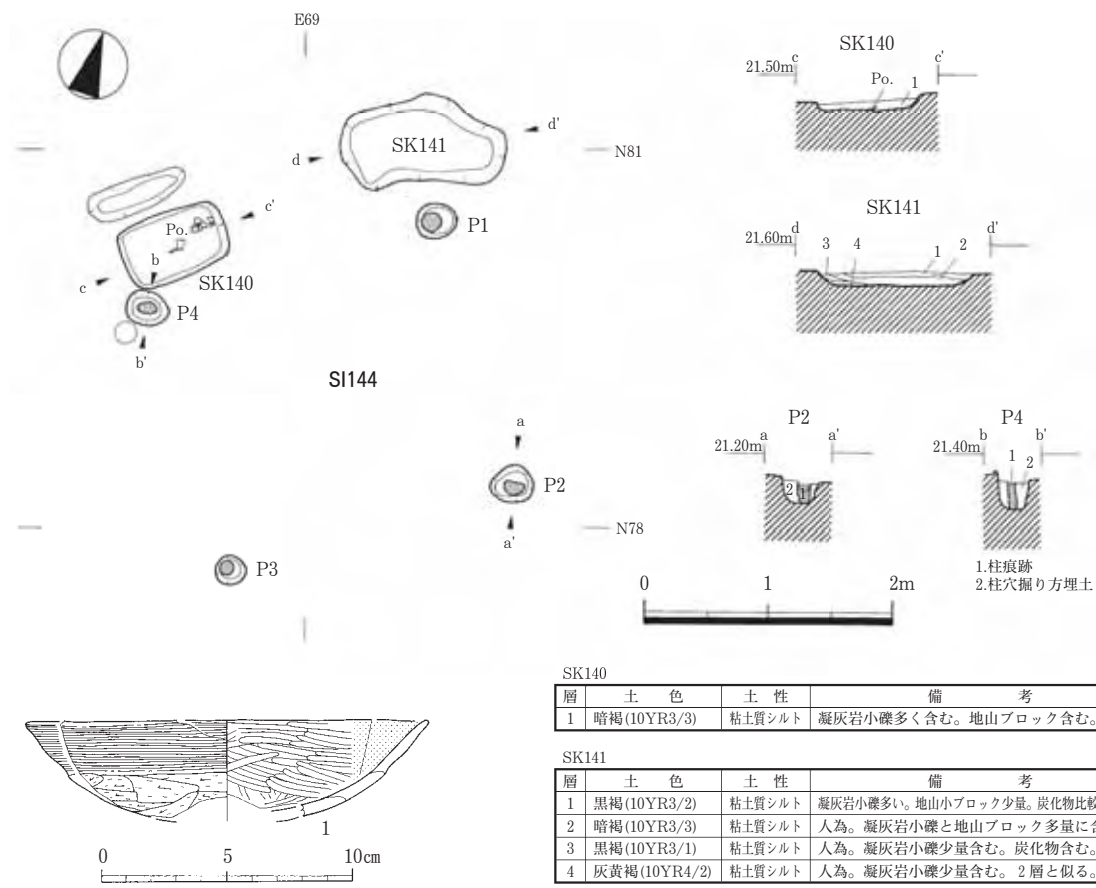
〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器坏(第53図-1・2)、燃烧部左側壁の焼き口部から非ロクロ調整の土師器甕底部、カマド堆積土から非ロクロ調整の土師器甕などが出土している。1の土師器坏は、内面調整にはナデの後に粗くヘラミガキが施されており、黒色処理は認められない。全体的に赤褐色を呈する。

【SI144住居跡】(第54図、図版21-2~6)

北区域中央やや東寄りに位置する。上部は削平されており、支柱穴と貯蔵穴の可能性のある浅い土壇が残るのみである。

〔柱穴〕支柱穴は4個(P1~P4)あり、いずれも柱痕跡が認められる。P1-P2間は約2.2m、P1-P4間は約2.3mである。柱穴掘り方は径22~32cmほどの円形あるいは楕円形状で、深さは20~30cmである。埋土は凝灰岩粒・小礫や地山シルト小ブロックを多く含む褐色シルトである。柱痕跡は径10~15cmの円形状で、堆積土は凝灰岩粒・炭化物粒などを含む黒褐色シルトである。

〔貯蔵穴状土壇〕支柱穴の北側には浅い貯蔵穴状土壇が2基(SK140・141)認められる。SK140は平面形が長形状を呈し、大きさは長軸84cm・短軸55cm、深さは8~10cmである。底面はほぼ平坦で



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | 特徴 | | 写真図版 | 登録 |
|----|-------|----------|-----|---------|----|----|----------------------------------|------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 1 | 土師器 環 | SK140 底面 | 1/4 | (16.2) | - | - | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 47-4 I-143 |

第54図 SI144竪穴住居跡と出土土器

ある。堆積土は凝灰岩小礫や炭化物を含む暗褐色粘土質シルトの自然堆積土である。SK141は不整な長形状を呈し、大きさは長軸135cm・短軸65cm、深さは10cmほどである。堆積土は凝灰岩小礫や地山シルトの小ブロック・炭化物粒を含む暗褐色～黒褐色シルトで、下半は人為的な埋土である。

〔その他〕SK140のすぐ北側には短く浅い小溝があるが、周溝の残痕である可能性もある。上幅25cm、深さ5cmほどで、堆積土は凝灰岩小礫や炭化物粒などを含む黒褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕SK140底面近くから非ロクロ調整の土師器環(第54図-1)・甕などの破片、SK141堆積土から非ロクロ調整の環・甕などの破片、支柱穴掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器甕などの小片がごく少量出土している。

【SI148住居跡】(第55図～第57図、図版22-1～6)

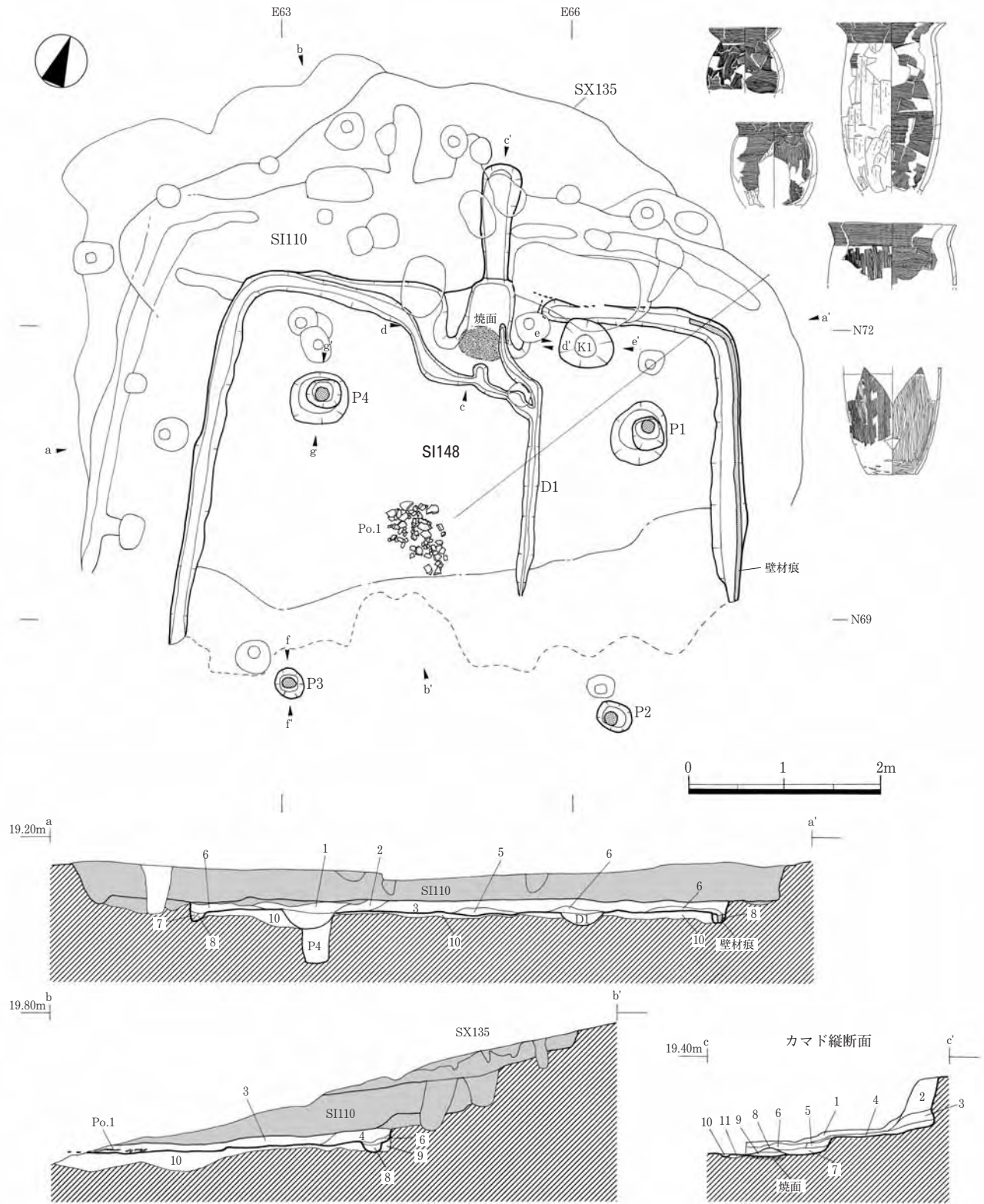
北区域南東部に位置し、中央の谷に面した南斜面部にある。南半部が削平されている。前述したSI110住居跡の床面下から検出された。SX135鍛冶遺構よりも古い。

〔平面形・規模〕平面形は方形状とみられる。規模は東西5.8m、南北4.4m以上である。

〔方向〕北辺でみると東で北へ約18° 偏する。

〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は北辺側で床面から10cmほどある。

〔床面〕住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。

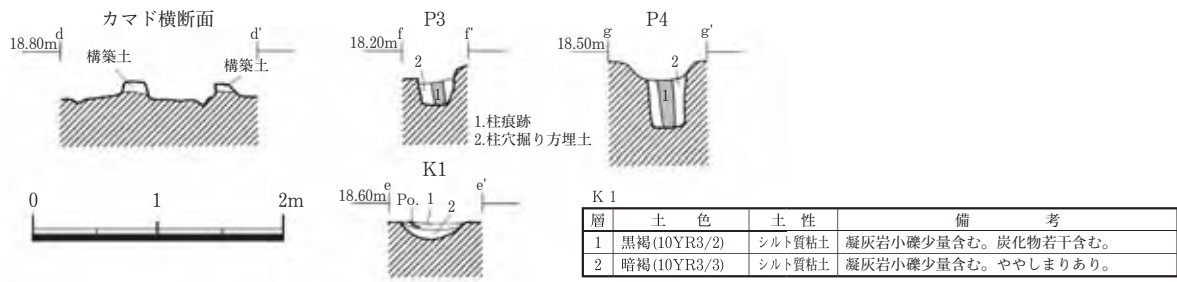


| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|----------------|--------|-----------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR3/2) | シルト質粘土 | 人為。地山シルトブロック・凝灰岩小礫・炭化物若干含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト質粘土 | 人為。地山シルトブロック・凝灰岩小礫多量に含む。 |
| 3 | 黒褐(10YR3/2) | シルト質粘土 | 人為。地山シルトブロック・凝灰岩小礫含む。 |
| 4 | 暗褐(10YR3/3) | シルト質粘土 | 人為。地山シルトブロック・凝灰岩小礫多量に含む。 |
| 5 | 黒褐(10YR3/2) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫・焼土粒・焼土ブロック量含む。 |
| 6 | 黒褐(10YR2/3) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫少量含む。 |
| 7 | 黒褐(10YR3/2) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫少量含む。 |
| 8 | 暗褐(10YR3/3) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫含む。地山シルトブロック含む。 |
| 9 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト質粘土 | 住居掘り方埋土。凝灰岩小礫含む。地山土主体。 |
| 10 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト質粘土 | 住居掘り方埋土。凝灰岩小礫・地山シルトブロック多量。 |

カマド縦断面

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|-------------|--------|----------------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 人為。地山シルトブロック・凝灰岩小礫多く含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 煙道内堆積土。凝灰岩小礫含む。焼土粒少量含む。 |
| 3 | 褐(10YR4/4) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫・地山ブロック含む。炭化物少量。 |
| 4 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫少量。焼土ブロック・炭化物少量。 |
| 5 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫・焼けた地山シルトブロック多い。 |
| 6 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫少量。焼土小ブロック少量。 |
| 7 | 黒褐(10YR2/2) | 粘土質シルト | 〃。凝灰岩小礫・焼けた小礫・焼土ブロック多い。炭化物少量。 |
| 8 | 黄褐(10YR5/6) | シルト質粘土 | 燃焼部貼床。凝灰岩小礫若干含む。被熱により赤化。 |
| 9 | 暗赤褐(5YR3/2) | シルト質粘土 | カマド内堆積土。凝灰岩小礫若干。炭化物少量。被熱で赤化。 |
| 10 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 住居内溝跡堆積土。凝灰岩小礫少量含む。 |
| 11 | 褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 住居掘り方埋土。凝灰岩小礫・地山ブロック多。焼土粒・炭化物若干。 |

第55図 S1148竪穴住居跡敢



第56図 SI148竪穴住居跡柑

〔柱穴〕住居平面形の対角線上に主柱穴を4個（P1～P4）検出した。主柱穴の掘り方は径30～38cmほどの楕円形状を呈する。深さは32～55cmほどある。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含むにぶい黄褐色シルトである。径12～14cmほどの円形の柱痕跡が認められる。堆積土は黒褐色シルトである。北辺側の主柱穴2個（P1・P4）には柱切り取り穴の可能性のあるピットが認められる。

〔カマド〕北辺の中央部に付設されており、燃焼部と煙道が残存する。燃焼部は幅55cm・奥行き70cmほどである。底面は住居床面よりわずかにくぼみ、焼面が認められる。燃焼部側壁は凝灰岩小礫や地山小ブロックを多く含む暗褐色シルトを貼り付けて構築している。東側壁の際からは排水溝（開渠）とみられる小溝（D1：幅15cm、深さ4～5cm）が南へ延びている。奥壁は住居壁面よりわずかに外側へ張り出し、煙道へと続いている。煙道の底面は奥壁からやや傾斜して上がり、北へ1.2mほど延びている。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴とみられる土壙（K1）はカマド右側で検出された。長軸65cm・短軸50cmほどの楕円形状で、深さは約22cmである。堆積土は凝灰岩粒・小礫や炭化物粒を含む暗褐色～黒褐色シルトの自然堆積土である。

〔周溝〕残存する壁際では全体に巡っている。幅20～30cm、深さ5～7cmほどである。北辺西側の周溝は、カマド前面を通してカマドから延びる小溝（D1）と連結している。また、東辺では壁材痕（幅約4cm）が痕跡的に認められた。

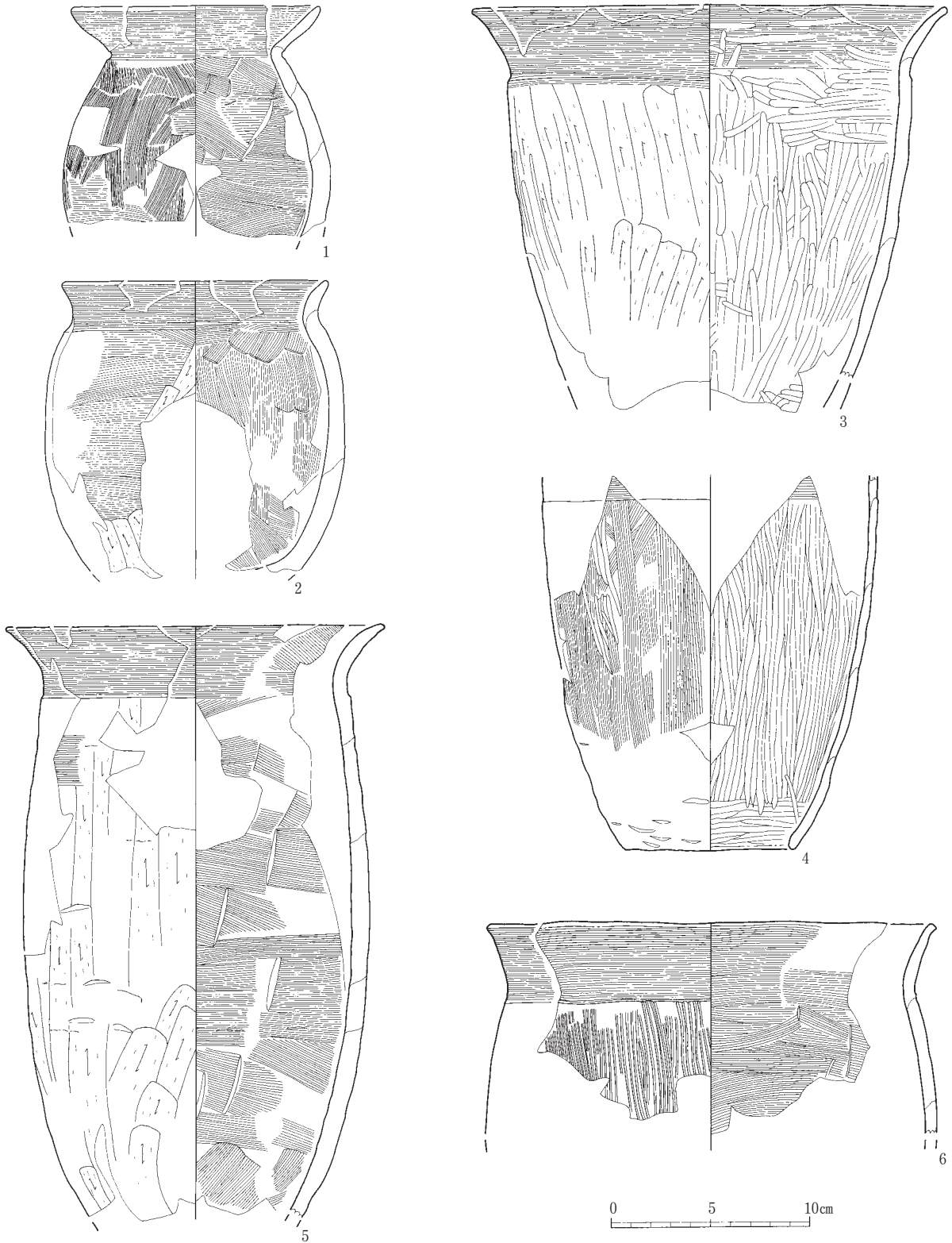
〔堆積土〕2層に大別される。上半は凝灰岩小礫や地山小ブロックを多く含む黒褐色～暗褐色シルトの人為的埋土、下部は黒褐色シルトの自然堆積土である。SI110住居構築の際に埋め戻されたものとみられる。

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器甑（第57図－3・4）・甕（第57図－1・2・5・6）、貯蔵穴状ピット堆積土から非ロクロ調整の土師器杯・甑・甕などが出土している。土師器杯は体部外面に段や稜を持ち、土師器甑・甕類も頸部に段や稜が認められる。

【SI150住居跡】（第58図、図版23－1・2）

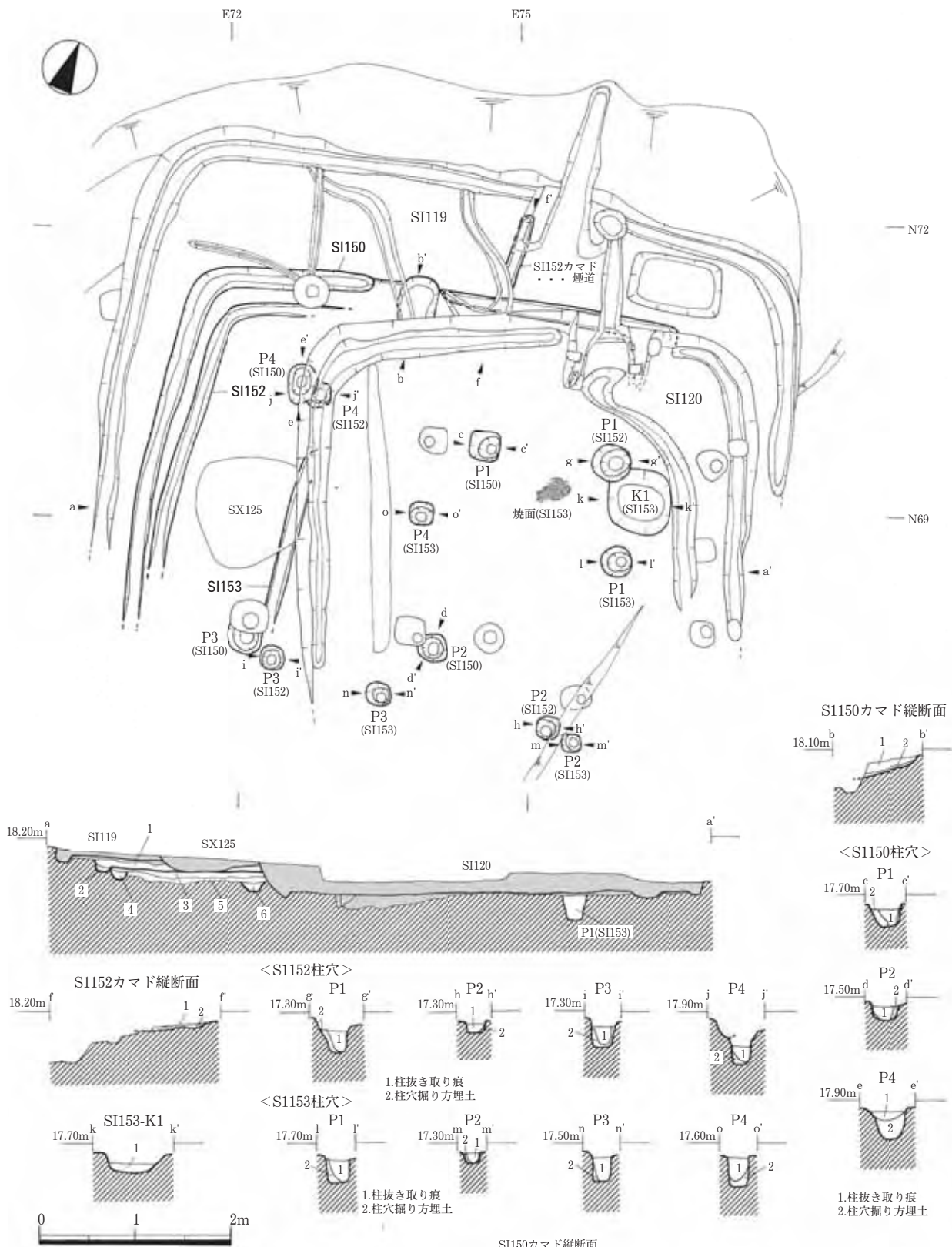
北区域南東部の南斜面上に位置する。SI120・SI119住居跡との重複および削平のために大部分を消失している。西辺と北辺の周溝の一部、カマド燃焼部の一部、および柱穴を残すのみである。SI119・SI120・SI152・SI153住居跡、SX125鍛冶遺構と重複し、SI152・153より新しく、SI119・120、SX125よりも古い。

〔平面形・規模〕平面形は方形状を呈するとみられる。規模は東西約5.0m、南北3.7m以上である。



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|--------|-----|---------|-----|----|---|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 甕 | 床面 | 1/5 | (12.6) | — | — | 外:(口)一部ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→一部ナデ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ | 47-5 | I-119 |
| 2 | 土師器 甕 | 床面 | 1/3 | (13.4) | — | — | 外:(口)ヨコナデ(胴)ナデ→(下部)ヘラケズリ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ・ナデ | 47-6 | I-120 |
| 3 | 土師器 甕 | 床面+貯蔵穴 | 1/3 | (24.0) | — | — | 外:(口)ヨコナデ(胴)ヘラケズリ→一部ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(胴)ヘラミガキ | 47-7 | I-117 |
| 4 | 土師器 甕 | 床面 | 1/2 | — | 8.5 | — | 外:(口)ヨコナデ(胴)ナデ→一部ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラミガキ | 48-1 | I-118 |
| 5 | 土師器 甕 | 床面 | 1/6 | (19.0) | — | — | 外:(口)ヨコナデ(胴)ヘラケズリ→一部ナデ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ・ナデ | 48-3 | I-122 |
| 6 | 土師器 甕 | 床面 | 口縁部 | (22.6) | — | — | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ | 48-2 | I-121 |

第57図 S1148住居跡出土土器



SI150・152・153

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|---------------------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | SI150住居内堆積土(人為か)。凝灰岩粒・礫多量。赤色岩粒やや多い。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | SI150周溝堆積土。凝灰岩粒多いが、1層に比べ少ない。赤色岩粒若干。 |
| 3 | 褐(10YR4/6) | シルト | SI150住居掘り方埋土。凝灰岩粒・礫多量。赤色岩粒・地山ブロックも多。 |
| 4 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | SI152周溝堆積土。凝灰岩粒・礫やや多。赤色岩粒若干含む。 |
| 5 | 褐(10YR4/4) | シルト | SI152住居掘り方埋土。凝灰岩粒・礫多量。赤色岩粒若干・地山ブロック多。 |
| 6 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | SI153周溝内堆積土。凝灰岩粒・礫やや多い。赤色岩粒若干含む。 |

SI150カマド縦断面

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|------------------------------|
| 1 | 褐(10YR4/4) | シルト | 人為の埋め戻しか。凝灰岩粒・礫多量。赤色岩粒比較的多い。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | カマド内堆積土。炭化粒・焼土粒やや多く含む。 |

SI152カマド縦断面

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|-----------------------------------|
| 1 | 黄褐(10YR5/6) | シルト | カマド天井部崩落土か。凝灰岩粒・礫多い。黄褐色シルトブロック含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 煙道底面堆積土。焼土粒・炭化物粒多量に含む。 |

SI153・K1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|------------|-----|-----------------------|
| 1 | 褐(10YR4/4) | シルト | 凝灰岩粒・礫やや多く含む。炭化物若干含む。 |

第58図 SI150・SI152・SI153竪穴住居跡

〔方向〕北辺でみると東で北へ約16° 偏する。

〔壁〕壁は残っていない。

〔床面〕住居掘り方埋土を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕柱穴は全部で4個（P1～P4）検出した。やや不整だが、推定される住居平面形の対角線上にあり、支柱穴とみられる。いずれも柱の抜き取り穴が認められる。柱穴は円形もしくは隅丸形状を呈する。大きさは30～38cmほどである。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含む黄褐色シルトである。

〔カマド〕北辺のやや西寄りに付設されている。ただし、燃焼部が痕跡的に残存するのみである。燃焼部底面は浅く窪んでおり、奥壁は住居壁面よりもわずかに外へ張り出している。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出されていない。

〔周溝〕残存している西辺と北辺では巡っている。幅20cm、深さ10～15cmほどである。堆積土は凝灰岩粒を含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔堆積土〕1層認められる。凝灰岩粒・小礫を多く含む暗褐色シルトで、人為的な埋土の可能性が
ある。

〔出土遺物〕カマド内堆積土および支柱穴（P2）の埋土から、わずかに非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土したのみである。

【SI151住居跡】（第59図）

南区域中央のやや東寄りの南斜面上に位置する。SI12・SI80住居跡とほぼ同位置にある。これらの住居跡と重複し、また南側は大きく削平されているため、カマドが付設されている北辺部の一部を検出したのみである。SI12・SI80住居跡よりも古い。SI80住居跡の構築の際に埋め戻されている可能性がある。

〔平面形・規模〕平面形は方形状とみられる。規模は北東－南西4.0m以上、北西－南東1.0m以上である。

〔方向〕北西辺でみると東で北へ約48° 偏する。

〔壁〕壁はほとんど残っておらず、壁高は北西辺で床面から10cmほどである。

〔床面〕北辺付近は地山、南側は住居掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕支柱穴などは不明である。

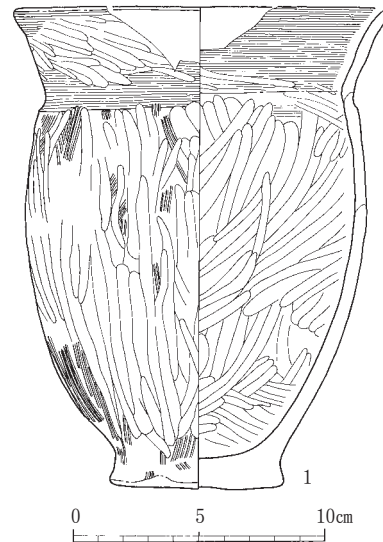
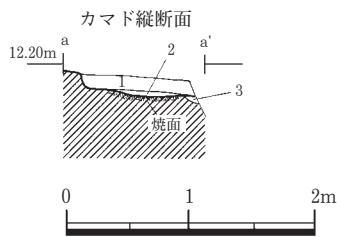
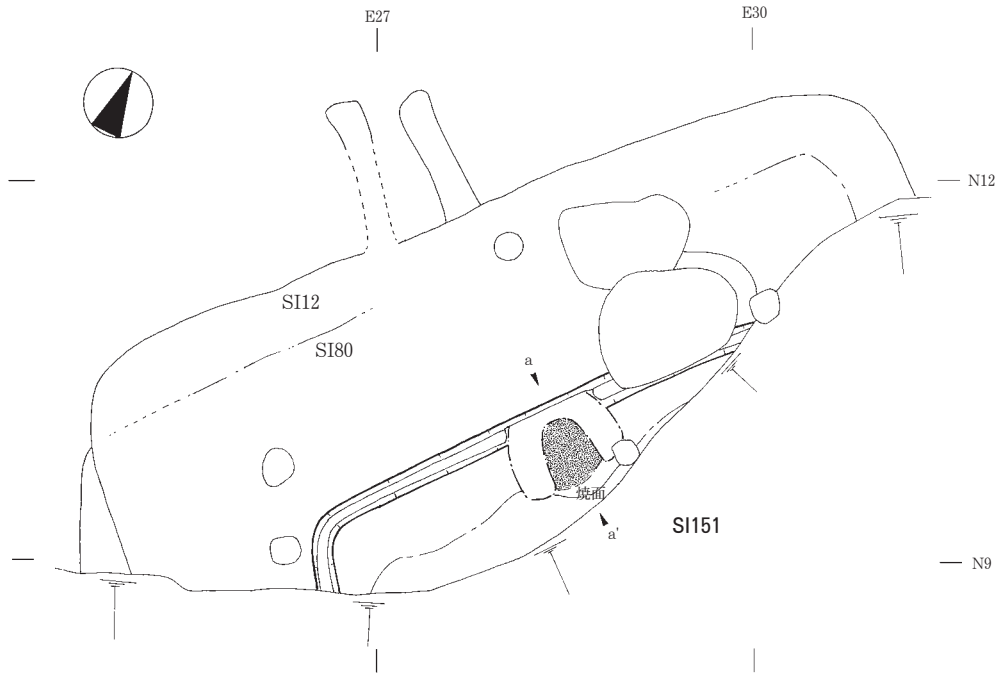
〔カマド〕北辺に付設されている。燃焼部側壁は残っていない。燃焼部の大きさは、幅30cm・奥行き50cmである。底面は焼けて赤変・硬化している。奥壁は住居の壁面から15cmほど内側に入る。煙道は不明である。カマド本体はSI80住居構築時に破壊されているものとみられる。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は不明である。

〔周溝〕残存する西辺・北辺では全体を巡っている。幅16～22cm、深さ6～10cmほどである。壁材痕は検出されなかった。堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルトの自然堆積土である。

〔堆積土〕凝灰岩小礫を多く含む暗褐色シルトの人為的埋土がわずかに残存する。

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整で頸部に段を持つ土師器甕（第59図－1）、住居掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器甕の小片が数片出土したのみである。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|--------------|-----|------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩小礫多く含む。 |
| 2 | 黒褐(7.5YR3/2) | シルト | 地山粘土(本体崩落土か)。炭化物・焼土含む。 |
| 3 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 住居掘り方埋土。地山粘土粒含む。 |

| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量(cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|--------|-----|--------|-----|------|--|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 甕 | 床面Po.1 | 1/2 | (15.0) | 6.9 | 19.3 | 外:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 底:ナデ→ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(胴)ヘラミガキ | 48-4 | I-123 |

第59図 SI151竪穴住居跡と出土土器

【SI152住居跡】(第58図、図版23-1・2)

前述のSI150とほぼ同位置にある。SI119・SI120・150住居跡との重複で大部分を消失している。西辺と北辺の周溝の一部、煙道部の一部、柱穴を痕跡的に残すのみである。SI119・SI120・SI150・SI153住居跡、SX125鍛冶遺構と重複し、SI153より新しく、SI119・120・150、SX125よりも古い。

〔平面形・規模〕平面形は不明である。規模は東西2.7m以上、南北3.0m以上とみられる。

〔方向〕西辺でみると北で西へ約5°偏する。

〔壁・床面〕壁・床面とも残存しない。

〔柱穴〕柱穴は全部で4個(P1~P4)認められ、推定される住居平面形の対角線上にあることから

支柱穴とみられる。円形状で、大きさは径25～30cm、深さは30～34cmである。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含むにふい黄褐色シルトである。いずれの柱穴にも柱抜き取り穴が認められる。

〔カマド〕北辺に付設されている。燃焼部は全く残っていないが、煙道の一部が痕跡的に残存している。煙道の残痕は長さ70cm・幅15cm、深さ3～4cmほどである。堆積土には炭化物・焼土粒を多く含む。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出されていない。

〔周溝〕西辺・北辺の一部が残存する。幅20cm、深さ5～8cmほどで、堆積土は凝灰岩粒を含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔堆積土〕住居堆積土は残存していない。

〔出土遺物〕支柱穴（P1）の埋土から非ロクロ調整の土師器坏、住居掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器甕・甕などの破片が若干数出土したのみである。

【SI153住居跡】（第58図、図版23-1・2）

SI120住居跡とほぼ同位置にある。SI119・SI120・150・152住居跡との重複で大部分を消失している。西辺周溝の一部、カマド燃焼部焼面の一部、柱穴、貯蔵穴状土壌を痕跡的に残すのみである。SI119・SI120・SI150・SI152住居跡、SX125鍛冶遺構と重複し、これらよりも古い。

〔平面形・規模〕平面形は方形状を呈するとみられる。規模は東西4.0m以上、南北2.5m以上である。

〔壁・床面〕壁・床面とも残存していない。

〔柱穴〕柱穴は全部で4個（P1～P4）認められ、推定される住居平面形の対角線上にあることから支柱穴とみられる。円形～隅丸方形状で、大きさは径もしくは一辺が22～25cm、深さは30～32cmである。埋土は凝灰岩小礫を多く含むにふい黄褐色シルトである。いずれの柱穴にも柱抜き取り穴が認められる。

〔カマド〕北辺に付設されていたとみられる。燃焼部の焼面とみられる痕跡が若干残存している。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴とみられる土壌（K1）は、カマド燃焼部焼面とみられる部分の右側にある。不整な円形状で、径65cm、深さは20cmほどある。堆積土は、上部には人為的埋土、下部には褐色シルトの自然堆積土が認められた。

〔周溝〕残存する西辺では巡っている。幅20cm、深さ5～6cmほどで、堆積土は凝灰岩粒・小礫をやや多く含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔堆積土〕住居堆積土は残存しない。

〔出土遺物〕貯蔵穴状土壌の堆積土、支柱穴（P1）埋土から非ロクロ調整の土師器甕などの小片が数点出土したのみである。

【SI154住居跡】（第60図・第61図、図版23-3）

南区域中央付近の南斜面に位置する。南側は削平されている。SI28・SI155住居跡と重複し、これらよりも古い。

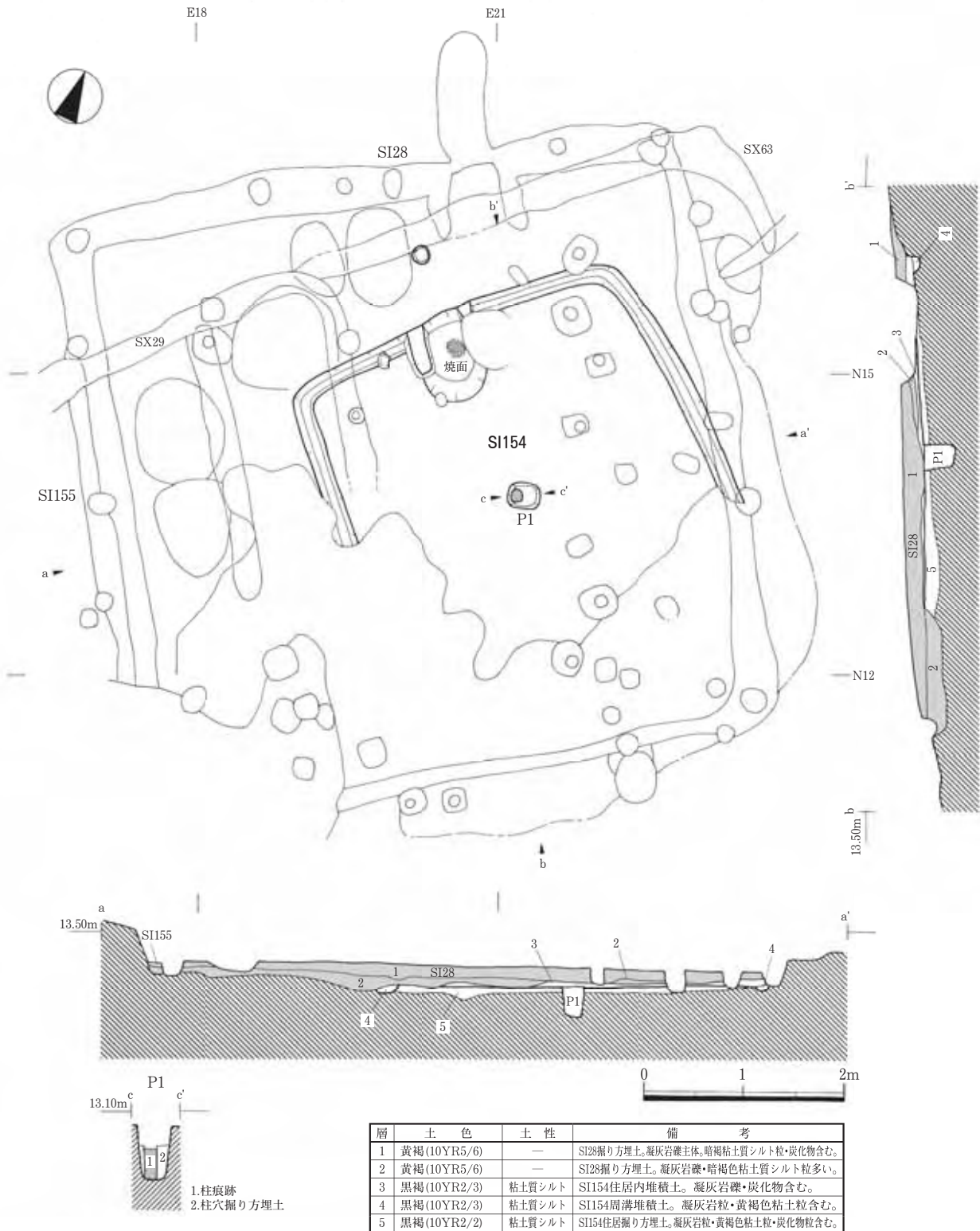
〔平面形・規模〕平面形は方形状とみられる。規模は東西3.5m、南北2.8m以上である。

〔方向〕北辺で見ると東で北へ約47° 偏する。

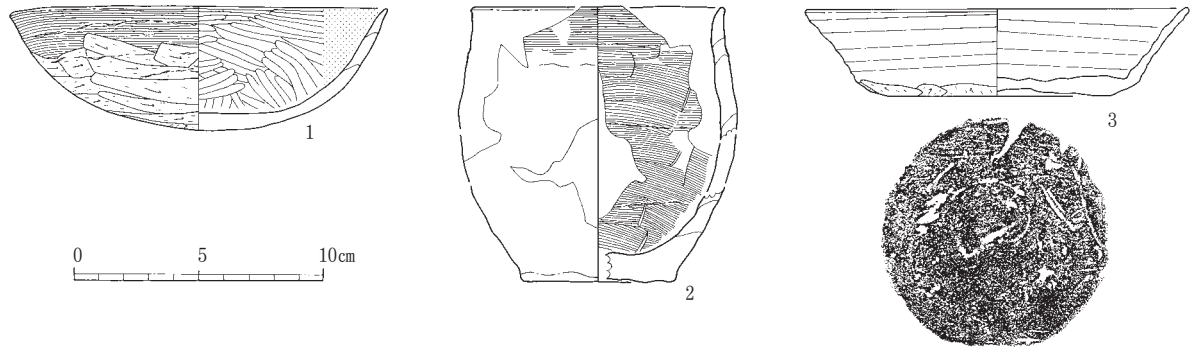
〔壁〕残存していない。

〔床面〕北東隅を除いて住居掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居のほぼ中央で1個（P1）検出した。一辺30cmほどの方形を呈する。埋土は凝灰岩小礫



第60図 SI154竪穴住居跡



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特 徴 | 写真図版 | 登 録 |
|-----|-------|---------|-----|---------|-------|------|--|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 環 | 住居掘り方埋土 | 4/5 | 15.1 | — | 5.0 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 48-5 | I-124 |
| 2 | 土師器 甕 | カマド内堆積土 | 1/4 | (10.1) | (6.0) | 11.0 | 外:(口)ヨコナデ(胴)磨減不明 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ・ナデ | 48-7 | I-125 |
| 3 | 須恵器 環 | 床面 Po.1 | 1/2 | (15.4) | 11.4 | 3.5 | 外:ロクロナデ→(下部)手持ヘラケズリ 底:ヘラ切り→手持ヘラケズリ 内:ロクロナデ | 48-6 | I-126 |

第61図 SI154住居跡出土土器

を含む黒褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径12cmの円形で、深さは50cmほどである。堆積土は暗褐色粘土質シルトである。

〔カマド〕カマドは北辺の中央部に付設されている。燃烧部の大きさは、幅40cm・奥行き50cmである。底面は浅く窪んでいる。奥壁は住居の壁面と一致する。燃烧部側壁は凝灰岩小礫を多量に含む褐色シルトで構築されている。煙道はSI28に削られて残っていない。ただし、0.5m先にあるピット(径20cmの円形)は煙出し部のピットの可能性がある。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は検出されなかった。

〔周溝〕残存する西辺・北辺・東辺では全体を巡っている。幅18~22cm、深さ11~15cmほどである。堆積土は凝灰岩粒や地山粘土ブロックを含む黒褐色粘土質シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居床面から土師器環・甕・甕、須恵器環(第61図-3)、カマド内堆積土から土師器甕(第61図-2)、住居掘り方埋土から土師器環(第61図-1)・甕、砥石などが出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整である。3の須恵器環は底部の切り離しがヘラ切りで、手持ちヘラケズリが施されている。

〔SI155住居跡〕(第62図)

南区域中央付近の南斜面に位置する。SI28住居跡とほぼ同位置である。住居西辺のごく一部と支柱穴とみられる4個の柱穴を検出したのみである。SI28・SI154住居跡と重複し、SI154より新しく、SI28よりも古い。

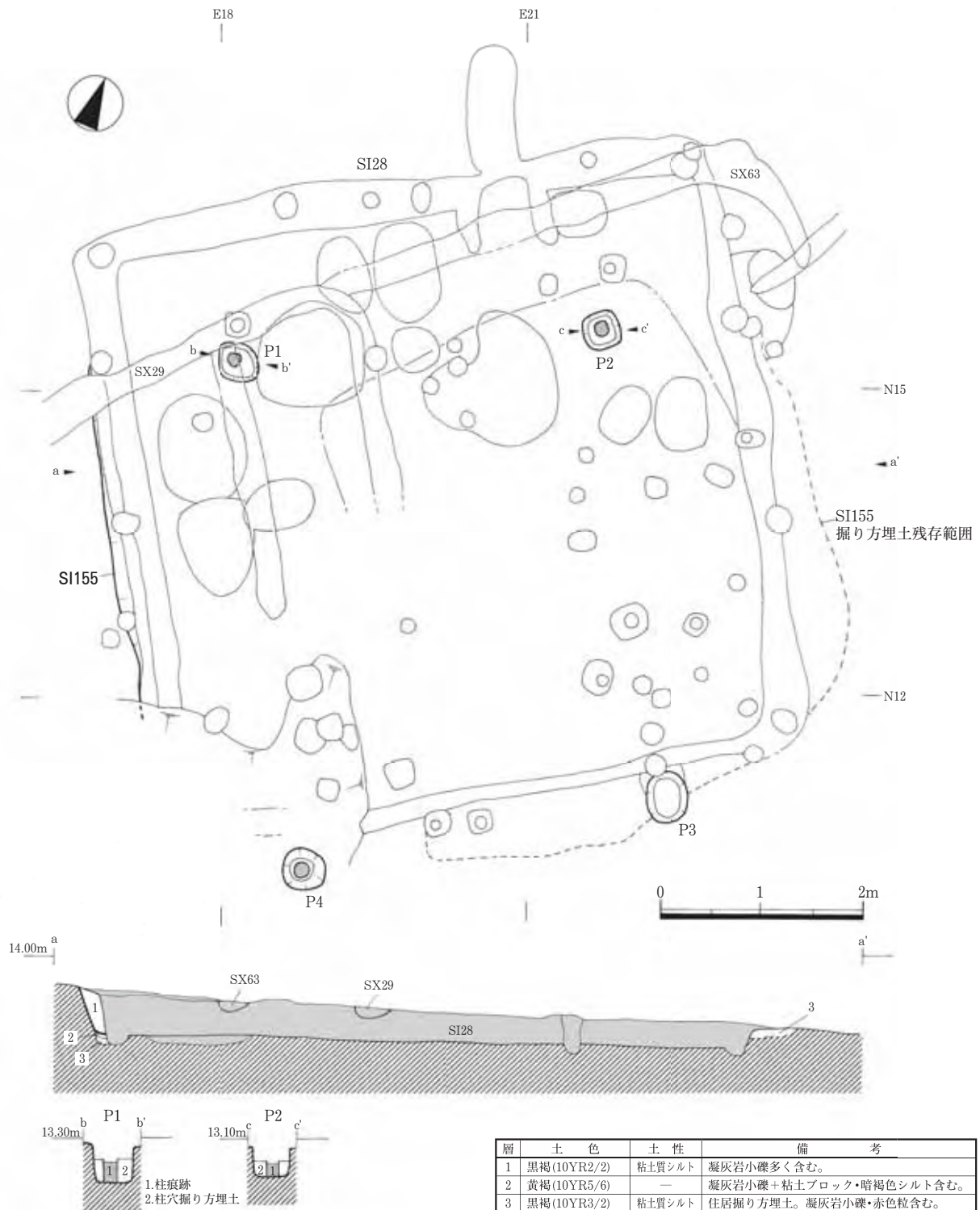
〔平面形・規模〕平面形は方形状とみられる。規模は東西6.5m、南北6.6m以上である。

〔方向〕わずかに残存する西辺でみると北で西へ約30°偏する。

〔壁〕わずかに残る西辺ではほぼ垂直に立ち上がる。壁高は西辺では床面から約40cmである。

〔床面〕住居掘り方埋土を床面としているとみられる。SI28住居跡の床面とはレベルをほぼ同じくする。

〔柱穴〕支柱穴とみられる4個(P1~P4)を検出した。一辺30~50cmほどのやや歪んだ方形を呈する。埋土は凝灰岩小礫を多く含む暗褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径12cmの円形で、深さは30~



第62図 SI155竪穴住居跡

40cm、堆積土は暗褐色粘土質シルトである。

〔カマド・貯蔵穴・周溝〕いずれも不明である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

B. 鍛冶遺構

鍛冶遺構としたものは6基である。鍛冶炉とみられる遺構に、周溝と掘立柱建物を伴うもの1基

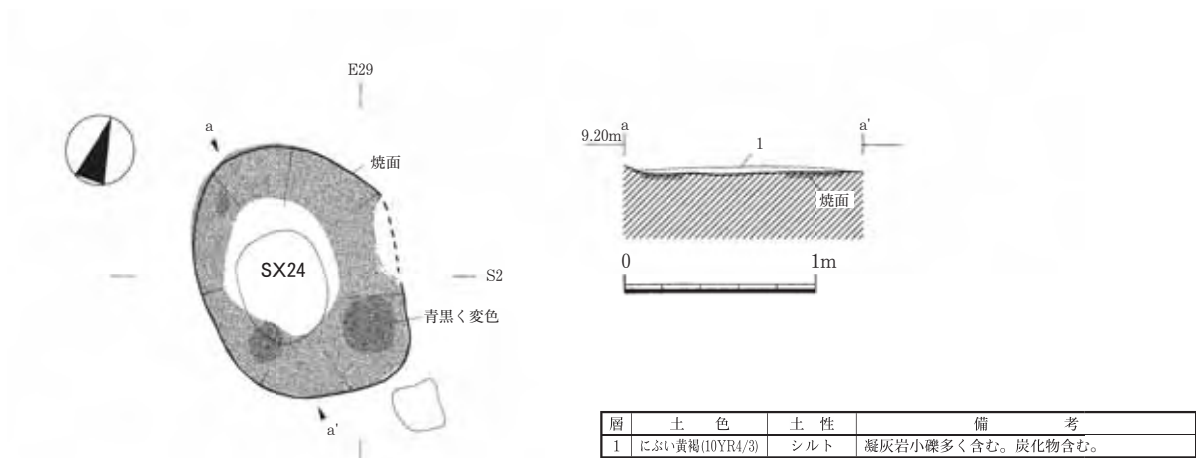
(SX25)、竪穴状遺構を伴うもの1基(SX135)、浅い土坑状遺構を伴うもの1基(SX131)があり、炉跡が単独のものは3基(SX24・SX121・SX125)である。

【SX24鍛冶遺構】(第63図、図版24-1)

南区域南端部の南斜面上に位置する。壁面が焼けて赤変しており、炉跡とみられる。上部は削平されており、底面部のみが残存している。位置的にSB50と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形はほぼ楕円形を呈し、大きさは長軸140cm・短軸106cmである。検出面からの深さは5cmと浅い。底面の中央部を囲むように熱を受けて赤変しており、特に北西隅が強く赤変・硬化している。

底面中央部には顕著に赤化した部分は認められない。また、北西隅・南西隅・南東隅の3ヶ所には青黒く変化している部分も認められた。



第63図 SX24鍛冶遺構

堆積土は凝灰岩粒・小礫や炭化物粒を多く含んだにぶい黄褐色シルトで、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SX25鍛冶遺構】(第64図、図版24-2・3、25-1~5)

南区域中央部やや東寄りの南東斜面に位置する。東側が削平を受けており、西側部分のみが残存する。長方形に切り出した平場に周溝を巡らし、4間×1間の掘立柱建物跡(SB72)と炉跡3基(K1・K2・K3)を設置したものである。SX26竪穴状遺構・SK79土坑と重複し、これらよりも新しい。

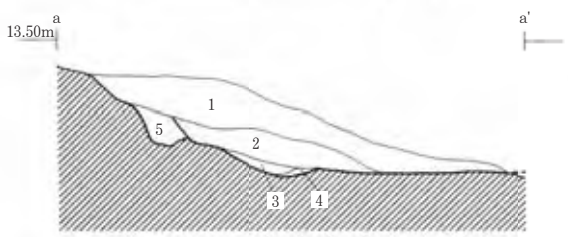
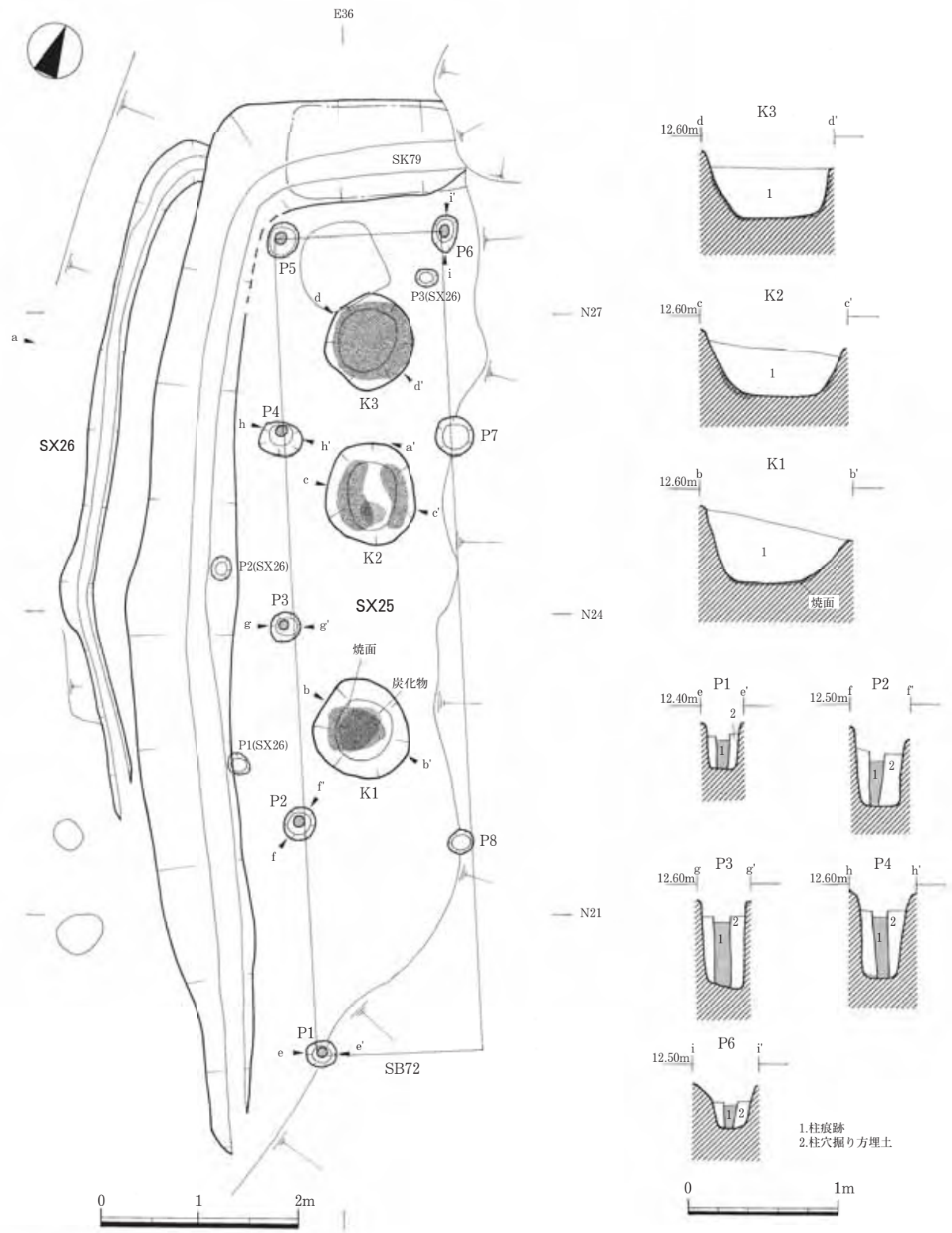
[平場]全体の平面形は長方形を呈するとみられるが、壁と周溝が全周していたかどうかは不明である。規模は南北10m以上、東西4m以上である。

壁は地山とSX26竪穴状遺構の堆積土の一部を壁面としており、周溝からやや斜めに立ち上がる。壁高は西辺で床面から29~31cmである。床面は地山で、ほぼ平坦である。周溝は上幅18~20cm、深さは6~10cmほどである。

遺構内の堆積土は、凝灰岩小礫を含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

床面や堆積土から遺物の出土はない。

[SB72]柱穴は8個(P1~P8)検出し、柱痕跡はそのうちの6個について認められた。建物跡の桁行総長は8.08m、柱間寸法は北から1.9m・1.9m・1.9m・2.38mである。梁行は北側柱列で1.44mであ



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-------|---------------------------------|
| 1 | 灰褐(7.5Y4/2) | シルト | 凝灰岩粒・地山シルト小ブロックを含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩粒少量含む。 |
| 3 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | やや砂質。凝灰岩粒少量含む。 |
| 4 | にぶい黄褐(10YR5/4) | 砂質シルト | 地山が汚れた土。 |
| 5 | 褐(10YR4/4) | シルト | SX26。人為的に埋め戻し。凝灰岩粒・地山小ブロック多く含む。 |

K1・K2・K3

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|---------------------|
| 1 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 人為的に埋め戻し。凝灰岩小礫多く含む。 |

第64図 SX25鍛冶遺構・SX26竪穴状遺構

る。建物方向は西側柱列でみると北で西へ約24° 偏する。

柱穴は径30～35cmほどの円形あるいは楕円形状を呈する。深さは28～57cmである。柱穴掘り方埋土は、凝灰岩粒・小礫を多く含む黄褐色シルトである。柱痕跡は径10cmほどの円形で、堆積土は凝灰岩粒を含む褐色シルトである。

[K1・K2・K3] 炉跡とみられる遺構がSB72建物跡の内部に一列になって3基認められる。K1とK2の間は約1.4mであるが、K2とK3の間は約50cmとやや狭くなっている。

平面形は3基とも円形を呈する。大きさは、K1が径90cm・深さ50cm、K2が径96cm・深さ42cm、K3が径96cm・深さ48cmである。いずれも断面形は逆台形状を呈し、壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。壁・底面とも地山である。底面から壁面にかけては熱を受けて赤変・硬化している。K2・K3は底面上に木炭の薄層が認められた。堆積土は凝灰岩粒・小礫を多く含む黄褐色シルトで、3基とも人為的に埋め戻されている。

いずれからも遺物は出土していない。

【SX121鍛冶遺構】(第65図、図版25-6、26-1)

北区域南東側の南斜面上に位置する。壁面が赤変した隅丸方形の凹部と溝状の部分からなり、この間には人為的に貼り付けた仕切りのような黄褐色土の高まりがみられる。全体が削平を受けている。

壁面が赤変した隅丸方形の凹部は長軸100cm・短軸70cmほどで、深さは北側で33cmある。壁はやや急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。熱による赤変は北側の壁際が顕著で、底面には認められない。東側の溝状の部分は上幅25cm、深さは約30cmである。

堆積土は凝灰岩小礫や炭化物粒・焼土粒を含む暗褐色～黒褐色シルトが自然堆積したものである。

遺物はロクロ調整の土師器坏(第65図-1)・鉢・甕(第65図-2・3)、須恵器甕の小片、鉄滓などが出土している。

【SX125鍛冶遺構】(第66図、図版26-2)

北区域南東側の南斜面上に位置する。壁面が焼けて赤変している。削平および他遺構との重複のために南～南東側を消失している。SI120・SI119住居跡などと重複し、SI120より古く、SI119より新しい。

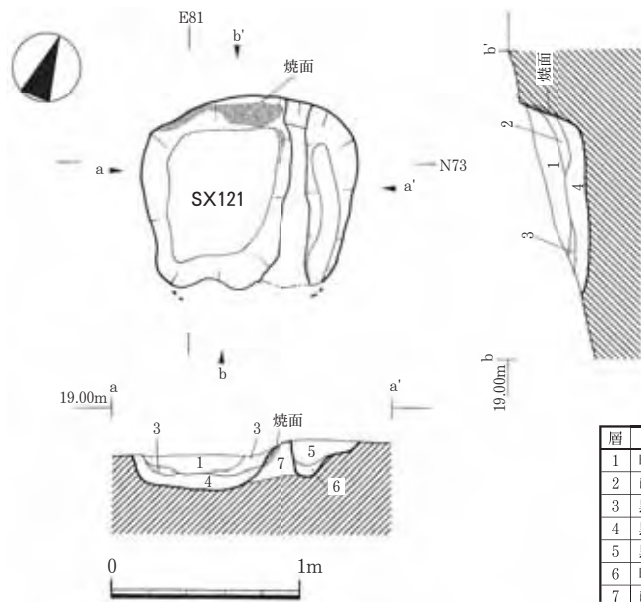
平面形は楕円形状を呈していたものとみられ、大きさは長軸1.1m以上、深さは15～20cmほどである。断面形は皿状を呈する。

堆積土は2層に大別される。1層は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルトの自然堆積層、2層は底面に堆積した炭化物・焼土粒層である。

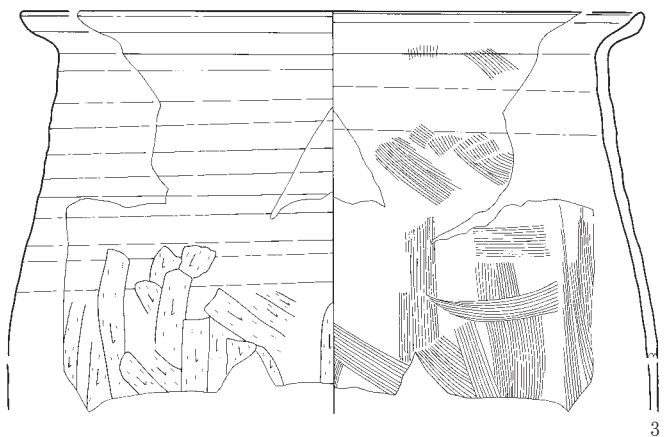
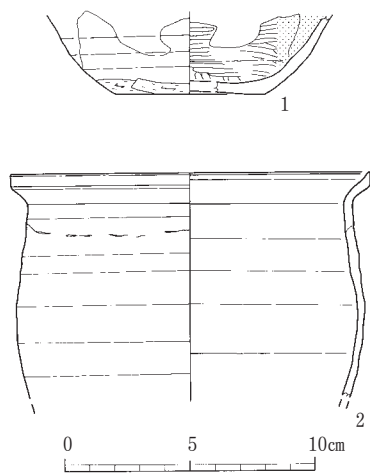
遺物は土師器坏・甕などの小片が少数出土したのみである。なお、SX125を切るSI120住居跡の堆積土から鉄滓が少量出土しているが、本来はSX125に由来するものとみられる。

【SX131鍛冶遺構】(第66図、図版26-3・4)

南区域中央部の南斜面上に位置する。削平のために残存は不良であるが、壁面が焼けて赤変しており、炉跡の残痕とみられる。西隣のSK132(後述)は、SX131と一連の遺構とみられる。SI27住居跡



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|--------|---------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫少量含む。炭化物・焼土粒少量含む。 |
| 2 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト質粘土 | 地山小礫含む。炭化物少量含む。 |
| 3 | 黒褐(10YR3/2) | シルト質粘土 | 焼土ブロック多量に含む。炭化物含む。 |
| 4 | 黒褐(10YR2/3) | シルト質粘土 | 焼土粒含む。焼土塊一部に含む。炭化物・地山粒少量。 |
| 5 | 黒褐(10YR2/3) | シルト質粘土 | 焼土ブロック・凝灰岩小礫含む。炭化物少量含む。 |
| 6 | 暗褐(10YR3/3) | シルト質粘土 | 地山シルト粒・ブロックを含む。 |
| 7 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト質粘土 | 地山シルトブロック・凝灰岩小礫含む。 |



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|------|-----|---------|-------|----|--|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 環 | 堆2層 | 底部 | - | (6.0) | - | 外:ロクロナデ→(下部)手持ちヘラケズリ 底:切離し不明→手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 49-1 | I-144 |
| 2 | 土師器 甕 | 堆2層 | 1/8 | (14.4) | - | - | 内外:ロクロナデ | 49-1 | I-145 |
| 3 | 土師器 甕 | 堆2層 | 1/6 | (25.0) | - | - | 外:ロクロナデ→(下部)ヘラケズリ 内:ロクロナデ→ナデ | 49-2 | I-146 |

第65図 SX121鍛冶遺構と出土土器

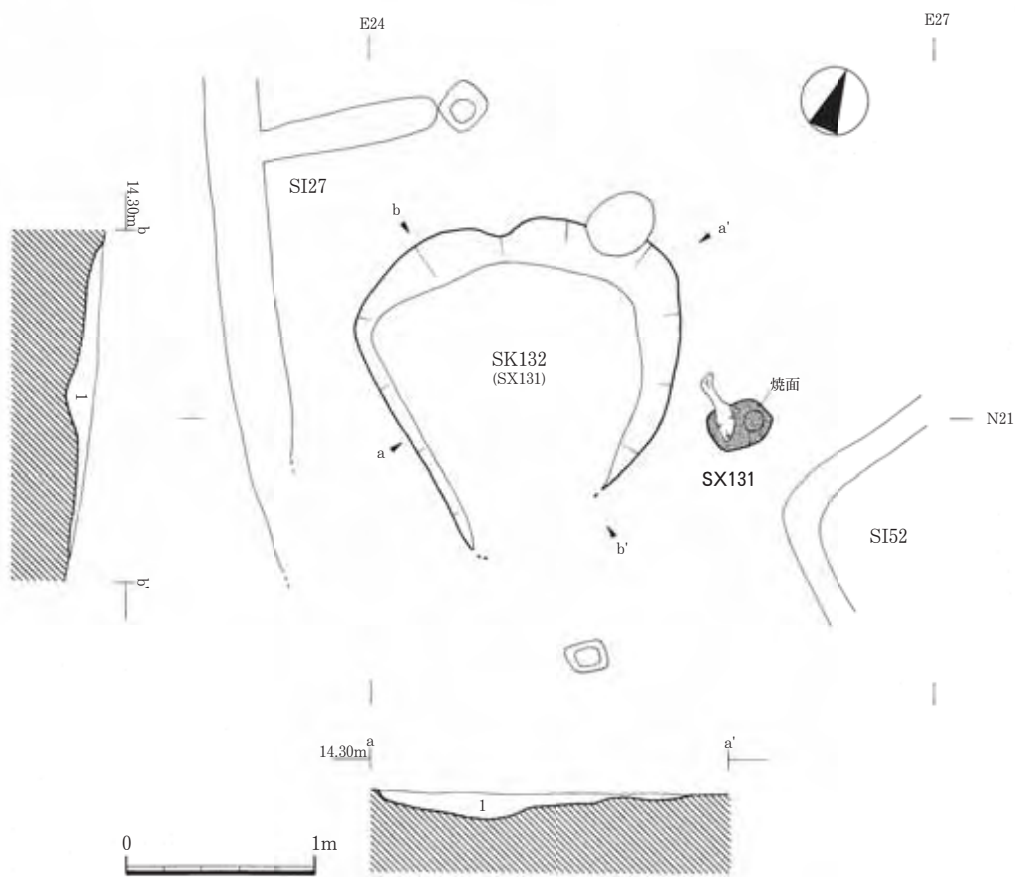
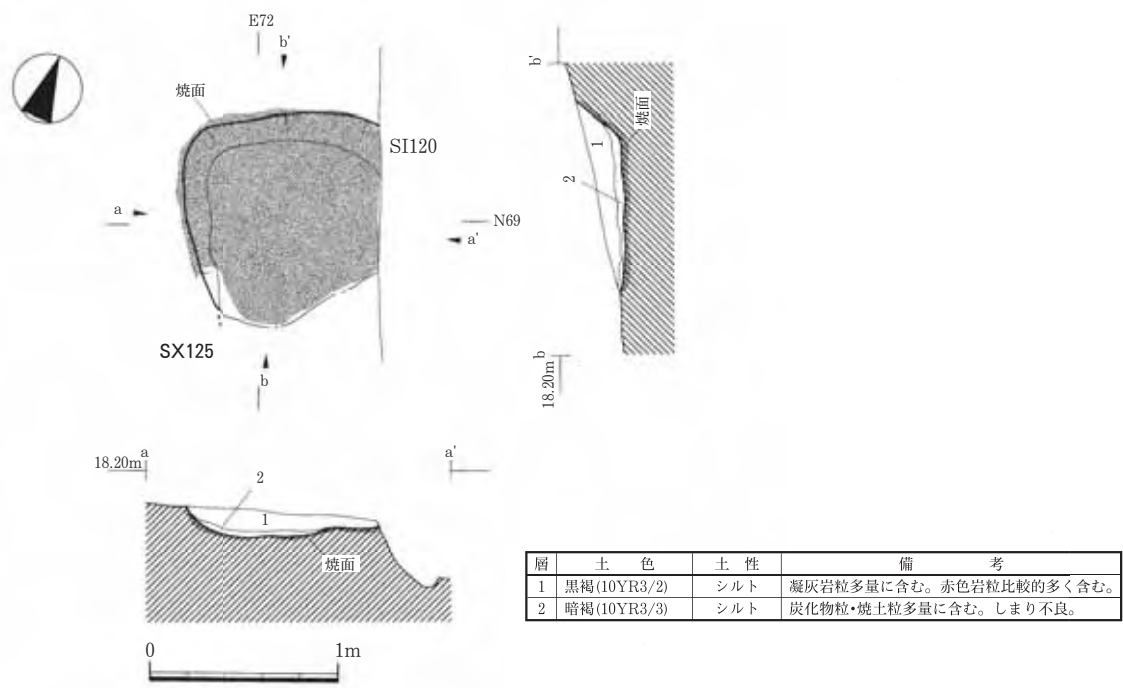
と重複し、これより新しい。

炉跡の痕跡は、長軸30cm・短軸22cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは2cmとごく浅い。壁は緩く立ち上がる。底面は焼けて赤変・硬化している。堆積土は炭化物・鉄滓を含む暗褐色シルトである。遺物は鉄滓が少量出土している。

SK132はやはり削平を受けており、残存は不良である。径170cmほどの不整円形状を呈する。深さは15cmで、断面形は浅い皿状を呈する。底面は凹凸がある。堆積土は炭化物・鉄滓を含む暗褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。遺物は土師器環・甕の小片、鉄滓が少量出土している。

【SX135鍛冶遺構】(第67図、図版26-5・6)

北区域南東部の南斜面上に位置する。前述のSX121・SX125西側の比較的近い地点にある。南側を



SK132

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|-----------|
| 1 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 炭化物・鉄滓含む。 |

第66図 SX125・SX131鍛冶遺構

削平されており、残存は不良である。竪穴状遺構（平面形は不明）の床面に炉跡1基と柱穴7個が検出されている。SI110・SI148住居跡と重複しており、これらよりも新しい。

竪穴状遺構は北側部分しか残っておらず、平面形は不明である。大きさは東西が5.7m、深さは北辺では20cmほどある。床面は南側へ緩やかに傾斜している。

竪穴状遺構のやや東寄りに炉跡（K1）が1基付設されている。楕円形を呈する。大きさは長軸50cm・短軸32cm、深さ17cmである。壁面が熱で赤変し、硬化している。底面や堆積土からは羽口や鉄滓が出土している。堆積土は炭化物粒や灰などが混じった黒褐色～暗褐色シルトである。

柱穴は7個検出されたが、規則的な配置ではない。P1は径32cmほどの不整な円形を呈し、深さは14cmである。P2は長軸40cm・短軸30cmの楕円形状を呈し、深さは15cmである。いずれも径10～12cmほどの円形の柱痕跡が認められる。

遺物は竪穴状遺構の床面や堆積土、炉跡内などから羽口（第91図-10～14）や鉄滓が出土している。また、竪穴状遺構の床面からロクロ調整の土師器坏・甕の破片、赤焼土器坏（第67図-1・2）、柱穴掘り方埋土から須恵器甕（第67図-4）、堆積土から土師器坏・鉢・甕、須恵器坏（第67図-3）・壺・甕などの破片が出土している。

C. 竪穴遺構

【SX35竪穴遺構】（第68図、図版27-1）

南区域東側の調査区壁際に位置する。大半は東側の調査区外へ延びている。一部は削平を受けている。SX39竪穴遺構と重複し、これよりも古い。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長形状を呈するものとみられる。規模は不明であるが、北西辺は5.4m以上ある。

〔方向〕西辺で見ると北で西へ約8°偏する。

〔壁〕やや斜めに立ち上がっている。壁高は西辺で床面から35cmである。

〔床面〕床面はほぼ平坦である。地山を床面としている。

〔柱穴〕壁沿いに3個（P1～P3）認められる。P1は径24cmの円形状を呈し、深さは21cmである。埋土は地山小ブロックを含むにふい黄褐色土である。P1では径16cmの円形の柱痕跡が確認された。他は確認できなかった。

〔周溝〕壁面に沿って巡っている。上幅10～34cm・深さ3cmで、炭化物混じりの暗褐色シルトが自然堆積している。この周溝と直交する小溝（D1）があり、上幅31cm・深さ5cmほどである。

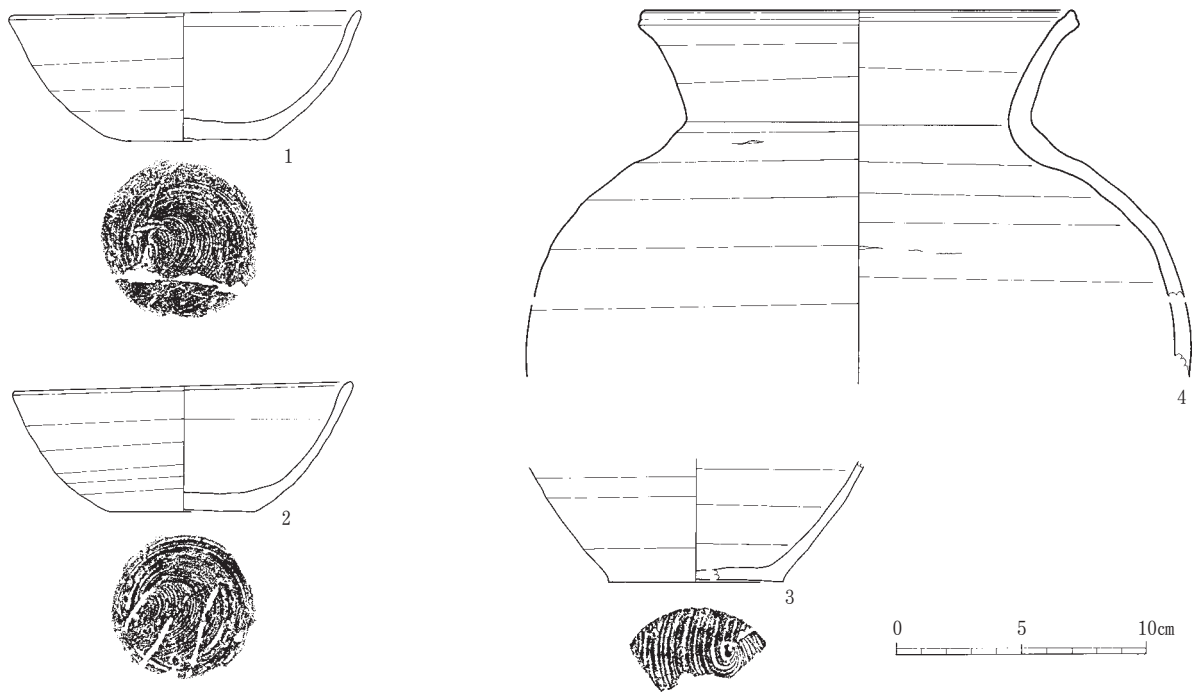
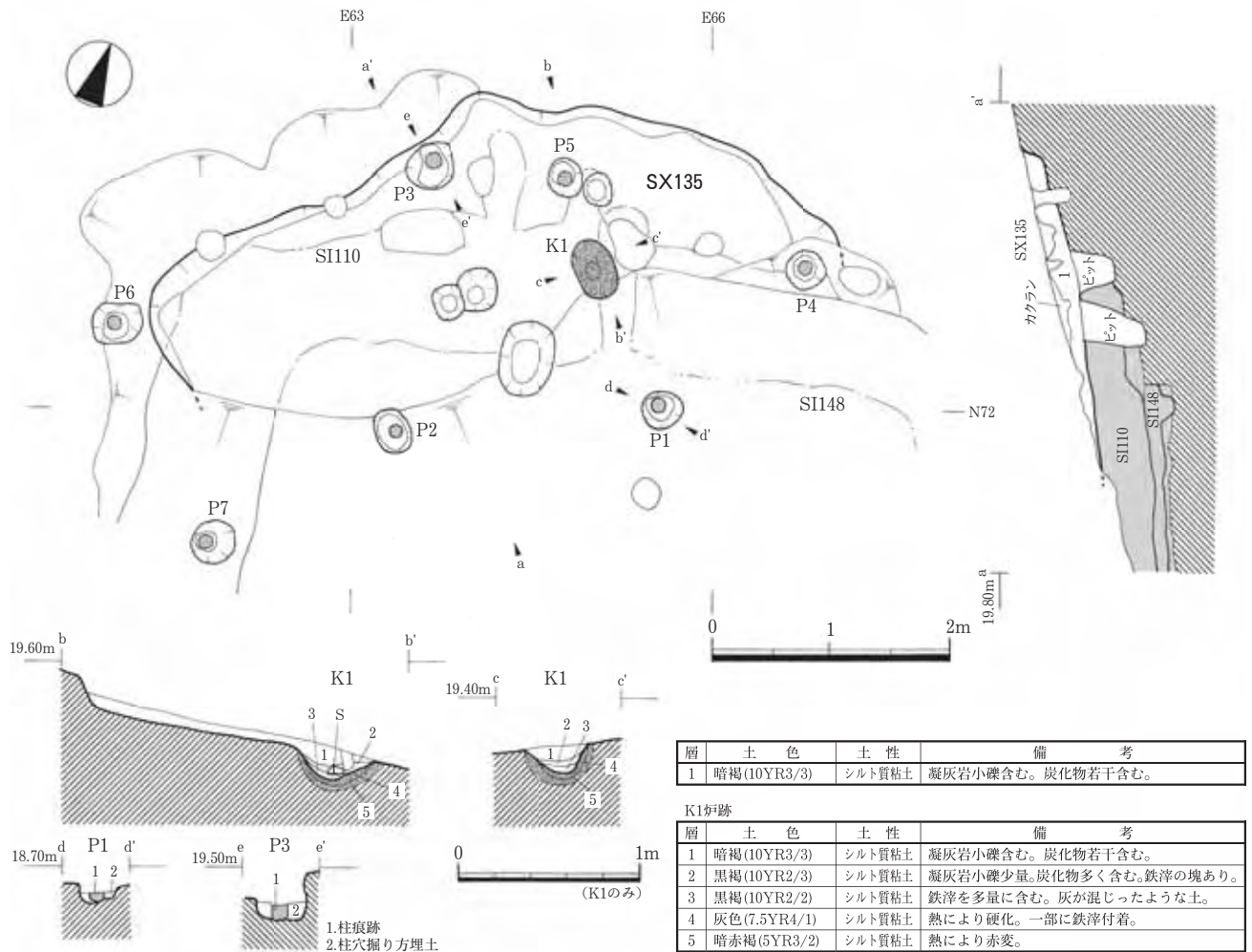
〔その他〕床面では浅い小土壇2基（K1・K2）、小ピット3個などを検出した。

〔堆積土〕凝灰岩粒・小礫や炭化物粒などを含むにふい黄褐色～褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕床面から非ロクロ調整の土師器甕破片、鉄滓などが少量出土したのみである。

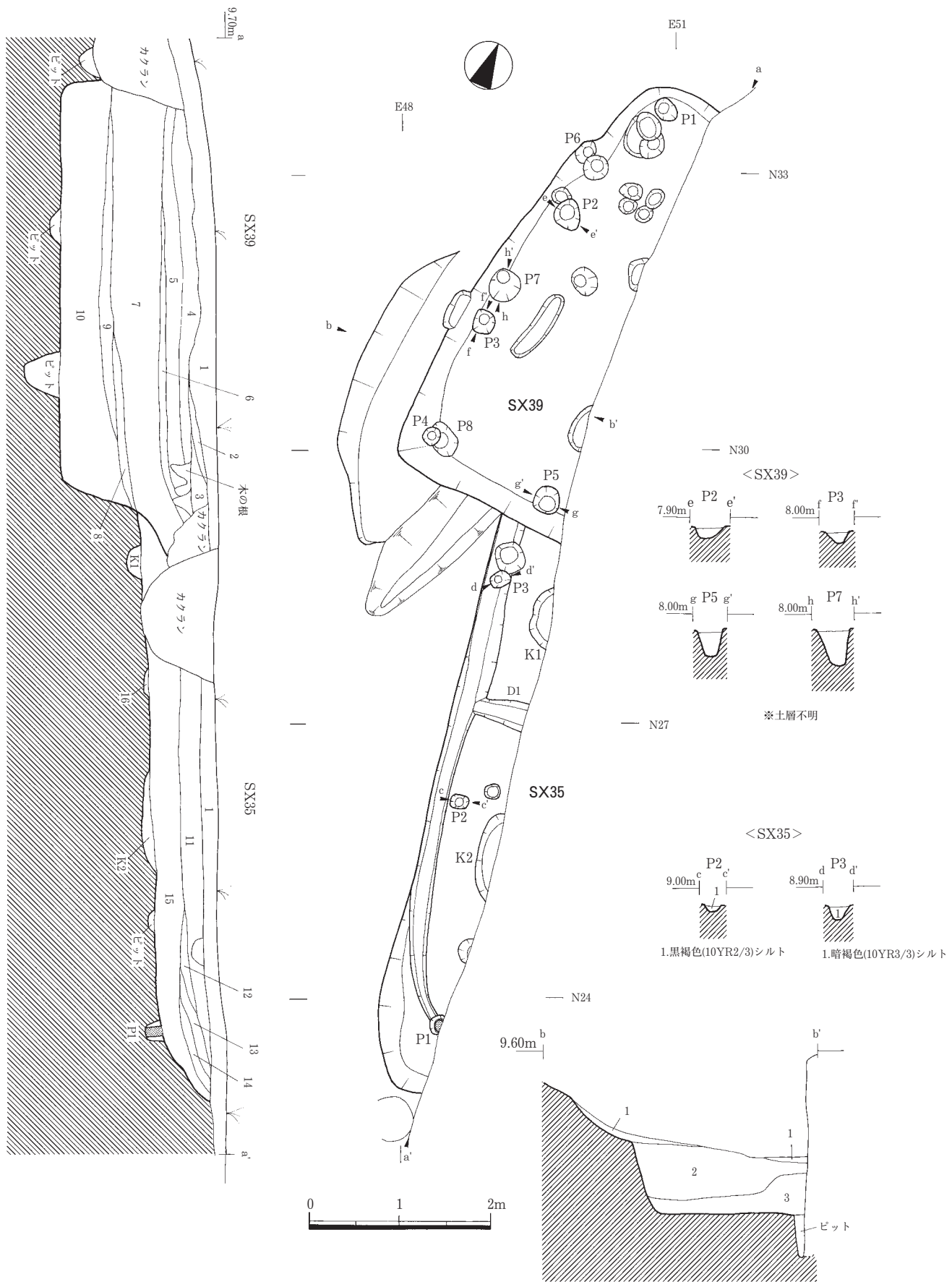
【SX37竪穴遺構】（第69図、図版27-2）

調査区中央にある谷の東斜面部に位置する。東側（斜面下側）は残存していない。北側は新しい倒木痕によって壊されている。



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|--------|-------|-----|---------|-------|-----|------------------|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 赤焼土器 坏 | Po.1 | 4/5 | 14.1 | 6.1 | 5.1 | 内外:ロクロナデ 底:回転糸切り | 49-3 | I-147 |
| 2 | 赤焼土器 坏 | Po.2 | 3/4 | 13.6 | 5.7 | 5.0 | 内外:ロクロナデ 底:回転糸切り | 49-4 | I-148 |
| 3 | 須恵器 坏 | 堆1層 | 1/6 | - | (7.0) | - | 内外:ロクロナデ 底:回転糸切り | | I-149 |
| 4 | 須恵器 甕 | ピット埋土 | 1/4 | (17.6) | - | - | 内外:ロクロナデ | 49-5 | I-150 |

第67図 SX135鍛冶遺構と出土土器



第68図 SX35・SX39竪穴遺構

SX35・SX39土層注記表

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 | 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|---------------------|----|----------------|-----|-----------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 表土。細根に富む。しまりなし。 | 9 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 人為。地山シルトブロック・木炭含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 人為。木炭・焼土・貝殻含む。 | 10 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 人為。地山シルトブロック含む。 |
| 3 | 褐(10YR4/4) | シルト | 人為。木炭・焼土をわずかに含む。 | 11 | 褐(10YR4/4) | シルト | 地山シルト粒含む。 |
| 4 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 人為。多くの木炭・焼土・陶磁器を含む。 | 12 | 褐(10YR4/6) | シルト | 地山シルト粒含む。 |
| 5 | 褐(10YR4/4) | シルト | 人為。木炭・焼土粒をわずかに含む。 | 13 | 褐(10YR4/4) | シルト | 地山シルト粒含む。ややしまりなし。 |
| 6 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 地山シルト粒多く含む。 | 14 | 褐(10YR4/6) | シルト | 地山シルト粒多く含む。木炭をわずかに含む。 |
| 7 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 地山シルト粒含む。 | 15 | 褐(10YR4/4) | シルト | 地山シルト粒多く含む。木炭をわずかに含む。 |
| 8 | 褐(10YR4/4) | シルト | 地山シルト粒含む。 | 16 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 地山シルト粒・木炭含む。 |

〔平面形・規模〕 方形状に地山を切り出して周溝を巡らしているものとみられるが、全体形や規模は不明である。ただ、南北方向は少なくとも6.5m以上の規模である。

〔方向〕 方向は西辺でみると北で西へ約17° 偏する。

〔壁〕 斜めに立ち上がっている。壁高は西辺で床面から約40cmである。

〔床面〕 床面はほぼ平坦である。にぶい黄褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。

〔柱穴〕 柱穴は壁際に沿って南北方向に3個(P1～P3) 検出した。総長は6.56mで、柱間寸法は北から4.16m・2.40mである。柱穴は楕円形を呈する。P3は他に比べて大きく、長軸44cm・短軸30cm、深さ10cmである。柱の抜き穴の可能性もある。P1およびP2は径20cmの円形で、深さは19～20cmである。柱痕跡はいずれも不明であった。

〔周溝〕 上幅14～26cm、深さ3～4cmで、断面形は皿状である。

〔堆積土〕 周溝および遺構内の堆積土は凝灰岩小礫を含む褐色～黒褐色シルトで、自然堆積である。

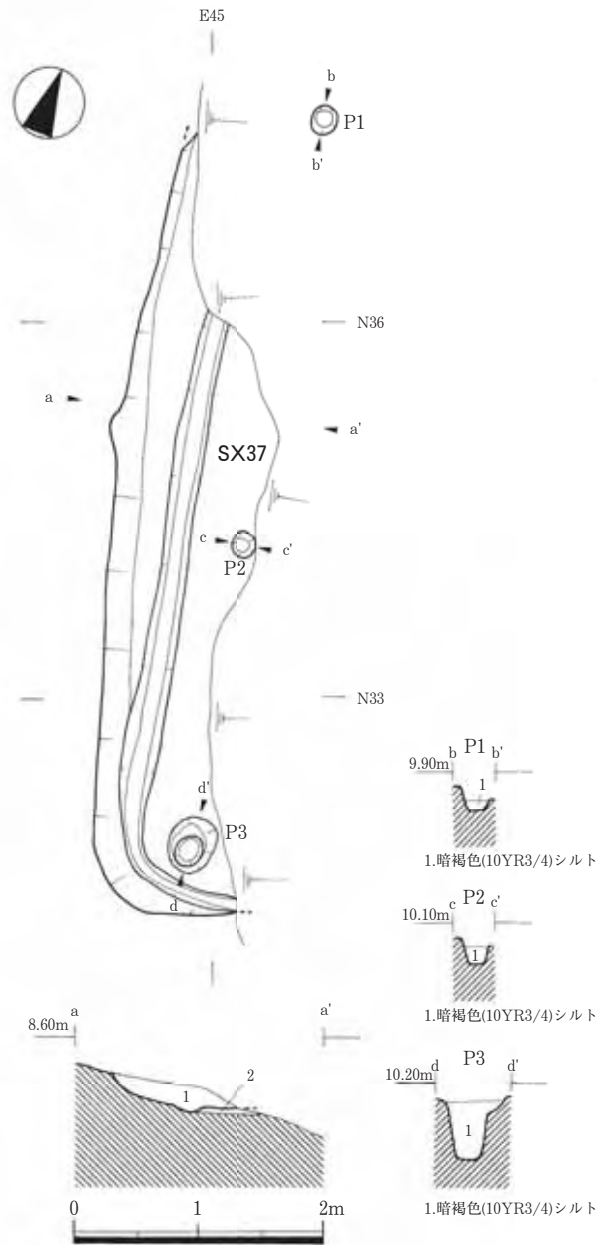
〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【SX39竪穴遺構】(第68図、図版27-3)

前述のSX35のすぐ北側にあり、SX35と同様、東側が調査区外へと延びている。SX35竪穴遺構と重複し、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕 全体的には長方形状を呈するものとみられる。規模は西辺では5.0mほどある。

〔方向〕 西辺でみると北で東へ約8° 偏する。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|----------|
| 1 | 黒褐(10YR2/2) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 2 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 掘り方埋土。 |

第69図 SX37竪穴遺構

〔壁〕 やや斜めに立ち上がっている。壁高は西辺では床面から85cmと深い。

〔床面〕 床面は地山で、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 柱穴とみられるピットが壁面にそって8個（P1～P8）、床面に8個ほど認められる。径25～30cmほどの円形あるいは不整円形状を呈するものが多い。P1は深さが10cm、P4は深さが39cmである。明瞭な柱痕跡を持つものはないが、配置や大きさからみて柱穴と考えられる（柱は抜かれている可能性がある）。また、壁際の柱穴には2時期（P1～P5、P6～P8）あるとみられる。

〔周溝〕 周溝は巡っていない。

〔堆積土〕 下層が地山ブロックを含む暗褐色シルトの人為的埋土、上層が地山小ブロックを含む暗褐色シルトの自然堆積土である。さらに上部には木炭・焼土・貝殻・陶磁器を含む人為堆積層が形成されていた。

〔出土遺物〕 床面や堆積土から鉄滓、堆積土から土師器や須恵器の小片が少量出土している。

【SX104竪穴遺構】（第70図、図版28-1）

中央付近の東へ下がる谷部の東斜面に位置する。東側部分を大きく削平されており、西辺部が残るのみである。他の遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕 平面形は正形状もしくは長形状になるものと思われる。西辺は約3.4mである。

〔方向〕 西辺で見ると北で西へ約2° 偏する。

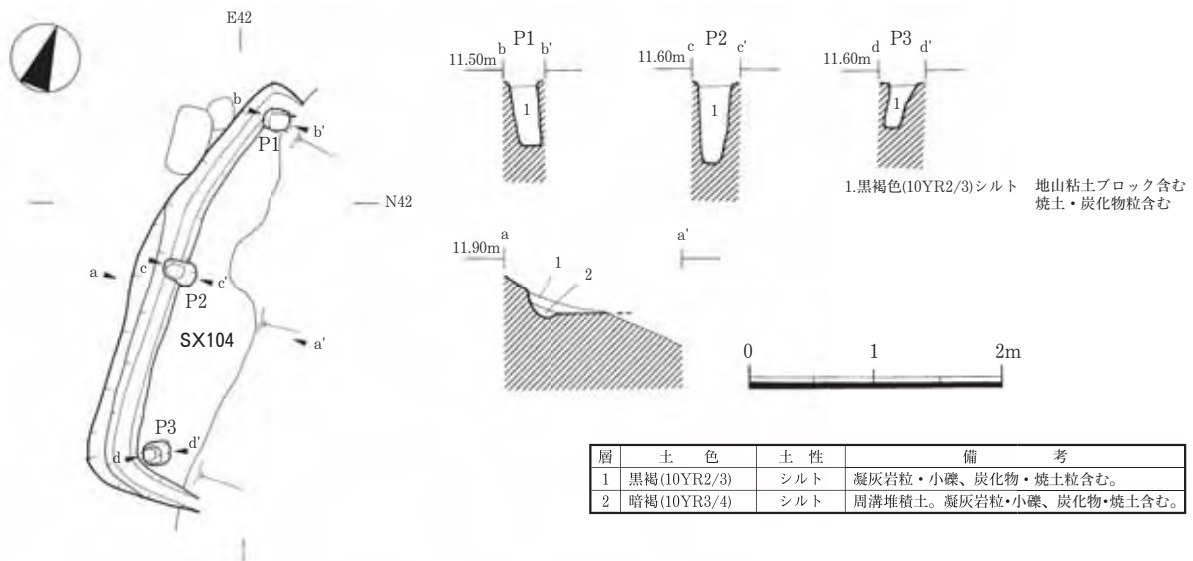
〔壁〕 やや斜めに立ち上がっている。壁高は北西隅で床面から20cmほどである。

〔床面〕 わずかに残る部分では地山を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 壁柱穴とみられる小ピット（P1～P3）が西辺中央部・北西隅・南西隅に認められる。径22～25cmほどの円形もしくは楕円形状を呈し、深さは25～42cmほどある。柱痕跡は確認できなかった。

〔周溝〕 残存する壁際には巡っている。幅20～22cm・深さ10cmで、断面形は浅いU字状である。堆積土は凝灰岩粒を含む暗褐色シルトで、自然堆積によるものである。

〔堆積土〕 凝灰岩小礫や炭化物粒などを含む黒褐色シルトである。



第70図 SX104竪穴遺構

〔出土遺物〕 堆積土から非ロクロ調整の土師器甕の小片がごく少量出土したのみである。

D. 竪穴状遺構・周溝状遺構

前述したように、これまで記載してきた竪穴住居跡・鍛冶遺構・竪穴遺構などの一部の可能性があるが、残存がより不良で性格が限定できない遺構などをここでまとめた。

【SX04】（第72図）

南区域南側の南斜面で検出した。周溝状の一部分とピット2個を検出したのみである。SI15住居跡と重複しており、これよりも古い。

周溝状の部分は上幅16～20cm、深さ9cmほどで、断面形はU字状を呈する。堆積土は凝灰岩粒を含む灰黄褐色シルトである。壁面が若干残っており、壁は溝底面から外側に向かってやや開いて立ちあがっている。壁高は北側では溝底面から20cmである。

ピットは2個（P1・P2）検出した。P2はSI15住居跡の床面下から検出している。ピットは2個とも長軸20cm・短軸16cmの方形を呈し、深さは12～19cmほどである。いずれも柱痕跡は認められなかった。堆積土はしまりのある褐色シルトで、径1cm以下の凝灰岩粒を含んでいる。

遺構内の堆積土は2層認められる。1層は凝灰岩粒や地山ブロックを含む灰黄褐色のシルトで、炭化物を少量含んでいる。2層は凝灰岩粒や地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色のシルトで壁の崩落土と考えられる。2層とも自然堆積とみられる。

遺物の出土はない。

【SX26】（第64図・第71図、図版25-1）

南区域中央東寄り、南東斜面に位置する。周溝状の溝跡とこれに伴う可能性があるピット3個が検出されている。SX25鍛冶遺構と重複し、これよりも古い。

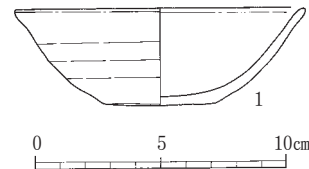
全体の平面形や規模は不明であるが、溝跡は少なくとも6.5mほどの長さがあり、北端は東へ屈曲している。上幅18～20cm、深さ5～11cm、断面形はU字状を呈する。溝跡内の堆積土は、凝灰岩粒・小礫や地山シルト小ブロックを多量に含む褐色シルトの人為的埋土である。

ピット3個（P1～P3）は、いずれも径22～24cmの円形で、深さは5～9cmである。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。柱痕跡は確認されていない。

溝跡の底面から赤焼土器坏（第71図-1）、土師器甕などの小片が少量出土している。

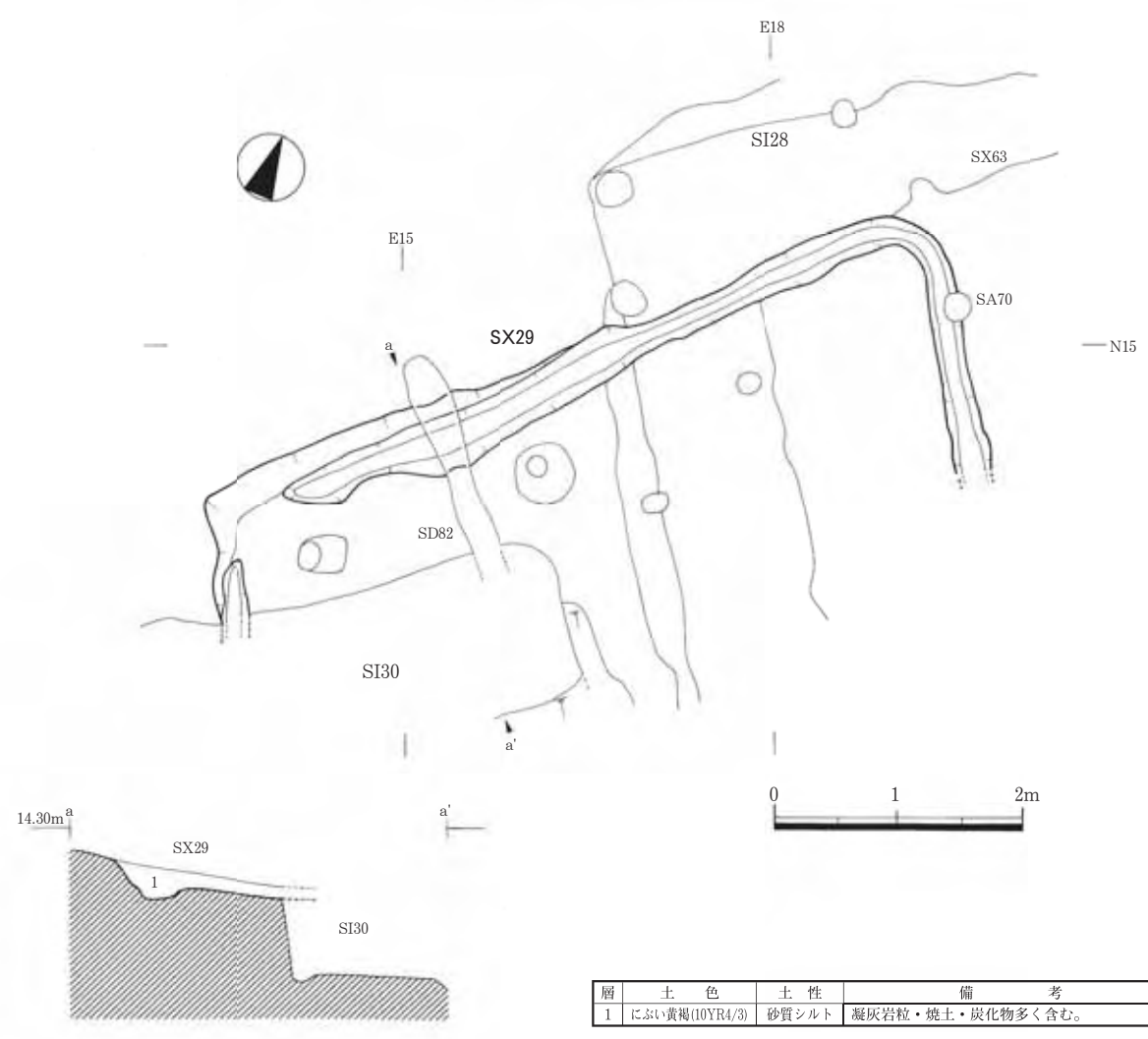
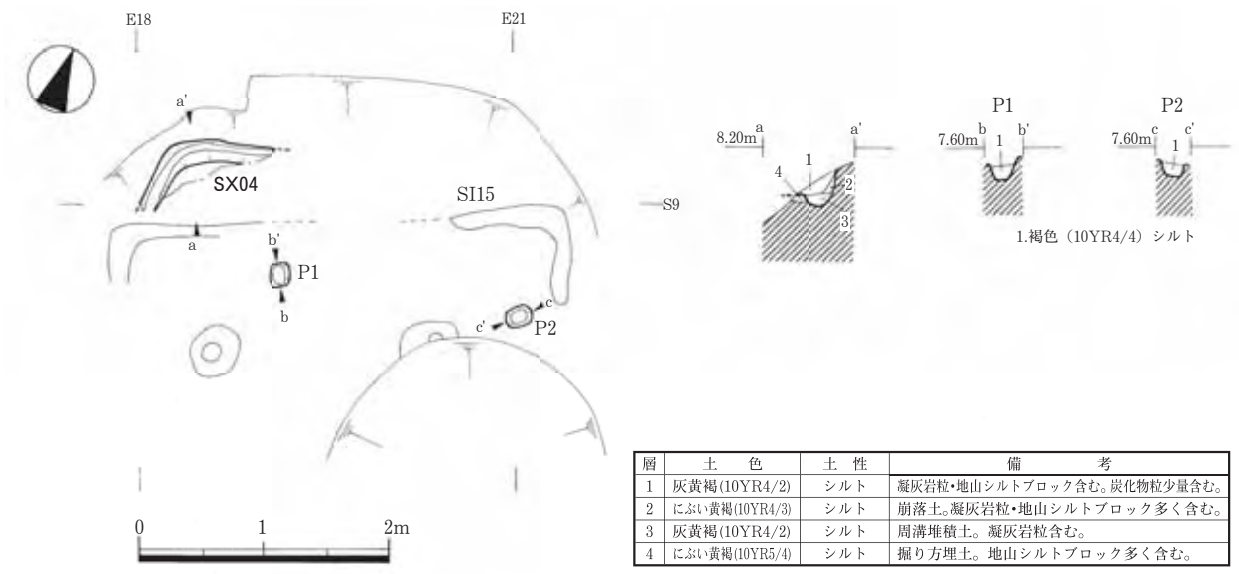
【SX29】（第72図）

南区域中央の南斜面上に位置する。周溝状の溝跡がコ字状に残存しており、床面とみられる平坦面が若干残っている。SA70柱穴列、SI28・SI30住居跡、SX63周溝状遺構、SD82溝跡と重複し、SA70、SD82よりも古く、SI28・SI30、SX63よりも新しい。



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | |
|------------------|--------|------|-----|------------|-------|-----|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 |
| 1 | 赤焼土器 坏 | 底面 | 1/3 | (11.6) | (4.6) | 3.9 |
| 特 徴 | | | | 写真図版 登 録 | | |
| 内外：ロクロナデ 底：回転糸切り | | | | 49-6 I-131 | | |

第71図 SX26竪穴状遺構出土土器



第72図 SX04・SX29竪穴状・周溝状遺構

規模は北辺が6.6m、東辺が2.2m以上である。方向は北辺でみると東で北へ約41° 偏する。

溝跡は上幅20~48cm、深さ3~9cmで、断面形は皿状を呈する。堆積土は凝灰岩小礫を多く含んだ黒褐色のシルト質粘土で、人為的なものである。壁は西側が地山を、東側がSI28住居跡の堆積土を壁としている。壁は西側部分では溝底面から斜めに立ち上がる。壁高は北壁西側で23cmである。

床面とみられる面はほぼ平坦であるが、標高の低い南に向かって緩やかに傾斜している。この面は西側が地山、東側がSI28住居堆積土である。柱穴などは検出されなかった。

遺構内の堆積土は1層で、凝灰岩小礫を多く含むにふい黄褐色砂質シルトの自然堆積土である。

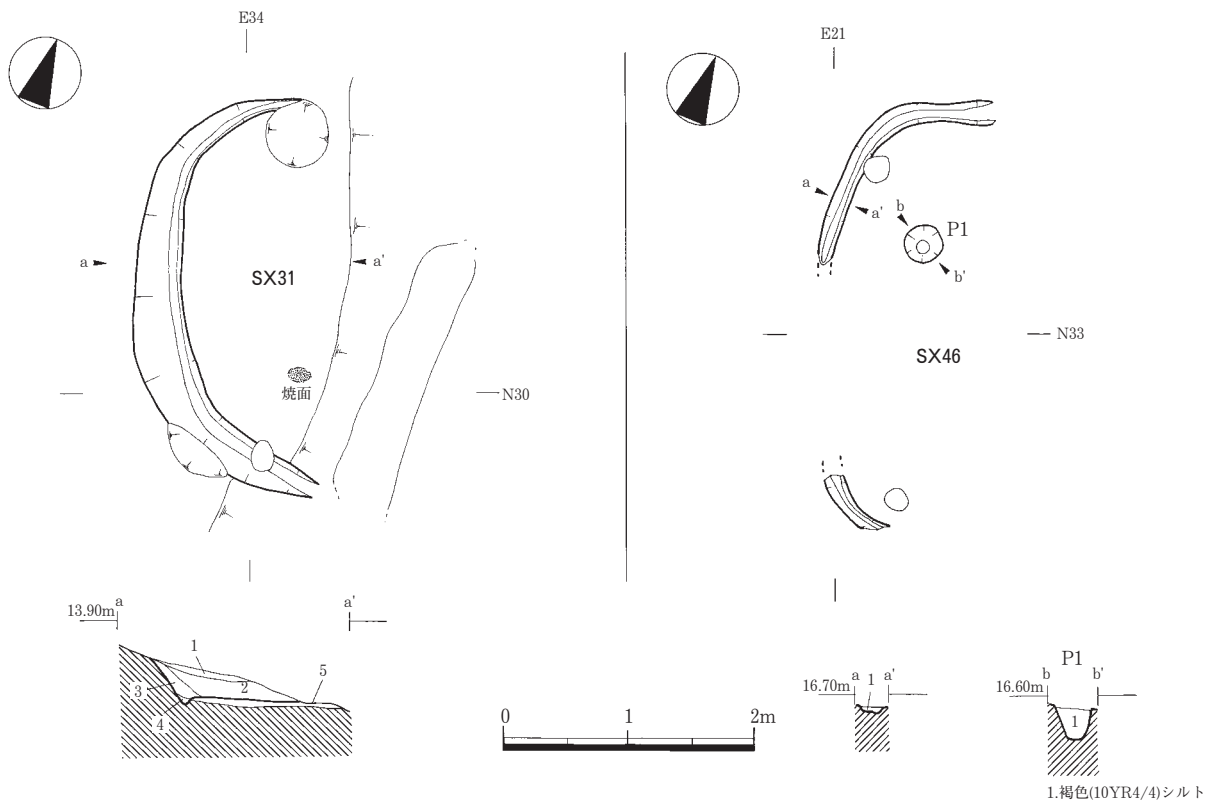
遺物は床面とみられる面や堆積土から土師器甕の破片が少量出土したのみである。

【SX31】(第73図、図版28-2)

南区域北東部の南東斜面で検出した。東半部が削平され、また木の根による攪乱を受けている。弧状の周溝状の溝跡および床面とみられる平坦面の一部、小さな焼面が残存する。

全体の平面形・規模は不明であるが、南北は3.0mほどの大きさである。

溝跡の上幅は10~44cm、深さは床面とみられる面から1~5cmで、断面形はほぼU字状を呈する。堆積土は凝灰岩粒を含んだにふい黄褐色シルトである。壁は崩落のためか斜めに立ち上がっている。壁高は残りのよい西壁で32cmである。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|---------------|
| 1 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 凝灰岩礫含む。しまりなし。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩礫含む。 |
| 3 | 黄褐(10YR5/6) | シルト | 凝灰岩礫がほとんど。 |
| 4 | にふい黄褐(10YR4/3) | シルト | 地山粒含む。 |
| 5 | 褐(10YR4/6) | シルト | 掘り方埋土。凝灰岩礫含む。 |

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|----------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 |

第73図 SX31・SX46竪穴状・周溝状遺構

床面とみられる面は、掘り方埋土と地山である。掘り方埋土は径3cm程度の凝灰岩礫がほとんどの褐色シルトで、厚さは約5cmほどである。南側には長軸18cm・短軸8cmの不整形を呈した焼面が見られる。

遺構内の堆積土は3層認められる。1層は凝灰岩粒を含むしまりのない黒褐色シルトで、上部からの流れ込みである。2層は1層よりややしまりのある暗褐色シルトである。3層は壁際にある凝灰岩礫がほとんどの黄褐色土で、壁面の崩落土とみられる。いずれも自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片、須恵器壺とみられる破片が出土している。なお、堆積土からは縄文土器片も数片出土している。

【SX46】（第73図、図版28-3）

南区域の北側中央部の南東斜面で検出した。北西隅と南西隅の周溝状の溝跡、小ピット1個などを検出した。

全体の平面形や規模などは不明である。周溝状の溝跡の北隅と南隅部分がわずかに残存している。溝跡は上幅14~22cm、深さ3~6cmほどである。断面形はほぼU字状を呈している。堆積土は径2cm以下の凝灰岩小礫を含むややしまりのある暗褐色シルトで、自然堆積である。

北西隅で確認されたピットは、径30cmほどの円形を呈している。深さは29cmである。埋土は径5cm以下の凝灰岩小礫を含む褐色シルトで、しまりが無い。柱痕跡は確認されなかった。

遺物は出土していない。

【SX58】（第74図、図版28-4）

南区域北西部の南斜面に位置する。大きく削平を受けており、周溝状の溝跡および床面とみられる平坦面のごく一部が残存している。位置的にはSK92と重複するが、新旧関係は不明である。

溝跡は残存する部分では長さ3.3m・上幅約20cm、深さ約2~5cmである。方向は北に対し東へ約35°偏する。堆積土は凝灰岩粒を多く含む黒褐色シルトの自然堆積土である。壁は西側で高さ10cmほどある。

床面とみられる平坦面はごくわずかに残存するが、この部分では凝灰岩小礫や地山シルトブロックを多く含む褐色シルトが厚さ2~3cmほど認められる。柱穴は確認できなかった。

遺構内の堆積土は1層認められた。凝灰岩小礫を多く含む暗褐色シルトの自然堆積土である。炭化物粒を若干含む。

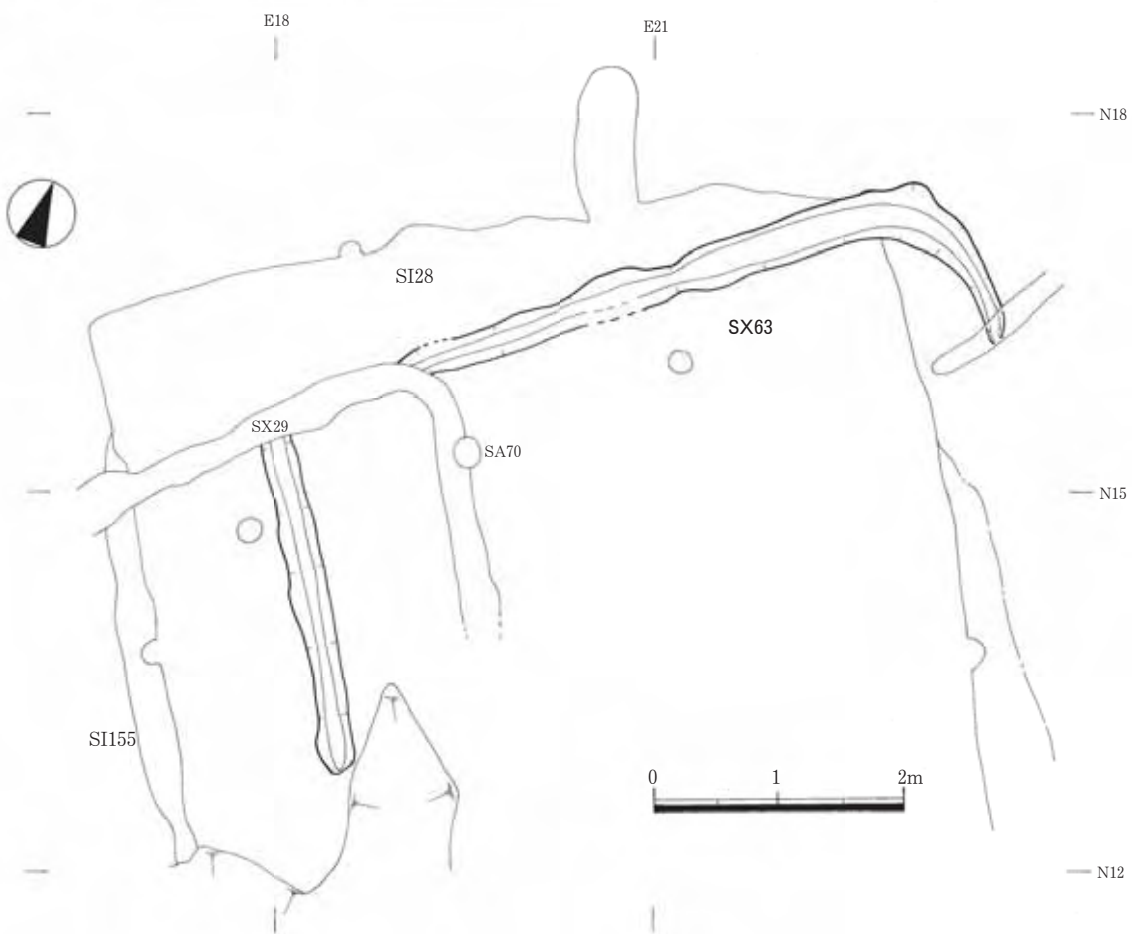
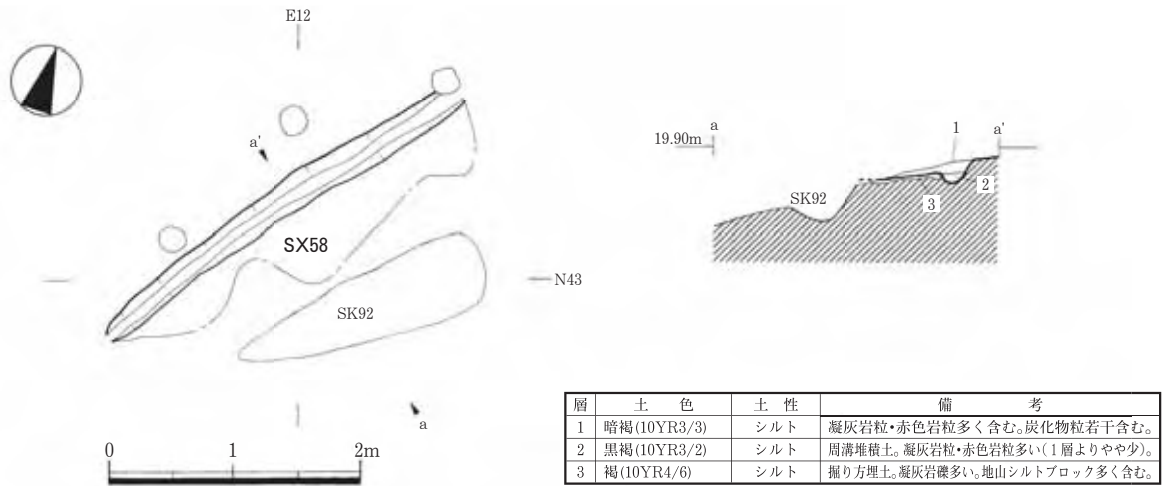
遺物は住居堆積土から非ロクロ調整の土師器甕の小破片が少量出土したのみである。

【SX63】（第74図）

南区域中央の南斜面に位置する。SX29と同様、周溝とみられる溝跡がコ字状に残存するものである。SA70柱穴列、SI28住居跡、SX29周溝状遺構と重複し、SA70・SX29よりも古く、SI28よりも新しい。

規模は北辺6.1m、西辺2.9m以上である。方向は北辺でみると東で北へ38°偏する。

溝跡は上幅23~35cm、深さ3~9cmで、断面形は皿状を呈する。堆積土は凝灰岩小礫を多く含んだ黒褐色のシルト質粘土で、人為的埋土である。壁は東辺が地山、北および西辺がSI28住居跡堆積土



第74図 SX58・SX63竪穴状・周溝状遺構

であり、東辺では周溝底面から斜めに立ち上がる。壁高は北東隅では18cmある。

床面とみられる平坦面は東側部分で残存している。標高の低い南に向かって緩やかに傾斜する。東側部分は地山を、西側はSI28住居跡堆積土である。柱穴などは検出されていない。

遺構内の堆積土は1層認められる。凝灰岩小礫を多く含む黒褐色粘土質シルトが自然堆積したものである。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕とみられる小片が少量出土したのみである。

【SX73】(第75図)

南区域東側の南東斜面に位置する。削平および攪乱が及んでおり、L字状に屈曲する周溝状の溝跡を検出したのみである。

溝跡は西辺では長さ4.2mほど残存する。上幅32cm～44cm、深さ6～21cmである。断面形は外側へやや開くU字状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は凝灰岩粒を多く含む褐色シルトの自然堆積土である。

遺物は堆積土から土師器甕などの小片がごく少量と縄文土器片が出土している。

【SX86】(第76図)

南区域の調査区西壁際に位置する。周溝と床面の一部とみられる痕跡を残すのみである。溝跡の南端は削平のために消失するが、北側は西へ屈曲し調査区外へと延びている。

溝跡は上幅8～15cm、深さ7～27cmである。堆積土は凝灰岩小礫や地山シルト小ブロックを多く含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

床面とみられる平坦面はごくわずかに残存するが、この部分は地山である。

遺構内の堆積土は北側で一部認められた。凝灰岩小礫を多く含む黒褐色シルトの自然堆積土である。炭化物粒を若干含む。

遺物は出土していない。

【SX93】(第76図)

南区域の調査区西壁際に位置する。前述のSX86のすぐ南側にあり、周溝状の溝跡、柱穴1個が残存している。溝跡の東辺南側は削平のために消失するが、北辺は西側の調査区外へと延びている。

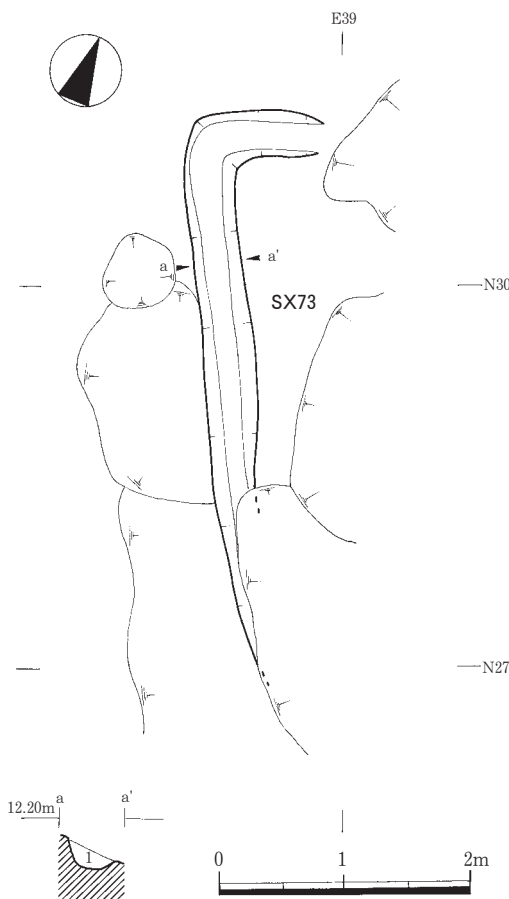
溝跡は上幅15～28cm、深さ4～8cmである。堆積土は凝灰岩小礫を含む暗褐色粘土質シルトの自然堆積土である。壁・床面とみられる面は残っていない。

柱穴は径38cmの円形を呈し、深さは28cmである。埋土は凝灰岩小礫を多く含むにふい黄褐色粘土質シルトである。径12cmほどの円形の柱痕跡が認められる。

遺物は溝堆積土から非ロクロ調整の土師器甕の小片が若干出土したのみである。

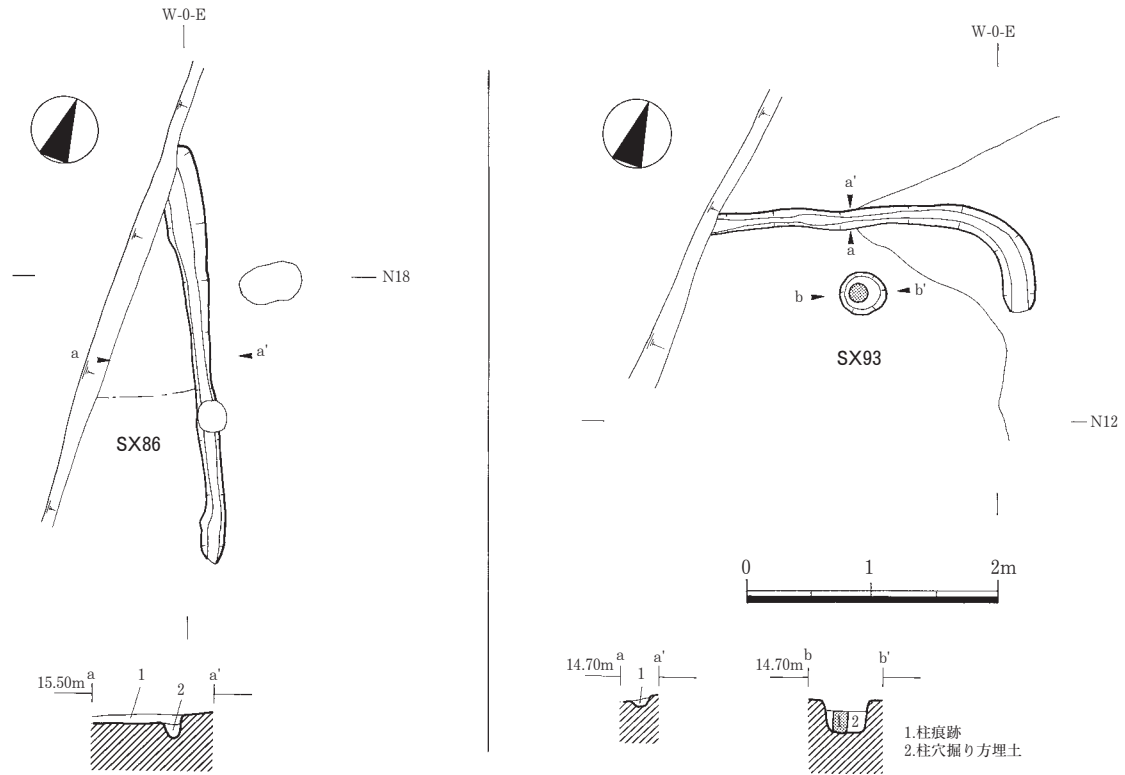
【SX94】(第77図、図版28-5)

調査区中央西側の南東斜面に位置する。西側部分を残すのみである。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|------------|-----|-----------|
| 1 | 褐(10YR4/4) | シルト | 凝灰岩粒多く含む。 |

第75図 SX73周溝状遺構



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|--------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR2/3) | 粘土質シルト | 地山シルト粒・凝灰岩小礫含む。炭化物少量含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 地山シルト小ブロック・凝灰岩小礫比較的多く含む。 |

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|----------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。 |

第76図 SX86・SX93竪穴状・周溝状遺構

平面形はやや不整な方形状を呈するとみられる。規模は東西2.8m、南北1.0m以上である。方向は西辺でみると北で東へ約30° 偏する。

壁はやや不整で斜めに立ち上がる。西壁では高さ15cmほど残っている。周溝は巡っていない。

床面とみられる底面はやや凹凸がある。柱穴は検出されていない。ただ、北東隅には長軸60cm・短軸26cm、深さ10cmほどの浅い土壌がある。

堆積土は1層認められ、凝灰岩小礫を多く含む黒褐色シルトの自然堆積土である。

遺物は底面から非ロクロ調整の土師器坏・甕、また、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕などの小片が少量出土している。

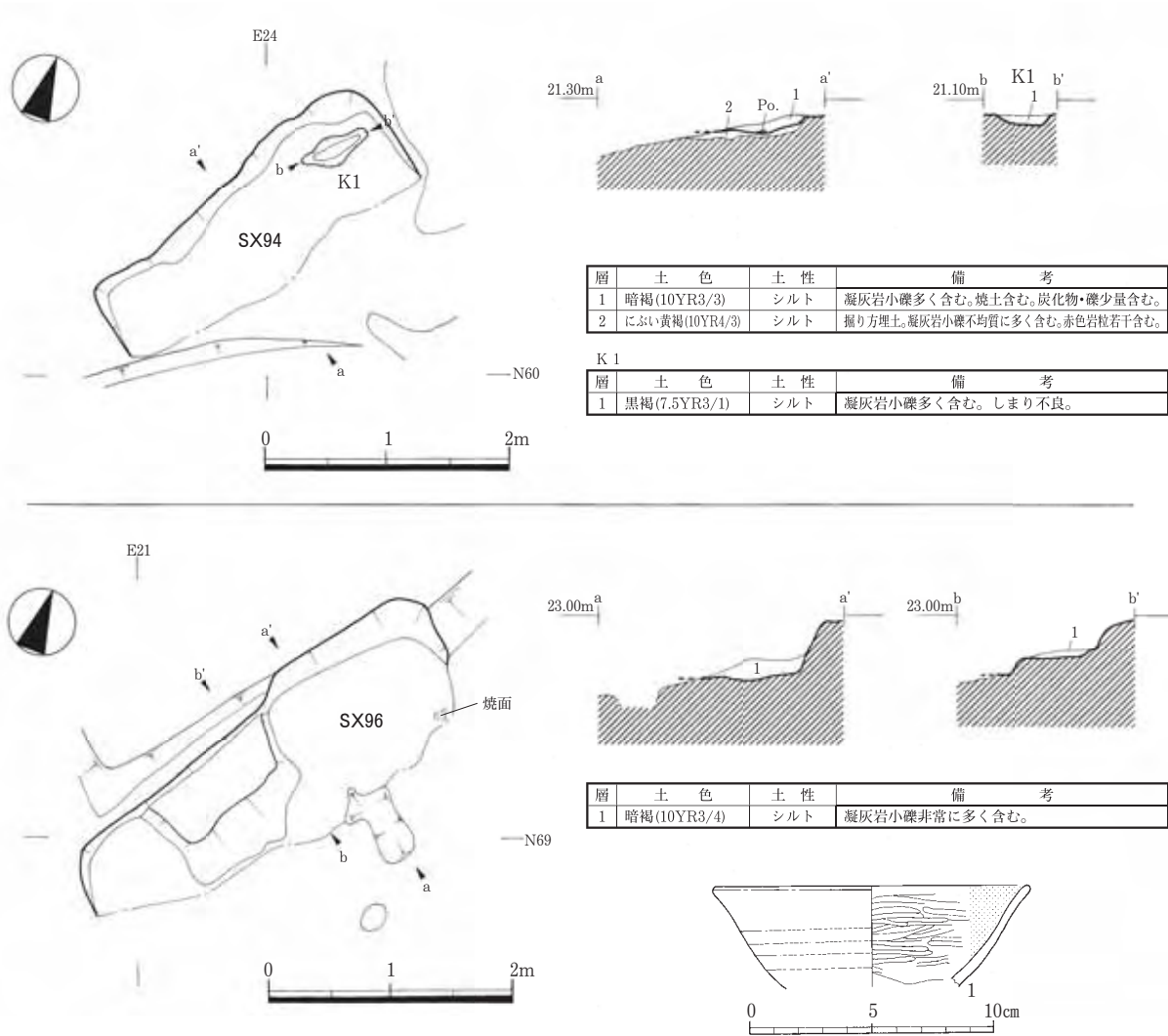
【SX96】(第77図、図版28-6)

調査区中央西端の丘陵頂部付近に位置する。南東側は削平されている。北西辺の中央部は床面とみられる底面から一段高い棚状になっている。

規模は南北が3.5mほどある。方向は北西辺でみると北で東へ約30° 偏する。

壁は南西側から棚状部分にかけてはほぼ垂直に、棚状部分から北東側では底面から外側に向かって斜めに立ちあがる。壁高は棚状部分の南西側で17cm、棚状部分で10cm、棚状部分の北東側で45cmある。周溝は認められない。

底面は地山で、やや凹凸がみられる。北辺の棚状部分も地山であり、両側は底面からやや急に立ち上がるが、南辺の立ち上がりは斜めである。長さ1.2m・幅40~50cmほどで、底面からの高さは8~



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|------|-----|---------|----|----|----------------------|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 環 | 底面 | 1/8 | 13.0 | - | - | 外:ロクロナデ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 49-7 | I-74 |

第77図 SX94・SX96竪穴状遺構と出土土器

17cmである。

柱穴は検出されていない。北東辺側には焼面が痕跡的に残っている。

堆積土は1層認められる。凝灰岩小礫を多く含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

遺物は底面からロクロ調整の土師器環（第77図-1）、堆積土からはロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の破片が少量出土している。

【SX97】（第78図、図版28-7）

南区域南西端の南斜面に位置する。北西隅部分がごく一部残存しているのみである。位置的にSX98竪穴状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。

壁は斜めに立ち上がる。壁高は北西隅で28cmほどある。西辺では周溝の一部とみられる浅い小溝が壁際に沿って認められる。床面とみられる底面はわずかに残る部分では地山であり、ほぼ平坦である。柱穴は確認されていない。

遺構内の堆積土は凝灰岩小礫や地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕破片が少数と縄文土器・石器が出土している。

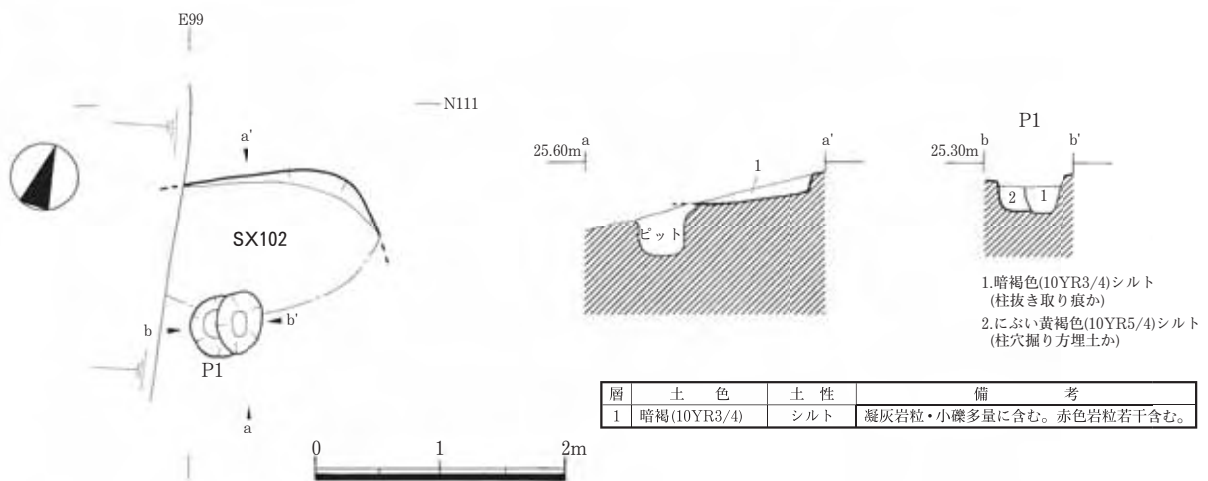
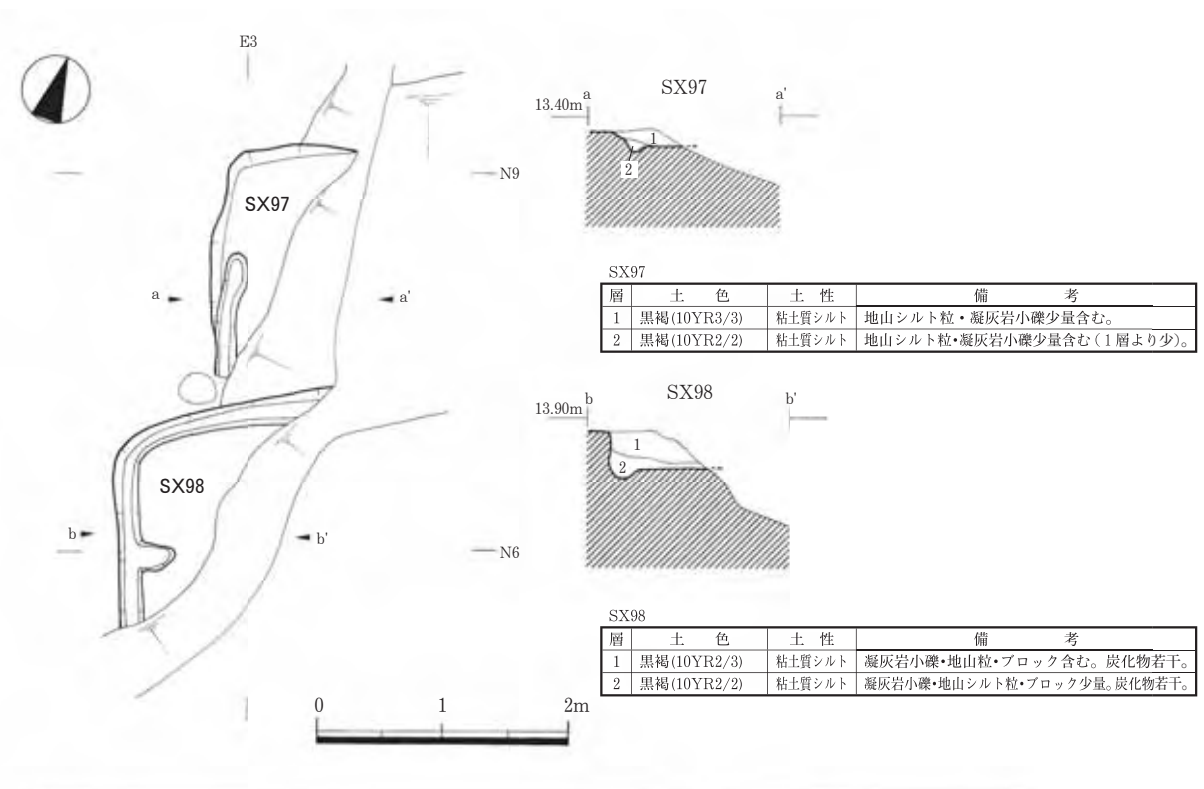
【SX98】（第78図、図版28-8）

前述のSX97竪穴状遺構のすぐ南側に位置する。SX97と同様、北西隅部分のごく一部残存しているのみである。SX97との新旧関係は不明である。

壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北西隅で42cmほどある。床面とみられる底面はわずかに残る部分では地山であり、ほぼ平坦である。柱穴は確認されていない。周溝の一部とみられる浅い小溝（西辺では突出部あり）が壁際に沿って認められる。幅20~25cm、深さ5~8cmである。

遺構内の堆積土は凝灰岩小礫や地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器杯・甑・甕などの破片が少量と縄文土器片が出土してい



第78図 SX97・SX98・SX102竪穴状遺構

る。

【SX102】（第78図）

北区域北端の丘陵頂部付近に位置する。北東隅部分がごく一部残存しているのみである。

壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北辺側で15cmほどある。周溝状の溝跡は確認されていない。床面とみられる底面はわずかに残る部分では地山であり、ほぼ平坦である。柱穴は1個（P1）検出された。径40cmほどの円形を呈するとみられる。ただ、柱の抜き取り痕とみられるピットがあり、柱痕跡は認められなかった。柱穴掘り方埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含むにぶい黄褐色シルトである。

堆積土は1層認められる。凝灰岩粒・小礫を多く含む黄褐色シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から土師器甕、須恵器坏の小片が数点出土したにすぎない。

【SX115】（第79図）

北区域の南東側、中央の谷に面した南斜面に位置する。北側部分が残存するのみである。SX116・SX134周溝状遺構と重複し、これらよりも新しい。

規模は東西が約3.0mほどである。北壁はやや斜めに立ち上がる。壁高は北辺側で25～34cmある。壁際に周溝状の溝は巡っていない。床面とみられる底面は西側が地山、東側は掘り方埋土であるが、東側は西側に比べて一段（4～6cm）低くなっている。底面上では径50cm・深さ10cmほどの浅い小土壙が検出されたが、柱穴は検出されていない。

遺物は底面から非ロクロ調整で頸部に段をもつ土師器甕（第79図－1）、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕などの小片が少量出土している。

【SX116】（第79図）

北区域の南東側、中央の谷に面した南斜面に位置する。前述のSX115のすぐ東側にあり、北辺側の周溝の一部とみられる溝跡が残存するのみである。溝跡の東端は調査区外へと延び、西端はSX115と重複して不明になる。SX134とも重複し、これよりも古い。

長さは少なくとも5.5mほどになる。上幅30～45cm・深さ16～28cm、断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は凝灰岩粒や炭化物粒を含む黒褐色～暗褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕などの小片が少量出土している。

【SX117】（第80図、図版29－1）

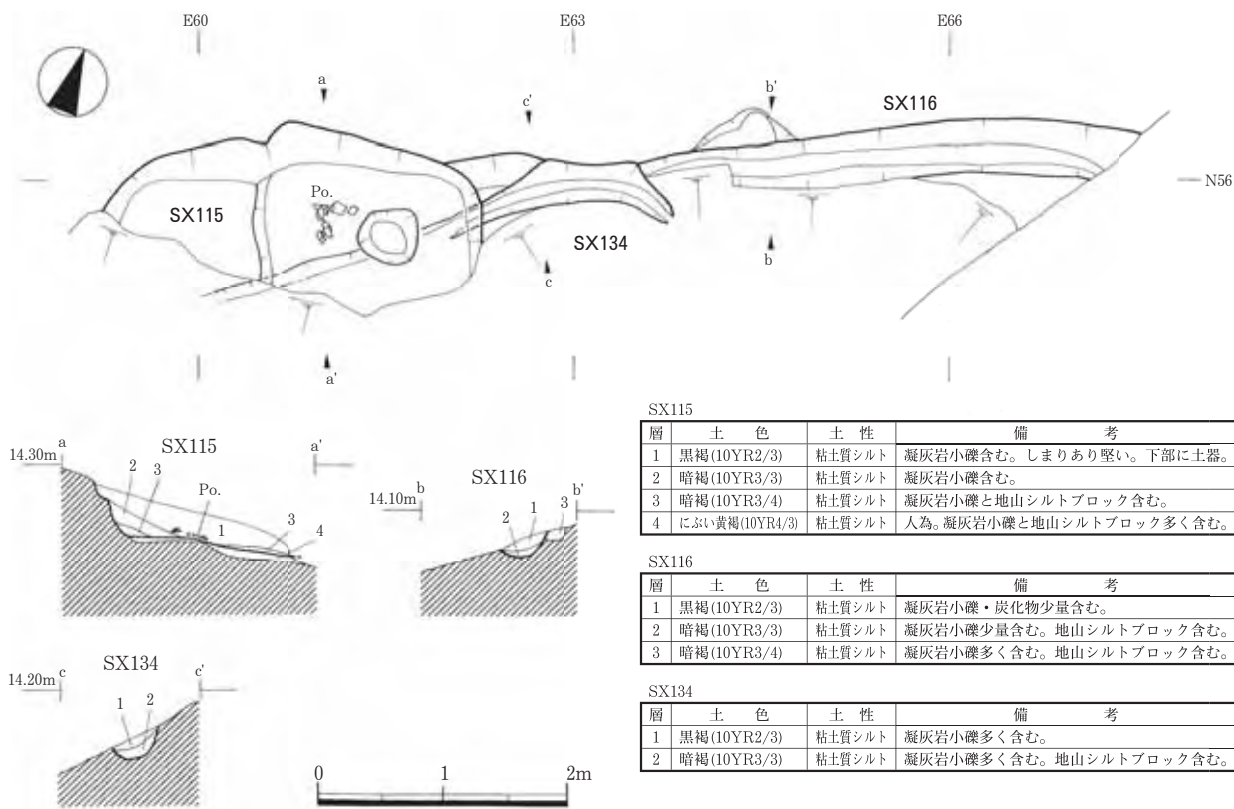
北区域南東端、中央の谷に面した南斜面に位置する。平場状の段とその面に周溝とみられる溝跡（北西隅）の一部が残存する。SK129土壙と重複し、これよりも古い。

平場状の段は地山でほぼ平坦である。壁は斜めに立ち上がり、壁高は北側で約40cmある。周溝とみられる溝跡は上幅22～28cm・深さ6～10cmで、断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む暗褐色粘土質シルトで、自然堆積である。柱穴などは確認されていない。

遺構堆積土は7層に分けられる。1～5層は黒褐色粘土質シルト、6・7層は暗褐色粘土質シルトで、いずれも凝灰岩粒・小礫を含む。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、丸玉（第91図－6）などが出土している。

【SX118】（第80図、図版29－1・2）



SX115

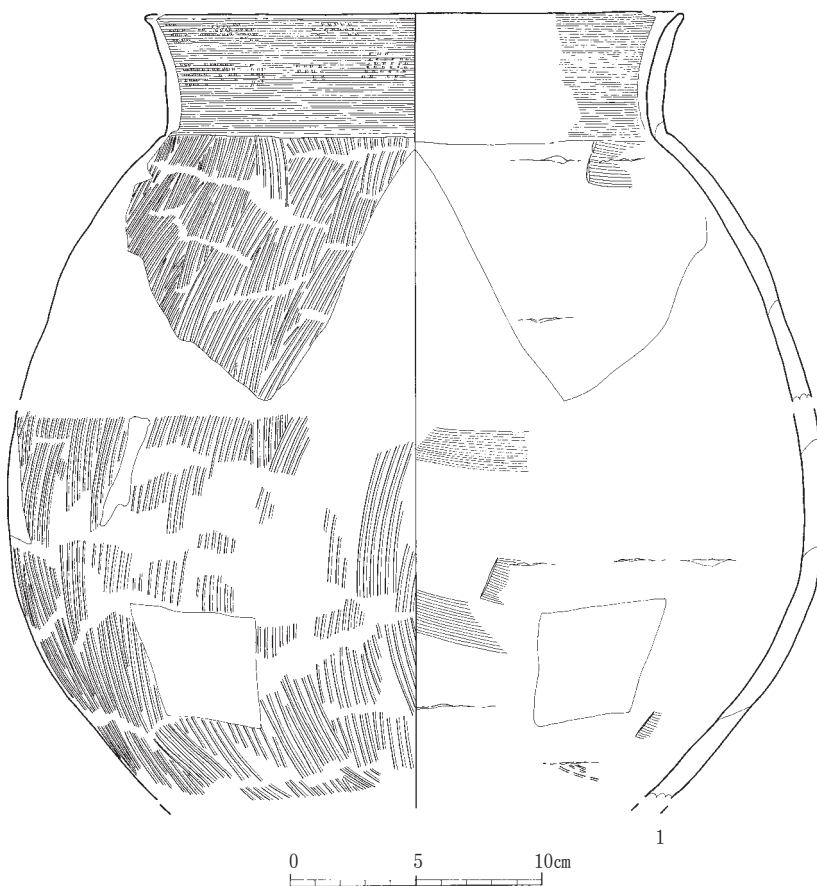
| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|--------|-------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR2/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。しまりあり堅い。下部に土器。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 3 | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫と地山シルトブロック含む。 |
| 4 | にぶい黄褐(10YR4/3) | 粘土質シルト | 人為。凝灰岩小礫と地山シルトブロック多く含む。 |

SX116

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR2/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫・炭化物少量含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫少量含む。地山シルトブロック含む。 |
| 3 | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫多く含む。地山シルトブロック含む。 |

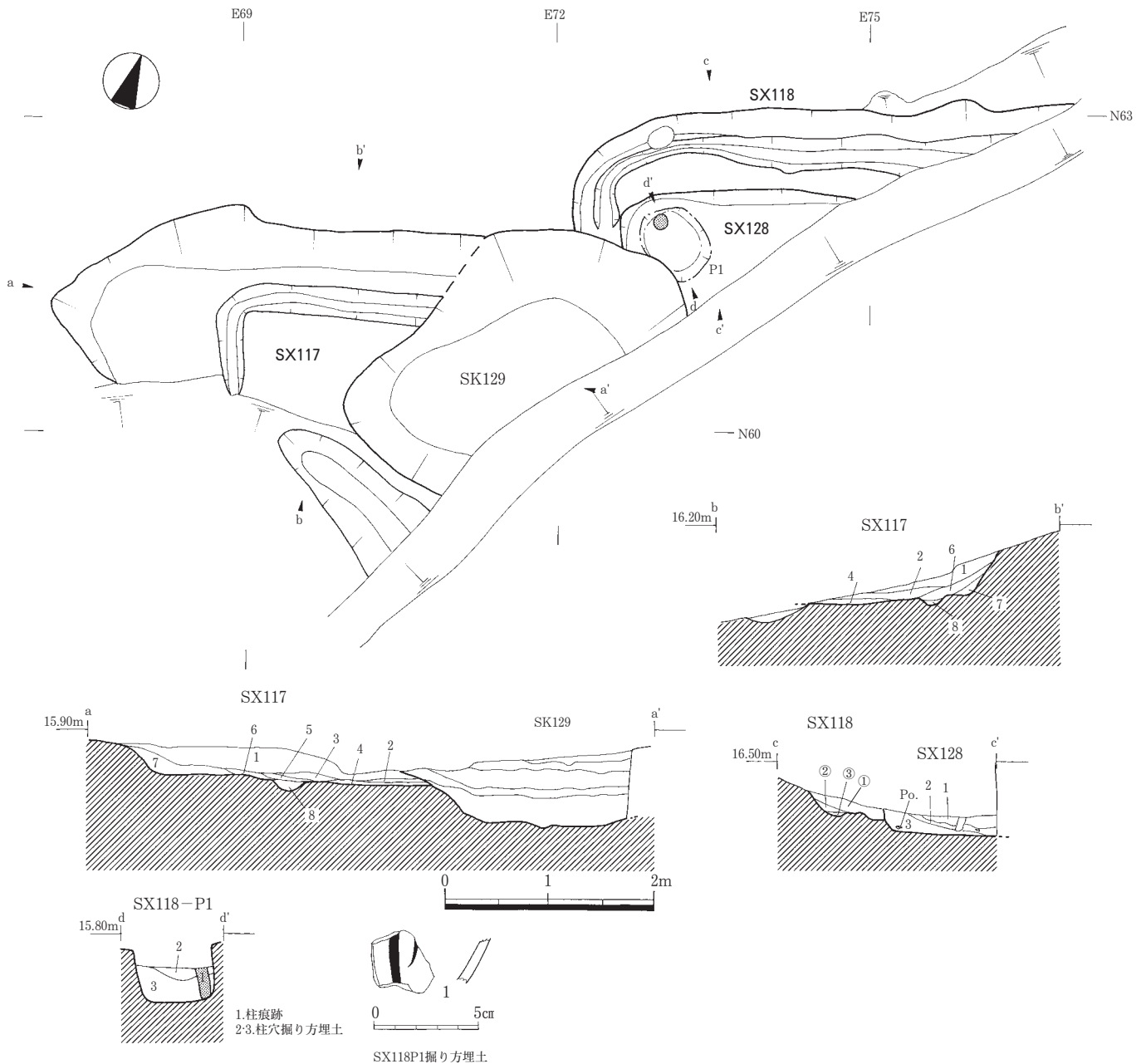
SX134

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR2/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫多く含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫多く含む。地山シルトブロック含む。 |



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|-------------|-----|---------|----|----|---|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 甕 | SX115底面+堆2層 | 1/4 | (21.6) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ(ナデ) 底部にハケメ | 51-1 | I-101 |

第79図 SX115縦穴状遺構・SX116・SX134周溝状遺構と出土土器



SX118・SX128

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|---------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 地山粒含む。焼土少量含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 3 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 凝灰岩礫多く含む。 |
| ① | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 凝灰岩礫・地山粒多く含む。焼土含む。 |
| ② | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 地山粒少量含む(5層より少なく小さい)。焼土含む。 |
| ③ | 暗褐(10YR3/3) | シルト | ②に似るが、地山シルト粒含まず。 |

SX117

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|----------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫多く含む。部分的に焼土ブロック含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 3 | 黒褐(10YR2/2) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 4 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含むが3層より少。 |
| 5 | 黒褐(10YR2/2) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫と炭化物含む。 |
| 6 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫少量含む。 |
| 7 | 暗褐(10YR3/4) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。炭化物若干含む。 |
| 8 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。炭化物・地山シルトブロック若干含む。 |

第80図 SX117・SX118・SX128竪穴状遺構と出土土器

北区域南東端、中央の谷に面した南斜面に位置する。前述のSX117の東隣にある。北西隅部分のみの検出であり、東側は調査区外へと延びる。SK129土壌、SX128竪穴状遺構と重複し、これらよりも古い。

壁は斜めに立ち上がる。壁高は北側で約20cmである。壁際には上幅20~30cm、深さ3~6cmほどの周溝状の溝が巡っている。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は暗褐色シルトである。

床面とみられる底面は地山で、ほぼ平坦である。北西隅部分では柱穴が1個（P1）検出されている。柱穴掘り方は長軸80cm・短軸58cmほどの楕円形状で、深さは50cmほどである。掘り方の北西寄りに径12cmほどの円形状の柱痕跡が認められる。

遺構堆積土は2層認められる。1層・2層とも凝灰岩粒・小礫や焼土粒を含む暗褐色シルトで、自然堆積である。

遺物はP1掘り方埋土から墨書のある土師器坏の破片（第80図－1）、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕などの小片が少量出土している。

【SX128】（第80図、図版29－1・2）

北区域南東端、前述のSX118と同位置にある。北西隅部分のみの検出で、東側は調査区外へと延びる。SK129土壇、SX118竪穴状遺構と重複し、SK129より古く、SX118よりも新しい。

壁は地山とSX118堆積土で、斜めに立ち上がる。壁高は北側で約22cmである。壁際には周溝状の溝は巡っていない。

床面とみられる底面は地山で、ほぼ平坦である。柱穴などは検出されていない。

遺構堆積土は3層認められる。1層は黒褐色シルト、2層は暗褐色シルト、3層はにぶい黄褐色シルトで、いずれも凝灰岩粒・小礫を含む自然堆積土である。

遺物は底面からミニチュア土器（第91図－4）、堆積土からロクロ調整の土師器坏・甕などの小片が少量出土している。

【SX134】（第79図）

北区域の南東側、中央の谷に面した南斜面に位置する。前述のSX115・SX116と同位置にある。北辺の周溝の一部とみられる溝跡が残存するのみである。SX115より古く、SX116よりも新しい。

全体で3.5mほど残存するが、西端はSX115との重複と削平のために消失し、東端部は屈曲してその先が削平で不明になっている。上幅20～25cm、深さ20cm、断面形はU字形を呈する。堆積土は凝灰岩粒を含む黒褐色～暗褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕などの小片が少量出土している。

【SX136】（第81図、図版29－3）

北区域の南東側、中央の谷に面した南斜面に位置する。前述のSX115・SX116・SX134の西側にある。北西隅の周溝の一部とみられる溝跡などが残存するのみである。

全体では長さ3.0mほど残っているが、西側は南へ屈曲して消失し、東側も削平のために不明になる。壁面がわずかに残っており、やや斜めに立ち上がる。壁高は北側で約40cmある。壁際の周溝状の溝跡は上幅20～25cm、深さ20cm、断面形はU字形を呈する。堆積土は凝灰岩粒を含む黒褐色粘土質シルトで、自然堆積である。この周溝の内側にも小溝が検出されている。

遺物は出土していない。

【SX139】（第81図）

南区域中央付近の南斜面に位置する。周溝状の溝跡が一部残存する。SD32溝跡と重複し、これよりも古い。SX142との新旧関係は不明である。

溝跡は南北の長さが少なくとも3.6m以上になる。上幅20cm、深さ10～12cmで、断面形はほぼU字状を呈する。方向は北西辺でみると北で東へ約30° 偏する。堆積土は凝灰岩小礫や焼土粒を含む褐色シルトで、自然堆積である。この溝跡に伴うとみられる柱穴などは検出されていない。

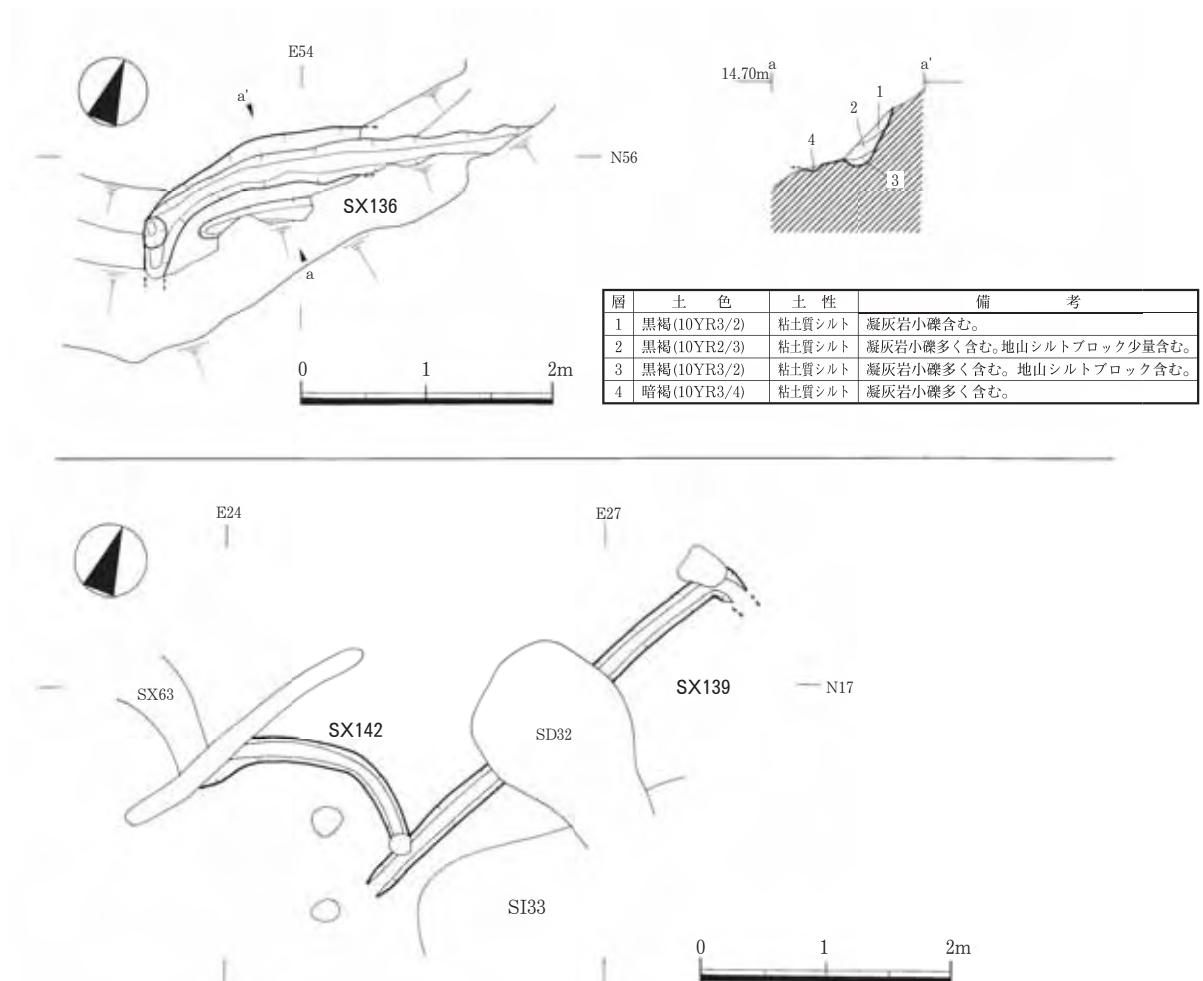
遺物は出土していない。

【SX142】(第81図)

南区域中央付近の南斜面、前述のSX139の西側に位置する。SX139と同様、周溝状の溝跡の一部が残存する。SX63・SX139との新旧関係は不明である。

溝跡は北辺1.1m、東辺0.8mのみ残存する。上幅20cmで、断面形はほぼU字状を呈する。堆積土は凝灰岩粒を含む暗褐色シルトで、自然堆積である。この溝跡に伴うとみられる柱穴などは検出されていない。

遺物は出土していない。

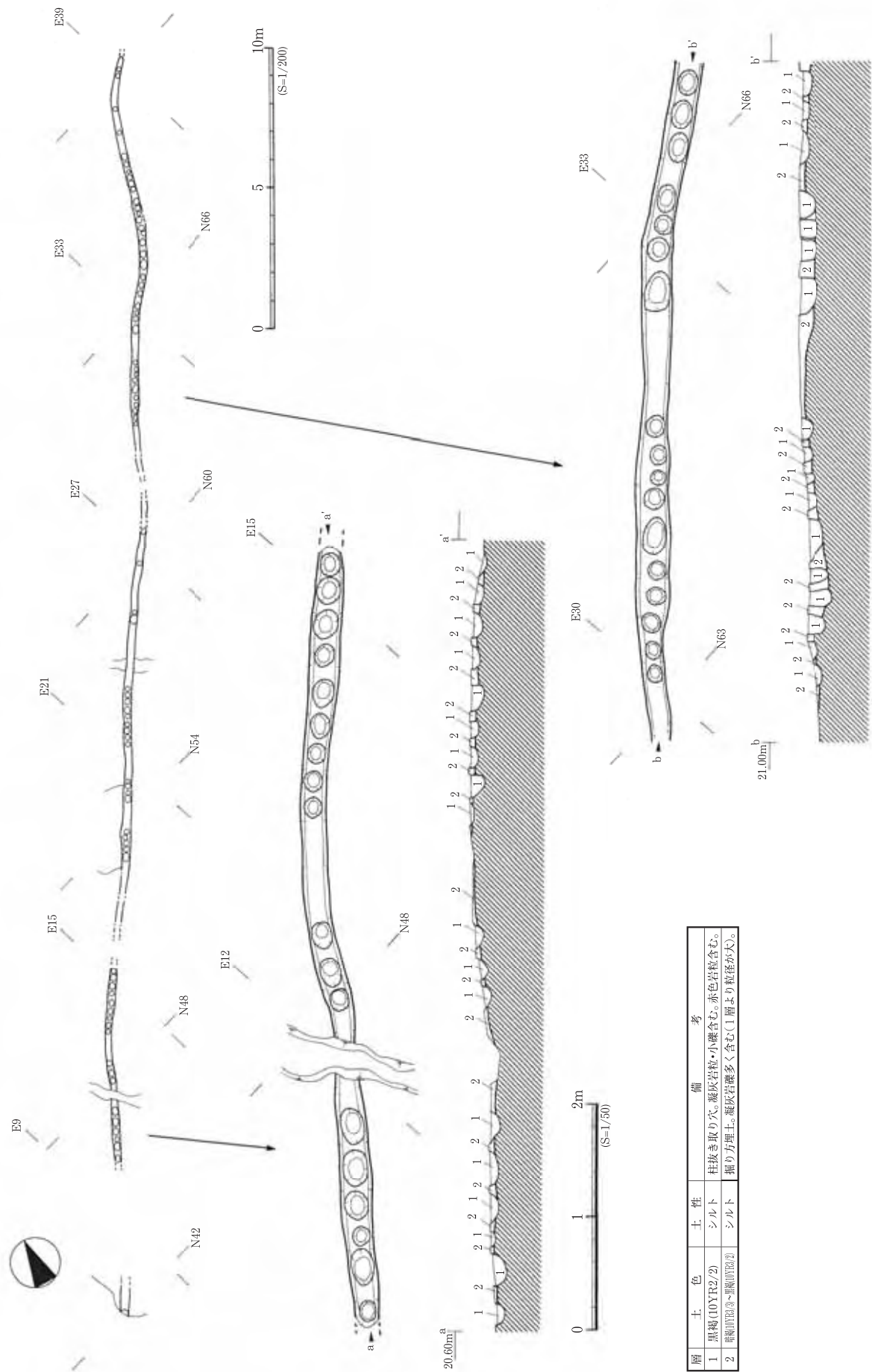


第81図 SX136・SX139・SX142周溝状遺構

E. 柵列跡

【SA60】(第82図、図版29-4～6)

調査区中央部西側の丘陵頂部よりやや南東へ下がった斜面で検出した、溝状の掘り方をもつ柵列跡



第82図 SA60柵列跡

である。南西から北東方向へほぼ直線的に延びている。全体的に削平が及んでおり、途切れている部分などもあるが、総長45mほど確認した。南西端はさらに調査区外へ延び、北東端の先は削平のために消失している。方向は北に対し東へ約30° 偏する。柱痕跡は明確に確認できなかったが、柱抜き取り穴とみられるピットが密集して検出された。他の遺構との重複はない。

溝状の掘り方は上幅20～25cm、深さは5～20cmほどである。断面形は箱形を呈する。埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含む暗褐色～黒褐色シルトである。柱抜き取り穴とみられるピットは、径16～20cmほどの円形あるいは楕円形状で、掘り方の底面よりもやや深く掘り込まれているものが多い。堆積土は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルトである。

遺物は掘り方埋土からは出土していないが、柱抜き取り穴とみられるピットの堆積土から土師器甕破片、砥石（第93図－4）が出土している。

F. 掘立柱建物跡

【SB50建物跡】（第83図、図版30－1）

南区域南側のやや東寄りの南斜面に位置する。桁行3間（南側柱は2間）・梁行1間の東西棟である。SX24鍛冶遺構と位置的に重複しているが、新旧関係は不明である。いずれの柱穴においても柱痕跡は認められなかった。

平面規模は桁行が北側柱列で総長約5.0m、柱間寸法は西から1.2m・1.8m・2.0m、南側柱列は西から2.4m・2.6m、梁行は総長約2.5mである。建物方向は北側柱列でみると東で北へ約41° 偏する。柱穴は径24～32cmの円形を呈するものが多く、深さは11～31cmである。埋土は径1cm以下の地山小ブロックを少量含む、ややしまりのない褐色シルトを基調としている。

遺物は出土していない。

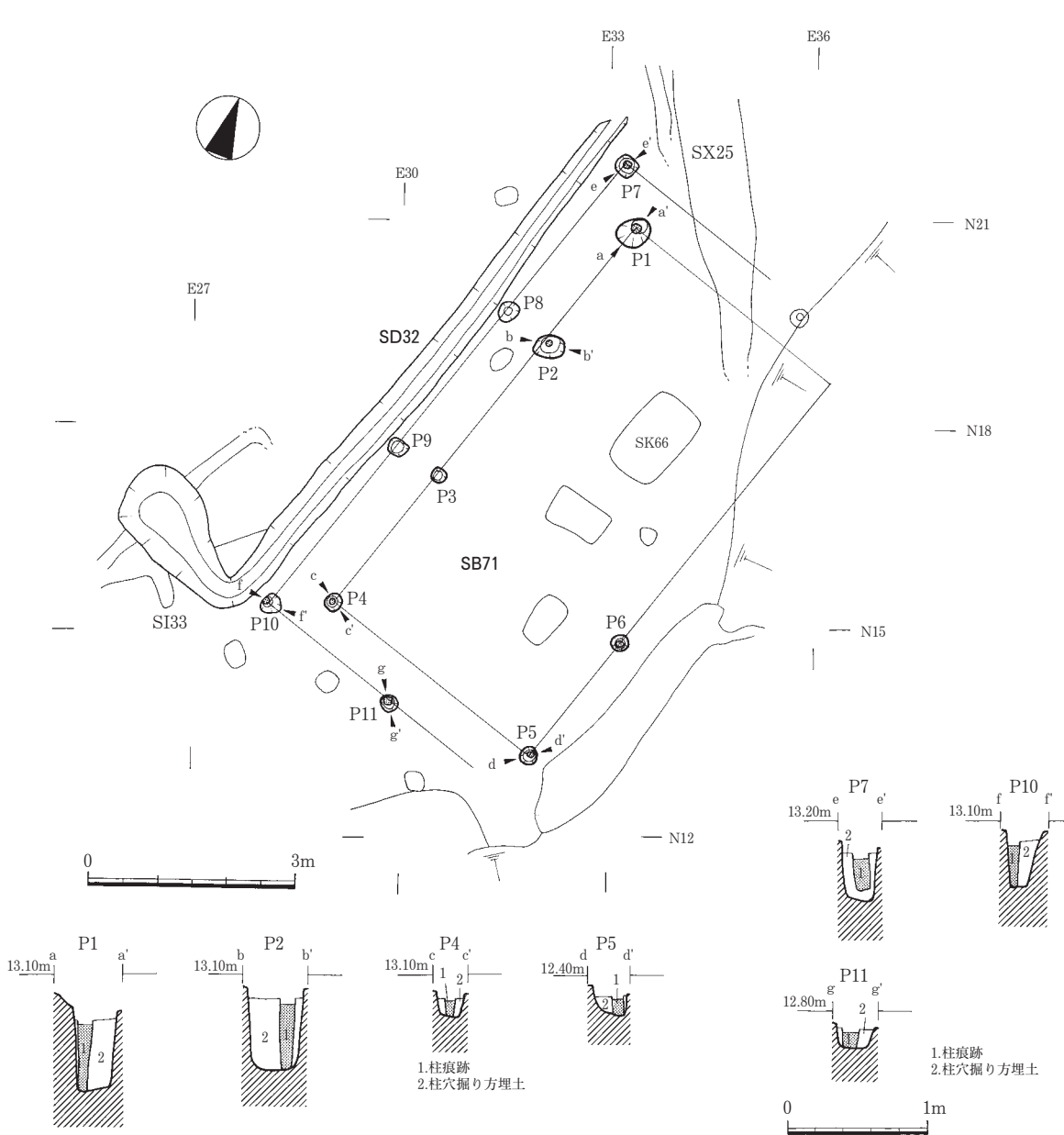
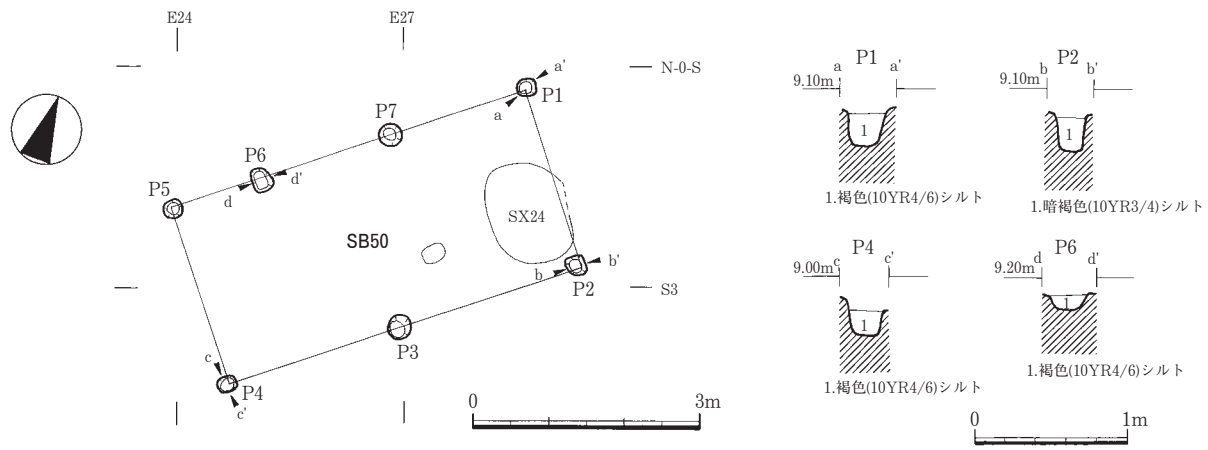
【SB71建物跡】（第83図、図版30－2）

南区域中央部やや東寄りの南東斜面に位置する。身舎が桁行3間・梁行1間で、桁行側3間・梁行側2間の庇が取り付く南北棟である。身舎の柱穴のうち、北東隅柱とその南隣の柱は確認できなかった。すぐ西側にあるSD32溝跡（後述）はこのSB71建物跡の西側柱列に平行していることから、この建物跡に伴う可能性が高い。

平面規模は桁行が西側柱列で総長7.0m、柱間寸法は北から2.2m・2.5m・2.3mである。梁行は南側柱列で総長3.6mである。建物方向は西側柱列でみると北で東へ約18° 偏する。

身舎の柱穴は径22～42cmの円形または歪んだ楕円形を呈するものが多く、深さは14～66cmである。柱穴掘り方埋土は凝灰岩粒・小礫を多く含む黄褐色～にぶい黄褐色シルトを基調としている。検出した6個の柱穴（P1～P6）のうち、5個から柱痕跡を確認した。径8～12cmのほぼ円形である。堆積土は凝灰岩小礫を若干含むしまりのない暗褐色もしくはにぶい黄褐色～褐色シルトである。なお、P3には柱の抜き取り穴が認められる。

庇とみられる柱穴は、身舎の柱穴から70cmほど離れている。径20～30cmの不整円形を呈しており、深さは14～56cmである。柱穴掘り方埋土は凝灰岩粒・小礫を多量に含む黄褐色～にぶい黄褐色シルト

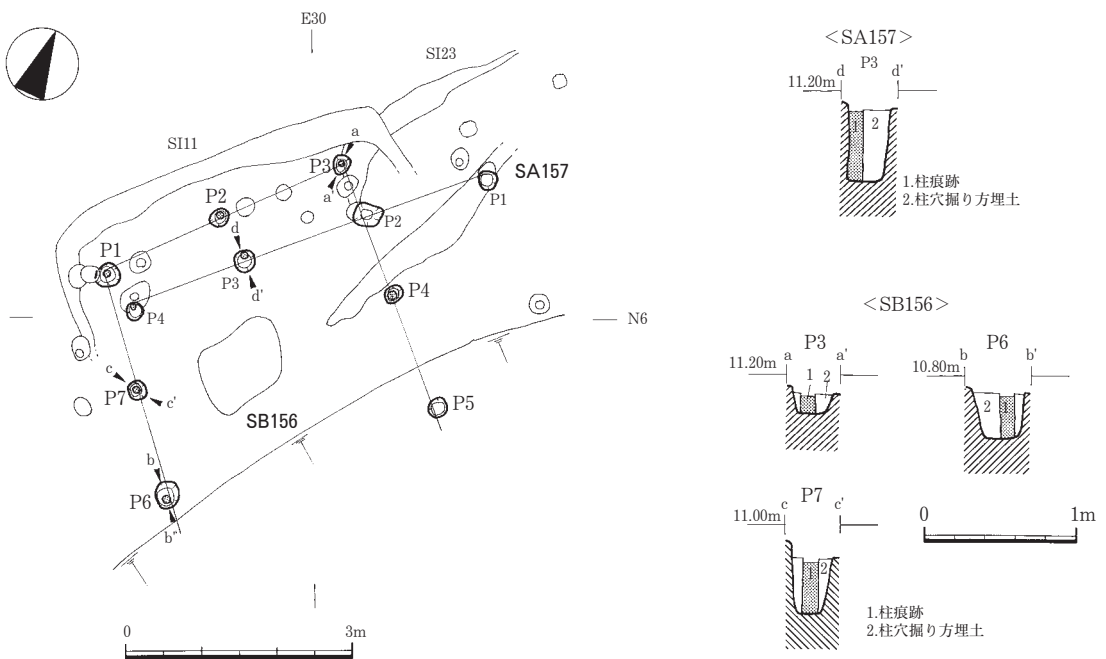
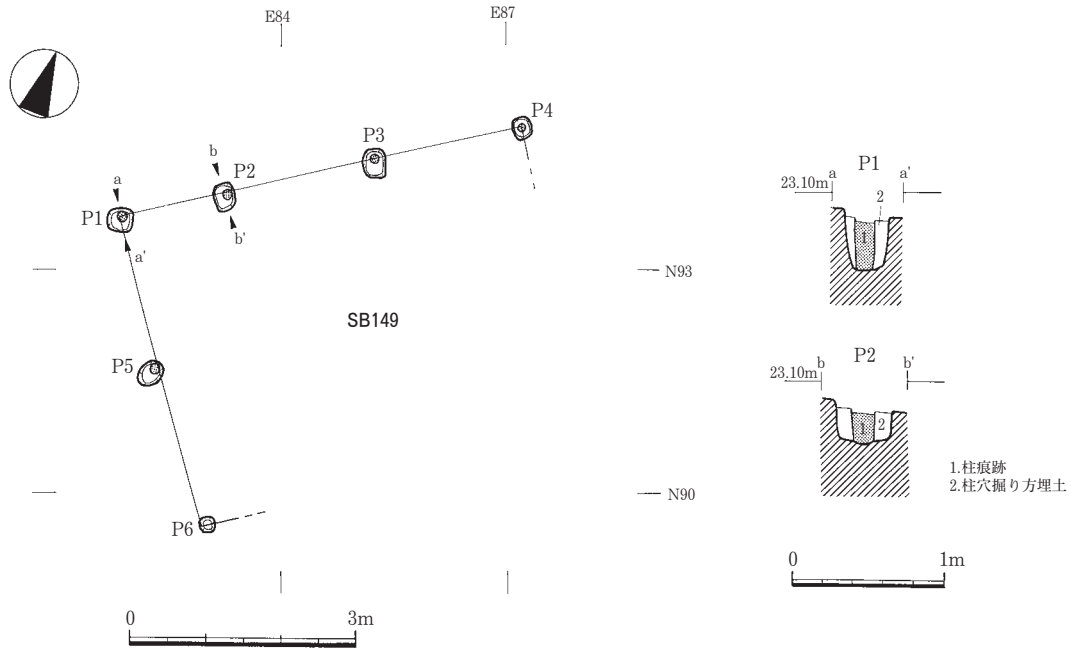


第83図 SB50・SB71掘立柱建物跡

を基調としている。5個の柱穴（P7～P11）のうち、3個から柱痕跡を確認した。径8～12cmの円形または楕円形を呈する。堆積土は凝灰岩粒・小礫を若干含む暗褐色～黄褐色シルトである。

遺物は出土していない。

[SD32溝跡]SB71建物跡の西側柱列と並行する溝跡である。南西端は西へL字状に屈曲してその先が土壌状に膨らんでいる。北東端は削平されており、その先は不明になる。SI33住居跡と重複し、これよりも新しい。



第84図 SB149・SB156掘立柱建物跡、SA157柱穴列

直線部分は検出総長約7m、上幅32～47cm、深さ5～24cmである。断面形はU字形を呈する。西端部の土壌状になる部分は長さが約2mで、上幅110cm、深さ30cmである。

遺物は堆積土から土師器環・甕などの小片がごく少数出土している。これらの中には、第90図-5のような頸部に鋸歯状沈線文をもつ土師器甕破片も含まれている。

【SB149建物跡】(第84図)

北区域中央部の東側に位置する。南側(斜面下側)は削平のため残っていない。柱穴は6個検出したが、桁行3間・梁行1間以上の東西棟とみられる。他の遺構との重複はない。

平面規模は桁行が総長約5.4m、柱間寸法は西から1.4m・2.0m・2.0m、建物方向は北側柱列で見ると東で北へ約35°偏する。梁行の柱間寸法は2.1mである。

柱穴は長軸30～42cm・短軸26～30cmの長形状を基調としている。深さ9～10cmほどある。柱穴掘り方埋土は凝灰岩小礫を多く含むふい暗褐色シルトである。柱穴の中央にはいずれも柱痕跡が認められたが、いずれも径12～14cmほどの円形状を呈する。柱痕跡の堆積土は炭化物粒を含む暗褐色シルトである。

遺物は出土していない。

【SB156建物跡】(第84図)

南区域中央のやや東寄りの南東斜面に位置する。桁行2間以上・梁行2間の南北棟とみられる。南側は削平されている。SI11・SI23住居跡と重複し、これらよりも新しい。

平面規模は北側柱列で総長3.4m、柱間寸法は西から1.7m・1.7m、西側柱列は総長3.2m、柱間寸法は北から1.6m・1.6m、東側柱列は総長3.4m、柱間寸法は北から1.8m・1.6mである。建物方向は西側柱列で見ると北で西へ約37°偏する。

柱穴は径20～32cmの円形もしくは不整形円形状を呈する。深さは18～47cmである。柱穴掘り方埋土は地山粒を含んだオリブ褐色シルトを基調としている。7個の柱穴のうち6個には柱痕跡が認められた。径10cmの円形を呈する。

遺物は出土していない。

G. 柱穴列

【SA70柱穴列】(第85図)

南区域の中央部に位置する。柱穴5個からなる東西方向の柱穴列である。南側は全体的に削平が及んでおり、柱穴列は掘立柱建物跡の一部であった可能性もある。SI28住居跡、SX29・SX63周溝状遺構などと重複し、いずれよりも新しい。

総長は7.5m、柱間寸法は東から1.8m・1.8m・1.9m・2.0mである。方向は東で北へ約40°偏する。

柱穴の平面形は、残りの良い西側2個の柱穴は長軸40～50cm・短軸32～46cmの楕円形を呈し、東側3個は径17～23cmの円形～楕円形を呈する。深さは29～63cmである。埋土は凝灰岩小礫を多く含む黒褐色粘土質シルトである。西側2個の柱穴で確認された柱痕跡は径18cmの円形で、堆積土は凝灰岩小

礫を含む極暗褐色のシルト質粘土である。東側3個の柱穴は、大きさからすると柱痕跡部分の残存である可能性もある。

出土遺物はない。

【SA157柱穴列】(第84図)

南区域中央のやや東寄りの南東斜面に位置する。4個の柱穴からなる東西方向の柱穴列である。SI11・SI23住居跡と重複し、これらよりも新しい。SB156建物跡との新旧関係は不明である。

総長は5.0m、柱間寸法は西から1.6m・1.5m・1.9m、柱穴列の方向は東で北へ約43°偏する。

柱穴は径28～46cmの円形や不整形形状を呈している。深さは20～52cmである。柱穴掘り方埋土は凝灰岩粒を含んだオリーブ褐色シルトを基調としている。西側2個の柱穴には径10cmほどの円形状の柱痕跡が認められる。

出土遺物はない。

【南東部柱穴群】(第85図、図版30-3)

南区域南東端で小型の柱穴が多数検出された。これらの柱穴群の多くは掘立柱建物跡の一部の可能性はあるが、いずれも調査区外へと延びており、建物跡としては明確には捉えられなかったものである。ほぼ同方向(東で北へ40°～50°偏する)に並ぶ、少なくとも5列(A～E)の柱穴群が認められる。

柱穴の多くは径もしくは一辺が22～25cmほどの円形あるいは隅丸形状を呈し、深さは20～25cmほどである。これらのおお半には径10～12cmほどの円形状の柱痕跡が認められる。柱間寸法は2.5mほどのもの(A・B)と1.8～2.1mほどのもの(C～E)がある。柱穴掘り方埋土は地山シルトブロックを多く含む暗褐色～にぶい黄褐色シルトで、柱痕跡は暗褐色シルトのものが多い。なお、AとBはちょうど90cmほどの間隔でほぼ平行していることから、同一建物の柱穴になる可能性もある。

H. 土壌

【SK36土壌】(第86図、図版31-1)

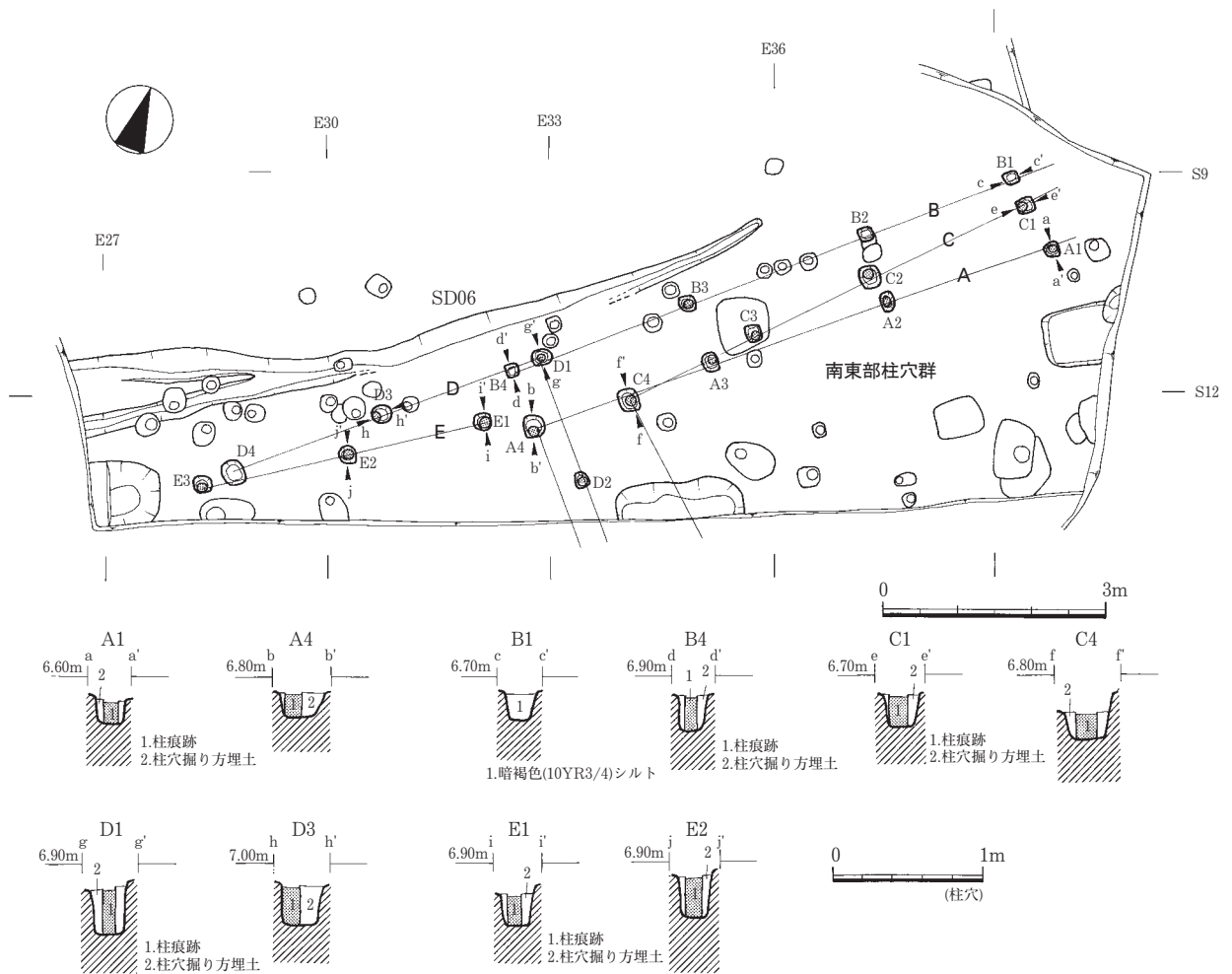
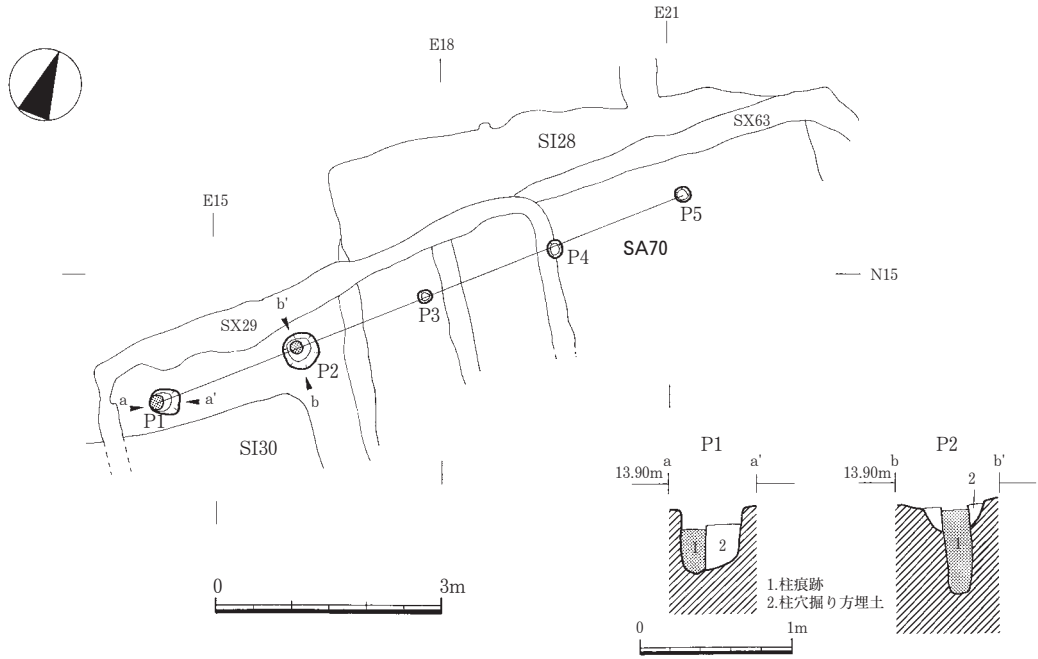
南区域北東側、中央の谷に面した東斜面で検出した。径80cmほどの円形を呈している。

壁は底面から緩やかに立ち上がる。深さは検出面から36cmで、断面形はすり鉢状である。堆積土は4層認められる。1層は1cm以下の凝灰岩粒・小礫を多く含むにぶい黄褐色シルト、2層は暗褐色シルト、3層は3cm以下の地山シルトブロックを少量含むにぶい黄褐色シルト、4層は5cm以下の凝灰岩小礫がほとんどの褐色シルトである。1・3・4層は自然堆積土、2層のみ人為的埋土とみられる。

遺物は堆積土から非クロロ調整の土師器甕片が出土している。

【SK44a土壌】(第86図)

南区域南東端で検出した。隅丸長形状を呈し、大きさは長軸116cm・短軸40cmほどである。深さは検出面から25cmほどである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平である。断面形は箱形を呈する。長軸方向は北で東へ約42°偏する。



第85図 SA70柱穴列、南東部柱穴群

堆積土は径10cm以下の地山シルトブロックや径1cm以下の凝灰岩粒・小礫を多く含んだ暗褐色シルトを基調としている。

遺物は出土していない。

【SK44b 土壌】 (第86図)

南区域南東端で検出した。前述のSK44aの8mほど南に位置し、その特徴が似ている。東側が調査区外へ延びるが、平面形は隅丸長方形を呈するとみられる。大きさは短軸が80cm、深さは検出面から15cmほどである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平である。断面形は箱形を呈する。長軸方向は北で東へ約60°偏しており、SK44aよりも東へ傾いている。

堆積土はSK44a同様、径10cm以下の地山シルトブロックや径1cm以下の凝灰岩粒・小礫を多く含んだ暗褐色シルトを基調としている。

遺物は出土していない。

【SK45土壌】 (第86図、図版31-2)

南区域北東側、中央の小谷に面した東斜面で検出した。前述のSK36から3mほど南東側に位置する。径70cmほどの円形を呈している。深さは検出面から30cmほどで、底面はほぼ水平である。断面形は逆台形状である。

堆積土は1層認められ、1cm以下の地山シルト粒を含む暗褐色シルトで、焼土や炭化物も含んでいる。人為的埋土の可能性が高い。

遺物は縄文土器と石器が出土している。

【SK62土壌】 (第87図)

南区域の中央付近に位置する。平面形はやや歪んだ長方形を呈している。大きさは長軸約250cm・短軸約100cm、深さは8~28cmである。断面形は上幅が広く浅い逆台形状を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は南東に向かってやや傾斜している。

堆積土は凝灰岩粒・小礫を多く含む暗褐色シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から土師器坏とみられる小片が1片のみである。

【SK66土壌】 (第87図)

南区域中央、やや東寄りに位置する。SB71建物跡の中で検出した。長軸方向がSB71とほぼ同じであるが、これに伴うかどうかは不明である。

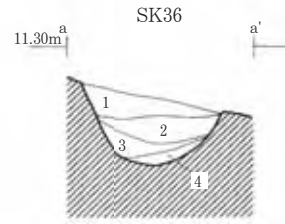
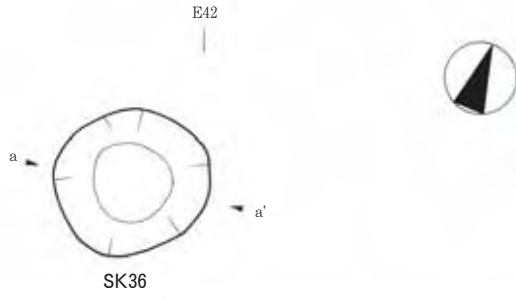
平面形は隅丸長方形で、大きさは長軸125cm・短軸82cm、深さは27cmである。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。長軸方向は北で東へ約18°偏する。

堆積土は2層に大別される。1層はしまりのある暗褐色シルトで、地山シルトブロックを少量含んでいる。2層はしまりのないにぶい黄褐色シルトで、凝灰岩小礫を多く含んでいる。1層は自然堆積、2層は人為的埋土の可能性がある。

遺物は出土していない。

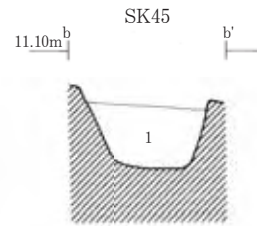
【SK92土壌】 (第87図、図版28-4)

南区域北西側の南東斜面に位置する。南西側は削平を受けている。位置的にみてSX58周溝状遺構



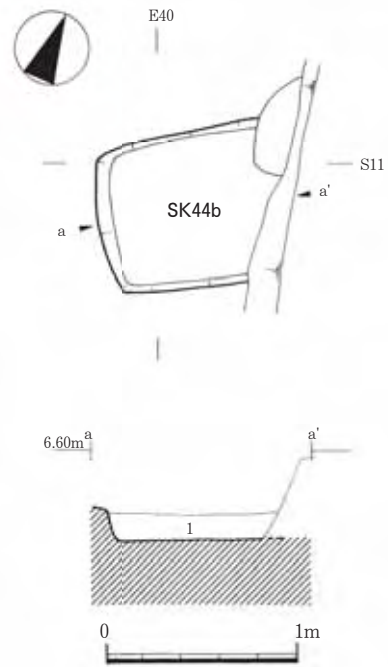
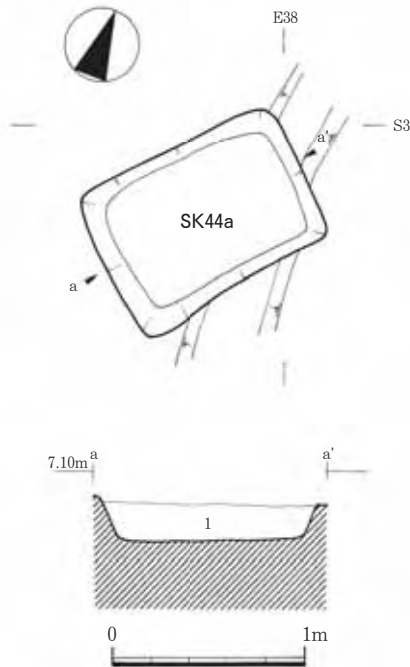
SK36

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|---------------------|
| 1 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 自然堆積。地山シルト粒多く含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 人為か。 |
| 3 | にぶい黄褐(10YR5/3) | シルト | 自然堆積。地山シルトブロック少量含む。 |
| 4 | 褐(10YR4/4) | シルト | 自然堆積。凝灰岩小礫がほとんど。 |



SK45

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|----------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 凝灰岩粒、焼土・炭化物含む。 |



SK44 a

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|------------|-----|-------------------------|
| 1 | 褐(10YR4/4) | シルト | 人為。地山シルト粒・ブロック多い。炭化物少量。 |

SK44 b

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|------------|-----|-------------------------|
| 1 | 褐(10YR4/4) | シルト | 人為。地山シルト粒・ブロック多い。炭化物少量。 |

第86図 SK36・SK44a・SK44b土壌

と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は西側が狭い長三角形状を呈する。ただ、本来は長方形状とみられる（削平が及んでいる西側部分の上幅が狭まっている）。長軸方向は東で北へ約44° 偏する。大きさは長軸約210cm・短軸55cm、深さは東側で25～30cmである。短軸の断面形は上幅がやや広いU字形を呈する。

堆積土は2層に大別される。2層とも凝灰岩粒・小礫を多く含む暗褐色～黒褐色シルトの自然堆積土である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕小片が少量出土しているのみである。

【SK124土壌】（第87図、図版31－3）

南区域北西側の南東斜面に位置する。前述のSK92のすぐ東側にある。東半は削平を受けており、上幅が狭くなっている。他遺構との重複はない。

平面形は東側が狭い長三角形状を呈するが、本来は長方形状とみられる（削平が及んでいる東側部分の上幅が狭まっている）。長軸方向は東で北へ約40° 偏する。大きさは長軸約130cm・短軸50cm、深さは西側で30cmである。短軸の断面形は上幅がやや広いU字形を呈する。

堆積土は3層に大別される。いずれも凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルトの自然堆積土である。

遺物は出土していない。

【SK126土壌】（第88図、図版31－4）

北区域南東部の南斜面に位置する。北東側はSI119住居跡と重複し、消失している。

平面形は長方形状を呈する。大きさは長軸約1.8m・短軸0.9m、深さは45cmである。短軸の断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。長軸方向は北で東へ約31° 偏する。

堆積土は3層に大別される。1・2層は凝灰岩粒・小礫を多く不均質に含む暗褐色～黒褐色シルト、3層は凝灰岩粒・小礫を多く不均質に含むにぶい黄褐色シルトで、いずれも人為的埋土とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕の小片がごく少量出土したのみである。

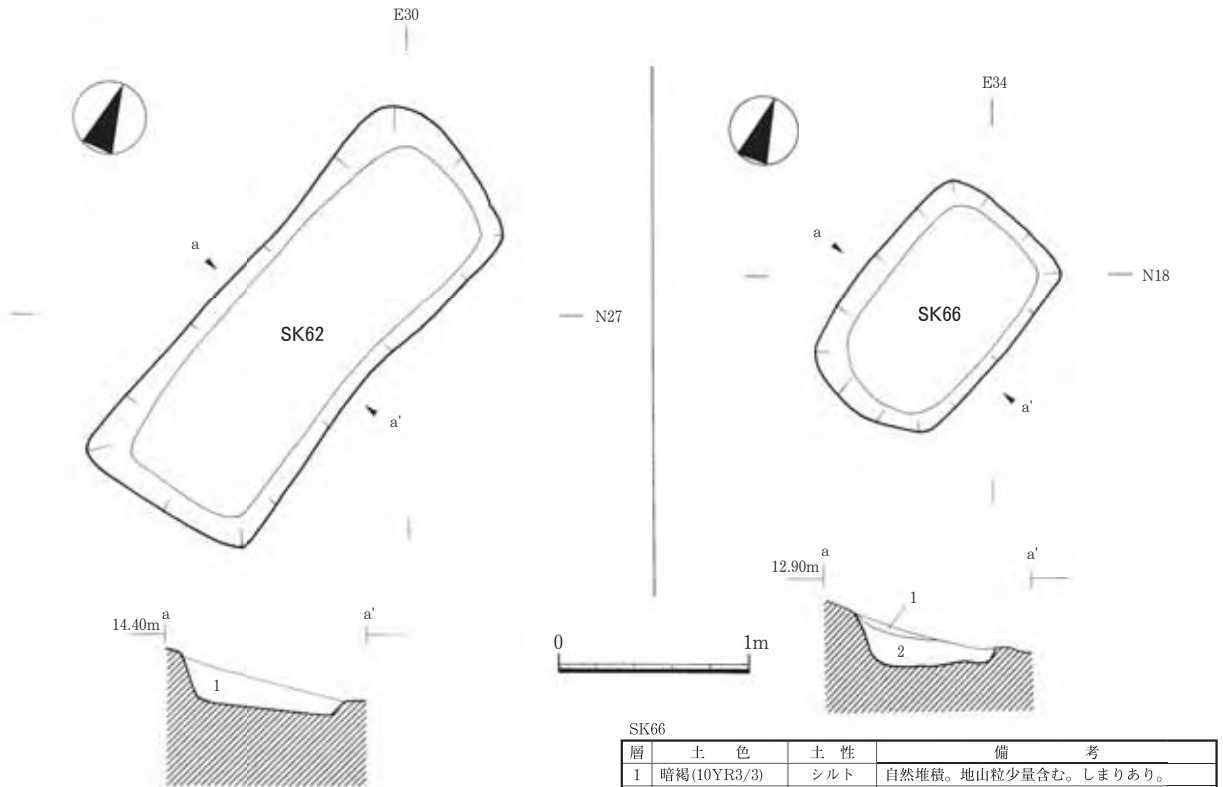
【SK129土壌】（第88図・第89図、図版29－1）

北区域南東部の調査区壁際に位置する大型の土壌である。東半部は調査区外へと延びる。SX117・SX118・SX128竪穴状遺構と重複し、これらよりも新しい。

平面形は不整な楕円形状を呈するものとみられる。大きさは南北方向で約3m、深さは60～65cmほどある。断面形は不整な逆台形状で、底面はほぼ平坦である。

堆積土は5層に大別される。1～4層は凝灰岩粒・小礫を含む黒褐色シルト、5層は凝灰岩粒・小礫や炭化物粒を含む暗褐色シルトである。いずれも自然堆積である。

遺物は比較的多く出土している。底面から非ロクロ調整の土師器甕（第89図－3）、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏（第89図－1）・壺（第89図－2）・甑・甕（第89図－4～8）、刀子（第92図－7）、砥石などが出土している。

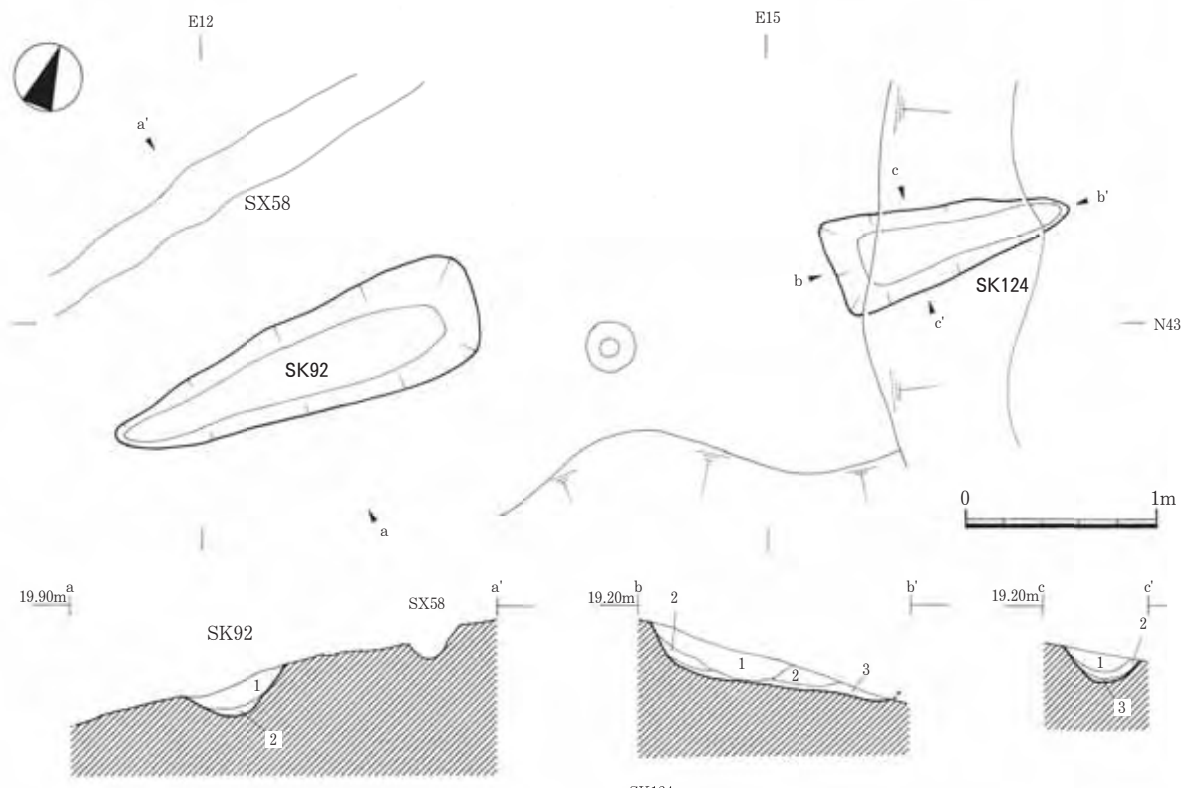


SK62

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/4) | シルト | 凝灰岩小礫多く含む。 |

SK66

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 自然堆積。地山粒少量含む。しまりあり。 |
| 2 | にふい黄褐(10YR4/3) | シルト | 人為の埋土。凝灰岩礫多く含む。しまりが無い。 |



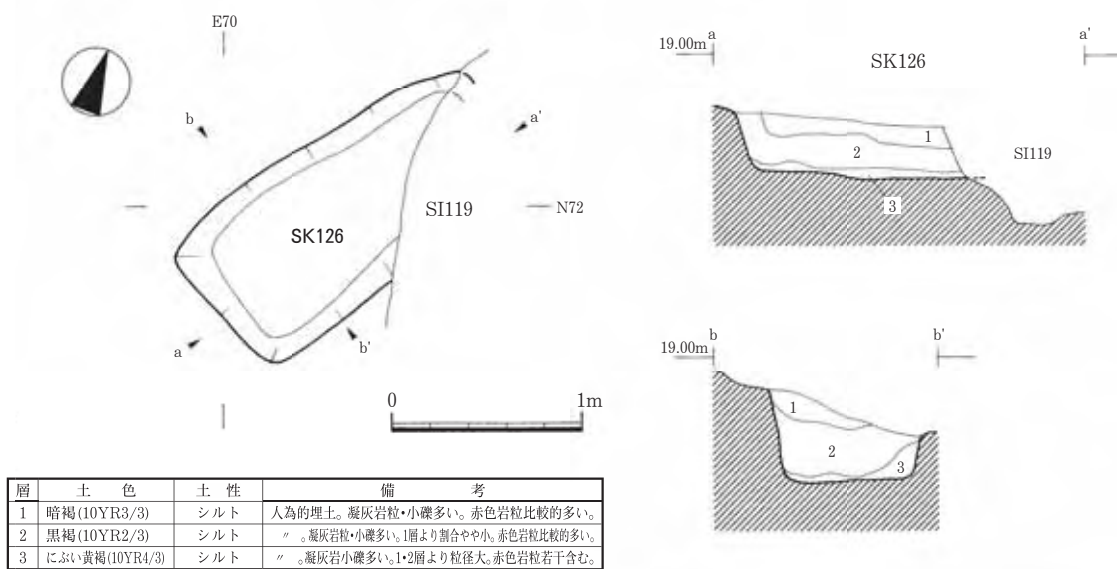
SK92

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|---------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 自然堆積。凝灰岩粒・赤色岩粒多く含む。 |
| 2 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 。凝灰岩粒・赤色岩粒比較的多く含む(1層より少)。 |

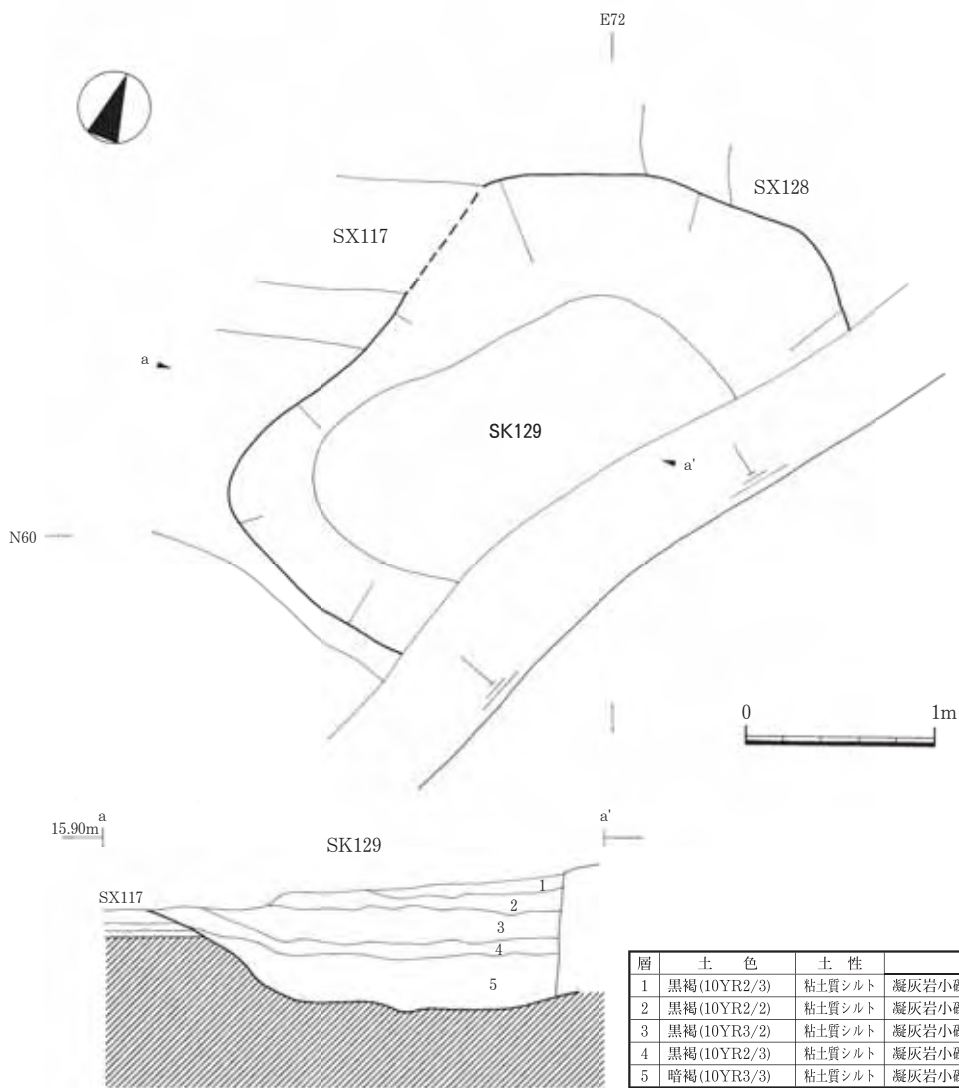
SK124

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|-----|---------------------------|
| 1 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 自然堆積。凝灰岩粒・赤色岩粒比較的多く含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR3/2) | シルト | 。凝灰岩粒・赤色岩粒多量に含む。1層より割合多い。 |
| 3 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 。凝灰岩粒若干→1・2層に比べ割合少ない。 |

第87図 SK62・SK66・SK92・SK124土壌

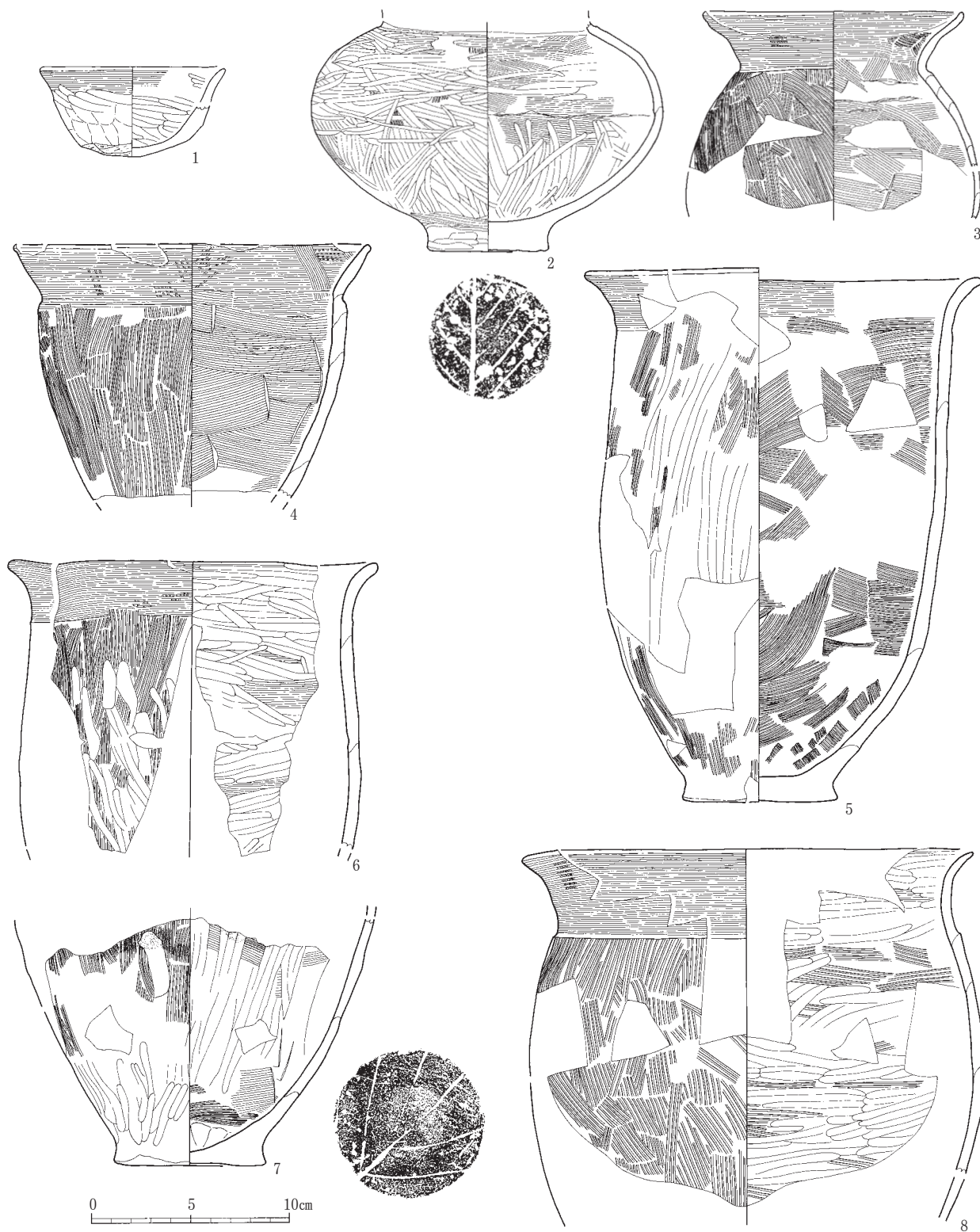


| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|----------------------------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト | 人為の埋土。凝灰岩粒・小礫多い。赤色岩粒比較的多い。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/3) | シルト | 〃。凝灰岩粒・小礫多い。1層より割合やや小。赤色岩粒比較的多い。 |
| 3 | にぶい黄褐(10YR4/3) | シルト | 〃。凝灰岩小礫多い。1・2層より粒径大。赤色岩粒若干含む。 |



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|-----------------------|
| 1 | 黒褐(10YR2/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 2 | 黒褐(10YR2/2) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫少量含む。 |
| 3 | 黒褐(10YR3/2) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫多く含む。しまりあり堅い。 |
| 4 | 黒褐(10YR2/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫含む。 |
| 5 | 暗褐(10YR3/3) | 粘土質シルト | 凝灰岩小礫多く含む。炭化物含む。土器出土。 |

第88図 SK126・SK129土壌



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|-------|------|---------|-----|------|--|-------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 坏 | 堆3~5層 | 4/5 | (9.3) | — | 4.6 | 外:(口)ヨコナデ(体)オサエ→ヘラミガキ(底)ヘラケズリ 内:(口)ヨコナデ(体)ヘラミガキ | 49-8 | I-133 |
| 2 | 土師器 壺 | 堆3~5層 | 1/4 | — | 6.2 | — | 外:ハケメ→ヘラミガキ 底:木葉痕あり 内:ヘラナデ・ナデ→ヘラミガキ | 49-9 | I-134 |
| 3 | 土師器 甕 | 底面 | 1/4 | (13.2) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ナデ・ヘラナデ | 49-10 | I-135 |
| 4 | 土師器 甕 | 堆3~5層 | 1/6 | (18.0) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ヘラナデ | 50-1 | I-136 |
| 5 | 土師器 甕 | 堆3~5層 | 8/9 | 20.1 | 7.9 | 27.0 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ(胴)ハケメ | 50-3 | I-139 |
| 6 | 土師器 甕 | 堆3~5層 | 1/10 | (18.6) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ→ヘラミガキ 内:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(胴)ナデ→ヘラミガキ | 50-5 | I-137 |
| 7 | 土師器 甕 | 堆3~5層 | 1/4 | — | 7.6 | — | 外:ハケメ→ヘラミガキ 底:木葉痕あり 内:ハケメ→ヘラナデ・ナデ→ヘラミガキ | 50-2 | I-138 |
| 8 | 土師器 甕 | 堆3~5層 | 1/4 | (22.8) | — | — | 外:(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ハケメ 内:(口)ヨコナデ→ヘラミガキ(胴)ハケメ→ヘラミガキ | 50-4 | I-140 |

第89図 SK129土壌出土土器

I. 溝跡

【SD06溝跡】(第85図)

南区域の南東端で検出した東西方向の溝跡である。西側は二股に分かれ、その先は削平されており不明である。東端は徐々に浅くなって途切れる。また、南側の壁が一部削平されている部分がある。すぐ南には前述の「柱穴列」の項で南東部柱穴群とした柱穴群があるが、これらとほぼ平行しており、一連の遺構の可能性はある。

溝跡は東端から西側の削平されている部分まで約10mである。上幅は12～48cm、深さは3cm～15cmである。断面形はおおむねU字状を呈する。底面レベルは東側が西側に比べ10cmほど低い。北壁は南壁に比べ緩やかに立ち上がり外側に開いている。溝跡の方向は東で北へおおよそ40°偏する。堆積土は凝灰岩粒・小礫や地山シルトブロックを多く含んだにぶい黄褐色シルトの自然堆積土である。

遺物は堆積土から須恵器甕の小片が出土したのみである。

【SD49溝跡】(第90図)

南区域の南西部にある南北方向の溝跡である。南端は削平されている。

検出総長は約4.1mで、上幅は24～34cm、深さは3～10cmである。断面形はおおむねU字状を呈する。底面は南側へ徐々に傾斜しており、南端は北端に比べ50cmほどレベルが低い。方向は北で東へ約7°偏する。堆積土はややしまりのある粘性を帯びた暗褐色シルト質粘土で、凝灰岩小礫を多く含む自然堆積土である。

遺物は出土していない。

J. その他

【SX01】(第90図)

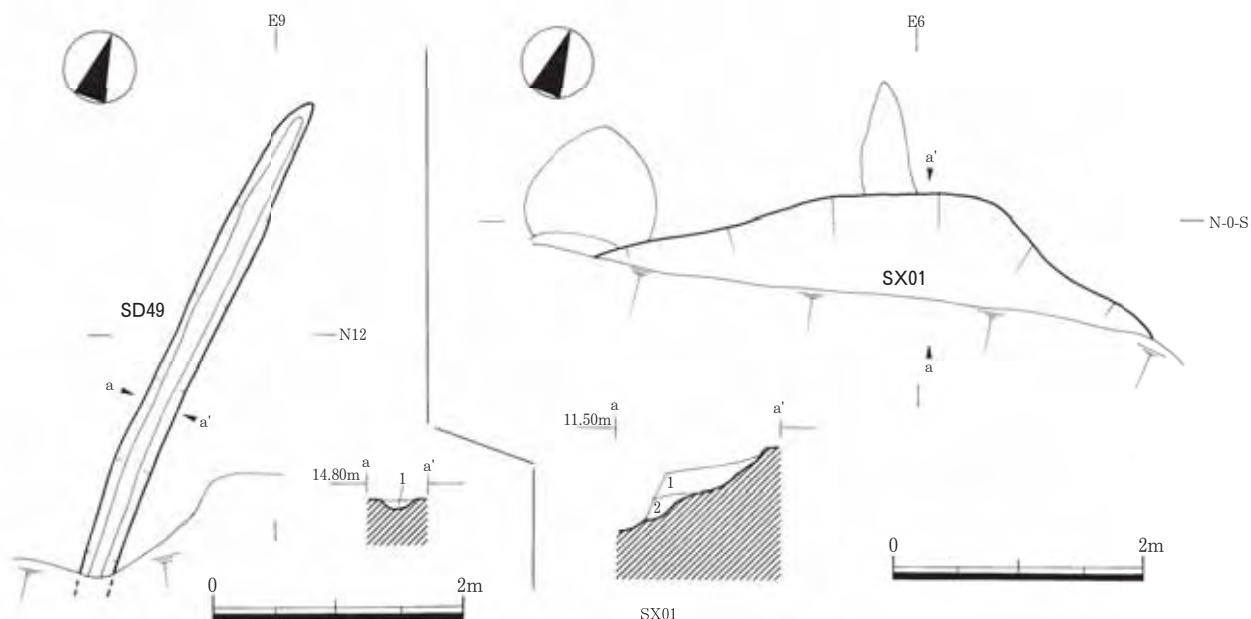
南区域の南西端に位置する。南側の大半が削平されており、ごく一部の確認である。検出部分は東西約3.1m、南北約1.7mほどである。壁は斜めに立ち上がっており、底面は確認されていない。確認した深さは50cmほどである。平場を造り出した段あるいは大型土壇の一部などの可能性が考えられるが、いずれとも判断できない。

堆積土は2層に大別される。1層は地山シルト小ブロックを含む、しまりのあるにぶい黄褐色のシルトで、ごく少量の炭化物を含んでいる。2層はしまりのない褐色シルトで、地山シルト小ブロックを含んでいる。2層とも自然堆積である。

遺物は堆積土上部から非ロクロ調整の土師器坏・大型坏(第90図-1～3)、須恵器坏(第90図-4)などが出土している。

【その他出土土器】(第90図)

5は時期的に新しいとみられるSD32溝跡堆積土から出土した土師器甕の破片である。頸部には鋸歯状沈線文が施されており、胴部外面にはハケメ調整が認められる。沈線文が施されている土師器はこの1点のみである。6は口縁部が欠損しているが、土師器鉢とみられる。

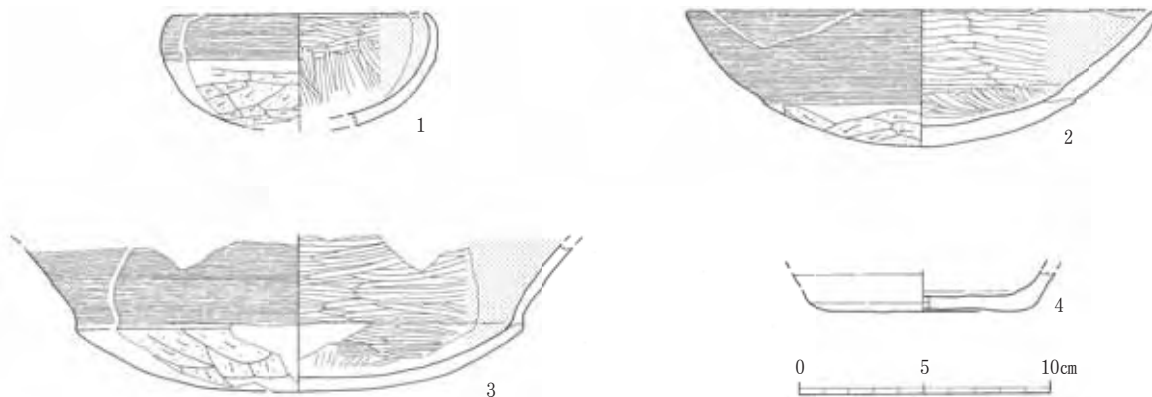


SD49

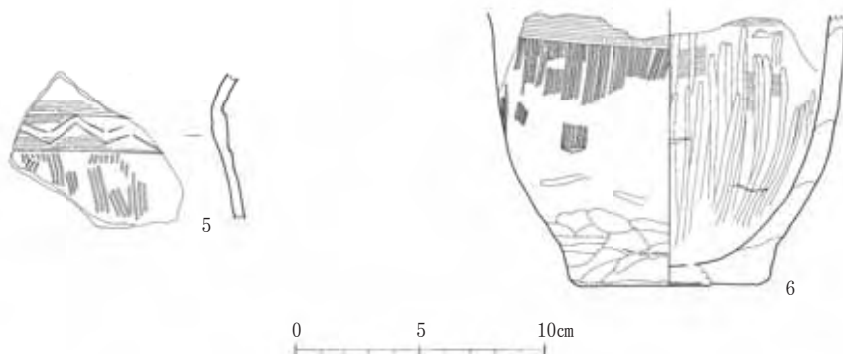
| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|-------------|--------|------------|
| 1 | 暗褐(10YR3/3) | シルト質粘土 | 凝灰岩小礫多く含む。 |

SX01

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|----------------|-----|---------------------------|
| 1 | にふい黄褐(10YR4/3) | シルト | 自然堆積。地山シルトブロック含む。炭化物少量含む。 |
| 2 | 褐(10YR4/4) | シルト | 。地山シルトブロック含む。 |



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|----|---------|---------|-----|---------|-------|-----|---|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 坏 | SX01 遺確 | 1/6 | (10.0) | - | - | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 51-4 | I-127 |
| 2 | 土師器 坏 | " 遺確 | 4/5 | 19.0 | - | 5.4 | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 底部に焼成前刻書「X」内:ヘラミガキ→黒色処理 | 51-2 | I-128 |
| 3 | 土師器 大型坏 | " 遺確 | 1/5 | - | - | - | 外:(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 51-3 | I-129 |
| 4 | 須恵器 坏 | " 遺確 | 底部 | - | (8.0) | - | 内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り→ナデ | | I-130 |



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|----|-------|----------|-----|---------|-----|----|--|------|-------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 5 | 土師器 甕 | SD32 堆 | 破片 | - | - | - | 外:(頸部)ヨコナデ→鋸歯状沈線文(胴)ハケメ 内:ナデか 炭化物付着 | 51-5 | I-155 |
| 6 | 土師器 鉢 | SK43 堆1層 | 1/2 | - | 7.8 | - | 外:(口)ヨコナデ(体)ハケメ→(下部)ヘラミガキ 底:ヘラケズリ 内:(口)ヨコナデ(体)ヘラナデ→ヘラミガキ | 51-6 | I-132 |

第90図 SD49溝跡、SX01不明遺構と出土土器ほか

K. 出土遺物

ここでは、これまで実測図を掲載した土器類以外の遺物（土製品・金属製品・石製品ほか）について概要をまとめる。

a. 土製品（第91図－1～17、図版52－1～17）

ミニチュア土器：SI30・SI51住居跡の床面や貯蔵穴などから計5点出土している。いずれも環形のもの（1～4）である。全体的に厚手で、1・2・4は内外面に指オサエやナデが特徴的に認められる。3は口縁部が欠損しており全体形が不明であるが、調整は内外面にヘラミガキが施されている。丸玉：SI28住居跡などから2点（5・6）出土している。いずれも球状で、両端から孔が開けられている。5は器径3.2cm・孔径0.4cm、6は器径3.4cm・孔径0.4cmである。外面は指ナデが施されている。支脚：SI27住居跡とSI110住居跡から2点ずつ計4点出土している。7・8はSI27住居跡出土である。いずれも柱状・中実で、下端がやや開く形状である。上端面はやや窪んでいる。外面は指ナデで整えられている。9はSI110住居跡出土である。柱状で下端がやや開く形状であるが、前者と異なり、上端面から未通孔がみられる。外面は指ナデである。SI110住居跡からはもう1点出土しているが、断片的な資料である。

羽口：いずれも断片的な資料のみである。SX135鍛冶遺構およびこれと重複するSI110住居跡の堆積土付近が多く、ほかにSI89・SI120住居跡堆積土などから計35点ほど出土している。熔滓が付着する羽口先端の破片資料（10～15）が比較的多い。

b. 金属製品・鉄滓（第92図－1～9、図版52－18～28）

鉄鏃：鉄鏃とみられる資料は4点（1～4）ある。いずれも長頸式とみられるが、鏃身部は残っていない。頸部～茎部のみ残る断片的なものである。

鉄釘：鉄釘とみられる資料は6点ある。1点以外はいずれも断片資料である。6は折釘タイプで、基部（脚部）は折れ曲がっている。長さ6.5cm、厚さ0.4cmほどである。

刀子：2点（7・8）ある。7は刀身部を欠損する。平造・両関で、縁金が残存している。残存長8.4cm。8は刀身部～茎部の一部が残存し、切先部は欠損する。両関とみられる。残存長8.8cm。

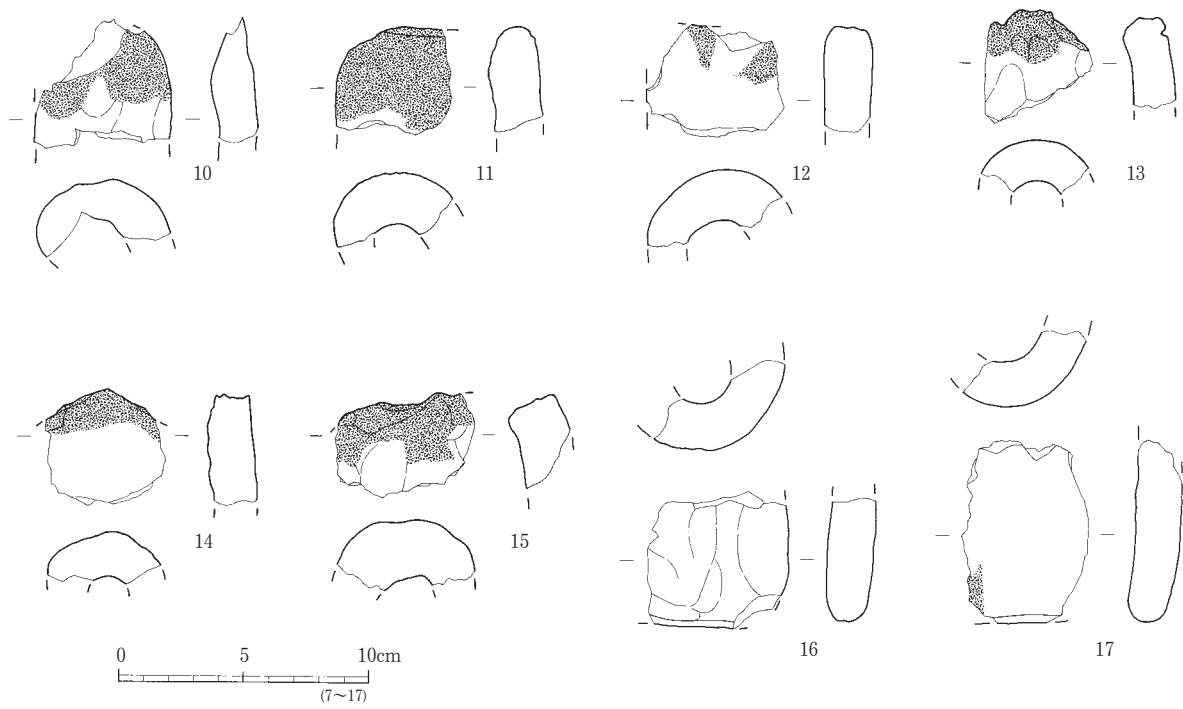
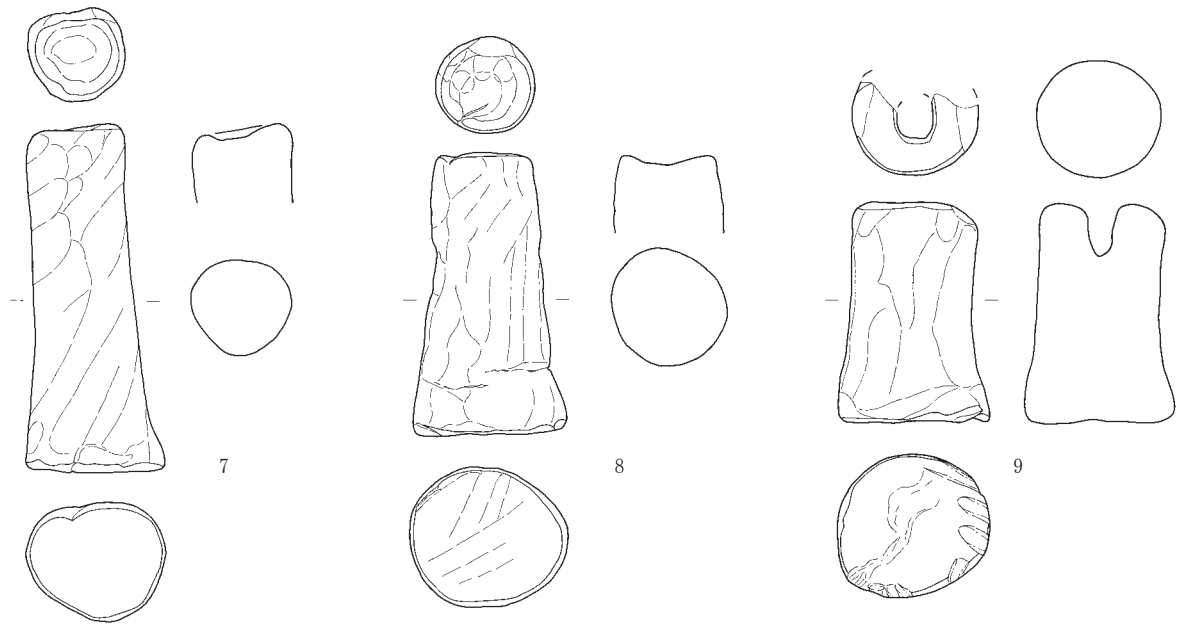
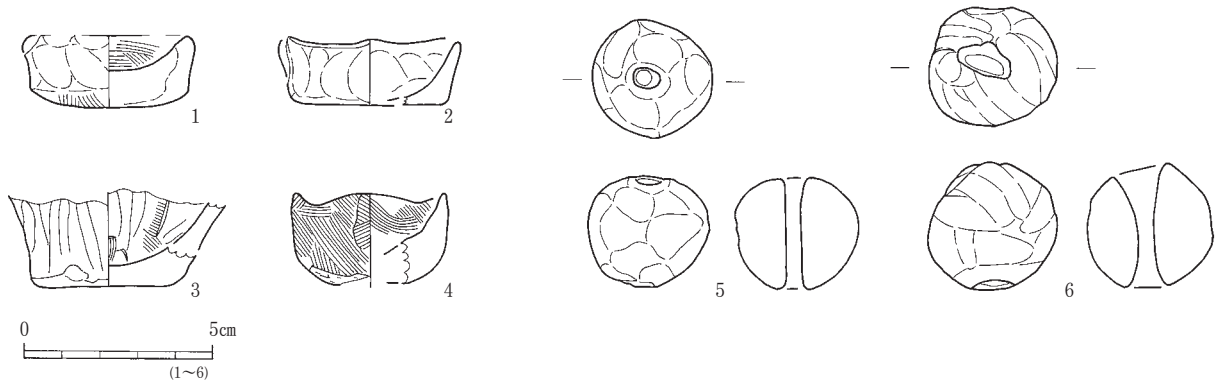
不明品：9は欠損品で、全体の形状は不明である。雁股鏃状の形態をもち、先端は二股に分かれているが、左先端は大きく左側へ屈曲している。残存長は5.8cm、幅は1.7cm（上部）・1.0cm（下部）、厚さ4～5mmで、断面形は板状である。

鉄滓：（図版52－27・28）量的にはコンテナ1箱分程度である。主に中央の谷に面したSX135鍛冶遺構、SX35・39竪穴遺構から多く出土している。また、SX135やSX125鍛冶遺構に近いSI110・120住居跡の堆積土などから出土している。

c. 石製品・石器（第93図～第96図－1～19、図版53－1～15）

砥石：砥石は21点出土している。砂岩や凝灰岩などを利用している。1～7の小～中型品と8～11の大型品がある。前者は柱状もしくは板状の形状をもち、砥面は4面以上あるものが多い。後者は大型の角柱礫などを素材としたもので、2面～4面に砥面が認められる。

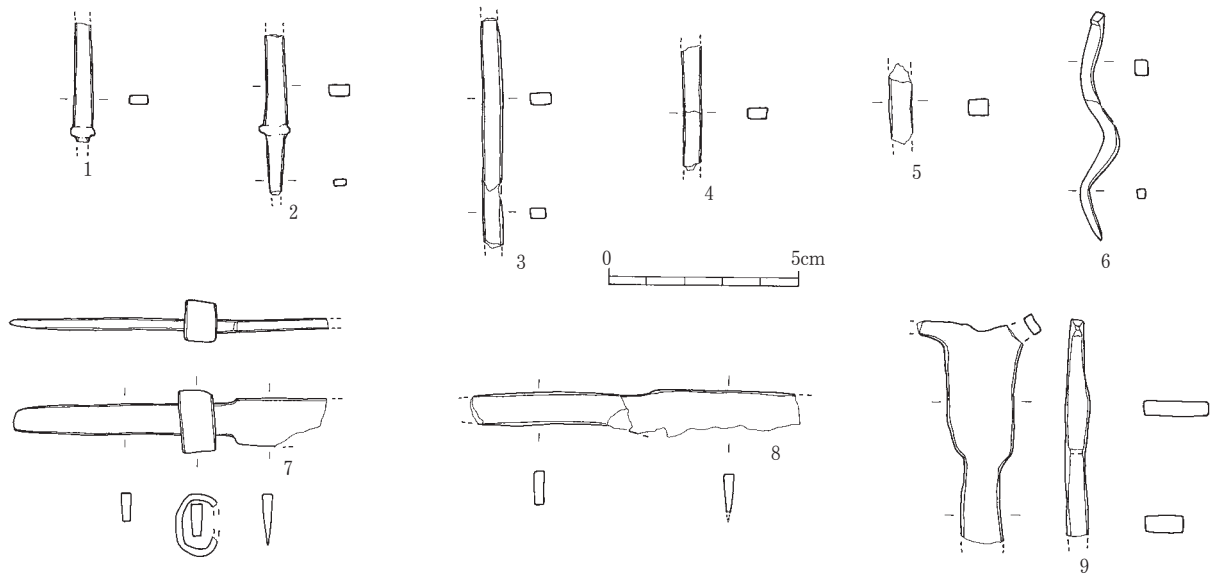
叩き石・すり石：砂岩などの円礫を用いた叩き石・すり石とみられる資料は8点ある。住居床面など



第91図 土製品

土製品観察表

| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 備考 | 写真図版 | 登録 |
|----|-----------|------------|------|---|-------|-----|
| 1 | ミニチュア土器 環 | SI28 堆1層 | 1/2 | 口径(4.6)cm 底径(4.2)cm 器高1.9cm 外:オサエ、ナデ 内:ナデ | 52-1 | 土4 |
| 2 | ミニチュア土器 環 | SI30 床面 | 1/4 | 口径(4.8)cm 底径(4.0)cm 器高1.7cm 内外:オサエ 底:ナデ | 52-2 | 土5 |
| 3 | ミニチュア土器 環 | SI51 貯穴1層 | 底部 | 底径3.7~4.0cm 外:ナデ、ヘラミガキ 底:ヘラミガキ 内:ヘラナデ→ヘラミガキ | 52-3 | 土7 |
| 4 | ミニチュア土器 環 | SX128 底面 | 1/3 | 口径(4.0)cm 外:ナデ、一部ヘラケズリ 底:ヘラケズリ 丸底 内:ナデ | 52-4 | 土8 |
| 5 | 丸玉 | SI28 | 完形 | 径3.2cm 孔径0.4cm 外:指オサエ | 52-5 | 土2 |
| 6 | 丸玉 | SX117堆1・2層 | 完形 | 径3.4cm 孔径0.4cm 外:指ナデ | 52-6 | 土3 |
| 7 | 土製支脚 | SI27 カマド | 完形 | 上径3.9cm 下径5.5cm 長13.9cm 外:指オサエ、ナデ | 52-7 | 土9 |
| 8 | 土製支脚 | SI27カマド脇 | 完形 | 上径3.6cm 下径5.6~6.3cm 長11.3cm 外:指オサエ、ナデ | 52-8 | 土10 |
| 9 | 土製支脚 | SI110 床面 | ほぼ完形 | 上径5.0cm 下径6.0cm 長8.8cm 外:指オサエ ナデ | 52-9 | 土11 |
| 10 | 羽口 | SX135 床面 | 破片 | 口径(5.8)cm 外:ナデ 熔着滓 | 52-10 | 土15 |
| 11 | 羽口 | SX135 ピット | 〃 | 口径(5.8)cm 外:熔着滓 | 52-11 | 土16 |
| 12 | 羽口 | SX135 堆1層 | 〃 | 口径(6.4)cm 外:熔着滓 | 52-13 | 土17 |
| 13 | 羽口 | SX135 遺確 | 〃 | 外:指オサエ 熔着滓 | 52-14 | 土19 |
| 14 | 羽口 | SX135 遺確 | 〃 | 外:熔着滓 | 52-15 | 土18 |
| 15 | 羽口 | SI110 堆1層 | 〃 | 外:指オサエ 熔着滓 | 52-16 | 土20 |
| 16 | 羽口 | SI89 堆2層 | 〃 | 口径(7.0)cm 外:指オサエ | 52-12 | 土13 |
| 17 | 羽口 | SI120 堆6層 | 〃 | 口径(6.0)cm 外:わずかに熔着滓 | 52-17 | 土14 |



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 備考 | 写真図版 | 登録 |
|----|-----|------------|-----|---|-------|-----|
| 1 | 鉄鎌 | SI30 堆1層 | 破損品 | 長頸式 長(31.5)mm 幅5.5mm 厚3mm 基部・先端欠 | 52-18 | 金5 |
| 2 | 鉄鎌 | SK107 堆1層 | 〃 | 長頸式 長(42.5)mm 幅6mm 厚3mm 基部・先端欠 | 52-19 | 金11 |
| 3 | 鉄鎌 | SI119 堆4層 | 〃 | 長頸式 長(61.9)mm 幅(6.4)mm 厚4.2mm 基部・先端欠 | 52-20 | 金9 |
| 4 | 鉄鎌 | SI28 掘方埋土 | 〃 | 長頸式 長33mm 幅5mm 厚2.5mm 基部・先端欠 | 52-21 | 金4 |
| 5 | 鉄釘 | SI12 床面 | 〃 | 長20mm 幅5.5mm 厚4mm | 52-22 | 金2 |
| 6 | 鉄釘 | SI109 堆3層 | 〃 | 長(61.2)mm 幅(5.5)mm 厚4.2mm | 52-23 | 金7 |
| 7 | 刀子 | SK129 堆5層下 | 〃 | 平造・両閃 緑金残存 刀身部欠 長(84)mm 茎胴部長59.5mm 刃元幅13mm 茎元幅8.5mm 棟厚3mm | 52-24 | 金12 |
| 8 | 刀子 | SI119 堆4層 | 〃 | 刀身部欠 長(8.8)mm 幅:刃(12)mm 茎9mm 厚:刃2.5mm 茎2.5mm | 52-25 | 金8 |
| 9 | 不明品 | SI28 堆積土 | 〃 | 長(58.5)mm 幅17mm 厚4.5mm | 52-26 | 金3 |

第92図 金属製品

からの出土である。12・13はすり面が扁平になった一面をもつもので、砥石の可能性もある。14・15は円礫もしくは亜角礫の縁辺に敲打痕が認められるものである。また、17~19は両面にすり面が認められる資料である。

d. その他(別時期の遺物)(第97図-1~18、図版54-1~17)

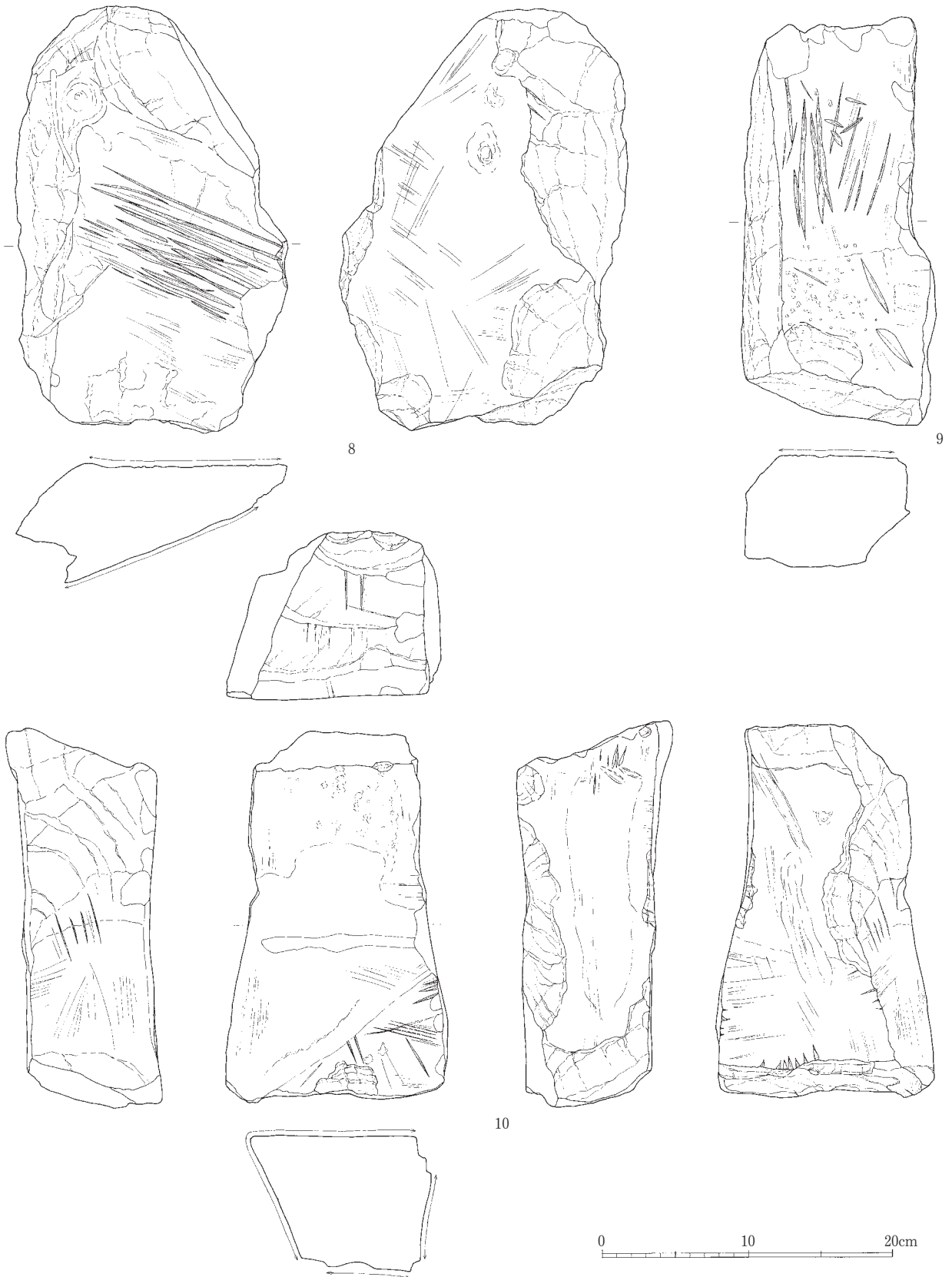
縄文・弥生土器：縄文土器は破片資料が約130点出土している。調査区南側の丘陵斜面部付近の古代遺構の堆積土などから比較的多く出土している。縄文早期末とみられる資料(1・3・5)が多い。

弥生土器は1点含まれている。6は浅鉢もしくは高環の口縁部破片であり、内面には沈線が巡って



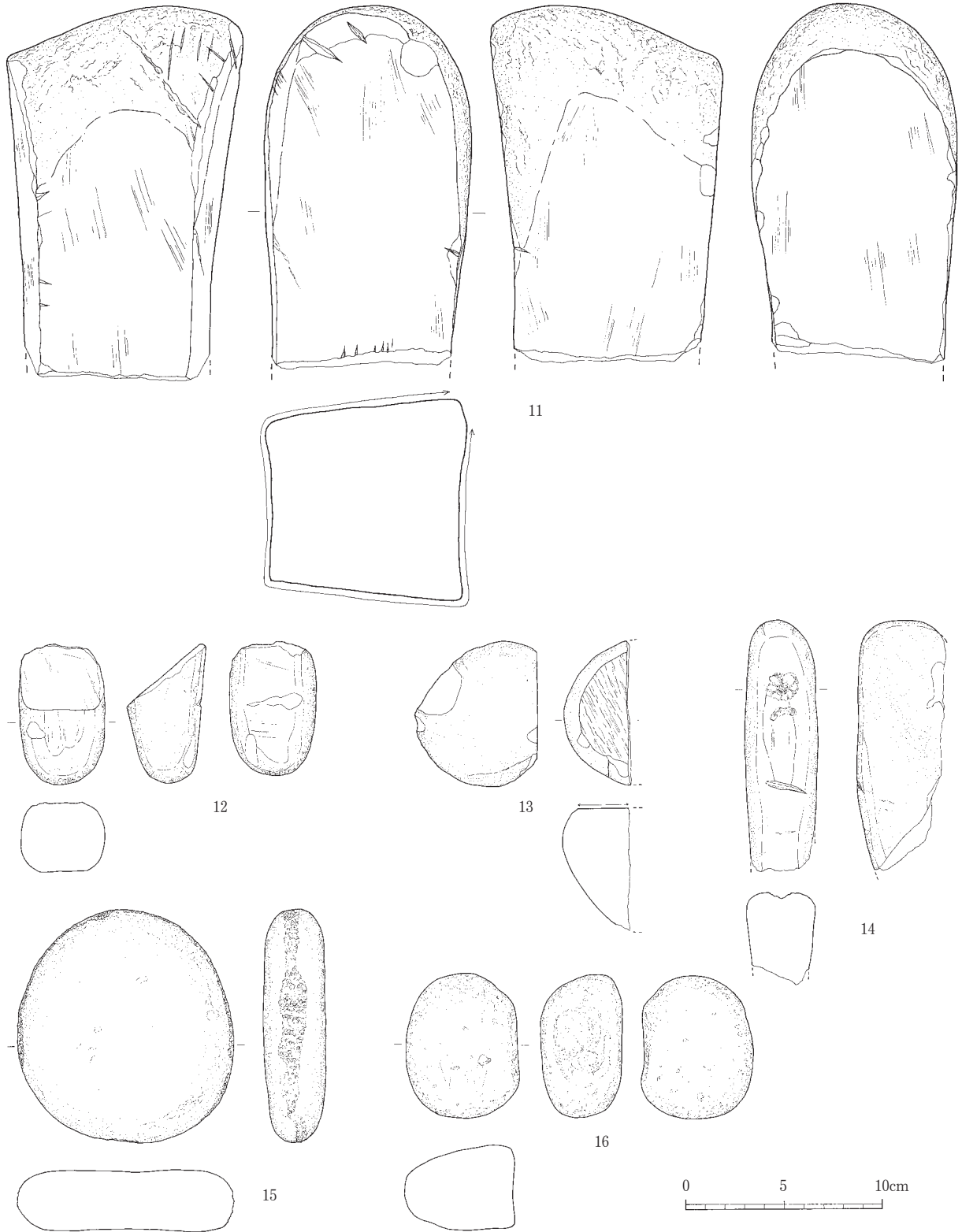
| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|----|------------|-----|---|------|-----|
| 1 | 砥石 | ビット20 柱痕跡 | 完形品 | 砂岩製 長5.6cm 幅3.5cm 厚2.7cm 角柱状 砥面 8 | 53-1 | 石56 |
| 2 | 砥石 | SI28 堆2層 | 〃 | 珪質凝灰質シルト岩製 長12.6cm 幅5.9cm 厚2.5cm 板状 砥面 5 | 53-2 | 石41 |
| 3 | 砥石 | SI51 床面 | 〃 | 珪質凝灰質シルト岩製 長13.5cm 幅6.5cm 厚2.2cm 板状 砥面 5 | 53-3 | 石43 |
| 4 | 砥石 | SA60 抜き穴 | 破損品 | 細粒凝灰岩製 長(9.3)cm 幅6.1cm 厚5.2cm 角柱状 砥面 4 | 53-4 | 石39 |
| 5 | 砥石 | SI28 堆2層 | 〃 | 珪質凝灰質シルト岩製 長(9.8)cm 幅(4.1)cm 厚(2.9)cm 角柱状 砥面3 | 53-5 | 石40 |
| 6 | 砥石 | SI154 掘方埋土 | 〃 | 砂岩製 長(8.1)cm 幅(5.1)cm 厚(4.1)cm 角柱状 砥面 1 | | 石50 |
| 7 | 砥石 | SI87 貯穴堆 | 完形品 | 頁岩製 長18.0cm 幅5.5cm 厚4.0cm 棒状 砥面 1 | 53-6 | 石48 |

第93図 石製品叢



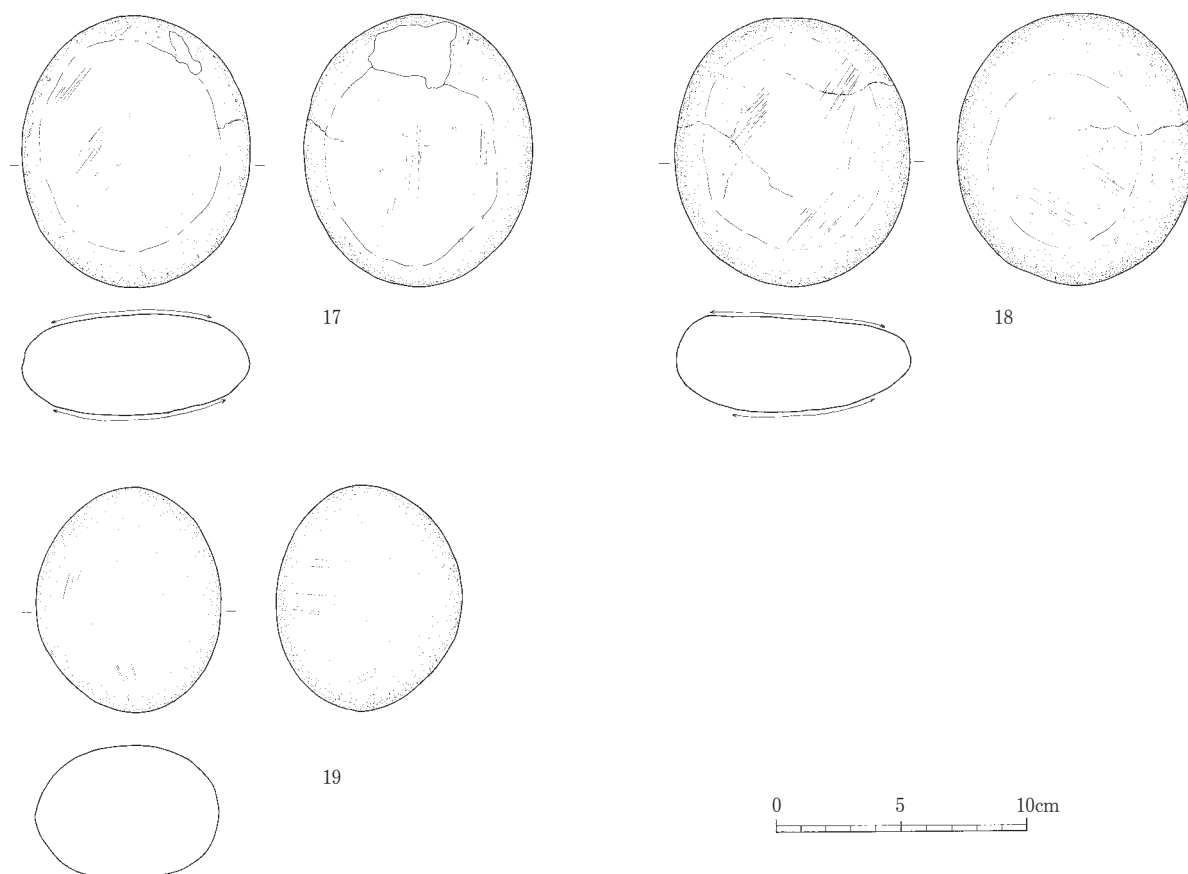
| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 備考 | 写真図版 | 登録 |
|-----|----|----------|-----|------------------------------------|------|-----|
| 8 | 砥石 | SI02B 床面 | 完形品 | 頁岩製 長29.6cm 幅18.7cm 厚8.2cm 大型品 砥面2 | 53-7 | 石57 |
| 9 | 砥石 | SI54 床面 | 〃 | 頁岩製 長28.6cm 幅13.6cm 厚7.8cm 大型品 砥面1 | 53-8 | 石58 |
| 10 | 砥石 | SI85 床面 | 〃 | 頁岩製 長25.8cm 幅15.3cm 厚9.5cm 大型品 砥面4 | 53-9 | 石60 |

第94図 石製品柑



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 備考 | 写真図版 | 登録 |
|-----|---------|-----------|-----|--------------------------------------|-------|-----|
| 11 | 砥石 | SI109 床面 | 破損品 | 砂岩製 長18.3cm 幅10.5cm 厚10.0cm 大型品 砥面4 | 53-10 | 石61 |
| 12 | すり石(砥石) | SI110 堆1層 | 完形品 | 砂岩製 長6.9cm 幅4.4cm 厚4.2cm 一面は平坦 | | 石31 |
| 13 | すり石(砥石) | SI28 床面 | 破損品 | 砂岩製 長(7.3)cm 幅(3.2)cm 厚(6.1)cm 一面は平坦 | 53-11 | 石21 |
| 14 | すり石(敲石) | SI51 床面 | 〃 | 砂岩製 長(12.8)cm 幅3.7cm 厚(4.3)cm 一面に敲打痕 | 53-13 | 石24 |
| 15 | 敲石(すり石) | SI85 床面 | 完形品 | 砂岩製 長11.8cm 幅11.0cm 厚3.1cm 周縁に敲打痕 | | 石26 |
| 16 | すり石 | SI02B 床面 | 〃 | 安山岩製 長7.3cm 幅5.6cm 厚4.1cm | 53-12 | 石17 |

第95図 石製品類



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 備考 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-----|------------|-----|---------------------------|-------|-----|
| 17 | すり石 | SI27 堆 | 完形品 | 砂岩製 長10.9cm 幅9.1cm 厚4.1cm | 53-15 | 石20 |
| 18 | すり石 | SI27 カマド脇 | 〃 | 砂岩製 長10.8cm 幅9.4cm 厚4.1cm | 53-14 | 石18 |
| 19 | すり石 | SI85 床面St2 | 〃 | 砂岩製 長9.1cm 幅7.4cm 厚5.3cm | | 石27 |

第96図 石製品棺

いる。弥生中期の柵形冢式に属するものであろう。

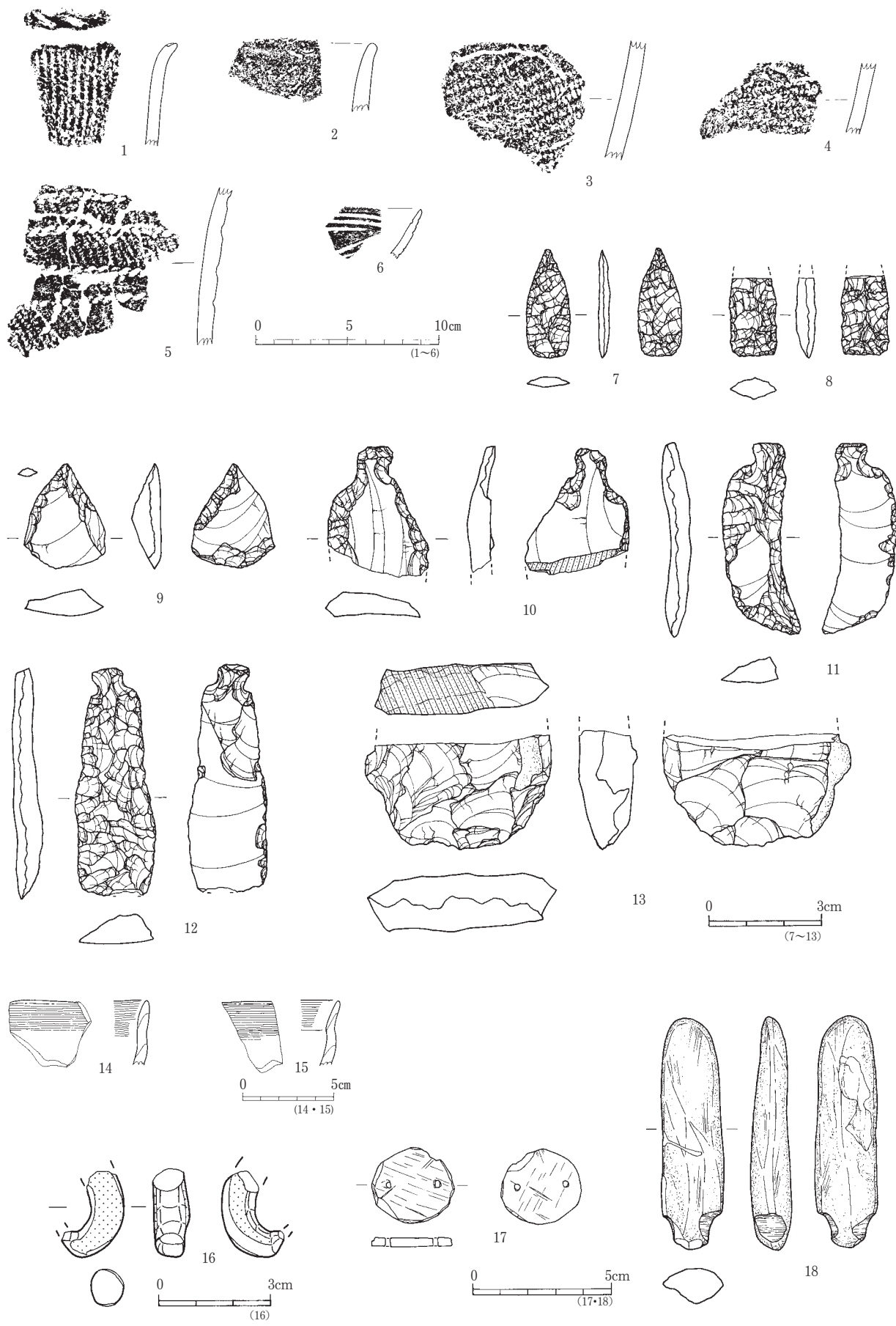
縄文時代石器：石鏃（7・8）、石錐（9）、石匙（10～12）、篋状石器（破損品か）（13）などが出土している。これらのほか、すり石、石核、剥片などが50点ほどある。石材は珪質頁岩が多く、他に凝灰岩・黒曜石・碧玉などがみられる。縄文土器と同様、調査区南側の丘陵南斜面付近から多く出土している。

古墳時代（中期か）の土器：土師器環の口縁部破片が2点（14・15）出土している。口縁部はわずかにくびれて外傾する。2点とも内外面に赤彩が施されている。

土製勾玉：1点（16）出土。長さ2.5cm、径0.9cmほどの大きさであるが、両端は欠損し、両面には新しいキズ跡が残る。断面形は円形状である。

石製模造品：頁岩製の有孔円板が1点（17）ある。ほぼ完形で、径2.9cm、厚さ3mmほどである。

不明石製品：細粒砂岩製の不明石製品（18）である。やや扁平な棒状礫を素材にして、その一端の両側を擦って抉りを施している。礫の表面にも擦痕が認められる。大きさは長さ8.4cm、幅2.3cm、厚さ1.5cmほどである。



第97図 その他の出土遺物

その他の遺物観察表

| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 備考 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|-----------|-----|---|-------|-------|
| 1 | 縄文土器 | 14トレンチ | 破片 | 撚糸文 口唇部に刻み | 54-1 | 縄4 |
| 2 | 縄文土器 | 遺確 | 〃 | 単節RL | 54-2 | 縄5 |
| 3 | 縄文土器 | SX01 | 〃 | 単節LR | 54-3 | 縄3 |
| 4 | 縄文土器 | SK55 堆1層 | 〃 | 単節RL | 54-4 | 縄2 |
| 5 | 縄文土器 | SK34 堆1層 | 〃 | 単節RL + RL押圧縄文 | 54-5 | 縄1 |
| 6 | 弥生土器 | SK99 堆 | 〃 | 裏面にも沈線 枳形閉式 | 54-6 | 弥1 |
| 7 | 石鎌 | カクラン | 完形品 | 珪質頁岩製 長29.0mm 幅11.8mm 厚2.8mm | 54-7 | 石1 |
| 8 | 石鎌 | SI28 床面 | 破損品 | 珪質頁岩製 長(21.5)mm 幅13.0mm 厚5.3mm 先端欠 | 54-8 | 石2 |
| 9 | 石鎌 | SI28 遺確 | 完形品 | 珪質凝灰質シルト岩製 長28.0mm 幅22.2mm 厚7.8mm | 54-9 | 石6 |
| 10 | 石匙 | SX114 遺確 | 破損品 | 珪質頁岩製 長(34.5)mm 幅(26.8)mm 厚(5.9)mm 先端欠 | 54-10 | 石5 |
| 11 | 石匙 | SI109 遺確 | 完形品 | 珪質頁岩製 長61.8mm 幅21.5mm 厚8.1mm | 54-11 | 石4 |
| 12 | 石匙 | SI28 掘方埋土 | ほぼ完 | 珪質頁岩製 長51.4mm 幅16.0mm 厚7.1mm 先端わずかに欠 | 54-12 | 石3 |
| 13 | 籠状石器? | SX97 堆1層 | 破損品 | 珪質頁岩製 長(29.6)mm 幅(40.5)mm 厚(15.5)mm 籠状石器の破損品か | | 石8 |
| 14 | 土師器 環 | SI12 | 破片 | 口縁部片 内外面赤彩。 | 54-14 | I-152 |
| 15 | 土師器 環 | SI87 掘方埋土 | 〃 | 口縁部片 内外面赤彩。 | 54-13 | I-151 |
| 16 | 勾玉 | SI120 堆4層 | 破損品 | 径0.9cm 両端欠 表面にキズ | 54-15 | 土1 |
| 17 | 石製模造品 | SI12 | 完形品 | 頁岩製 有孔円板 径29.0mm 厚3.0mm | 54-16 | 石14 |
| 18 | 不明石製品 | SI27 堆 | 〃 | 細粒砂岩製 長8.4cm 幅2.3cm 厚1.5cm 棒状礫の端部両側に擦りによる抉り面 両面にも擦痕 | 54-17 | 石15 |

柑 II区

1) 検出状況

前述の I 区丘陵部南側の低地部に当たる。標高は3.0m前後であり、I 区丘陵部との比高差は5～12mほどである。

丘陵裾部に近い区域から、灰白色火山灰（10世紀前葉頃）に覆われた古代の水田跡と中世のものと思われる溝跡などを検出した。丘陵裾部から離れるにしたがって湿地帯（スクモ層）へと移行するが、西から東方向へ流下するとみられる旧河道（灰白色火山灰降下時よりも新时期）なども一部確認された。

2) 遺構と遺物

A. 水田跡

【SX40水田跡】（第98図、図版31-5～7）

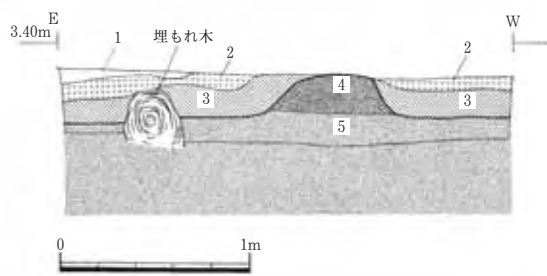
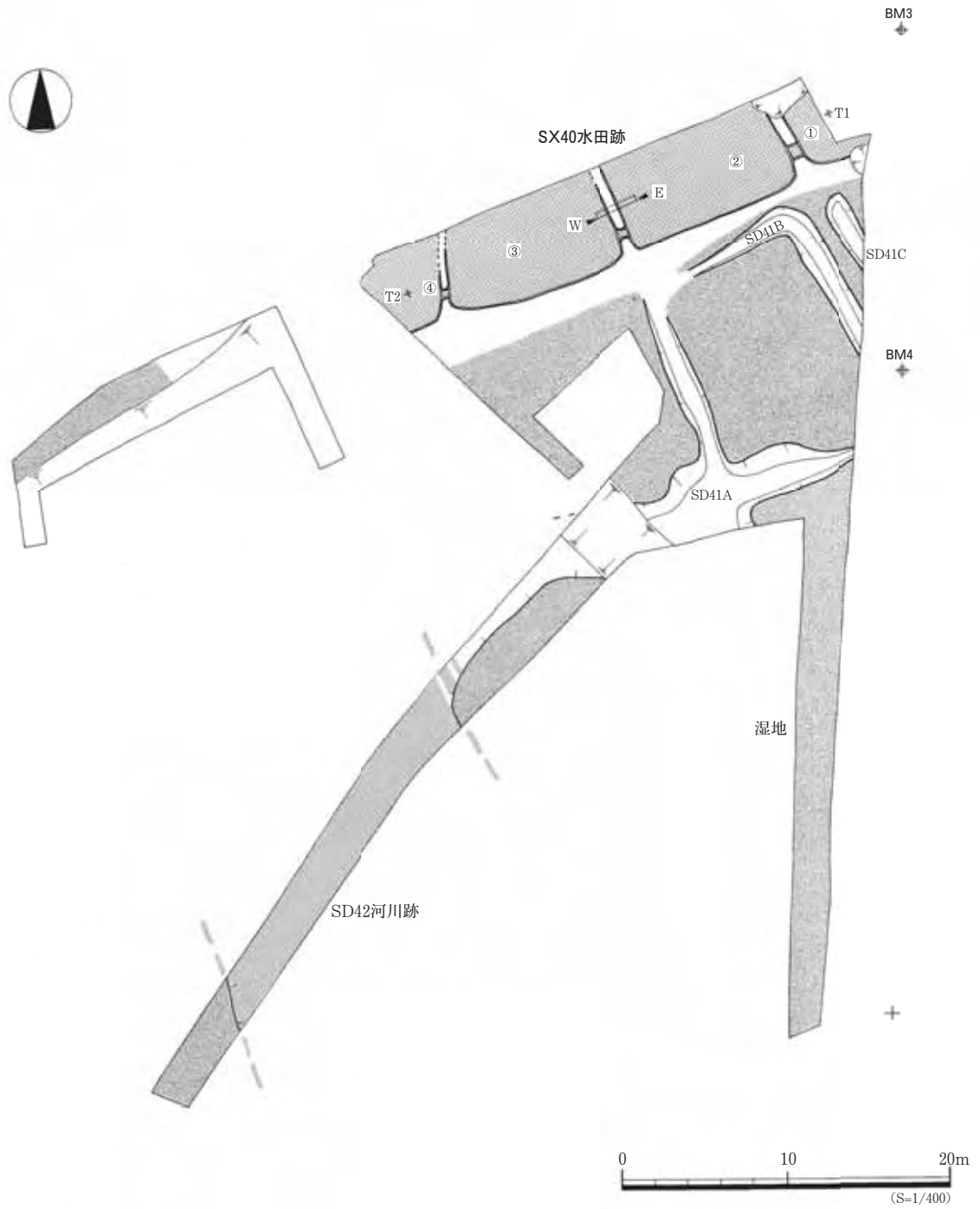
丘陵裾部を走る町道の東南側の低地部で検出した。灰白色火山灰層に覆われている。町道寄りの部分は現代の耕作により一部削平されている。

検出できたのは東西方向に並ぶ4枚の田面（①～④）とこれに伴う畦畔・水口状遺構である。未調査区域（町道下）へと延びており、全体の形状や規模は不明である。検出できた区域では、いずれも隅丸方形状を呈している。田面②の南東辺は10.8m（畦畔芯々間11.6m）、田面③の南東辺は10.96m（畦畔芯々間11.5m）である。北西辺はいずれも残存長で6.0m以上である。田面標高は3.0mである。

水田耕作土は灰白色火山灰層（1次堆積）に覆われており、場所によってはその上がさらにやや汚れた灰白色火山灰層（二次堆積）に覆われている。水田耕作土は黒褐色粘土で、層厚15～18cmである。耕作土底面には、下層の埋もれ木が一部表出している箇所もみられた。

畦畔は上幅40～80cm・基底部幅56～88cm、最大高13cmである。南東側では各水田間を連結する水口状遺構（上幅50～80cm）が3ヶ所確認された。

遺物は自然流入とみられる土師器破片が上層から若干数出土しているが、水田耕作土などからの出土はない。



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|--------------|----|--------------------------------|
| 1 | 灰(5Y4/1) | 粘土 | 青灰色の凝灰岩小礫含む。黒色シルト質粘土をブロック状に含む。 |
| 2 | — | — | 灰白色火山灰層。黒褐色粘土混じる。 |
| 3 | 黒褐(7.5YR3/1) | 粘土 | 水田耕作土。 |
| 4 | 黒(5YR1.7/1) | 〃 | 畦畔土。植物の細かい根を含む。 |
| 5 | 黒褐(7.5YR3/2) | 〃 | スクモ層。植物根を多く含む。 |

第98図 II区遺構全体図とSX40水田跡

B. 溝跡

【SD41溝跡】（第98図・第99図、図版31-7）

前述のSX40水田跡の南側に位置する。スクモ混じりの灰白色火山灰層上面で検出した。方形状に巡るとみられる溝跡である。それぞれSD41A・SD41B・SD41Cと付したが、SD41AとSD41Bが一つの方形状区画をなし、SD41Cはさらに東側の方形状区画をなす溝跡の一部とみられる。各溝跡は南辺側で連結して西側のSD42河川跡（後述）へと続いていた可能性がある。

SD41Aは西辺が上幅1.6m・下幅0.8m・深さ約20cm、南辺が上幅0.8~3.0m・下幅0.5~1.4m・深さ約20cm、SD41Bは北辺が上幅0.4~1.4m・下幅0.4~1.1m・深さ約5cm、東辺が上幅1.5m・下幅0.9m・深さ約30cmである。SD41Cは上幅1.3~1.8m・下幅0.9~1.0m・深さ約20cmである。

各溝跡の堆積土は、黒褐色シルトの自然堆積土である。

遺物はSD41Aの東辺堆積土中から中世陶器片が2点（第99図-1・2）出土している。



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|-------|------|----|--------|-------|----|
| 1 | 中世 陶器 | 堆積層 | 破片 | 内外面：ナデ | 54-18 | 陶3 |
| 2 | 中世 陶器 | 〃 | 〃 | 内外面：ナデ | 54-19 | 陶2 |

第99図 SD41溝跡出土遺物

C. その他

【SD42河川跡】（第98図）

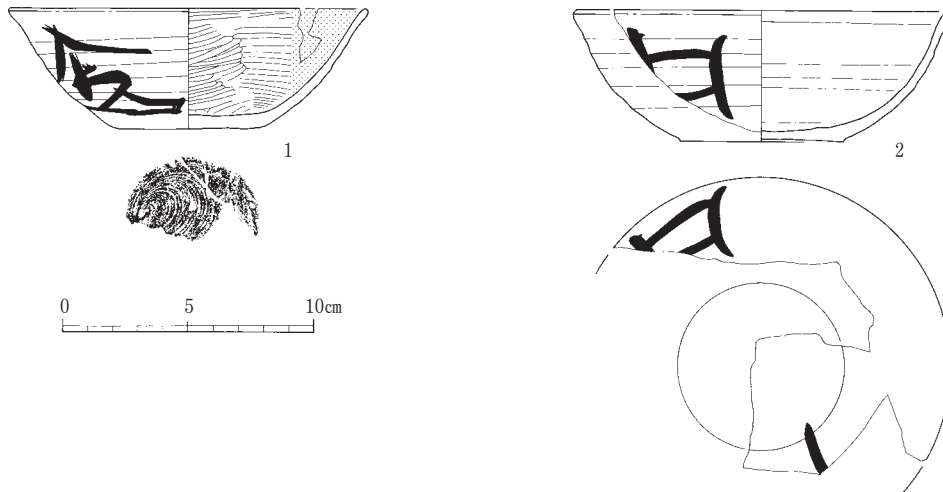
SX40水田跡、SD41溝跡の南西側に位置する。スクモ混じりの灰白色火山灰層上面で検出した。灰白色火山灰層を切っており、これよりも新しい。

平面での確認に留めて掘り下げは行っていないが、堆積土には砂礫を含む水成堆積層が認められることから旧河道の一部と判断した。確認した地点では幅が20mほどある。現地形などを考慮すると、西から東方向へ流下していたものと考えられる。

遺物は出土していない。

【湿地出土の遺物】（第98図・第100図、図版55-1・2）

SX40水田跡の南側で、スクモ混じりの灰白色火山灰層を掘り下げていた際に墨書土器が2点（第100図-1・2）出土した。1はロクロ調整の土師器坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。2は須恵器坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。ともに体部外面に墨書が施されている。



| No | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|----|-------|----------|-----|---------|-------|-----|--------------------------------------|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 環 | スクモ混じり灰白 | 1/2 | (14.4) | (5.6) | 4.8 | 外:ロクロナデ 体部に墨書あり 底:回転糸切り 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 55-1 | II-2 |
| 2 | 須恵器 環 | スクモ混じり灰白 | 1/2 | (15.2) | (6.6) | 5.2 | 内外:ロクロナデ 体部外面に墨書あり 底:回転糸切り | 55-2 | II-1 |

第100図 湿地出土土器

桓 Ⅲ区

1) 検出状況

調査地点は丘陵頂部北西端から北斜面にかけての区域（標高15m～25m）で、開田などによる削平がかなり及んでいる場所である。ただ、削平があまり及んでいない調査区南側の頂部付近の緩斜面では古代の竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基が検出された。また、その近辺では時期不明の掘立柱建物跡5棟、柱穴列1条などが確認された（第101図）。

この他、調査区北側斜面部では焼成遺構1基が検出されたが、これ以外には認められなかった。

2) 遺構と遺物

A. 竪穴住居跡

【SI1001住居跡】（第102図・第103図、図版32-2・3）

調査区南側の東端に位置する。東半部は調査区外へと延びている。SX1012竪穴状遺構、SB1009・SB1010・SB1011掘立柱建物跡と重複し、SX1012より新しく、SB1009・SB1010・SB1011よりも古い。

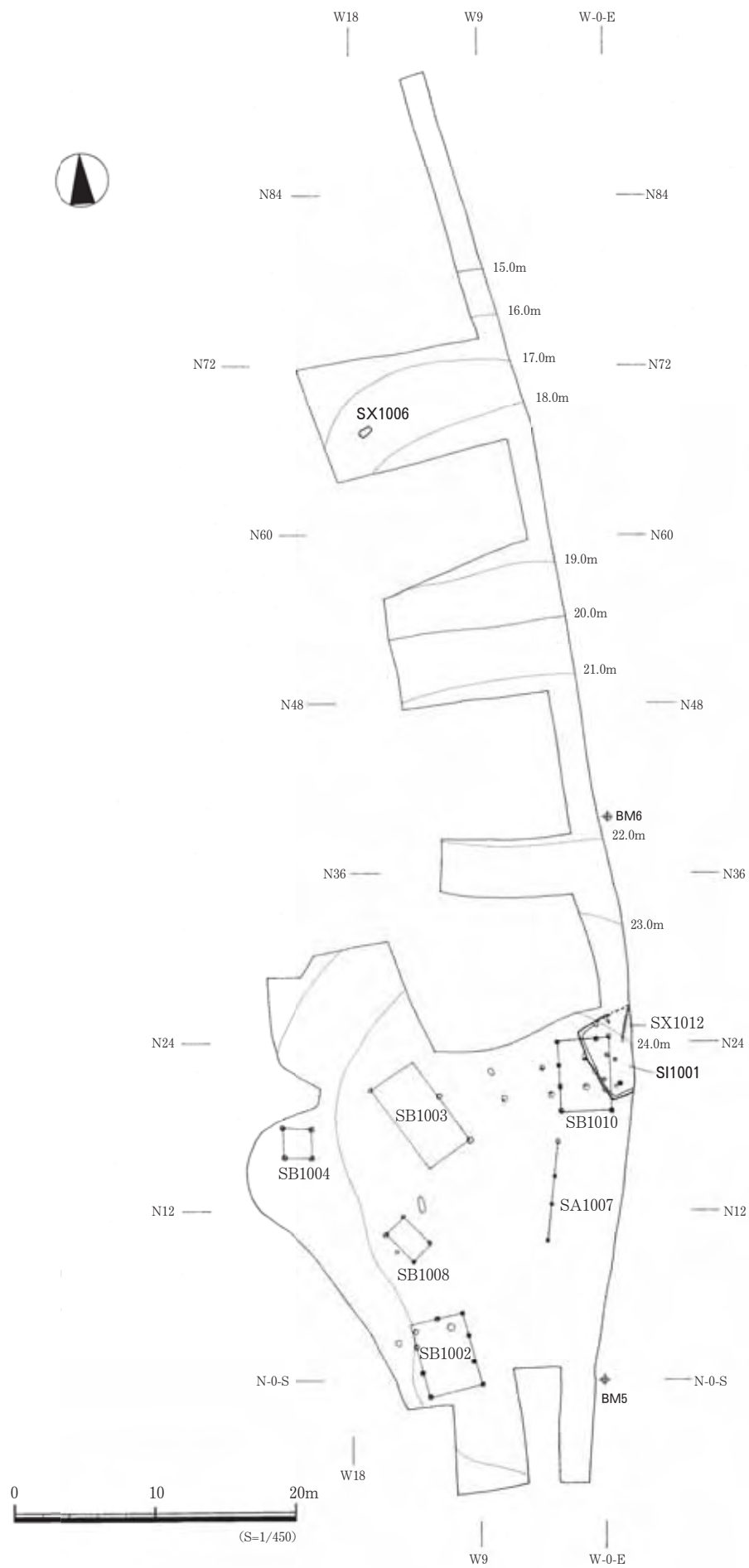
〔平面形・規模〕平面形は方形状を呈するとみられる。規模は西辺で5.4mである。

〔方向〕西辺で見ると北で西へ約25°偏する。

〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は南西隅で床面から33cmである。

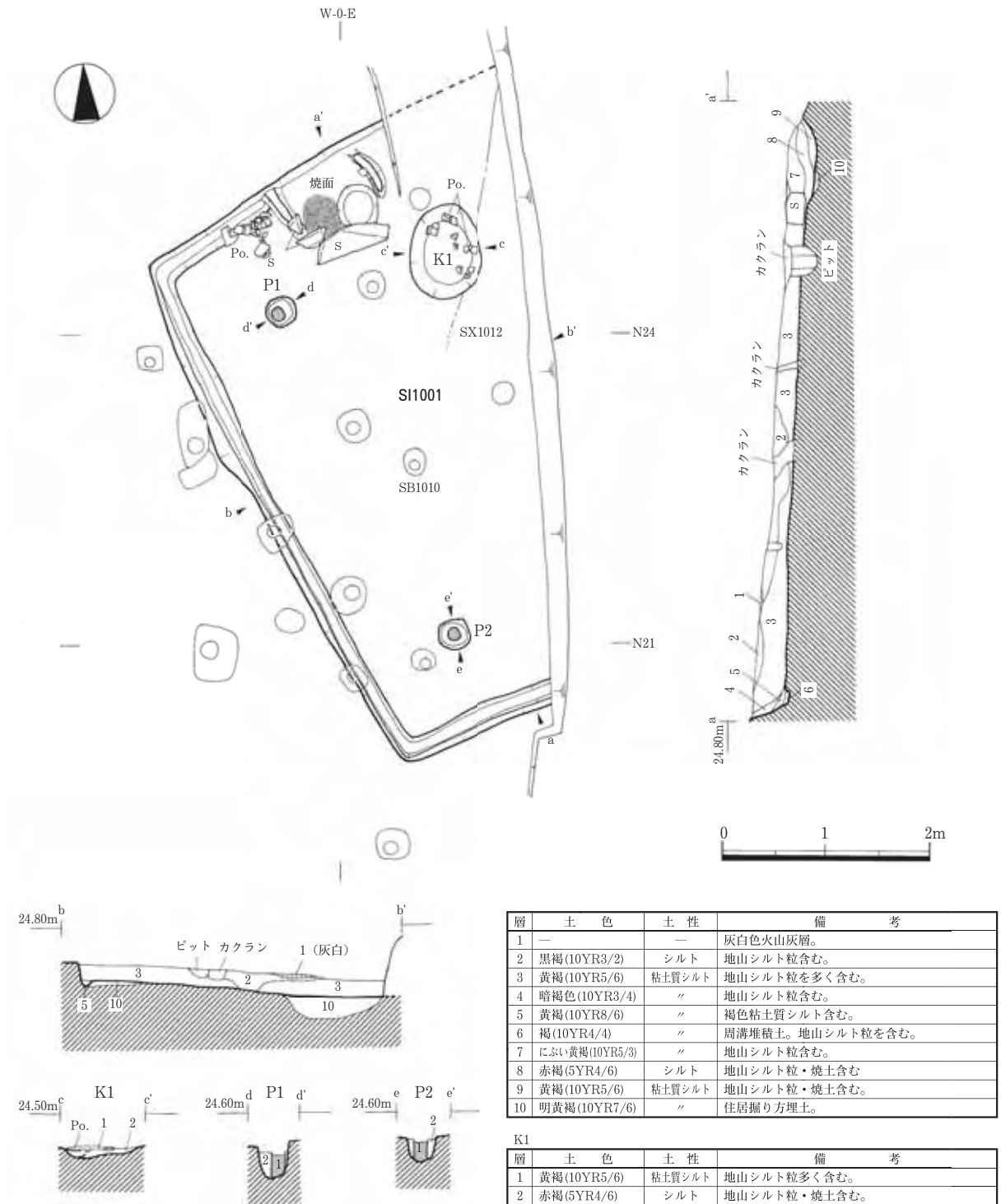
〔床面〕一部が住居掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕主柱穴は2個（P1・P2）検出された。住居平面形の対角線上に4個配置されているものとみられる。P1は長軸30cm・短軸27cmの楕円形で深さ32cm、P2は長軸30cm・短軸26cmの楕円形で深さ24cmである。P1とP2の柱間は3.5mである。柱穴掘り方埋土は地山シルトブロックを多く含む褐色シルトである。いずれも径12cmほどの円形状の柱痕跡が認められる。

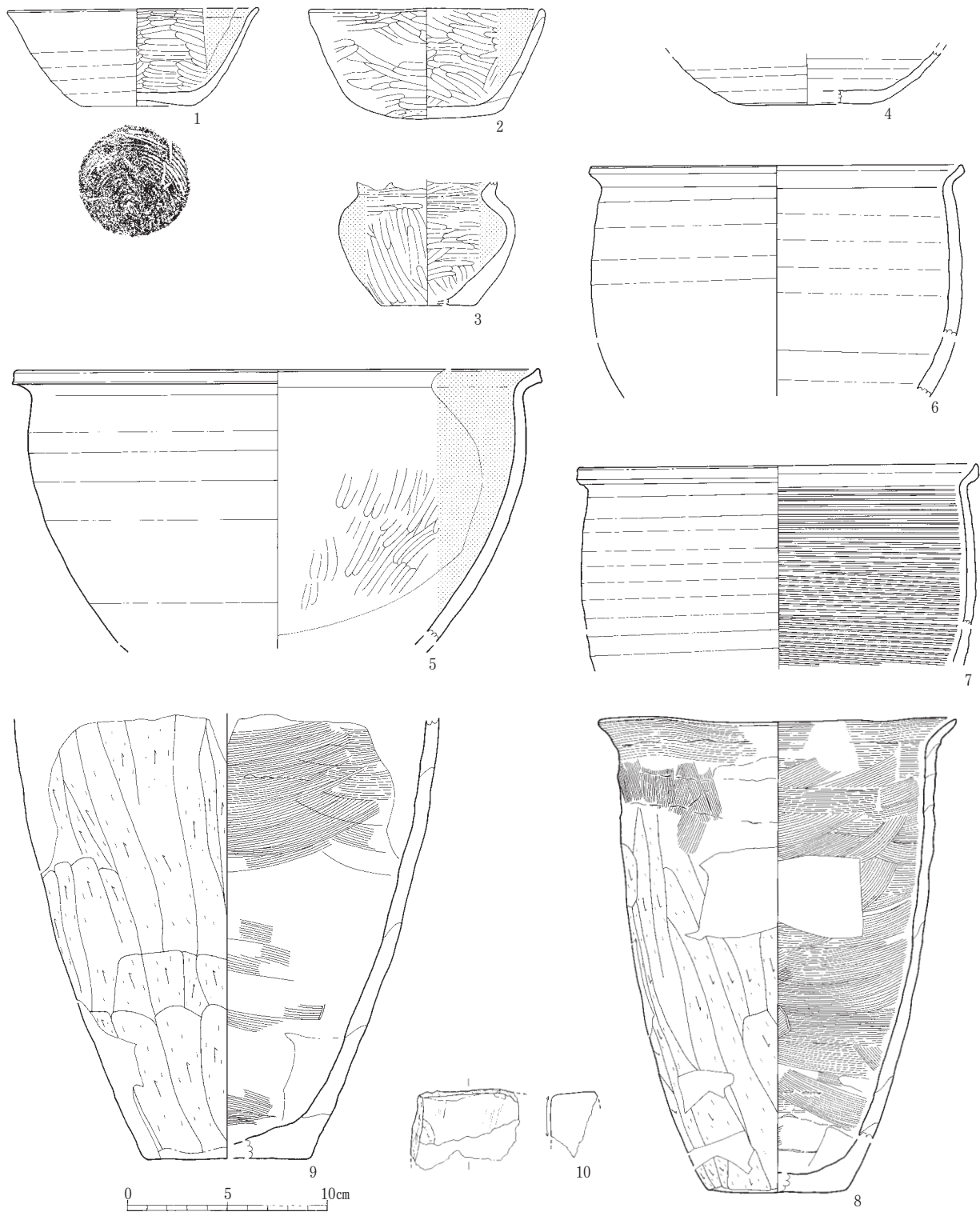


第101図 III区遺構全体図

〔カマド〕北辺に付設されている。煙道は削平されて残っていない。燃焼部側壁も残りが悪く、残痕を留めるに過ぎないが、柱状の角礫を埋め込んで明黄褐色シルトによって構築していたものとみられる。燃焼部底面には部分的に焼面が残っている。また、燃焼部東部分には長軸50cm・短軸40cmほどの浅い皿状の窪みがある。この窪みには顕著な焼面は認められなかった。焚き口部には大型の垂角礫(75×25cm)があるが、台石などに利用していたものをカマドの廃絶時に置いたものと考えられる。



第102図 SI1001竪穴住居跡



| No. | 器種 | 遺構/層 | 残存 | 法量 (cm) | | | 特徴 | 写真図版 | 登録 |
|-----|---------|-----------|-----|--------------------------------|-------|------|--|------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | |
| 1 | 土師器 坏 | カマド | 1/2 | (12.0) | 5.6 | 4.9 | 外:ロクロナデ 底:回転系切り 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 55-3 | Ⅲ-1 |
| 2 | 土師器 坏 | カマド+焼土層 | 1/2 | (11.8) | - | 5.5 | 外:ヘラミガキ 底:ヘラケズリ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 55-4 | Ⅲ-2 |
| 3 | 土師器 小型壺 | 住居掘り方埋土 | 2/5 | - | (4.6) | - | 内外:ヘラミガキ→黒色処理 | 55-5 | Ⅲ-5 |
| 4 | 須恵器 坏 | 焼土層 | 1/5 | - | (7.2) | - | 内外:ロクロナデ 底:切り離し不明→ヘラケズリ | 55-8 | Ⅲ-4 |
| 5 | 土師器 鉢 | 床面 | 1/5 | (26.2) | - | - | 外:ロクロナデ 内:ヘラミガキ→黒色処理 | 55-6 | Ⅲ-10 |
| 6 | 土師器 甕 | 焼土層+貯蔵穴+堆 | 1/9 | (18.8) | - | - | 内外:ロクロナデ | 55-7 | Ⅲ-8 |
| 7 | 土師器 甕 | カマド | 1/8 | (20.0) | - | - | 外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→カキ目 | 56-1 | Ⅲ-6 |
| 8 | 土師器 甕 | 貯蔵穴+焼土層 | 1/3 | (18.0) | (7.0) | 23.6 | 外:(口)ヨコナデ(胴)ヘラケズリ→一部ナデ 底:ヘラケズリ 内:(口)ヨコナデ(胴)ナデ・ヘラナデ | 56-3 | Ⅲ-7 |
| 9 | 土師器 鉢 | 堆積土 | 1/8 | - | (8.0) | - | 外:ヘラケズリ 内:ナデ・ヘラナデ | 56-2 | Ⅲ-9 |
| 10 | 砥石 | 堆積土 | 破損品 | 砂岩製 長(5.4)cm 幅(3.9)cm 厚(2.5)cm | | | | 56-4 | 石83 |

第103図 SI1001住居跡出土遺物

なお、カマド左側の周溝部分からは土師器甕破片がまとまって出土している。

〔貯蔵穴状土壌〕貯蔵穴状土壌（K1）はカマド右下側にある。長軸90cm・短軸70cm、深さ12cmほどの浅い土壌で、焼土を含む赤褐色粘土で人為的に埋め戻されている。

〔周溝〕確認された壁際ではすべて巡っている。幅15～20cm、深さ5～10cmほどで、褐色粘土質シルトが自然堆積している。壁材痕は認められなかった。

〔堆積土〕3層に大別される。1層は灰白色火山灰層、2層は黒褐色シルト、3層は地山シルト粒を多く含む黄褐色粘土質シルトで、いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕遺物は比較的多く出土している。住居床面からは土師器鉢（第103図-5）、カマド内堆積土から土師器坏（第103図-1・2）・甕（第103図-7）、須恵器坏（第103図-4）、貯蔵穴状土壌から土師器甕（第103図-6・8）、住居掘り方埋土から土師器小型壺（第103図-3）などが出土している。1の土師器坏はロクロ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。5～7はロクロ調整、2・3・8は非ロクロ調整である。また、4の須恵器坏の底部は手持ちヘラケズリが施されている。

なお、住居堆積土からは土師器坏・甕（第103図-9）、須恵器坏・高台坏、砥石（第103図-10）、不明鉄製品（断片）など、また、縄文土器片が数点出土している。

B. 竪穴状遺構

【SX1012竪穴状遺構】（第104図）

前述のSI1001住居掘り方埋土の下で検出された。竪穴住居跡の可能性があるが、西辺の一部分のみの検出なので、ここでは竪穴状遺構としておいた。大半は東側の調査区外へのび、南西隅はSI1001住居掘り方に壊されている。

壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は床面から12cmである。周溝は検出されなかった。地山を床面とし、ほぼ平坦である。調査区の壁際では焼面がわずかに検出されている。

堆積土は1層認められる。地山シルト粒を多く含む黄褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は出土していない。

C. 掘立柱建物跡

【SB1002建物跡】（第105図）

調査区南端の丘陵頂部付近の西緩斜面で検出された、桁行3間・梁行2間とみられる南北棟である。柱穴は8個、柱痕跡は6個で確認している。柱穴の一部は削平で失われたとみられる。

平面規模は桁行が東側柱列で総長5.2m、柱間寸法は北から1.65m・1.95m・1.6mである。西側柱列は削平を受けており、詳細不明である。梁行は北側柱列で推定総長3.9m、南側が総長3.8mである。建物方向は西側柱列でみると北で西へ42°偏する。

柱穴掘り方は隅丸長方形を基調とし、大きさは長軸30～40cm・短軸25～30cm、深さは最も深いもので32cmである。柱穴掘り方埋土は地山シルト粒、凝灰岩小礫を含む褐色シルトである。柱痕跡は径12～15cmの円形状で、暗褐色シルトが堆積していた。

遺物は出土していない。

【SB1003建物跡】(第106図)

調査区南側の丘陵頂部付近の西緩斜面で検出された、桁行4間・梁行2間と推定される南北棟である。柱穴は4個検出されたが、ほかは削平を受けて消失したものとみられる。柱痕跡は確認されていない。3個の柱穴には底部に扁平な礫が据えられている。

平面規模は桁行が推定総長7.2m、柱間寸法はP1-P2間は3.8m、P3-P4間は1.8mである。梁行は推定で総長3.7mである。建物方向は西側柱列で見ると北で西へ約32°偏する。

柱穴掘り方は隅丸方形～円形を基調とし、大きさは残りの良いもので径もしくは一辺が40～45cmほどである。深さは最も深いもので16cmである。柱穴の底面には扁平な角・亜角礫が据えられている。埋土は地山シルトブロックを含む黄褐色シルトである。

遺物は出土していない。

【SB1004建物跡】(第106図)

調査区南側の丘陵頂部付近の西緩斜面で検出された、南北1間・東西1間と推測される建物跡である。柱穴は4個あり、いずれも柱痕跡を確認している。

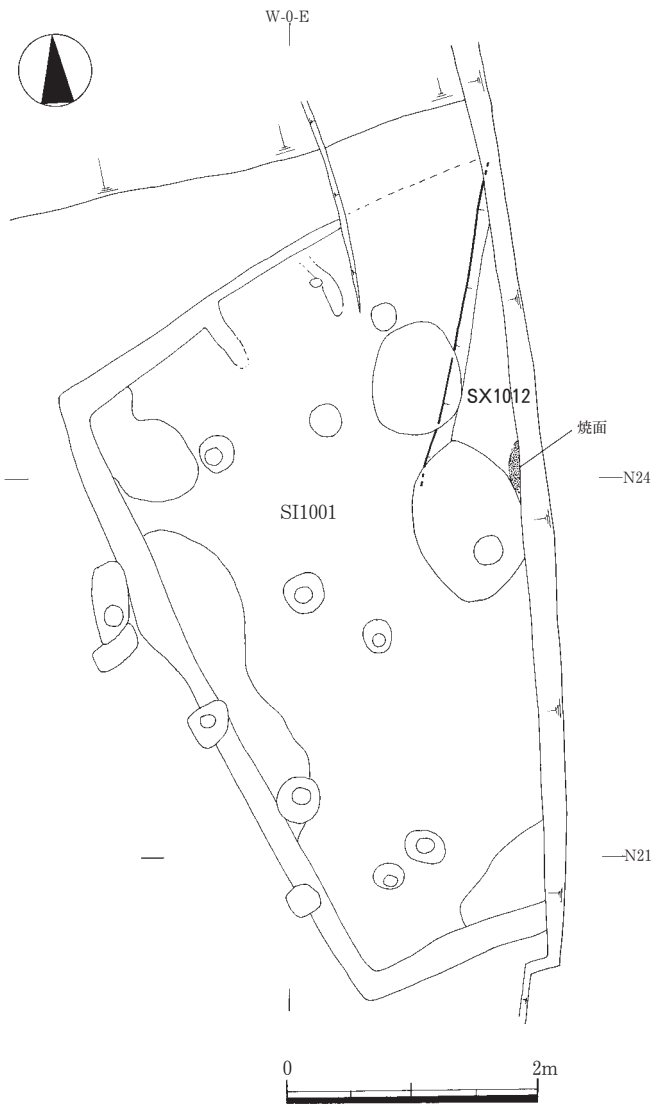
平面規模は北辺2.2m・南辺2.1m・東辺2.1m・西辺2.1mである。建物方向は東側柱列で見ると北で東へ約3°偏する。

柱穴掘り方は隅丸長方形～円形を基調とし、大きさは長軸38cm～46cm・短軸30cm～38cm、深さは12cm～30cmである。柱穴掘り方埋土は地山ブロックを含む褐色シルトである。柱痕跡は径16cm～18cmの円形で、黒褐色シルトが堆積していた。

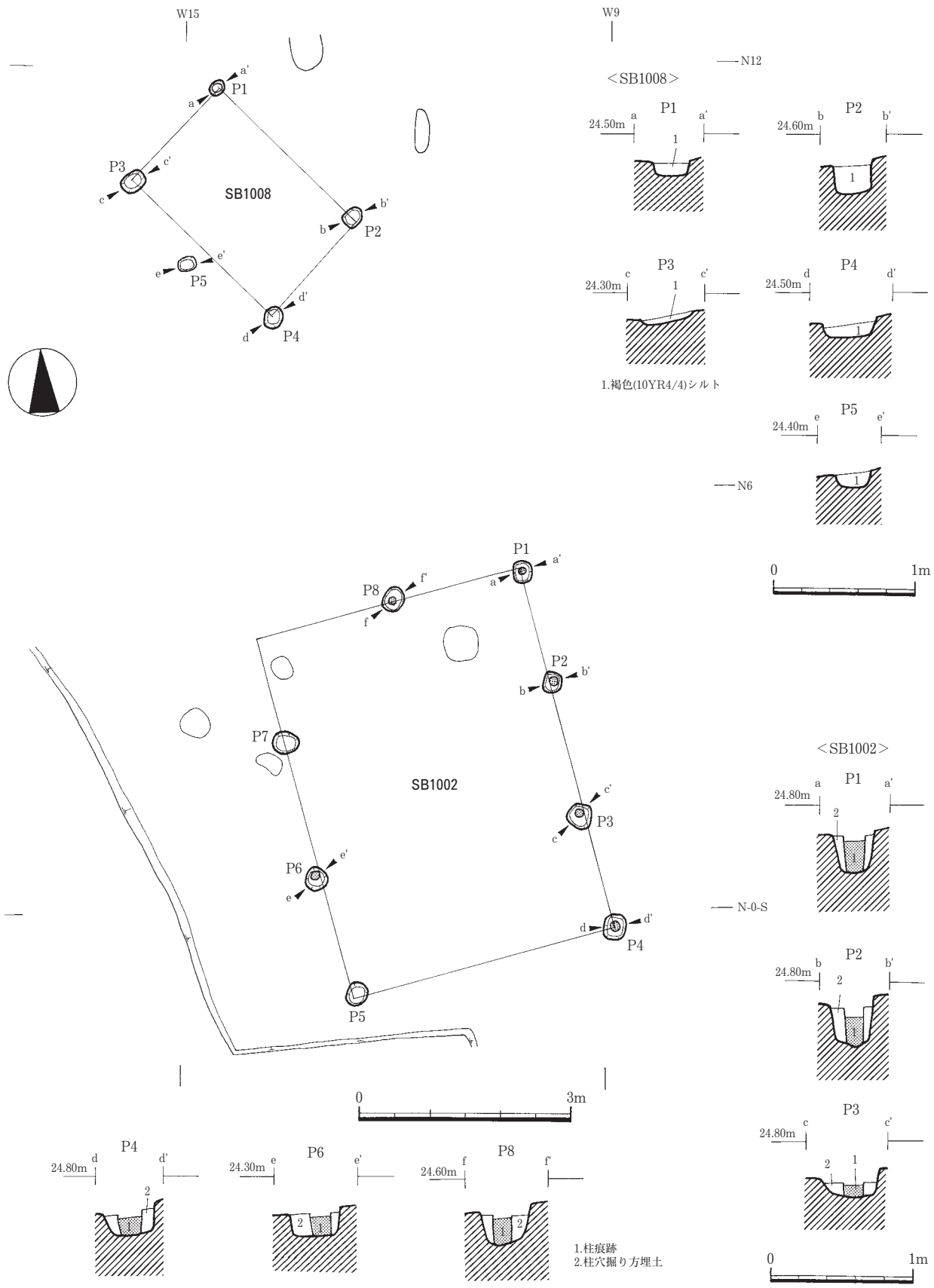
遺物は出土していない。

【SB1008建物跡】(第105図)

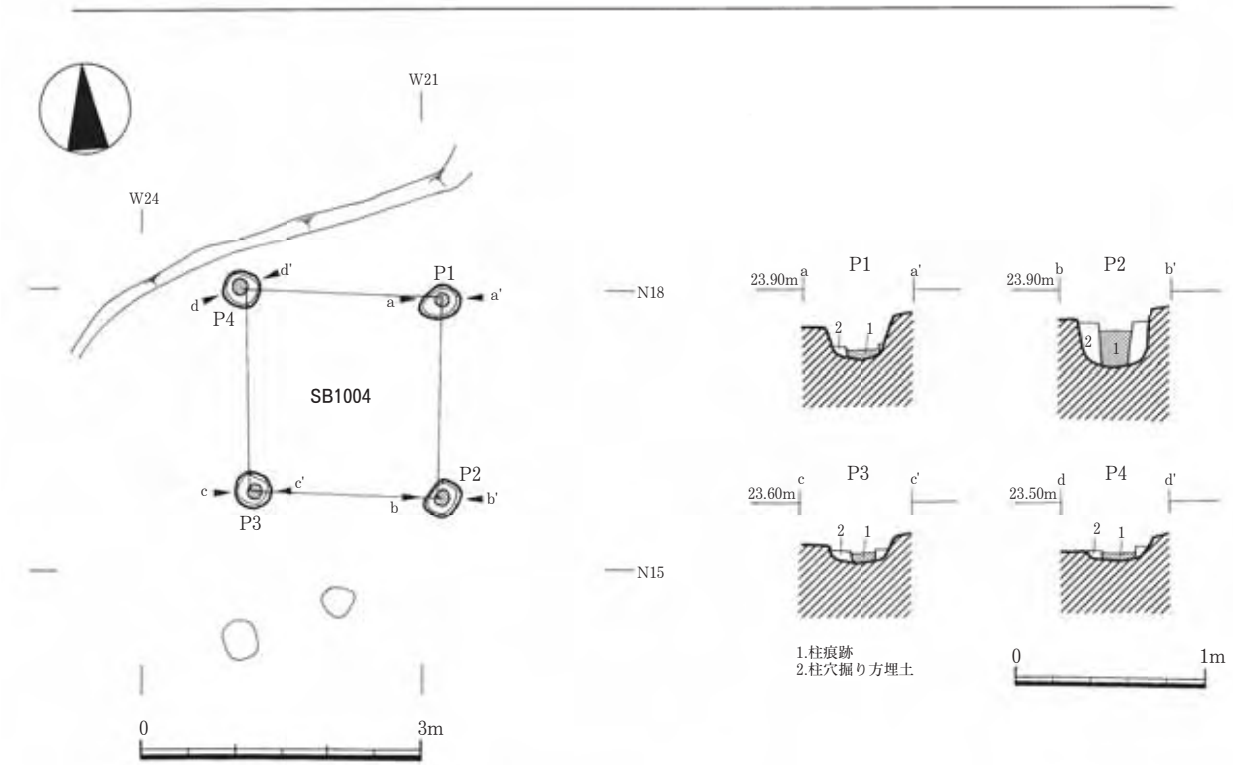
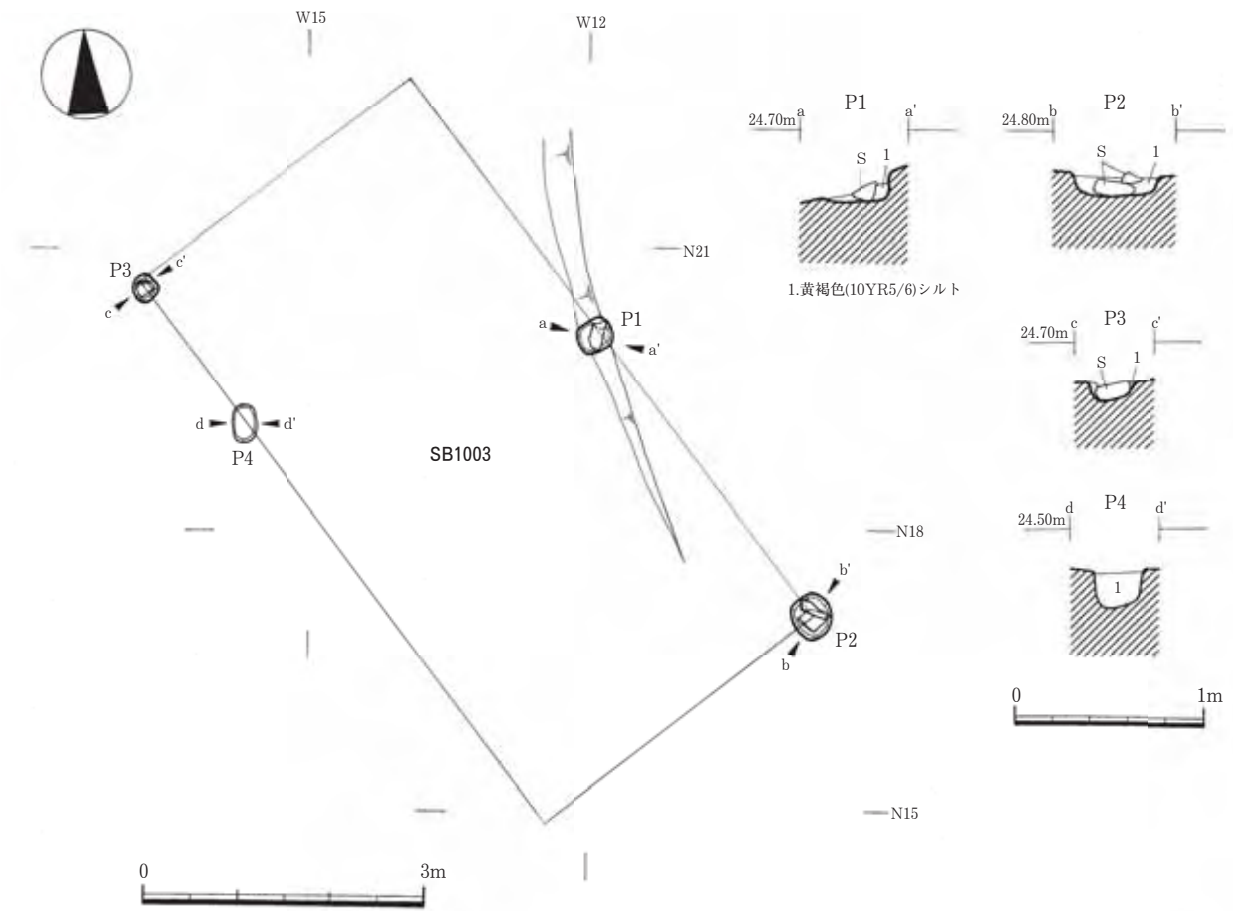
調査区南側の丘陵頂部付近の西緩斜面で検出された、桁行1間・梁行1間と推測される南北棟である。いずれにも柱の抜き取り穴とみられるピットが認められ、柱痕跡は確認されなかった。桁行西側には付属するとみられる柱穴(柱抜き取り穴)が1個ある。



第104図 SX1012竪穴状遺構



第105図 SB1002・SB1008掘立柱建物跡



第106図 SB1003・SB1004掘立柱建物跡

平面規模（推定）は桁行が西側で2.8m、東側で2.8m、梁行が北側・南側ともに1.8mである。建物方向は東側柱列でみると北で西へ約12° 偏する。

柱抜き取り穴とみられるピットはやや不整な楕円形で、大きさは長軸25cm～36cm・短軸18cm～26cm、深さは5cm～25cmである。埋土は炭化物粒・焼土粒を含む褐色シルトの人為的埋土である。西側桁行の中間からやや外側へ張り出した位置には、楕円形状の小ピット（長軸30cm・短軸20cm、深さ20cm）が1個ある。堆積土は他のピットと同様である。この建物に付属する柱の抜き取り穴とみられる。

遺物は出土していない。

【SB1010建物跡】（第107図、図版32-4）

調査区南側の丘陵頂部付近の北東緩斜面で検出された、桁行3間・梁行1間とみられる南北棟である。柱穴は6個検出され、いずれにおいても柱痕跡を確認している。柱穴の一部は失われている可能性がある。SI1001住居跡と重複し、これよりも新しい。

平面規模は桁行が西側柱列で総長5.1m、柱間寸法は北から1.8m・1.7m・1.7mである。東側は総長5.4mである。梁行は北側で総長3.6m、南側が総長3.6mである。建物方向は東側柱列でみると北で東へ約1° 偏する。

柱穴掘り方は隅丸長方形を基調とし、大きさは長軸28cm～34cm・短軸20cm～32cm、深さは最も深いもので46cmである。柱穴掘り方埋土は地山シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトである。柱痕跡は径13～14cmの円形で、暗褐色～褐色シルトが堆積していた。

遺物は出土していない。

D. 柱穴列

【SA1007柱穴列】（第107図）

前述のSB1010建物跡の南側に位置する。4個の柱穴を検出した。総長は6.9mである。方向は北で東へ約10° 偏する。柱穴の間隔はP1-P2：2.5m、P2-P3：2.0m、P3-P4：2.4mである。

柱穴は長軸23～30cm・短軸20～23cmの隅丸長方形～楕円形で、深さは10～15cmである。柱穴は小さく、固い岩盤を削り抜いて柱穴にしている。柱穴掘り方埋土は地山シルトブロックを含む黄褐色～褐色シルトである。柱痕跡は円形で、径12～16cmほどの大きさである。堆積土は褐色～暗褐色シルトである。

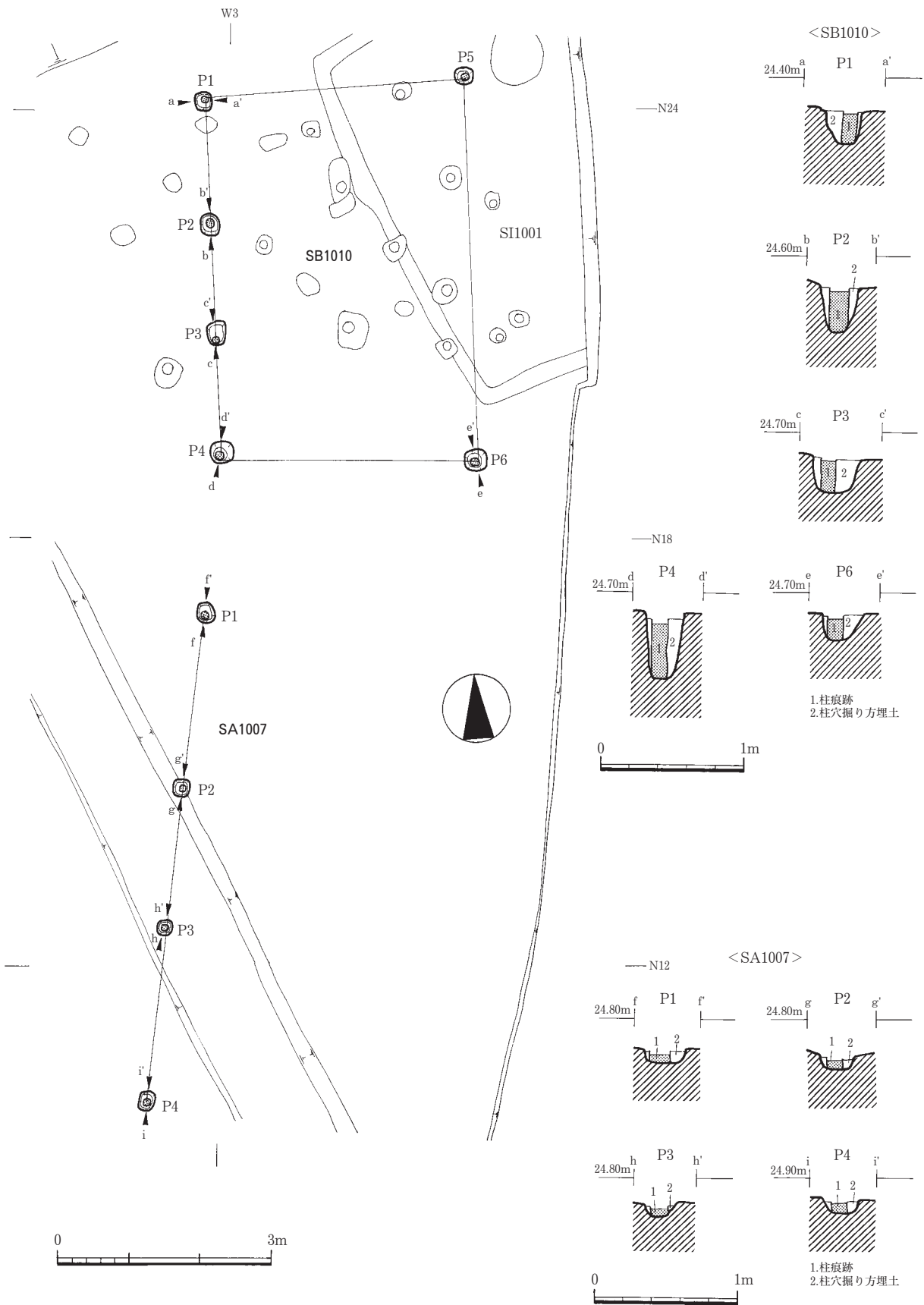
遺物は出土していない。

E. 焼成遺構

【SX1006】（第108図）

調査区北側の北斜面に位置する。前述のSI1001竪穴住居跡や掘立柱建物がある地点からは50mほど離れている。壁面が焼けて赤変・硬化した土壌状の遺構である。

平面形は隅丸長形状を呈し、大きさは長軸1.22m・短軸0.6m、深さは22cmである。壁は急角度で

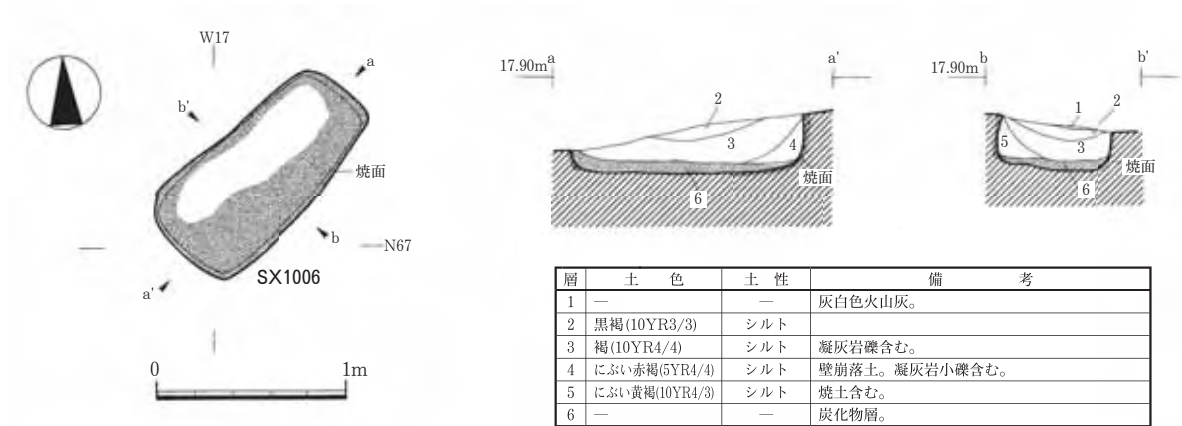


第107図 SB1010掘立柱建物跡、SA1007柱穴列

立ち上がる。壁の全周が焼面となっている。底面はほぼ平坦で、中央部分には顕著な焼面は認められない。

堆積土は最上層に灰白色火山灰、以下に旧表土起源の黒褐色シルト、凝灰岩礫を含む褐色シルト、壁崩落土のにぶい赤褐色・にぶい黄褐色シルトで、いずれも自然堆積である。底面には炭化物が3～6 cmほどの厚さで堆積していた。

遺物の出土はない。



第108図 SX1006焼成遺構

第IV章 考 察

これまで、本遺跡の発掘調査（Ⅰ～Ⅲ区）についてまとめてきたが、これらの調査結果をふまえて、あらためて遺物と遺構について検討し、遺構の変遷や年代・遺跡の性格などについて考察を加えることにする。

なお、検出した遺物や遺構は、時代的には縄文時代、（弥生時代）、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世にわたるが、主体となるのは古墳時代後期、奈良・平安時代である。以下、Ⅰ～Ⅲ区ごとにそれぞれ検討する。

1. Ⅰ区

敢 遺物について

遺物は土師器類が最も多く、須恵器・赤焼土器が少量出土している。土器類以外では、土製品（ミニチュア土器・丸玉・支脚など）、鉄製品（鉄鏃・刀子など）、石製品（砥石・すり石など）、鍛冶関連遺物（羽口・鉄滓）が出土している。これらは大半が古墳時代後期、奈良・平安時代に属するものである。また、これらの他に縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器などがごく少量含まれている。

1) 土器類

以下、主体となる古墳時代後期～奈良・平安時代の土器類について検討する。はじめに土器類の分類を行い、その年代などについて考える。

及 分類

祇 土師器（第109図～第111図）

土師器には製作にロクロを使用しないもの（以下「非ロクロ調整」とする）と、ロクロを使用するもの（以下「ロクロ調整」とする）とがある。前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。これらは、器形・細部調整などによってさらに細分される。

非ロクロ調整のⅠ類には、坏・大型坏・壙・高坏・鉢・壺・甔・甕がある。また、ロクロ調整の土師器Ⅱ類には、坏・壺・甕がある。

〈Ⅰ類〉（非ロクロ調整）

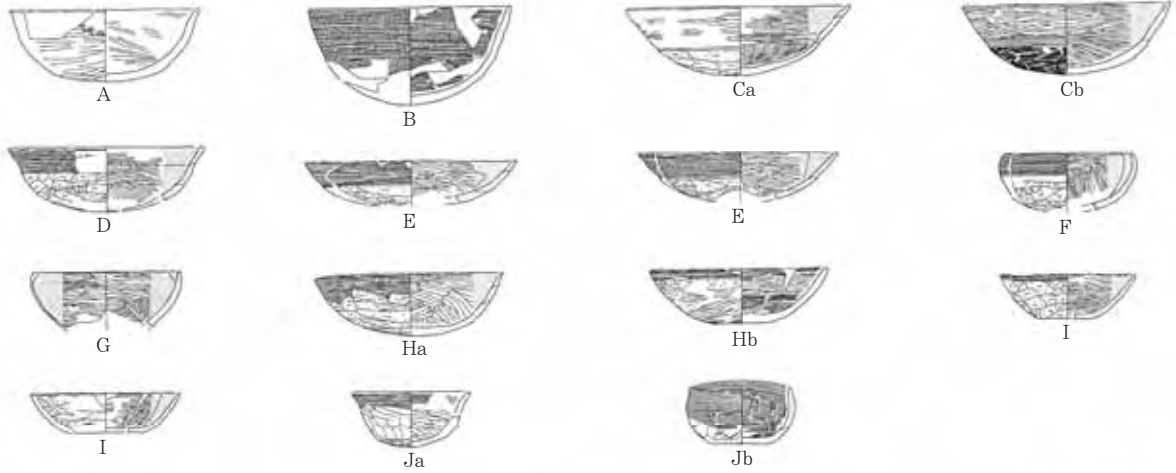
【坏】口縁部や体部の形態、調整・黒色処理の有無などから分類できる。内面に黒色処理が施されるものが多いが、A・B・Hb・J類は黒色処理が施されていない。

A：丸底で、口縁部がくびれてやや外反する。口径に対して器高がやや深い。外面調整はハケメの後へラミガキ、内面調整はヘラミガキである。内面には黒色処理が施されていない。

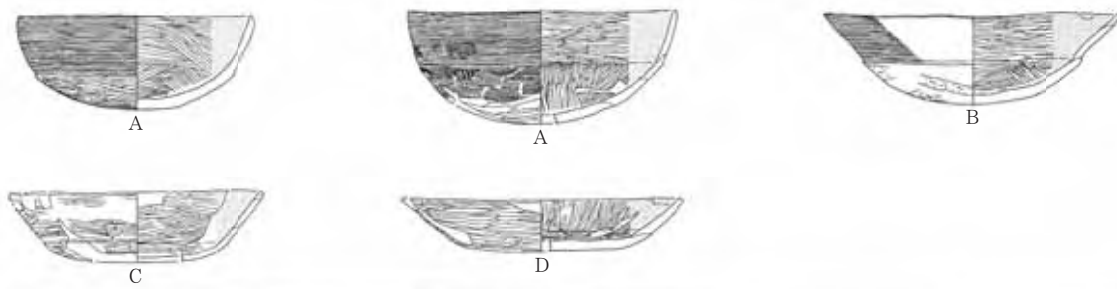
B：丸底で、やや長い口縁部が直立気味に立ち上がる。体部外面には弱い段をもつ。口径に対して器高が深い。内外面とも調整は口縁部がヨコナデ、体部がナデである。内面には黒色処理が施されていない。

《土師器 I 類》

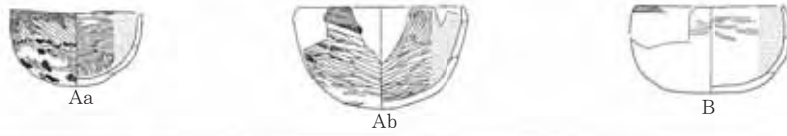
[坏]



[大型坏]



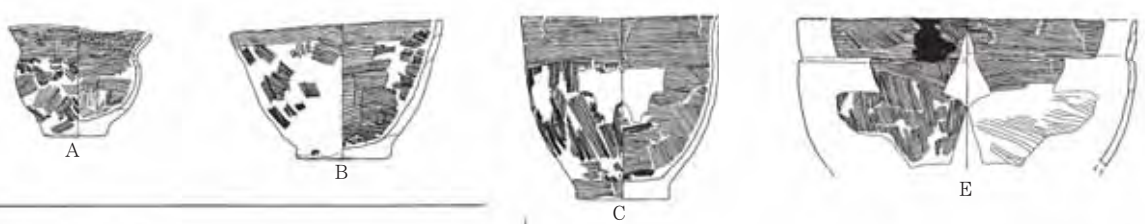
[碗]



[高坏]



[鉢]



[壺]



縮尺=1/6

第109図 土師器分類図敢

C：丸底で、体部外面の中位に段や稜をもち、それに対応する内面にも段や屈曲がある。

a：口縁部が直線的に外傾し、外面調整は口縁部がヨコナデ（一部ミガキ含む）、体～底部がヘラケズリである。

b：口縁部がやや内湾気味に外傾する。外面調整は口縁部がヨコナデ、体～底部がハケメである。

D：丸底で、体部外面の上位に弱い段や稜をもち、内面にもやや弱い屈曲がある。

E：丸底で、体部外面の中位に弱い段や稜をもつが、内面には明瞭な屈曲をもたない。口縁部はやや内湾気味に外傾する。

F：丸底で、体部外面に沈線状の段をもつ。内面に屈曲はなく、口縁部は強く内湾する。

G：底部は不明。体部外面に段や稜を持たず、口縁端部が内傾する。両面ともヘラミガキの後に黒色処理が施されている。

H：丸底や平底気味のものがある。体部外面には段や稜をもたない。内面に黒色処理が施されているものと施されていないものがある。

a：丸底で、口縁部は外傾する。体～底部の外面調整はヘラケズリである。内面に黒色処理が施されている。

b：底部はやや平底気味で、口縁部は外傾する。体～底部の外面調整はヘラケズリの後に粗いヘラミガキ、内面調整はナデの後に粗いヘラミガキである。内面には黒色処理が施されていない。

I：平底で、体部外面に段や稜をもたない。口縁部は外傾する。

J：丸底と平底がある。小型である。内面に黒色処理は施されていない。

a：丸底で、口縁部が外反する。体部内外面の調整はヘラミガキである。

b：平底で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。体部内外面の調整はヘラナデ・ナデである。

【大型坏】 坏の中で口径が概ね20cmを超えるものである。体部外面に段や稜をもち、内面には屈曲を持つものと持たないものがある。内面には黒色処理が施されている。

A：丸底で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、外傾する。体～底部の外面調整が、ヘラケズリの後にヘラミガキのもの、ハケメの後にヘラミガキのものがある。

B：丸底で、口縁部は中位でやや屈曲し、口縁端部が内湾気味に外傾する。体～底部の外面調整はヘラケズリである。

C：平底気味で、段や稜の位置が下位にある。口縁部は直線的に外傾する。外面調整はヘラミガキである。

D：平底で、器高が低い盤状のものである。外面調整はヘラミガキである。

【壙】 口径に対して器高があるもの。外面に明瞭な段や稜は持たない。内面には黒色処理が施されている。

A：丸底で、口縁部は直立気味のもの（a）と内傾するもの（b）がある。体部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

B：平底気味で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は内湾する。体部外面の調整はヘラミガキである。

【高坏】坏部の形態をもとに分けられる。坏部内面には黒色処理が施されている。

A：坏部の体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はくびれて外反する。脚部の柱状部が短い棒状で中実のもの。裾部は不明である。

B：坏部の体部外面に段や稜をもち、内面にも段や屈曲がある。脚部の柱状部が円錐形で中空のもの。裾部は八の字状に開き、中位に段をもつ。

C：坏部の体部外面に段や稜をもち、内面にも段や屈曲がある。器高が低く皿状である。脚部は不明。

D：坏部の体部は段や稜を持たずにやや内湾気味に立ち上がり、口縁部へ至る。脚部は不明。坏部の外面調整はハケメである。

【鉢】甕に比べ、口径に対し器高が低いもの。体部内外面の調整はハケメやヘラナデ・ナデが多いが、一部にはヘラケズリやヘラミガキのものがある。また、内面に黒色処理がみられるものもある。

A：体部が膨らみ、口縁部はくびれて直線的に外傾する。口縁部と体部の境には段（稜）をもつ。

B：体部がやや内湾気味に外傾し、そのまま口縁部に至るもの。

C：体部は内湾して立ち上がり、やや長い口縁部が直立する。口縁部と体部の境にはわずかに段（稜）が巡る。

D：体部は球状に膨らみ、内湾してそのまま口縁部に至るもの。

E：体部は内湾して立ち上がり、口縁部は直立気味である。口縁部と体部の境に段・屈曲を持つ。

F：体部は内湾して立ち上がり、口縁部はくびれて外反する。体部外面の調整はヘラケズリ、内面はヘラミガキで、内面には黒色処理が施されている。

【壺】胴部が球状に膨らむものである。

A：口縁部は直立気味に立ち上がるが、中位でやや屈曲し、上端はやや内湾気味になる。頸部には段をもつ。胴部外面の調整はハケメである。

B：胴部中央の張りが強い。口縁部は不明。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

【甑】無底式のもので、法量や器形から分けられる。胴部外面の調整はハケメが多いが、ヘラケズリのものや、ハケメ後にヘラミガキのものもある。胴部内面の調整はヘラミガキが多い。

A：小型（器高15cm以下）で、深鉢形を呈する。頸部には段をもつ。

B：大型（器高20cm以上）で、口径に対して器高がやや小さい鉢形を呈する。頸部に弱い段や稜をもつ。

C：大型（器高20cm以上）で、深鉢形を呈する。頸部に段や稜を持つものと持たないものがある。

a：口縁部が直線的に外傾し、頸部には段や稜を持たない。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

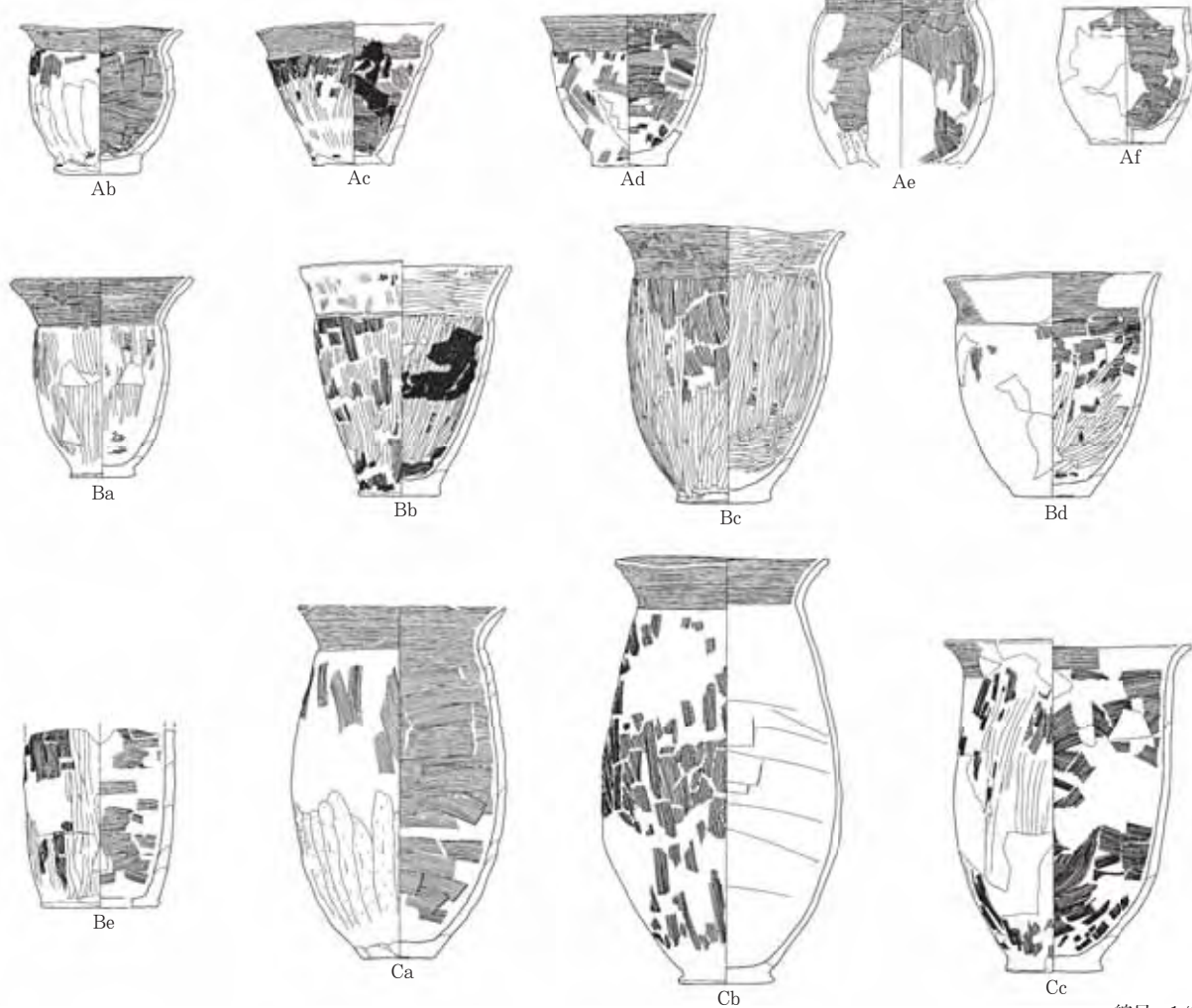
b：口縁部が直線的に外傾し、頸部には段や稜を持つ。胴部外面の調整はハケメやヘラケズリで

《土師器 I 類》

[甌]



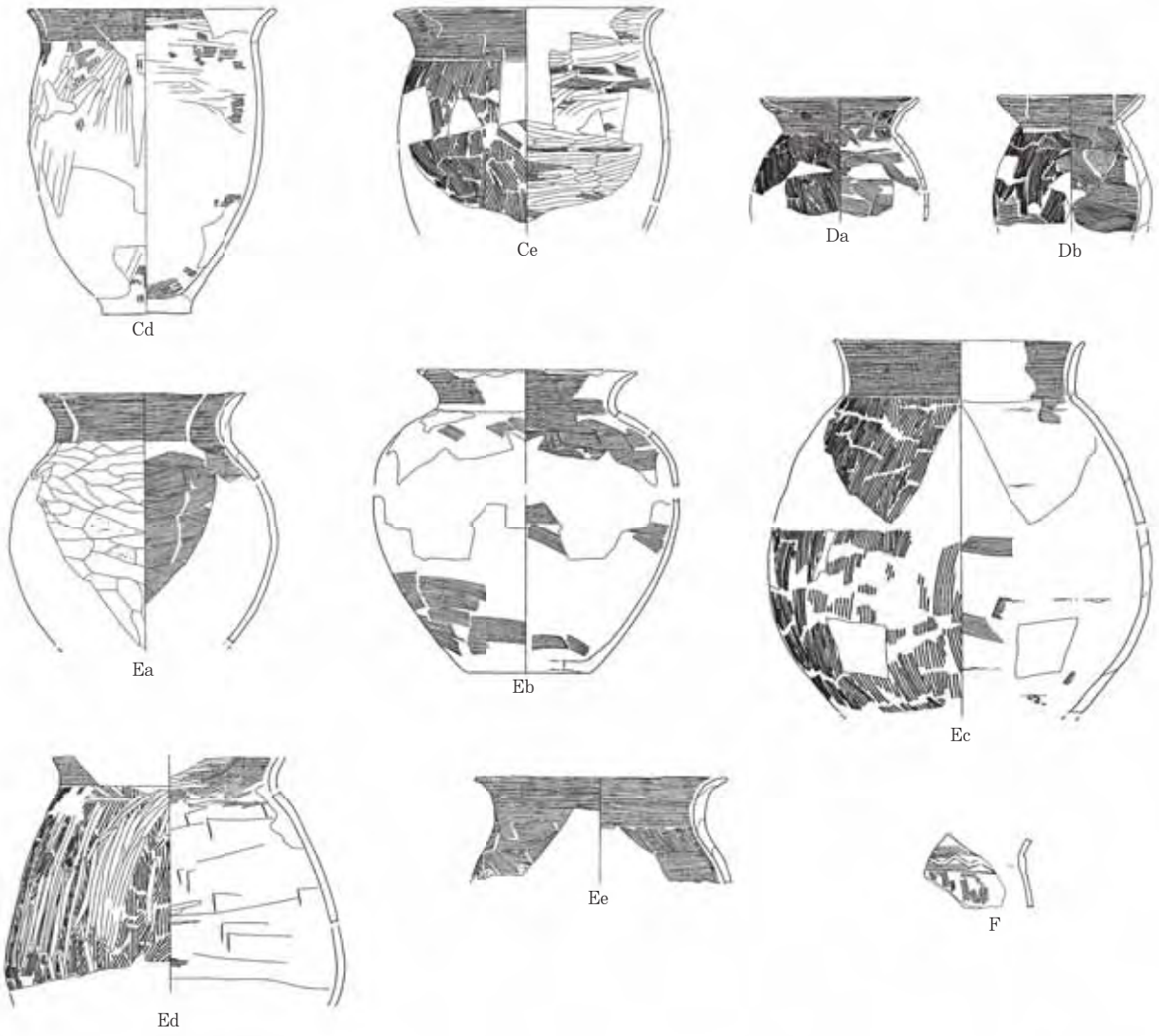
[甗]



縮尺=1/6

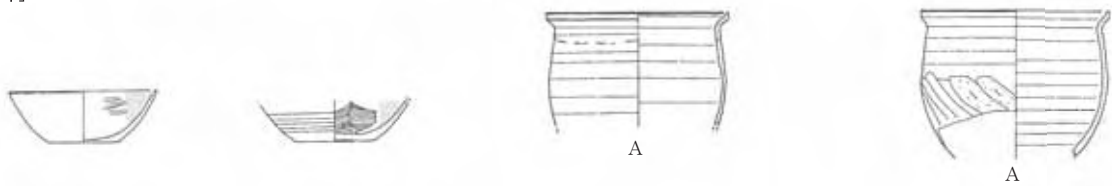
第110図 土師器分類図柑

[甕]

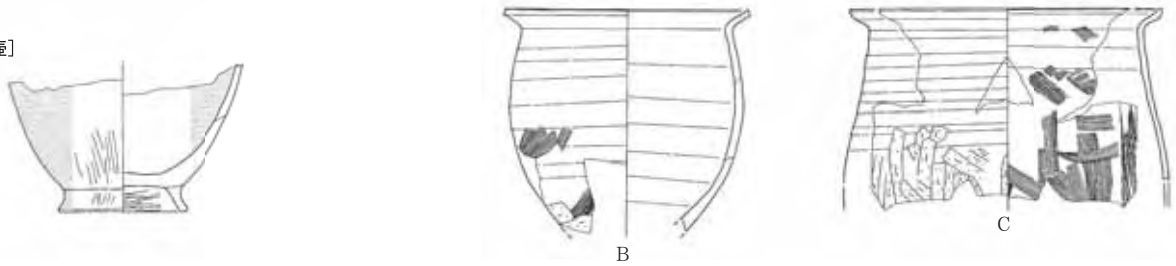


《土師器Ⅱ類》

[坏]



[壺]



第111図 土師器分類図概

縮尺=1/6

ある。

c：やや長い口縁部が外反もしくは外傾し、頸部には段や稜を持つ。胴部外面の調整はハケメの他に、ハケメの後にヘラミガキのものがある。

【甕】口径と器高の比率、器形によって鉢形^(註1)・長胴形・球胴形に大別できる。法量は器高が16cm未満の小型のもの、16cm以上23cm未満の中型のもの、23cm以上の大型のものに分けられる。

A：口径に対して器高が低い鉢形のもの。器高は16cm未満である。a類以外は頸部に段や稜を持つ。

a：口縁部がくびれて外傾する。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキ、内面はヘラミガキである。

b：口縁部はやや外反する。胴部外面の調整はハケメ・ナデである。

c：胴部が直線的に外へ開き、口縁部が外傾する。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

d：やや長い口縁部が外反もしくは外傾する。胴部外面の調整はハケメが多い。

e：短い口縁部が外傾する。胴部外面の調整はナデ・ヘラケズリである。

f：口縁部が直立気味に立ち上がる。

B：長胴形のうち、器高が16cm以上23cm未満のもの。頸部に段や稜をもつ（e類は不明）。胴部内面の調整にはヘラミガキが多い。

a：口縁部はやや長く、外傾し、中位に屈曲をもつ。口縁端部は平坦で、上端が浅く窪む。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

b：胴部の張りがやや弱い。口縁部はやや長く、直線的に外傾する。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

c：口縁部がやや長く、直線的に外傾もしくは外反する。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

d：口縁部は直線的に外傾する。胴部外面の調整はハケメである。

e：胴部が円筒状のもの^(註2)である。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

C：長胴形のうち、器高が23cm以上のもの。d類以外は頸部に段や稜をもつ。

a：胴部が細長い楕円形状のもの。胴部外面の調整はハケメやヘラケズリのものがある。

b：最大径が胴部下半にある。胴部外面の調整はハケメである。

c：胴部上半が円筒状で下部は底部に向けてすぼまるもの。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

d：口縁部は外反する。頸部に段や稜は持たない。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキ、内面調整はヘラミガキである。

e：胴部の張りがややある。口縁部は外反もしくは直線的に外傾する。胴部外面の調整はハケメ、内面調整はハケメの後にヘラミガキである。

D：胴部に張りがあり球胴形となるもので、器高が16cm未満とみられるもの。頸部に段や稜をも

つ。

a：口縁部は屈曲して外傾し、上半部はくびれて立ち上がる。胴部外面の調整はハケメである。

b：口縁部は屈曲して直線的に外傾する。胴部外面の調整はハケメである。

E：球胴形で、器高が23cm以上のもの。c類のみ頸部に段や稜をもつ。

a：最大径が胴部中央にある。頸部は直立気味で、口縁部上半は外反する。胴部外面の調整はヘラケズリの後に幅広のヘラミガキである。

b：最大径が胴部上半にある。口縁部は外反する。胴部外面の調整はナデである。

c：最大径が胴部の中位にある。口縁部は直立気味に立ち上がり上端がやや外反する。胴部外面の調整はハケメである。

d：最大径が胴部の下半にある。口縁部は外反するものとみられる。胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

e：頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部上半が外反する。

F：長胴形とみられるが、全体形は不明である。頸部に段が2段あり、鋸歯状沈線文が認められる。

〈Ⅱ類〉（ロクロ調整）

【坏】体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はそのまま外傾する。底部の切り離しが分かるものは回転糸切りである。内面には黒色処理が施されている。

【壺】上半部は不明。底部は高台付で、胴部外面の調整はヘラミガキである。内外面に黒色処理が施されている。

【甕】全体形が不明であるが、推定される法量や口縁部の形態などから以下のように分けられる。

A：小型（器高15cm以下）のもの。口縁端部が短く直立する。胴部外面の下部にヘラケズリが施されるものがある。

B：中型（器高20cm前後）のもの。胴部外面の下部にヘラケズリ・ナデが施されている。

C：大型（器高25cm以上）のもの。口縁端部が短く直立する。胴部外面の下部にヘラケズリ、内面はナデが施されている。

義 須恵器（第112図）

【坏】口径に対する器高・底径の比率で大別され、底部の切り離しによって細分される。

A：口径に対し底径の割合が大きいもの。底部の切り離しはヘラ切りで、手持ちヘラケズリもしくはナデを施す。

B：口径に対し底径の割合が小さいもの。

a：底部の切り離しがヘラ切りで、再調整はみられない。

b：底部の切り離しが回転糸切りで、再調整はみられない。

【高台坏】坏部の形態で分けられる。

A：器高は浅く、体部は底部から内湾して立ち上がり、口縁部に至る。

《須恵器》

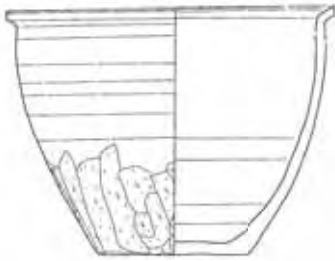
[坏]



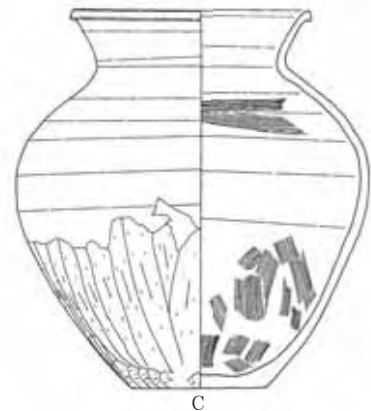
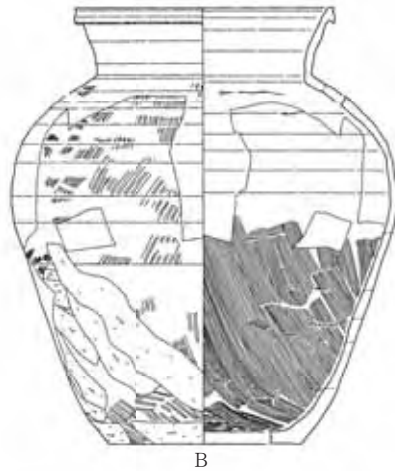
[高台坏]



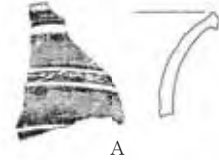
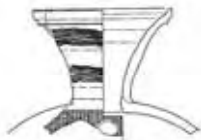
[鉢]



[甕]

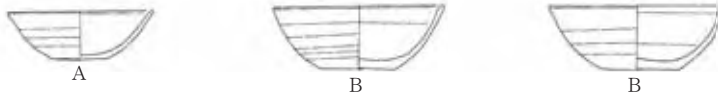


[提瓶]



《赤焼土器》

[坏]



縮尺=1/6

第112図 須恵器・赤焼土器分類図

B：器高は浅く、体部下端が屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。

【鉢】 体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外傾する。外面は体下部にヘラケズリが施されている。

【提瓶】 口縁部は外反し、端部は上方につまみだされている。頸部には2段に櫛描き波状文が巡る。胴部はカキメで、肩部にボタン状貼付文がある。

【甕】 口縁部の形態や最大径の位置などで分けられる。

A：全体の器形は不明であるが、頸部に櫛描き波状文があるもの。

B：最大径が胴部上半にあり、底径がやや大きい。口縁端部は上下につまみ出されて縁帯状になる。胴部外面は平行タタキとその後ろにロクロナデ、下部にヘラケズリ、内面はロクロナデで下部にナデを施している。

C：最大径が胴部中位にあり、底径はB類に比べて小さい。口縁端部は上下につまみ出されている。胴部外面はロクロナデで下部にヘラケズリ、内面はロクロナデで下部にナデを施している。

類(6)、壺には直立する口縁部が上端でやや屈曲するI A類(7)がある。甑は小型I A類(8)・鉢形I B類(10)・深鉢形I Ca.b(11・12)類があり、頸部に段を持つものと持たないものがある。甕は小型で鉢形のI Aa類(4・5)、長胴形I Ca.d類(13・14)・球胴形I Ed類(16・17)がある。甑と同様に、頸部に段を持つものと持たないものが認められる。

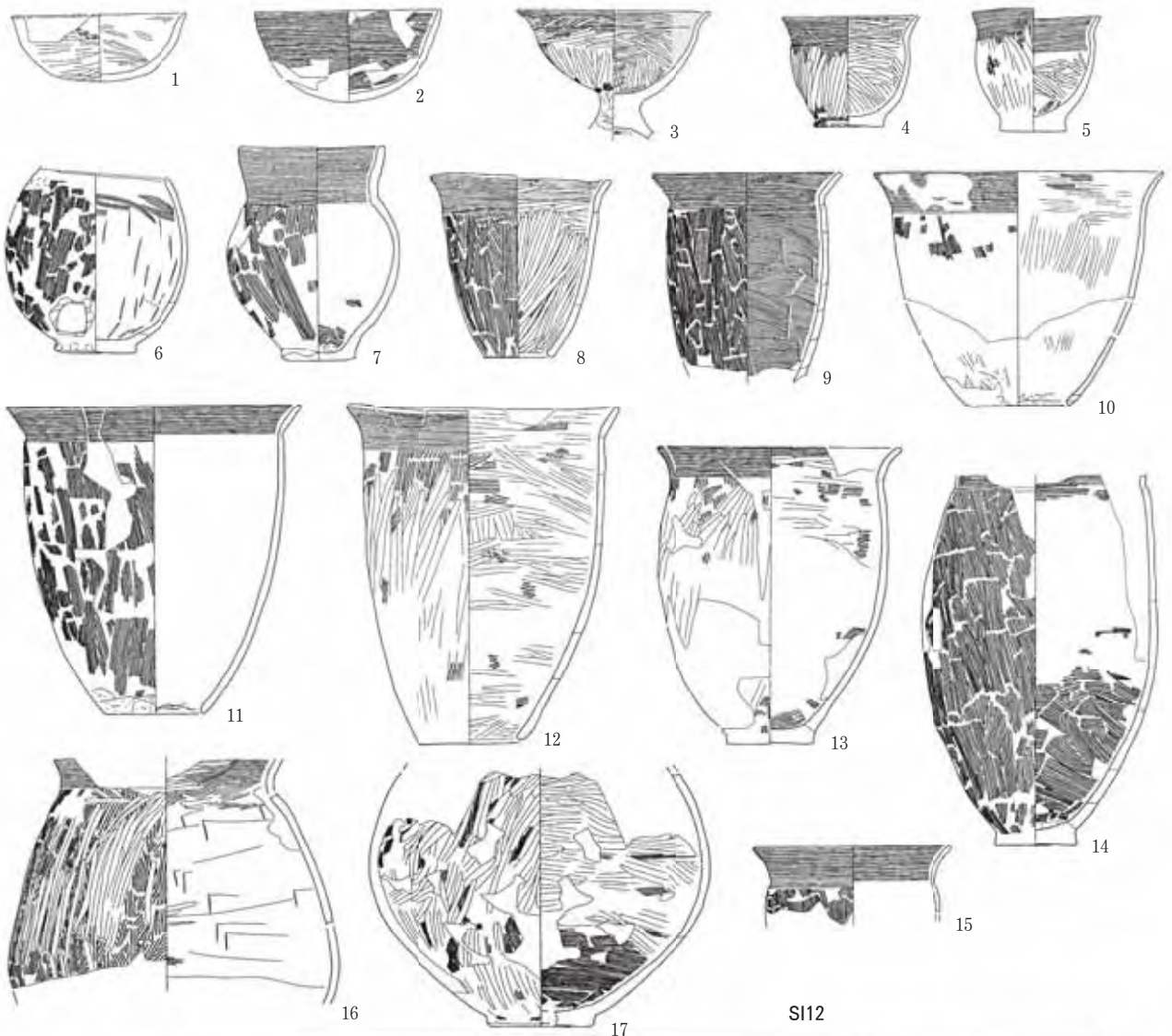
こうした土器類と共通する特徴をもつものには、角田市住社遺跡出土土器(志間 1958、齊藤 1997)がある。土師器坏I A・B類、高坏I A類、壺I A類、甑I Ca類、甕I Cd類などがある。これらは「住社式」の標準資料になっており、SI12出土土器も住社式の時期と考えられる。SI12出土土器と類似する資料には、1990年調査の住社遺跡第1号住居跡(齊藤・中村 1991)、他に角田市角田郡山遺跡SI62住居跡出土土器(齊藤・瀬戸 2001)、多賀城市山王遺跡八幡地区SD2050河川跡第7層出土土器(後藤・村田ほか 2001)などがある。住社遺跡第1号住居跡では6世紀後半、山王遺跡でも上層資料や形式的に先行するとみられる合戦原遺跡(岩見・佐藤 1991)との比較から6世紀後半頃の時期と推定しており、SI12出土土器も同様の年代が考えられる。

[SI27] (第113図) 土師器坏・塀・鉢・甕などがある。坏は小型の塀形を呈するI Jb類(18)である。塀はI Aa類(19)で、外面調整はハケメの後にヘラミガキを施す。鉢は体部が張り、口縁部と体部の境に段を持つ小型のI A類(20)、段を持たないI B類(21)である。甕には小型で鉢形を呈するI Ad類(22・23)、長胴形のI Bb.c類(24・25)がある。後者はいずれも口縁部がやや長く、体部外面の調整はハケメの後に縦方向のヘラミガキが施されている。

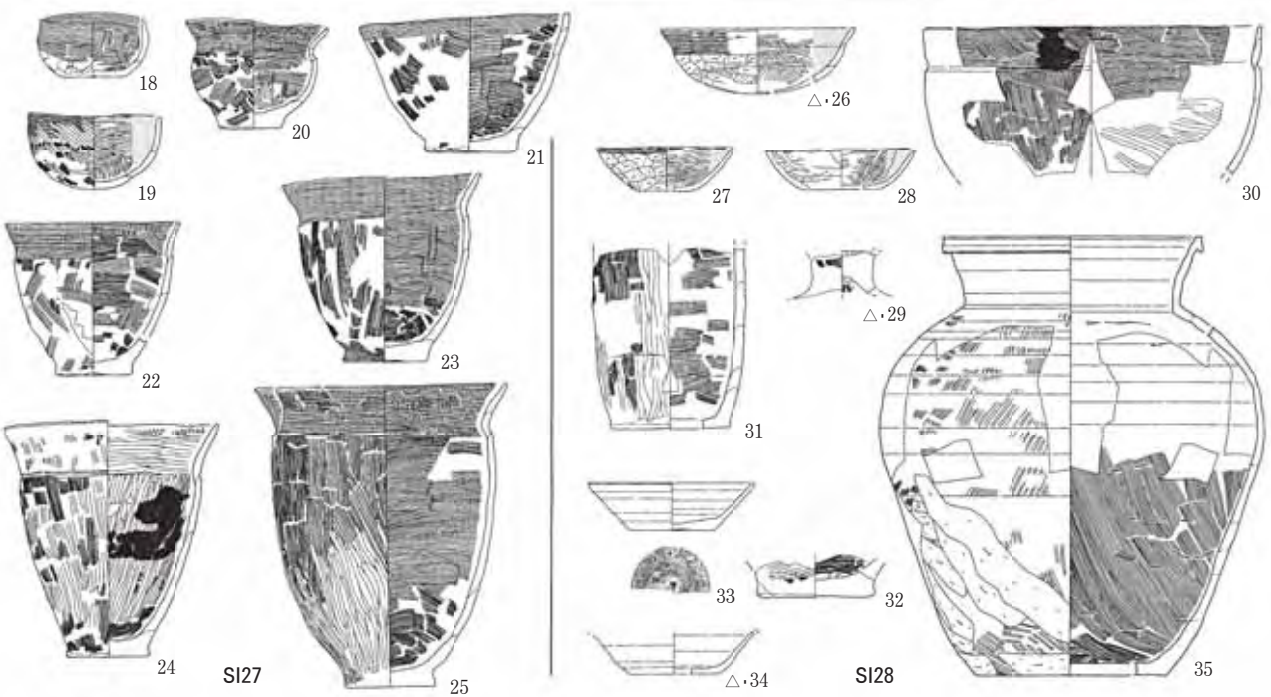
坏類などの特徴が明確でないが、土師器鉢・甕類をみると、これらと共通する特徴を持つものには仙台市栗遺跡出土土器(氏家 1957、加藤 1989)がある。これらは「栗囲式土器」の標準資料になっており、SI27出土土器も栗囲式の時期と考えられる。SI27の土師器鉢・甕類は、名取市清水遺跡第73号住居跡出土土器(丹羽・小野寺・阿部 1981)、多賀城市山王遺跡SD2050河川跡第2A・B層出土土器(後藤・村田ほか 2001)などと類似している。これらは年代的には7世紀前半代と位置づけられており、SI27出土土器類も7世紀前半頃と推定される。

[SI28] (第113図) 土師器坏・高坏・鉢・甕、須恵器坏・甕などがある。土師器坏には平底で外面体部に段をもたないI I類(27・28)がある。鉢は大型のI E類(30)である。甕には胴部が円筒状になるI Be類(31)が含まれる。この甕の胴部外面の調整はハケメの後に縦方向のヘラミガキである。須恵器坏は底部の切り離しがヘラ切りで再調整がないBa類(33)である。須恵器甕は最大径が胴部上半にあり、口縁端部が縁帯状になるB類(35)である。なお、住居掘り方埋土からは丸底で体部上半に段・屈曲をもつ土師器坏I D類(26)が出土している。

これらと共通する特徴を持つものには、仙台市陸奥国分寺跡出土土器(氏家 1967、加藤 1989)がある。これらは「国分寺下層式」の標準資料になっており、SI28出土土器も国分寺下層式の時期と考えられる。SI28出土土器と類似する資料には、河北町沢田山西遺跡SI25住居跡出土土器(須田・相原 2004)、志波姫町御駒堂遺跡第22号住居跡出土土器(小井川・小川 1982)、名取市清水遺跡第58号住居跡出土土器(丹羽・小野寺・阿部 1981)などがある。これらは年代的には8世紀後半もしくは8世紀後葉頃に位置づけられている。SI28出土土器は、平底の土師器坏や底部がヘラ切りの須恵



SI12



SI27

SI28

※ △は住居堆積土など出土

縮尺=1/6

第113図 竪穴住居跡出土土器類敢

器坏の特徴からみて8世紀後葉頃の年代と考えられる。

[SI51] (第114図) 土師器坏・甑・甕などがある。坏は体部外面に段を持つ I Ca類 (36)、甑は深鉢形の I Cc類 (38) とみられるものである。甑は胴部外面の調整はハケメの後に縦方向のヘラミガキである。甕は口縁部が長く上半でやや屈曲する I Ba類 (37)、長胴形の I Cb.c類 (40・42) がある。甑・甕とも頸部には段や稜を持つ。

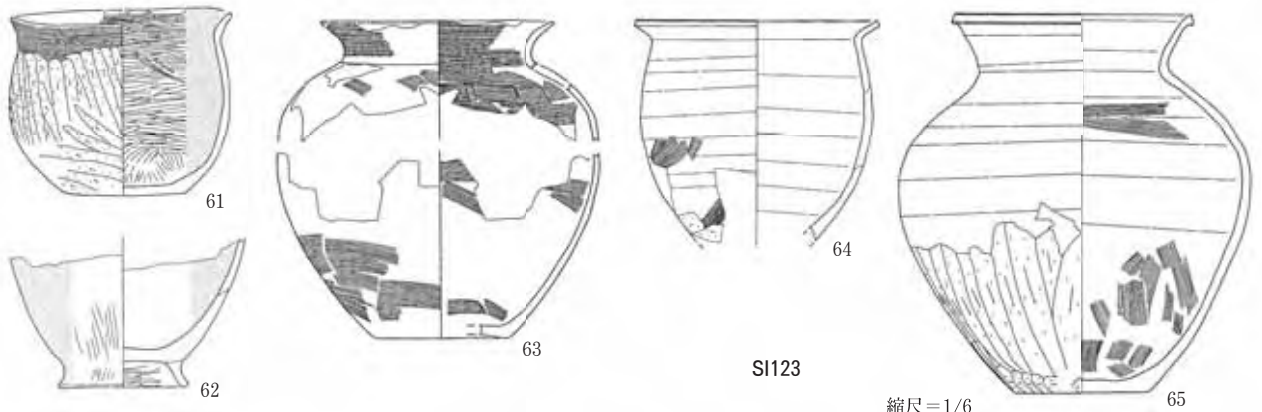
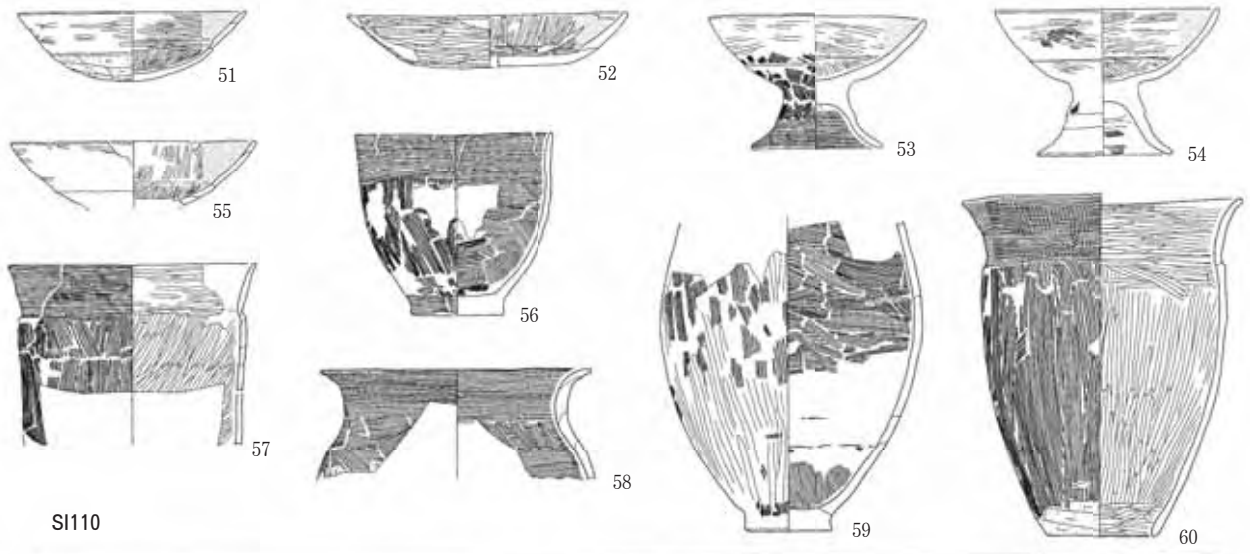
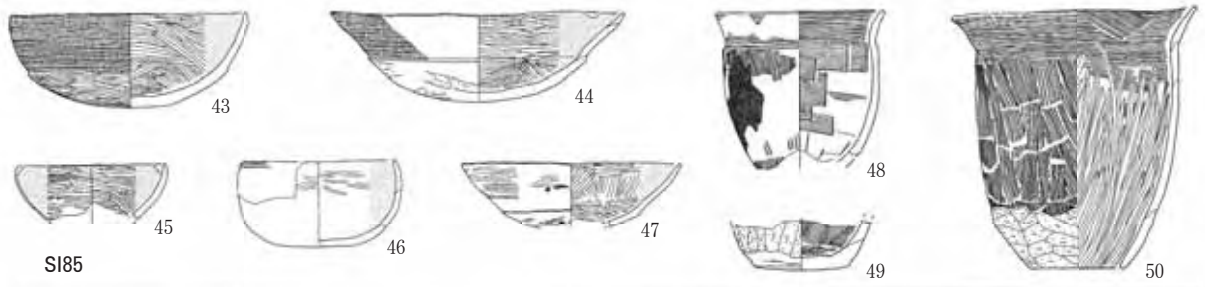
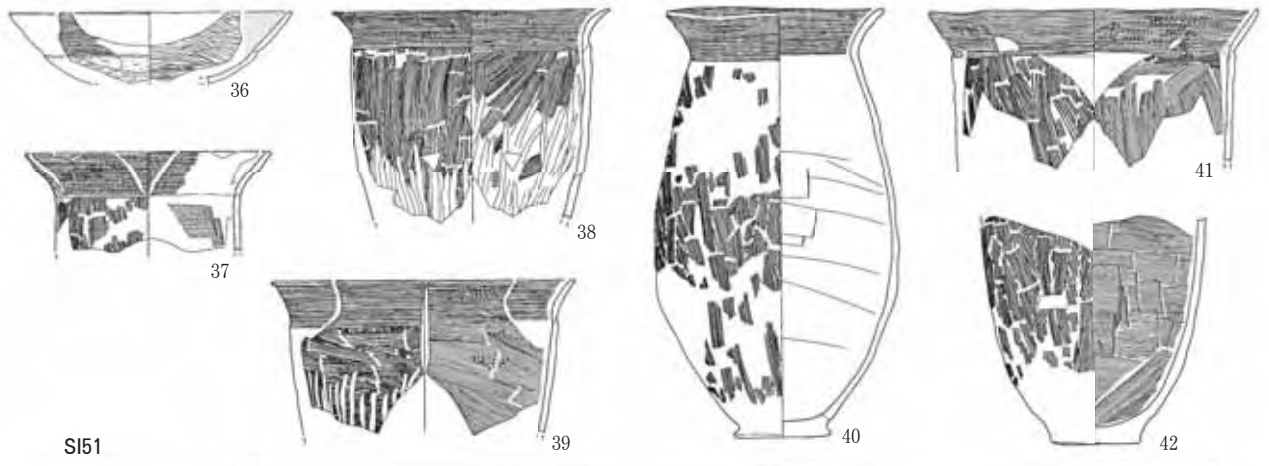
資料数は少ないが、こうした土器類と共通する特徴を持つものには、前述の仙台市栗遺跡出土土器 (氏家 1957、加藤 1989) がある。SI27と同様、SI51出土土器類も栗罌式の時期と考えられる。SI51出土土器と類似する資料には、名取市清水遺跡第42号・第73号住居跡出土土器 (丹羽・小野寺・阿部 1981)、仙台市栗遺跡1974・1975年調査9号住居跡ほか出土土器 (東北学院大学考古学研究所ほか 1979、工藤・成瀬 1982)、多賀城市山王遺跡八幡地区SI491住居跡出土土器 (佐藤・佐藤ほか 1997)、同遺跡SD2050河川跡第1層～第5層出土土器 (後藤・村田ほか 2001) などがある。年代は清水遺跡では7世紀前半を中心とした時期、山王遺跡SI491・SD2050でも共伴する須恵器の年代などから7世紀前半代と位置づけている。したがって、SI51出土土器類も7世紀前半を中心とした時期と推定される。

[SI85] (第114図) 土師器坏・大型坏・高坏・壙・甑・甕などがある。坏は壙形を呈する I G類 (45)、大型坏には口縁部が内湾して直立気味に立ち上がる I A類 (43) と口縁部が外傾する I B類 (44) がある。前者は、内面の屈曲がミガキ調整のためか不明瞭になっている。壙にはやや平底気味の I B類 (46) がある。高坏は坏部の体部外面に段・内面に屈曲があるもので、I B類 (47) とみられる。甑は I Cc類 (50) で、口縁端部は平坦になっている。甕は底部が欠損しているが、鉢形の I Ad類 (48) とみられる。

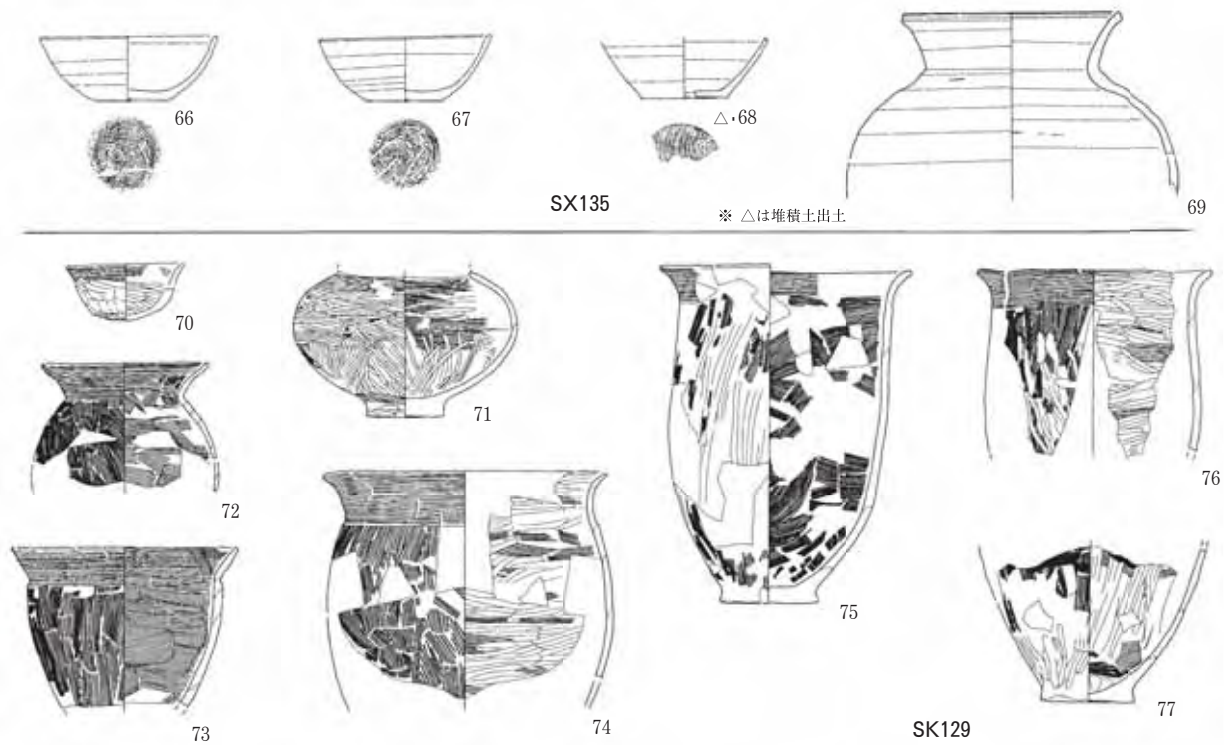
これらの土器類の特徴は、前述の「栗罌式土器」と共通するものである。SI85出土土器と類似する資料には、前述した仙台市栗遺跡1974・1975年調査9号住居跡ほか出土土器 (東北学院大学考古学研究所ほか 1979、工藤・成瀬 1982)、多賀城市山王遺跡八幡地区SI491・同遺跡SD2050河川跡第1～第5層出土土器 (後藤・村田ほか 2001) などがある。年代は同様に7世紀前半頃と考えられる。

[SI110] (第114図) 土師器坏・大型坏・高坏・鉢・甑・甕などがある。坏は体部外面に段をもつ I Ca類 (51)、大型坏は盤状の I D類 (52) である。高坏は坏部の内外に段・屈曲を持ち、八の字状にひらく脚裾部にも段がみられる I B類 (53・54) である。鉢は口縁部が直立する I C類 (56)、甑はやや長い口縁部をもつ I Cc類 (57・60) である。甕には、全体形が不明であるが長胴形 I Ca類 (59)、球胴形 I Ee類 (58) とみられるものがある。長胴形の甕は胴部外面の調整がハケメの後にヘラミガキで、底部は台形状を呈する。

これらの土器類の特徴は、前述の「栗罌式土器」と共通するものである。SI110出土土器と類似する資料には、前述の仙台市栗遺跡1974・1975年調査9号住居跡ほか出土土器 (東北学院大学考古学研究所ほか 1979、工藤・成瀬 1982)、多賀城市山王遺跡八幡地区SI491・同遺跡SD2050河川跡第1～第5層出土土器 (後藤・村田ほか 2001) などがある。年代はこれらと同様に7世紀前半頃と考えられる。



第114図 竪穴住居跡出土土器類相



縮尺=1/6

第115図 鍛冶遺構・土壌出土土器類

[SI123] (第114図) 土師器鉢・壺・甕、須恵器甕などがある。土師器鉢は口縁部がくびれる I F 類 (61) で、内面には黒色処理が施されている。土師器壺は上半が欠損しているが、底部に高台が付くもので、内外面に黒色処理が施されている。ロクロ調整の II 類 (62) とみられる。土師器甕には非ロクロ調整とロクロ調整のものがあ、球胴形の I Eb 類 (63)、鉢形の II B 類 (64) がある。須恵器甕は最大径が胴部中央にある C 類 (65) である。

資料数が少なく坏類もないことから不明な点が多いが、土師器甕や須恵器甕をみると、志波姫町糠塚遺跡第6号住居跡出土土器 (小井川・手塚 1978) に類似する。糠塚遺跡の土師器甕は赤彩のある球胴甕^(註3) であるが、形態は SI123 の球胴甕と類似するものとみられる。須恵器甕は C 類である。糠塚遺跡出土土器は、坏類の特徴などをみると9世紀前半代に位置づけられるものである^(註4)。また、SI123出土土器は、土師器類には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものが含まれており、9世紀初め頃の年代に位置づけられている瀬峰町大境山遺跡25号住居跡出土土器 (阿部・赤沢 1983) などと共通する要素をもっている。赤彩された球胴甕は8世紀末頃～9世紀初めまでには消滅したものと考えられており (杉本 2001)、これらの年代観も考慮して、SI123出土土器は9世紀初めか前葉頃に位置づけられるのではないかと考えられる。

[SX135] (第115図) 須恵器甕、赤焼土器坏がある。須恵器甕は下半が欠損しているが、C 類 (69) かと思われる。赤焼土器坏は B 類 (66・67) である。なお、堆積土からは須恵器坏 I Bb 類 (68) が出土している。

これらの赤焼土器坏や須恵器甕と類似する資料は、河北町新田東遺跡 SI40 住居跡出土土器 (柳沢・茂木・西村 2003)、仙台市藤田新田遺跡 SD302C 河川跡出土土器 (後藤・村田・岩見ほか 1994) な

どから出土しており、これらはいずれも10世紀前葉頃に位置づけられている。したがって、SX135出土土器の年代については10世紀前葉頃と考えられる。

[SK129] (第115図) 土師器坏・壺・甕などがある。坏は小型の I Ja 類 (70) である。壺は胴部の張りが強く、台状の底部が付く I B 類 (71) である。甕は小型の I Ad 類 (73)・I Da 類 (72)、長胴形の I Cc.e 類 (74~77) がある。I Da 類 (72) の小型球胴甕は口縁部上端が屈曲する。I Cc 類 (75・77) の長胴甕は底部が台形状で内面は丸みをもつもので、胴部外面の調整はハケメの後にヘラミガキである。

頸部に段をもつ土師器甕などの特徴は、前述の「栗圀式土器」と共通するものである。SK129出土土器の土師器甕類と類似する資料は、前述したSI51出土土器や多賀城市山王遺跡SD2050河川跡第1~第5層出土土器(後藤・村田ほか 2001)などに認められるが、坏類の特徴がはっきりしないので、年代は概ね7世紀代として捉えておく。

以上のことから、堅穴住居跡などの比較的まとまりのある遺構出土土器類は、6世紀後半の「住社式」から7世紀(前半)の「栗圀式」の時期を中心としたもので、ほかに8世紀後葉の「国分寺下層式」や10世紀前葉頃のものが見られることがわかる。

2) その他の遺物

これまで取り上げた土器類以外では、土製品(ミニチュア土器・丸玉・支脚ほか)や金属製品(鉄鏃・刀子・鉄釘)、石製品(砥石・すり石ほか)、鍛冶関連遺物(羽口・鉄滓)などがある。砥石などを除いてはいずれも出土点数は少ない。

鍛冶関連遺物は羽口・鉄滓のみで、鉄滓もコンテナ1箱分程度である。後述するように鍛冶遺構の数からすると少ない量である。しかし、遺構の大半が削平を受けており、また急傾斜地を含む斜面にあることから、鍛冶関連遺物の多くは斜面下の調査区外へと流出してしまった可能性もある。

また、遺物の中には縄文土器や石器、弥生土器、古墳時代中期とみられる土師器坏片、石製模造品・勾玉などが含まれている。縄文土器は130片ほどの破片資料であるが、口唇部に刻みを施すものや撚糸圧痕文をもつものなど、七ヶ浜町吉田浜貝塚上層資料(後藤 1968)に類似する早期末とみられる資料が比較的多い。弥生土器は中期の榊形圀式とみられる浅鉢もしくは高坏の口縁部片1点のみである。古墳時代中期とみられる遺物もごく少数である。遺物は散在するものの、これらの時期の遺構は検出されていない。ただ、縄文時代の遺物は調査区南側の丘陵南斜面から比較的多く出土していることから、この近辺には少なくとも縄文時代の遺構は存在した可能性がある。

なお、石器の中に黒曜石製剥片類が14点ほど認められるが、いずれも遺構堆積土などの出土であることから、古墳時代後期の黒曜石製石器^(註5)が含まれているかどうかは確認できなかった。

柑 遺構について

今回の調査では、竪穴住居跡41軒、鍛冶遺構6基、竪穴遺構4基、竪穴状遺構・周溝状遺構24基、柵列跡1条、掘立柱建物跡4棟、柱穴列7条、土壇32基、溝跡9条などが検出されている。

1) 各遺構の年代について

前述の竪穴住居跡などの遺構出土土器類の年代や遺構の重複関係などをもとに、各遺構の年代について検討する。

a. 竪穴住居跡

SI12住居跡は前述したように6世紀後半頃に位置づけられる。出土土器類は土師器I類（非クロ調整）のみで構成され、坏I A・B類、高坏I A類、鉢I D類、壺I A類、甑I A・B・Ca.b類、甕I Aa・Ca.d・Ed類などが含まれる。坏には体部内外面に段や稜を持つものと持たないものがあり、内面の黒色処理も施されているものと施されていないものがある。また、坏にはI B類のように須恵器模倣とみられるタイプがある。高坏は体部外面に段や稜がない器高の深い坏部をもち、内面には黒色処理がなされている。甑には大型で鉢形のものを含まれ、甕には楕円形状の胴部をもつ長胴甕や大型の球胴甕がある。甑や甕は頸部に段や稜を持つものと持たないものがある。

このSI12住居跡より古いSI151住居跡では、口縁部の長い土師器甕I Bc類が出土している。これは前に取り上げた多賀城市山王遺跡SD2050河川跡第7層出土土器（6世紀後半頃）などにみられるものであり、SI12住居跡もほぼ時期の6世紀後半頃と考えられる。重複関係でSI12とSI151住居跡の間にあるSI80住居跡についても6世紀後半頃に位置づけられる。

SI27・SI51・SI85・SI110住居跡は、先に検討したように7世紀前半頃を中心とした時期に位置づけられる。出土土器類は土師器I類のみで構成され、坏I Ca・G・Jb類、大型坏I A・B・D類、高坏I B類、壺I Aa・B類、鉢I A・B・C類、甑I Cc類、甕I Ad・Ba.b.c・Ca.b.c・Ee類などが含まれている。坏は丸底で内外面に段や稜を持つI C類が主体である。大型坏が組成され、器高が高く、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの（I A類）や口縁部が外傾するもの（I B類）、器高が低い盤状のもの（I D類）がある。これらの坏類および壺類の内面にはいずれも黒色処理が施されている。高坏は坏I Cc類に脚部が付くI B類である。甑はいずれも無底式で、鉢形と深鉢形がある。甕は小型で鉢形のもの、中型で長胴形のもの、大型の長胴形・球胴形のものなどがある。甑や甕はほとんどが頸部に段や稜が認められる。

ほかの住居跡の出土土器をみると、SI02A・B住居跡では土師器坏I Ca類・甕I Ba類など、SI106住居跡では土師器大型坏I A類、他に甕I Bc.d類などがあり、これらは前述のSI27・SI51・SI85・SI110出土土器類と共通するものであり、SI02A・B・SI106住居跡の年代はこれらと同様に7世紀前半頃と推定される。SI30住居跡では土師器高坏I C類・甕I Bc類や、堆積土出土ではあるが肩部にボタン状貼付文がある須恵器提瓶や甕A類があること、SI33住居跡では甑Cb・甕Ab.c・Ca類などがあることから、これらは概ね7世紀代と考えられる。SI158住居跡は土師器坏I Cb類のみで年代の限定が難しいが、丸底で体部外面や内面に段や屈曲をもつ土師器坏の特徴から考えると、これも7世紀代と推定される。SI108住居跡は重複関係からSI158住居跡よりも新しいが、SI158住居跡と同様に

体部外面や内面に段や屈曲をもつ土師器坏などがあり、SI108住居跡も7世紀代に収まるものと考えられる。SI119住居跡では平底気味の土師器大型坏 I C類・堦 Ab類がある。大型坏や丸底の堦が組成されることなどを考えると、SI119住居跡も7世紀代と推定される。SI119住居跡より古く、これとほぼ同位置にあるSI150・SI152・SI153住居跡^(註6)は、破片資料をみると体部外面や内面に段や屈曲を持つ土師器坏などを含むことから、ほぼ同様の時期と捉えてよいだろう。SI122住居跡は土師器高坏 I D類のみで年代の位置づけが難しいが、矢本町赤井遺跡(佐藤・益子・菅原 2001)に坏部の形態が類似するものがあり、これらは主に7世紀後半代から8世紀初頭頃に位置づけられていること、高坏が7世紀末～8世紀初頭には消えるという指摘(村田 1998)なども踏まえ、SI122住居跡は概ね7世紀代と捉えておきたい。前述のSI110住居跡より古いSI148住居跡には甕 I Ae・Ca・Db類などがあり、頸部に段をもつ土師器甕や甕類の特徴から7世紀前半に位置づけられると考えられる。なお、7世紀後半に確実に位置づけられる住居跡が見当たらないことから、7世紀代と推定した住居跡は7世紀前半を中心とした時期に位置づけられる可能性が高いものと考えられる。

SI28住居跡は、先にみたように8世紀後葉頃に位置づけられる。土師器 I 類と須恵器で構成され、土師器坏 I I類、鉢 I E類、甕 I Be類、須恵器坏 Ba類・甕 B類などが含まれる。土師器坏は平底であり、体部外面には段や稜をもたない。ただし、土師器坏には丸底で体部外面に段が認められる I D類も含まれるものとみられる。須恵器坏は底部の切り離しがヘラ切りで再調整はなく、口径に対し底径がやや小さいものである。須恵器甕は平底で最大径が胴部上半にある。

このSI28住居跡と重複し、これよりも古いSI154住居跡では土師器坏 I Ha類、土師器甕 I Af類、須恵器坏 A類が出土している。土師器坏は丸底で体部外面に段はみられず、須恵器坏は口径に対して底径がやや大きく、底部の切り離しがヘラ切りで手持ちケズリが施されている。これらの資料と類似するものは高清水町観音沢遺跡第3号住居跡出土土器(加藤・阿部 1980)、瀬峰町大境山遺跡2号住居跡出土土器(阿部・赤沢 1983)に認められ、前者は8世紀前半頃、後者は8世紀中頃に位置づけられている。これらの年代からみると、SI154住居跡は8世紀前半～中頃と考えられる。SI155住居跡は年代の手がかりになる遺物が出土していないが、新旧関係から前述のSI28住居跡(8世紀後葉頃)とSI154住居跡(8世紀前半～中頃)の間に位置づけられるので、SI155の年代は概ね8世紀前半～後葉頃と考えられる。SI100住居跡では須恵器高台坏 A・B類が出土しており、また、SI130住居跡では体部外面の段が沈線状で内面には屈曲が認められない土師器坏 I E類、内面に黒色処理が施されないいわゆる関東系土器とみられる土師器坏 I Hb類がある。SI100の高台坏やSI130の土師器坏類と類似する資料は、矢本町赤井遺跡SI502住居跡出土土器(佐藤・益子・菅原 2001)に認められる。これは8世紀前葉頃に位置づけられており、SI100・SI130住居跡も同様に8世紀前葉頃と推定される。SI144住居跡では土師器坏 I E類があることから概ね8世紀代かと思われる。SI54住居跡には関東系土器とみられる土師器甕 I Ea類があり、これは赤井遺跡出土資料(前掲書)などと比較すると8世紀前半頃と考えられ、SI54住居跡の年代は8世紀前半頃と推定される。

SI123住居跡は、先に検討したように9世紀初めか前葉頃に位置づけられる。土師器 I 類(非ロクロ調整)・II類(ロクロ調整)、須恵器で構成され、土師器鉢 I F類、甕 I Eb類、壺 II類、甕 II B類、

須恵器甕C類などが含まれる。土師器にロクロ調整のものが加わる。土師器鉢は非ロクロ調整で、内面には黒色処理が施されている。土師器壺は須恵器長頸壺もしくは広口壺を模倣したもの（ロクロ調整）とみられる。土師器甕は非ロクロ調整とロクロ調整があり、前者は最大径が胴部の上半にある球胴形タイプである。

SI90住居跡は土師器甕ⅡA類のみであるが、河北町新田東遺跡出土土器（柳沢・茂木・西村2003）や10世紀前後の土器群（村田 1995b）などから考えると9世紀後葉～10世紀前半頃のものともみられ、SI90住居跡は概ねこの頃の年代と推定される。SI109住居跡からは底部の切り離しが回転糸切りで再調整がみられない土師器坏Ⅱ類・須恵器坏Bb類などが出土しており、これらの坏類からSI109住居跡は9世紀後葉頃の年代が考えられる。SI120住居跡では土師器甕（類不明）、須恵器鉢が出土しているが、破片資料に底部が回転糸切りの須恵器坏が含まれることやSI123住居跡（9世紀初めか前葉頃）出土土器の特徴などを考え合わせると、SI120住居跡は9世紀前葉頃に位置づけられるものとみられる。

これら以外の住居跡は年代の推定が難しい。ただ、住居跡の位置や構造などからみると、SI52住居跡は8世紀前葉頃に位置づけられるSI154住居跡の東隣にあり、住居の方向・構造などが類似することから、8世紀前葉頃の可能性がある。これ以外のSI03・SI10・SI11・SI15・SI23・SI53・SI87・SI89・SI101・SI103住居跡については、破片資料を観察するとロクロ調整の土師器が含まれていないことから、少なくとも9世紀以降に下ることはないとみられるが、年代の限定はできない。

以上の検討から、住居跡の年代は概ね以下のようにまとめられる。

- 6世紀後半：SI12・SI80・SI151
- 7世紀（前半）：SI02A・B・SI27・SI30・SI33・SI51・SI85・SI106・SI108・SI110・SI119・(SI122)・SI148・(SI150)・(SI152)・(SI153)・SI158
- 8世紀前葉～後葉：SI28・(SI52)・SI54・SI100・SI130・(SI144)・SI154・SI155
- 9世紀～10世紀前半：SI90・SI109・SI120・SI123
- 年代不確定 ・ 6世紀後半～8世紀代か
 : SI03・SI10・SI11・SI15・SI23・SI53・SI87・SI89・SI101・SI103

b. 鍛冶遺構

SX135は前述したように10世紀前葉頃と考えられる。SX121はロクロ調整で底部に手持ちヘラケズリを施した土師器坏Ⅱ類や甕ⅡA・C類などがあり、これらは概ね9世紀後半～10世紀前葉頃に位置づけられるものである。このことから、SX121は9世紀後半～10世紀前葉頃の年代と推定される。SX125は9世紀前葉頃のSI120住居跡よりも古いのが、若干出土した破片資料をみると回転糸切りの土師器坏やロクロ調整の甕破片などがあることから、9世紀初めかもしくは前葉頃に位置づけられるものと考えられる。

SX24については、遺物の出土がなく他の遺構との重複関係もないため時期は不明である。SX25も

出土遺物がないため年代が明確でない。ただ、SX25よりも古いSX26竪穴状遺構からは口径が11.6 cm・器高が3.9cmほどの小型の赤焼土器坏（第71図-1）が出土しており、年代はおおよそ10世紀半ば頃と考えられる（村田 1995b）。したがって、SX25は少なくとも10世紀半ば以降の時期に位置づけられ、さらに、規模や形態が他の鍛冶遺構としたものとは異なっていることから、中・近世以降の可能性も考えられる^(註7)。SX131は7世紀前半頃のSI27住居跡より新しいが、遺物が出土していないので時期は不明である。

以上から、SX125は9世紀初めかもしくは前葉頃、SX121は9世紀後半～10世紀前葉頃、SX135は10世紀前葉頃、SX25は10世紀半ば以降（中世もしくは近世以降の可能性はある）に位置づけられる。SX24・SX131については時期の限定ができない。

c. 竪穴遺構

竪穴遺構は4基とも年代が不明である。谷斜面の下に位置するSX35・SX39からは鉄滓が出土しているが、年代を示す遺物は出土していない。また、SX37・SX104についても出土遺物がなく、時期の特定ができない。ただし、後述するように、SX25鍛冶遺構と関連する可能性もあるので、10世紀半ば～中・近世以降に位置づけられる可能性がある。

d. 竪穴状遺構・周溝状遺構

出土遺物から年代を位置づけできるのは、SX26・SX96・SX115のみである。SX25鍛冶遺構と重複するSX26は、前述したように周溝底面から10世紀半ば頃とみられる赤焼土器坏が出土していることから、この頃の年代が推定される。SX96は床面からロクロ調整の土師器坏、SX115は床面から頸部に段をもつ土師器球胴甕が出土しており、前者は概ね9世紀代、後者は7世紀代とみられる。他遺構との重複関係からは、SX116・SX117・SX118・SX128・SX134が7世紀代と推定される。これら以外については不明である。

e. 柵列跡

年代については明確でない。ただ、丘陵の上方に位置するSA60柵列跡よりも低い場所に分布する7世紀（前半）もしくは8世紀代のいずれかの時期の竪穴住居群に伴う可能性が考えられる。

f. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は4棟あるが、これらのうちSB50建物跡に伴うとみられるSD32溝跡は7世紀代のSI33住居跡よりも新しく、少なくともこの住居跡の埋没以降に構築されている。SB149についてもSI11・SI23住居跡よりも後世のものである。他の建物跡についても柱穴や規模がほぼ類似しており、竪穴住居跡の年代よりはさらに後世のものと考えられる。年代を限定できる遺物はないが、これらの建物跡は柱穴の形態や堆積土の特徴などから、中・近世以降である可能性が高いと考えられる。

g. 柱穴列

SA70・SA157柱穴列、南東部柱穴群は、遺構の重複関係からみても最も新しく柱穴も小さいことから、前述の掘立柱建物跡と同様に、より後世の遺構である可能性が高い。

h. 土壇

SK129は先にみたように7世紀代の土器が比較的まとまって出土しており、この時期に位置づけら

れる。SK126は重複関係から7世紀代のSI119住居跡よりも古い時期のものである。SK36・SK45・SK44a.bなどの土壌については、遺物や他の遺構との関係からもその年代が限定できない。

以上の検討を踏まえて主な遺構の年代を整理すると、以下のようにまとめられる。

- 6世紀後半：SI12・SI80・SI151住居跡
- 7世紀（前半）：SI02A・B・SI27・SI30・SI33・SI51・SI85・SI106・SI108・SI110・SI119・
(SI122)・SI148・(SI150)・(SI152)・(SI153)・SI158住居跡
SX115・SX116・SX117・SX118・SX128・SX134竪穴状・周溝状遺構
(SK126)・SK129土壌
- 8世紀前葉～後葉：SI28・(SI52)・SI54・SI100・SI130・(SI144)・SI154・SI155住居跡
- 9世紀～10世紀前半：SI90・SI109・SI120・SI123住居跡
SX121・SX125・SX135鍛冶遺構
SX96竪穴状遺構
- 10世紀半ば～中・近世以降：SX25鍛冶遺構
(SX35)・(SX37)・(SX39)・(SX104) 竪穴遺構
(SB50)・(SB71)・(SB149)・(SB156) 掘立柱建物跡
(SA70)・(SA157)・(南東部柱穴群) 柱穴列
SX26竪穴状遺構
- 年代不確定
 - ・6世紀後半～8世紀代か
：SI03・SI10・SI11・SI15・SI23・SI53・SI87・SI89・SI101・SI103住居跡
SA60柵列跡
 - ・9世紀以降か
：SX24・SX131鍛冶遺構

これらの年代的な位置づけから、Ⅰ期：6世紀後半～7世紀（前半）、Ⅱ期：8世紀前葉～後葉、Ⅲ期：9世紀～10世紀前半、Ⅳ期：10世紀半ば～中・近世以降、と大きく4期に捉えることができる。これらに基づいて、次に各時期の特徴・様相をみていく。

2) 各時期の様相について

【Ⅰ期】6世紀後半～7世紀（前半）頃

敢 集落の概要

この時期に位置づけられる住居数は19軒と最も多い。中央の谷を挟んで、丘陵の南斜面と谷に面する南斜面の2ヶ所に概ねまとまっている。それぞれの地点には一辺約7mの比較的大型の住居が2軒ずつ（SI12・SI30、SI110・SI119）あり、その周辺部にやや小型の住居が分布するような状況を示している（第124図）。また、北区域の大型住居SI110・SI119は並んで位置しており、同時存在の可能性も考えられる。

これらの住居がある斜面は傾斜があり、12°～16°の角度がある。住居は、以前に造り出された住居の平坦面を再利用する場合が多く、SI12やSI119付近ではほぼ同じ位置で3～4軒の重複が認められる。表土層がそれほど厚くない斜面であり、また、基盤が凝灰岩であることからこうした地形利用の仕方になったものと思われる。

これらの住居跡の上方に位置するSA60柵列跡は、この時期に伴う可能性もある。標高20mの等高線にほぼ沿うように南北方向に直線的に延びている。丘陵斜面部の竪穴住居群を丘陵頂部（北側）から遮蔽する施設であったと捉えても良いかもしれない。

この時期の出土土器類には、後述するように、東北部の特徴をもった土器器類が多く含まれている。土器を見る限りでは、この時期の集落は東北部社会との繋がりが強かったものと考えられる。

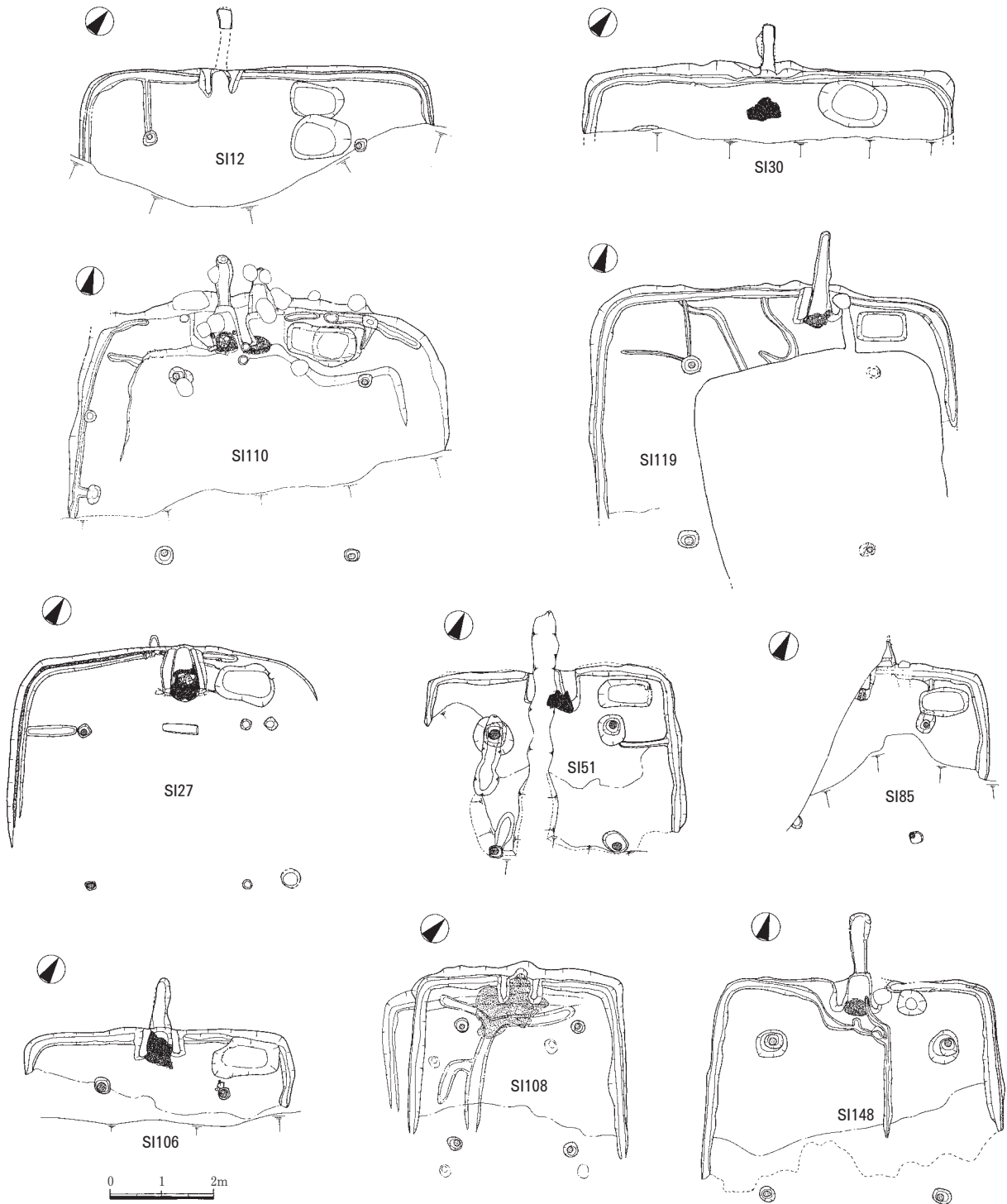
柵 竪穴住居跡の特徴（第4表・第116図）

〔平面形・規模・方向〕削平によって住居の南側を失っており、全体の平面形がわかるものはない。ただ、残存する部分から推測すると、全体形は方形・隅丸方形を基調としていると考えられる。規模は、残存する一辺からみると3.5m前後から7.2mの間に収まる。一辺7m前後の比較的大型の住

第4表 竪穴住居跡一覧

方向：カマドが残存する場合は、その軸を基準にした北方向に対する角度。カマドが不明な場合は、北もしくは北西辺を基準→()付き。

| 時期 | 住居Na | 平面形 | 規模 (東西×南北) (m) | 方向 | 柱 穴 | | カ マ ド | | | | | 貯 蔵 穴 | | 周溝 | 備 考 | | |
|-------|-------|-------------|----------------------|--------|--------|-----|-------|------------|---------------|-----------|------------|------------|---------|-------|-----|-----------------------------|-------------------------------|
| | | | | | 主柱穴 | 壁柱穴 | 位置 | 側 壁 | 焚き口部 (礎など) | 支脚 (礎) | 煙道長 (m) | 煙出し ビット | 位置 | | | 形 状 | 有 無 |
| I 期 | SI12 | 隅丸方形? | 6.9×2.7以上 | 西41° | (4?) | × | 北辺 | 黄褐色土 | × | × | 1.1 | ビット無 | カマド右新田? | 不整楕円形 | ○ | ○ | SI80・SI151と重複。 |
| | SI180 | 方形? | 6.7×2.2以上 | 西47° | (4?) | × | 北西辺 | 残存せず | — | — | (1.1) | — | カマド右 | 不整楕円形 | ○ | ○ | SI12・SI151と重複。 |
| | SI151 | 方形? | 4.0以上×1.0以上 | 西48° | 不明(削平) | × | 北西辺 | 残存せず | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | × | SI12・SI80と重複。 |
| | SI02A | 隅丸方形? | 4.8×? | (東70°) | (4?) | × | 東辺? | — | — | — | — | — | カマド左1? | 不整円形 | ○ | × | |
| | SI02B | 隅丸方形? | 5.2×? | (東70°) | (4?) | × | 東辺? | — | — | — | — | — | カマド左1? | 不整円形 | ○ | × | |
| | SI27 | 隅丸方形? | 5.7×3.4以上 | 西37° | 4 | × | 北辺 | 黄褐色土 | 礎左右2 | × | 短(削平か) | — | カマド右1 | 不整楕円形 | ○ | ○ | 旧カマド・貯蔵穴あり。間仕切り溝か。SI52と重複。 |
| | SI30 | 方形? | 7.0×1.3以上 | 西41° | 不明(削平) | × | 北西辺 | 残存せず | — | — | 0.9 | ビット無 | カマド右1 | 楕円形 | ○ | × | カマドは人為的に破壊か。 |
| | SI33 | 方形? | 2.9以上×2.0以上 | 西38° | 不明 | × | 北西辺 | 地山削り出し | × | × | 不明(削平) | — | カマド右1 | 隅丸長方形 | × | × | 北西隅のみ残存。 |
| | SI51 | 方形? | 4.9×3.7以上 | 西35° | 4 | × | 北西辺 | 地山削り出し | × | × | 不明(削平) | — | カマド右1 | 隅丸長方形 | ○ | × | |
| | SI85 | 方形? | 2.2以上×3.5以上 | 西20° | (4?) | × | 北辺 | 褐色土 | 礎左右2? | × | 0.5以上 | (調査区外) | カマド右 | 隅丸長方形 | ○ | × | カマドは人為的に破壊か。 |
| | SI106 | 方形? | 5.2×1.5以上 | 西40° | (4?) | × | 北西辺 | 地山削り出し+褐色土 | × | × | 1.0 | ビット無 | カマド右1 | 隅丸長方形 | ○ | × | |
| | SI108 | 方形? | 4.2×3.9以上 | 西46° | 4 | × | 北西辺 | 暗褐色土 | × | × | 短 | — | 無 | — | ○ | × | SI158と重複。 |
| | SI110 | 隅丸方形? | 7.2×5.3以上 | 西15° | 4 | × | 北辺 | 褐色土 | 礎左右2? | × | 1 | ○ | カマド右1 | 隅丸長方形 | ○ | × | 旧カマド・貯蔵穴あり。SI148と重複。 |
| | SI119 | 隅丸方形? | 7.0×4.6以上 | 西14° | 4 | × | 北辺 | 明黄褐色土 | × | 左右2 | 1.0 | ビット無 | カマド右1 | 隅丸長方形 | ○ | × | SI120・SI150・152・153と重複。間仕切り溝? |
| | SI122 | 方形? | 3.5×1.5以上 | 西7° | (4?) | × | 北辺 | にぶい黄褐色土 | × | × | 0.8 | ビット無 | 不明 | — | ○ | × | 北西隅のみ残存。 |
| | SI148 | 方形? | 5.8×4.4以上 | 西18° | 4 | × | 北辺 | 暗褐色土 | × | × | 1.2 | ビット無 | カマド右1 | 不整円形 | ○ | 一部 | SI110と重複。カマドから排水溝。 |
| | SI150 | 方形? | 5.0×3.7以上 | 西16° | 4 | × | 北辺 | 残存せず | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | × | SI119・120・152・153と重複。削平著しい。 |
| | SI152 | 方形? | 2.7以上×3.0以上 | 西5° | 4 | × | 北辺 | 残存せず | — | — | (0.7) | ビット無 | 不明 | — | ○ | × | SI119・120・150・153と重複。削平著しい。 |
| SI153 | 方形? | 4.0以上×2.5以上 | — | 4 | × | 北辺 | 残存せず | — | — | — | — | カマド右1 | 不整円形 | ○ | × | SI119・120・150・152と重複。削平著しい。 | |
| SI158 | 方形? | 4.0以上×3.5以上 | 東46° | 4 | × | 北東辺 | 残存せず | — | — | — | — | 無? | — | ○ | × | SI108と重複。 | |
| II 期 | SI28 | 正方形? | 6.4×6.1 | 西30° | 4 | ○ | 北辺 | 暗褐色土 | × | × | 1.3 | ○ | カマド右1 | 隅丸長方形 | ○ | ○ | 焼失住居か。SI154・SI155と重複。 |
| | SI52 | 隅丸方形? | 3.1×2.2以上 | 西55° | (1?) | × | 北西辺 | にぶい黄褐色土 | × | × | 短(削平か) | — | 無 | — | ○ | × | SI27と重複。 |
| | SI54 | 方形? | 4.7×2.9以上 | 西70° | (4?) | × | 西辺 | にぶい黄褐色土 | × | × | 短 | — | 無 | — | ○ | × | 北辺拡張か? |
| | SI100 | 正方形? | 4.0以上×4.0以上 | 東36° | 検出されず | × | 北東辺 | 残存せず | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | × | |
| | SI130 | 方形? | 4.0×? | 西30° | 不明(削平) | × | 北辺 | 褐色土 | 土器右1 | × | 短 | — | 不明 | — | ○ | × | カマド両側に小ビット。 |
| | SI144 | 方形? | ?×? | — | 4 | × | (北辺?) | — | — | — | — | — | 2? | 長方形? | 不明 | — | × |
| SI154 | 方形? | 3.5×2.8以上 | 西47° | 1? | × | 北辺 | 褐色土 | × | × | 削平 | ○? | 無? | — | ○ | × | SI28と重複。 | |
| SI155 | 方形? | 6.5以上×6.6以上 | (西30°) | 4 | × | 不明 | — | — | — | — | — | 不明 | — | 不明 | — | × | SI28と重複。ごく一部残存。 |
| III 期 | SI90 | 長方形? | 5.1×2.3以上 | 東15° | (4?) | × | 北辺 | 黄褐色土+(礎) | × | × | 削平 | — | 不明 | — | × | × | 床面に炭化物多い。 |
| | SI109 | 正方形? | 5.7×5.0以上 | 東38° | 4 | × | 北東辺 | 残存せず | — | — | (1.0) | ○ | 不明 | — | ○ | × | 床面に小溝2条。 |
| | SI120 | 隅丸方形? | 4.6×4.5以上 | 西23° | 4 | × | 北辺 | にぶい黄褐色土+礎 | 礎あり | × | 1.0 | ○ | 無 | — | ○ | × | カマド底面に礎数。排水溝。SI119はかと重複。 |
| | SI123 | 隅丸方形? | 3.6×3.1 | 西75° | 検出されず | × | 西辺 | 黄褐色土 | × | × | 1.2 | ○ | 無? | — | ○ | × | 床面に小溝あり。 |
| その他 | SI03 | 方形? | 4.3×0.6以上 | (東70°) | 4 | × | 東辺? | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | × | | |
| | SI10 | 方形? | 3.8以上×3.5以上 | (東5°) | 4 | × | 北辺? | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | × | 間仕切り溝あり。 | |
| | SI11 | 方形? | 4.6×4.0以上 | (東42°) | (4?) | × | 北東辺? | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | × | SI23と重複。 | |
| | SI15 | 方形? | 3.7以上×? | (西28°) | (4?) | × | 北辺? | — | — | — | — | 不明 | — | 一部 | ○ | | |
| | SI23 | 隅丸方形? | 2.8以上×? | (西45°) | (4?) | × | 不明 | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | ○ | 住居北西隅のみ残存。 | |
| | SI53 | 隅丸方形? | 3.5×2.2以上 | 西45° | 4 | × | 北西辺 | 地山削り出し | × | 左1 | 0.8 | ビット無 | カマド右1 | 楕円形 | ○ | × | |
| | SI87 | 方形? | ?×3.2以上 | 東50° | (4?) | × | 東辺 | にぶい黄褐色土 | × | × | 短(削平か) | — | (カマド右) | (楕円形) | ○ | × | 貯蔵穴は既存カマドより古。西側調査区外 |
| | SI89 | 正方形? | 4.9×4.5 | 東31° | 2 | ○ | 北東辺 | 残存せず | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | ○ | |
| | SI101 | 正方形? | 4.0以上×3.8以上 | (東34°) | 4 | × | 北東辺? | — | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | × | |
| | SI103 | 方形? | 4.5×1.5以上 | 東43° | (4?) | ○ | 北東辺 | 残存せず | — | — | — | — | 不明 | — | ○ | × | 床面に小溝2条。 |



第116図 I期の主な竪穴住居跡

居跡は、南区域の斜面にあるSI12・SI30、谷に面する北区域の斜面にあるSI110・SI119であり、2つの地点にそれぞれ分布している。ほかの住居跡は、これらの大型住居跡を中心に比較的まとまる傾向を示している。

カマドが確認できた住居は、ほとんどが丘陵頂部側にカマドを設置しており、これを基準にみると住居の軸は北に対しては西側へ15°～50°前後振れている。

〔支柱穴・壁柱穴〕支柱穴は住居平面形の対角線上に4個を配置するのが基本形である。次のII期に

みられるような壁柱穴を伴うものや支柱穴が1個と考えられるようなタイプのものは認められない。

〔カマド〕 前述したように、カマドは丘陵頂部側の住居北壁もしくは北西壁に付設されており、東向きのものはみられない。カマドの造り替えは2軒（SI27・SI110）あるが、いずれもすぐ隣に新設している。

カマドの構造をみると、住居壁面に取り付く形で内側に付設し、燃焼部側壁は地山凝灰岩粒・小礫を含むにふい黄褐色～暗褐色土を積み上げて構築しているものが多い。地山削り出しによるものは2軒（SI33・SI51）認められる。焚き口部に粘板岩礫を据えているものは3軒（SI27・SI85・SI110）みられた。また、燃焼部底面に棒状の礫を1対据えて支脚にしているものは1軒（SI119）ある。煙道は削平されているものが多いが、残存しているものでは底面が奥壁の段から緩やかに傾斜して上がり、長さが1m前後になる場合（SI12・SI30・SI80・SI106・SI110・SI119・SI148）が多い。煙道が外へ延びないものが1軒（SI108）あるが、この住居がある地点は斜面の角度がきつく、表土下がすぐ基盤の凝灰岩になることから、あえて長い煙道を造らなかったものと考えられる。煙道の先端に煙出しピットが付くものは1軒（SI110）のみである。また、カマド燃焼部から排水溝とみられる小溝（開渠）が延びているものが1軒（SI148）ある。

なお、カマドを人為的に取り壊したとみられる住居が2軒（SI30・SI85）ある。SI85は右側壁が残っておらず、燃焼部付近からは完形に近い土師器大型坏などの土器が出土している。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴とみられる土壌が検出された住居跡は13軒ある。このうち、カマドとの位置関係が確認できるものは12軒である。これらはいずれもカマド右側に付設されており統一的である。形状は隅丸（長）方形状（SI33・SI51・SI85・SI106・SI110新旧・SI119）、楕円形状（SI12・SI27・SI30）、不整形形状（SI148）などである。一方、貯蔵穴とみられる土壌がないものは2軒（SI108・SI158）ある。

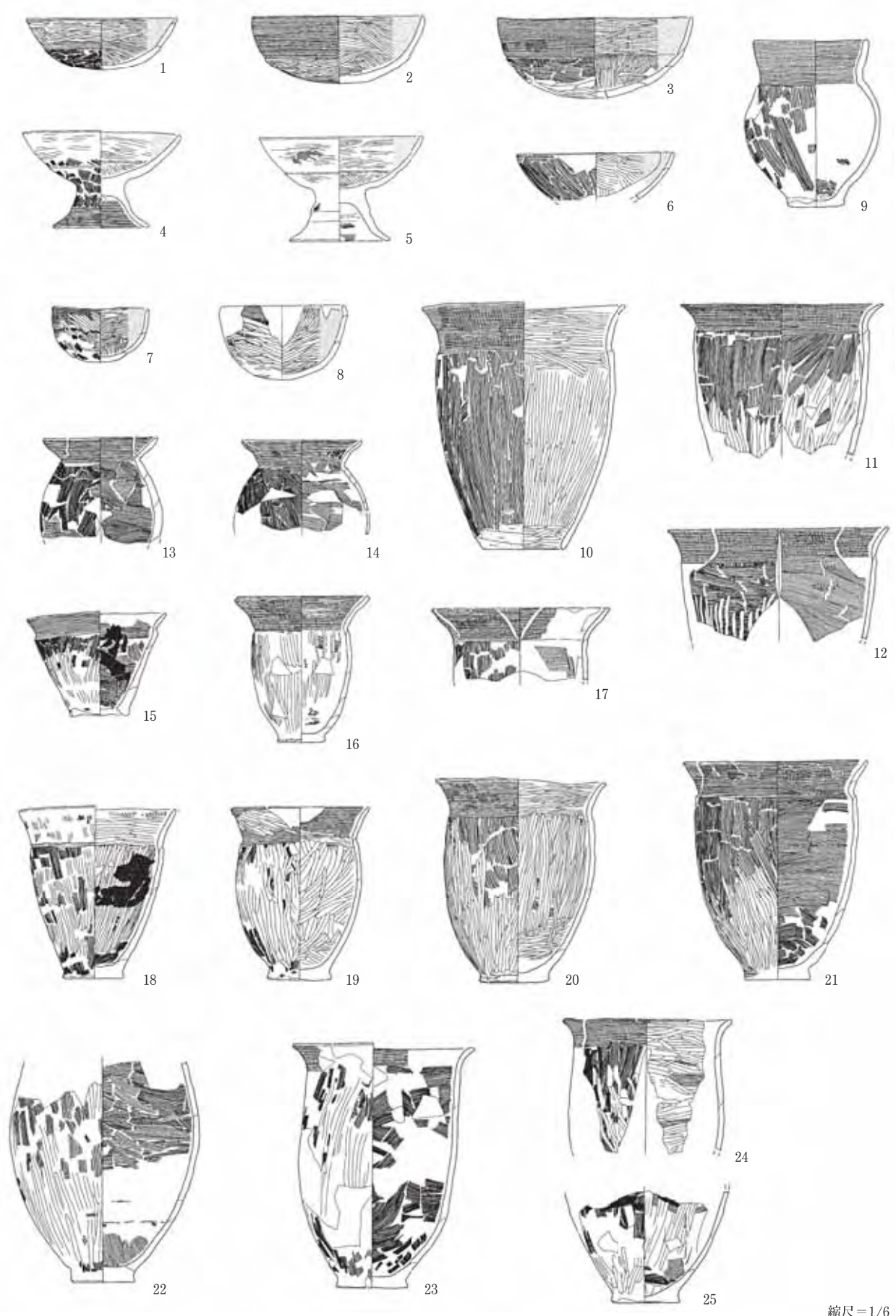
〔周溝・壁材痕〕 周溝は大半の住居で検出されており、認められなかったものは1軒（SI33）のみである。周溝に沿って幅5cm前後の壁材痕が確認された例は4軒（SI12・SI27・SI80・SI148）であり、割合は少ない。

〔その他〕 周溝から支柱穴へ延びる間仕切りとみられる小溝が検出されたものが4軒（SI12・SI27・SI51・SI119）ある。周溝から北西隅柱（SI12・SI27・SI119）、北東隅柱（SI51）へと延びるものである。

Ⅱ 東北北部の特徴をもつ土器類

この時期の出土土器類で特徴的なことは、東北北部の土師器の特徴（宇部 2002、八木 1998）を備えている土器類が多く含まれている点である。図示した土器のうち、少なくとも4割程度占めており、その比率は高い。土師器坏・高坏・壙・壺・甑など、ほとんどの器種に認められる。

東北北部の土師器の特徴について、宇部氏は、①ヘラミガキで調整されるものが東北南部と比較して多い、②坏は全体に大型で深く、内湾器形が多い、③長胴甑は体部の最大径をその上半に有し、底部が台形状に突き出るものも多く、口唇部が角状のものが目立つ、④鋸歯状沈線文、横走沈線文などの有文土師器が組成に加わる、などの点を上げている（宇部 2002）。また、八木氏は甑の内面が丸



第117図 東北部の特徴をもつ土器類

縮尺=1/6

みをもち底中央が薄くなるなどの点を指摘している（八木 1998）。

こうした特徴をもつ土師器とこの他に東北北部の土師器と共通する特徴をもつものを抽出してそれらの一部を第117図に示した。

1の坏は丸底で、内外面に段・屈曲をもち、口縁部は直線的に外へ開くものである。外面の調整は口縁部がヨコナデの後ヘラミガキ、体～底部はハケメである。2・3の大型坏はやや長い口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、外面調整は口縁部がヨコナデであるが、2の体～底部はヘラケズリの後にヘラミガキ、3はハケメの後にナデ・ヘラミガキが施されている。脚部に段がつく4・5の高坏は、岩手県水沢市今泉遺跡（八重樫・相原 1981）、同県花巻市古館Ⅱ遺跡（菊池・光井ほか 1986）などに類例がみられる。

7・8の壺は、外面調整にはハケメの後にヘラミガキが施されており、8は口縁部が内湾する器形である。9の壺は、口縁部が直立気味で中位からやや屈曲しており、13・14の小型甕や16・17の甕も同様の屈曲がある。このように口縁部が屈曲する壺や甕類は、岩手県水沢市膳性遺跡（高橋 1982）や盛岡市台太郎山遺跡（杉沢・半沢ほか 2001、杉沢・阿部ほか 2003）など、北上盆地の遺跡に類例が認められる。

甕や甕類は、胴部外面の調整をみると、11～25のようにハケメの後に縦方向のヘラミガキが施されているものが多い。また、甕類の中には16・17のように口縁部が長く、口縁端部が平坦に仕上げられ、上端が浅く窪むものがある。さらに、19～23・25のように底部の内面が丸い長胴甕も認められる。

これらの他にも東北北部の土器の特徴を持ったものが多く含まれており、こうした土器群の様相は当期の大きな特徴である。

【Ⅱ期】8世紀前葉～後葉頃

敢 集落の概要

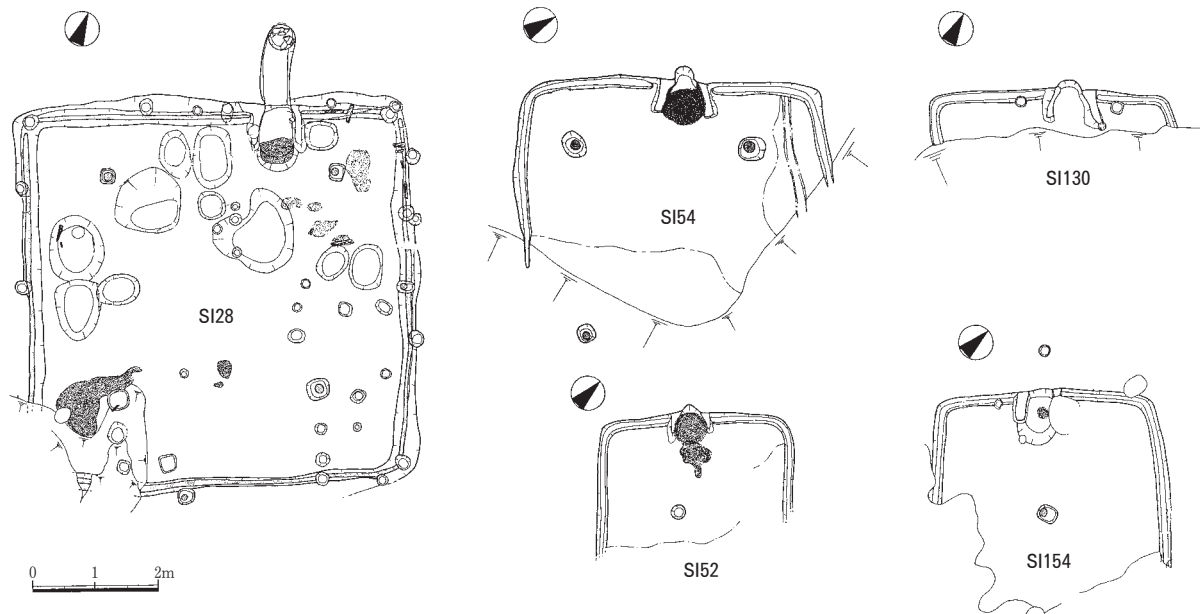
この時期に位置づけられる住居数は8軒で、Ⅰ期に比べて大幅に少ない。南区域の南斜面に5軒（SI28・SI52・SI54・SI154・SI155）、北区域の谷に面する南斜面に2軒（SI130・SI144）、そしてⅠ期にはみられなかった丘陵頂部に1軒（SI100）分布する（第124図）。南区域南斜面部の住居には重複関係をもつもの（SI28・SI154・SI155）がある。年代的には、8世紀前葉～中頃に位置づけられるものが5軒（SI52・SI54・SI154・SI100・SI130）、8世紀後葉頃が1軒（SI28）、8世紀前葉～後葉頃が2軒（SI144・SI155）である。

SA60柵列跡は、その位置から考えるとⅠ期だけでなくⅡ期段階の可能性も残っている。

この時期の出土土器類には、Ⅰ期に多く認められた東北北部の特徴を備えた土器はほとんど認められない。一方、いわゆる「関東系土器」とみられる土器類がわずかに含まれている。

柑 竪穴住居跡の特徴（第118図）

〔平面形・規模・方向〕平面形は方形状を呈しており、正方形に近いもの（SI28）もある。規模が大



第118図 II期の主な竪穴住居跡

きいのはSI28住居跡で、一辺が6.4mである。SI155住居跡はこのSI28よりも大型である可能性が高いが、残存が不良で全体の大きさは不明である。ほかは一辺が3.1~4.7mほどで一回り小さく、3.1~3.5mの小形のものが2軒(SI52・SI154)ある。I期のように一辺7m前後の大型のものは含まれていない。カマドが確認できるのは5軒あるが、これを基準に見ると住居の軸は、I期と同様、北もしくは北西方向である。

〔支柱穴・壁柱穴〕確認できた住居跡では、支柱穴4個をもつもの4軒(SI28・SI54・SI144・SI155)、1個とみられるもの1軒(SI154)である。ほかは削平のために明確ではない。ただ、SI52はSI154と同様、住居跡の中央付近に1個だけあるパターンの可能性もある。両者とも1辺が3.1~3.5mの小型住居である。壁柱穴が認められるものは1軒(SI28)ある。ほかに、支柱穴は不明であるがカマド両脇に小ピットが認められるものが1軒(SI130)ある。こうした構造の住居跡はI期ではみられないものである(註8)。

〔カマド〕カマドが残存しているものは5軒(SI28・SI52・SI54・SI130・SI154)である。カマドの構造をみると、燃烧部側壁は地山凝灰岩粒・小礫を含むにぶい黄褐色~暗褐色土を積み上げて構築しており、芯材に礫を用いているものや地山削り出しによるものは認められなかった。焚き口部に土器を据えているものが1軒(SI130)ある。煙道が残るのはSI28のみで、先端には煙出しピットが取りついている。SI52・SI54・SI130は煙道が短い、これは削平されたかもしくはI期のSI108と同様の理由のためと考えられる。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴と言える土壌が検出されたのは1軒(SI28)のみである。カマド右側に付設されている。3軒(SI52・SI54・SI154)には付設されていない。

〔周溝・壁材痕〕周溝はいずれの住居跡でも認められる。これらのうち、周溝に壁材痕が認められたのは壁柱穴を伴うSI28のみである。

〔その他〕焼失住居とみられるものが1軒(SI28)ある。ほかには認められない。

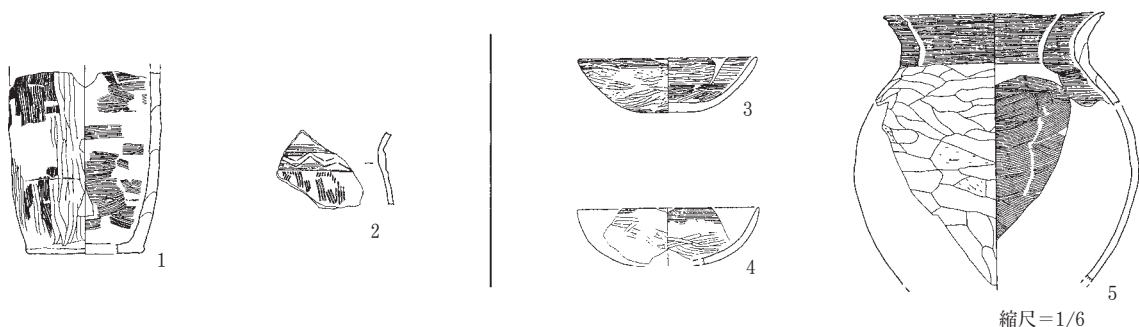
Ⅱ 東北北部の特徴を持つ土器と関東系土器（第119図）

I期段階にみられた東北北部と共通する土器はこのII期段階でも認められるが、数はごくわずかである。I期とは際立った違いである。図示した資料では、SI28住居跡出土の土師器甕（第119図-1）のみである。この土師器甕は円筒状の胴部を持ち、外面調整にはハケメの後に縦方向のヘラミガキが施されている。

なお、時期は不明確であるが、中・近世以降と考えられるSD32溝跡の堆積土から、頸部に鋸歯状の沈線文がみられる土師器甕の破片（第119図-2）が出土している。岩手県や青森県内では出土例が多いが^{（註9）}、宮城県内でも矢本町赤井遺跡（佐藤・益子・菅原 2001）、志波姫町御駒堂遺跡（小井川・小川 1982）、瀬峰町大境山遺跡（阿部・赤沢 1983）で出土している。前2者の年代は概ね7世紀末から8世紀前半頃のものである。

一方、このII期段階には、数はごく少量であるが他の土師器類とは胎土や焼成、調整などが異なるいわゆる関東系土器（第119図-3～5）が含まれている。3はSI130住居跡出土の土師器坏である。平底風丸底で、体部はやや直線的に外傾するものである。外面調整は口縁部がヨコナデ、体～底部がヘラケズリの後に粗いヘラミガキ、内面調整は口縁部がヨコナデ、体～底部はナデの後に粗いヘラミガキである。内面には黒色処理は認められない。胎土はやや砂粒が多く、赤褐色を呈している。また、4はSI101住居跡堆積土出土資料であるが、外面や内面の調整のあり方は3の坏と類似する。5の土師器甕はSI54住居跡出土である。胴部が球胴状で、口縁部が直立して中位から外傾する器形をもつ。外面の調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラケズリの後に幅広ミガキ状の調整、内面は口縁部がヨコナデ、胴部はナデ・ヘラナデが施されている。胎土や焼成は前述の3の坏に類似する。

こうした特徴を持つ土師器は、矢本町赤井遺跡（佐藤・益子・菅原 2001）などの出土資料に認められるものである。これらの土器の年代は、8世紀前葉もしくは前半頃と考えられる。



第119図 東北北部の特徴を持つ土器と関東系土器

【Ⅲ期】 9世紀～10世紀前半頃

敢 集落の概要

この時期に位置づけられる住居数は4軒と最も少ない。谷に面した斜面にあるが、北区域の南斜面には3軒がややまとまっている（第125図）。住居跡の年代は9世紀初めもしくは前葉頃（SI120・SI123）、9世紀後葉頃（SI109）、9世紀後葉～10世紀前半頃（SI90）と推定される。

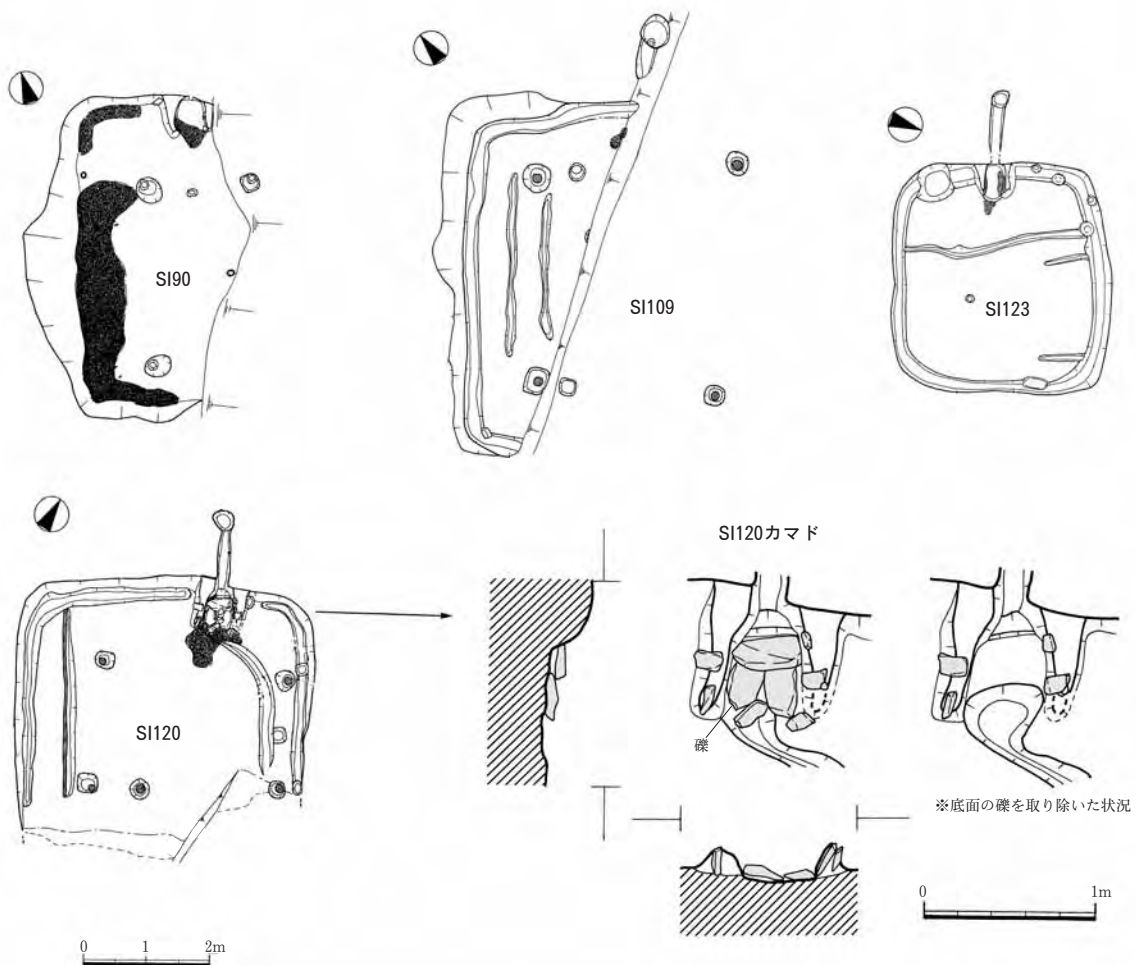
この段階には新たに鍛冶施設が設けられている。SX125鍛冶遺構は9世紀初めかもしくは前葉頃、SX121・SX135鍛冶遺構は9世紀後半～10世紀前葉頃の年代である。3基ともこの時期の住居跡に隣接した場所にある。

柑 竪穴住居跡の特徴（第120図）

〔平面形・規模・方向〕全体形が分かるのはSI123のみであるが、これは隅丸方形状を呈する。大きさは3.6×3.1mで比較的小型である。ほかの住居跡も方形状を呈するとみられ、大きさは一辺3.5～5.7mほどである。住居の方向は、カマドを基準にしてみると、北向き（SI120）、東向き（SI90・SI109）、西向き（SI123）があり、I・II期が概ね北もしくは北西向きをとるのは対照的である。

〔支柱穴・壁柱穴〕支柱穴が4個認められたものは3軒（SI90・SI109・SI120）、1個も認められなかったものは1軒（SI123）である。壁柱穴はいずれも伴っていない。

〔カマド〕カマドは4軒とも残存しており、北壁（SI120）、北東壁（SI90・SI109）、西壁（SI123）にそれぞれ付設されている。カマドの構造をみると、燃烧部側壁は地山凝灰岩粒・小礫を含むにふい黄褐色～暗褐色土を積み上げて構築しており、芯材に礫を用いているものは2軒（SI90・SI120）である。地山削り出しによるものはなかった。燃烧部底面に数個体の粘板岩礫を敷く特異な例が1軒



第120図 III期の竪穴住居跡とSI120カマド

のようにやや大きな炉跡をもつものがあり、これらはそれぞれの性格や年代的な違いなどを反映しているものとも考えられる^(註10)。

棺 土師器球胴甕について

9世紀初めかもしくは前葉頃に位置づけられるSI123住居跡から、第114図-63の土師器球胴甕が出土している。この球胴甕は、岩手県の8世紀～9世紀初め頃の遺跡にみられる、いわゆる「赤彩球胴甕」(杉本 2001)と器形が類似するものである。同様のものは、宮城県内でも志波姫町糠塚遺跡(小井川・手塚 1978)などで出土しており、特に、21号住居跡堆積土出土の赤彩球胴甕とは器形がよく似ている。

Ⅲ期の初め頃までは、ごくわずかではあるが東北北部の特徴を持つ土器が含まれるものと考えられる。

【Ⅳ期】10世紀半ば～中・近世以降

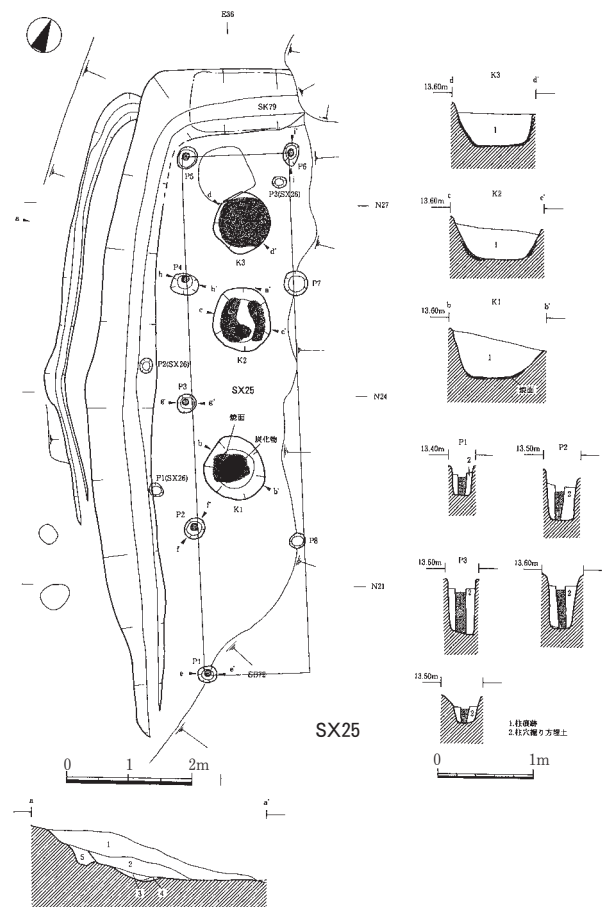
集落は10世紀半ば頃には消えている。その後、ある時期に谷部に面した斜面に鍛冶関連施設(SX25など)が置かれたものとみられる(第125図)。

掘立柱建物が建てられるのは、この段階かもしくはさらにそれ以降の可能性が高いと考えられる。

鍛冶遺構について(第122図)

この段階に位置づけられるSX25鍛冶遺構は、桁行8.08m・梁行1.45mほどの細長い掘立柱建物内に、炉跡(地下構造)とみられる壁面が焼けた土壌状の遺構(径90～96cm、深さ42～50cm)が3基連なって設置されているものである。この土壌状の3基は、いずれも掘り窪めて焼成された後にすぐ埋め戻されたような状況を示している。これは、防湿効果を得るために造られた炉床の地下構造ではないかとみられる。このような構造を持つものはⅢ期の鍛冶遺構にはなく、大きく異なっている。しかし、この鍛冶遺構の全体がどのような構造になるのか、また、年代など詳細については不明である。

このSX25鍛冶遺構の近くには、堅穴遺構としたものが4基(SX35・SX37・SX39・SX104)分布する。4基とも部分的な検出でありいずれも年代の特定ができないが、SX35・SX39堅穴遺構では床面もしくは床面近くから鉄滓が出土してい



第122図 Ⅳ期の鍛冶遺構

る。これらのすぐ西側にはSX37竪穴遺構があり、構造的にはSX35と類似するようである。SX104竪穴遺構は前3者と比べると小型ではあるが、近接した位置にある。これらは位置関係からみて、SX25鍛冶遺構と関連する施設とも考えられる。ある時期、谷部の斜面には鍛冶に関わる施設がおかれていたと想定することも可能かと思われる。

【時期が不確定な遺構】(第123図)

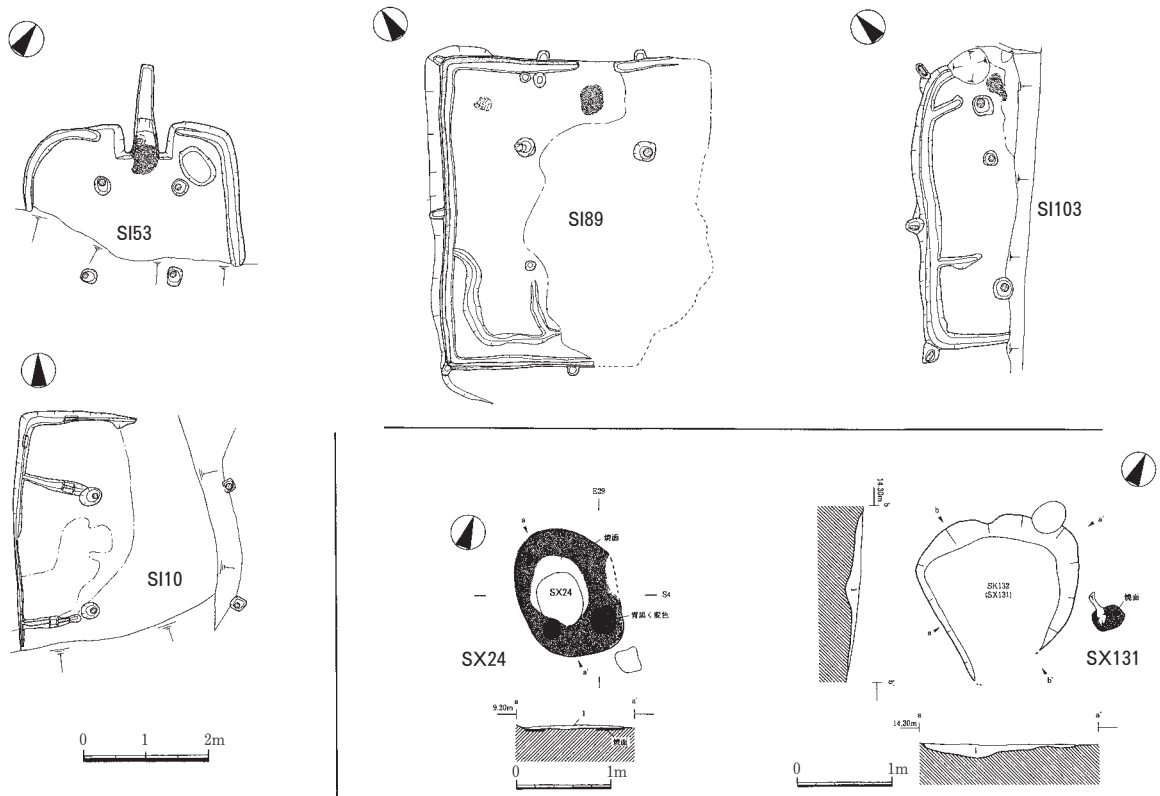
時期が不確定な遺構のうち、竪穴住居跡と鍛冶遺構について取り上げておく。

a. 竪穴住居跡

全部で10軒ある。前述したように、削平が大きく及ぶか出土遺物がほとんどないため、年代の位置付けができないものであるが、遺物の中にロクロ調整による土師器が含まれていないことから、9世紀以降には下らないとみられる。

〔平面形・規模・方向〕平面形は隅丸形状・方形を基調とするとみられる。全体がほとんど不明な1軒(SI23)を除くと、大きさは一辺5m以下であり、一辺7mを超えるような住居跡はない。カマドの位置が確認できたのは4軒で、これを基準にしてみると、住居の方向は北西向き1軒(SI53)、東向き3軒(SI87・SI89・SI103)である。

〔支柱穴・壁柱穴〕支柱穴は4個とみられるものが大半であるが、壁柱穴を伴う1軒(SI89)は、2個のみしか検出されていない。壁柱穴はこのSI89と他にSI103で認められる。いずれも壁柱穴は規則的な配置を取っている。



第123図 時期が不確定な遺構

〔カマド〕大半が削平されており残っていない。カマドの位置が確認できた4軒（SI53・SI87・SI89・SI103）のうち、カマド側壁が残存するのは2軒（SI53・SI87）のみである。SI53は地山削り出し、SI87はにぶい黄褐色土によって構築されている。SI53のみ燃焼部に棒状の礫を支脚に据えており、0.8mほど延びる煙道が残っている。なお、SI89は燃焼部とみられる焼面しか残っていなかったが、防湿効果を得るためかその下は大きく掘り込まれて礫混じり土が充填されている。

〔貯蔵穴〕確認できたのは2軒（SI53・SI87）のみである。カマド右側にある。

〔周溝・壁材痕〕周溝はいずれにおいても検出されている。これらのうち、壁材痕が確認されたのは4軒（SI10・SI15・SI23・SI89）で、SI89は壁柱穴が伴うものである。

〔その他〕周溝から支柱穴へ延びる間仕切りとみられる小溝が検出されたものが1軒（SI10）、また、北辺の周溝部から短い小溝が2条のびているものが1軒（SI103）ある。

b. 鍛冶遺構

SX24・SX131鍛冶遺構の2基は、年代の限定ができないものである。2基とも南区域の南斜面に位置する。SX24は炉跡の一部とみられる遺構が単独で検出されたものである。また、SX131は炉床の一部とみられる楕円形状の焼面（長軸約30cm）がわずかに残存するものである。鉄滓などが出土したすぐ西隣の浅い土壌状の遺構（SK132）は、（工房などの）床面の低い部分のごく一部残存したものと考えられる。

以上から、I区遺構の各時期の様相をまとめると、以下のように要約することができる（第124図・第125図）。

I期：6世紀後半～7世紀（前半）頃

集落は6世紀後半頃から形成され、7世紀前半頃には竪穴住居の数が増加し、集落の規模も大きくなったものと考えられる。

この段階の土器の特徴をみると、東北部と共通するものが多く、この時期の集落は東北部社会とのつながりが強いことが伺える。

II期：8世紀前葉～後葉頃

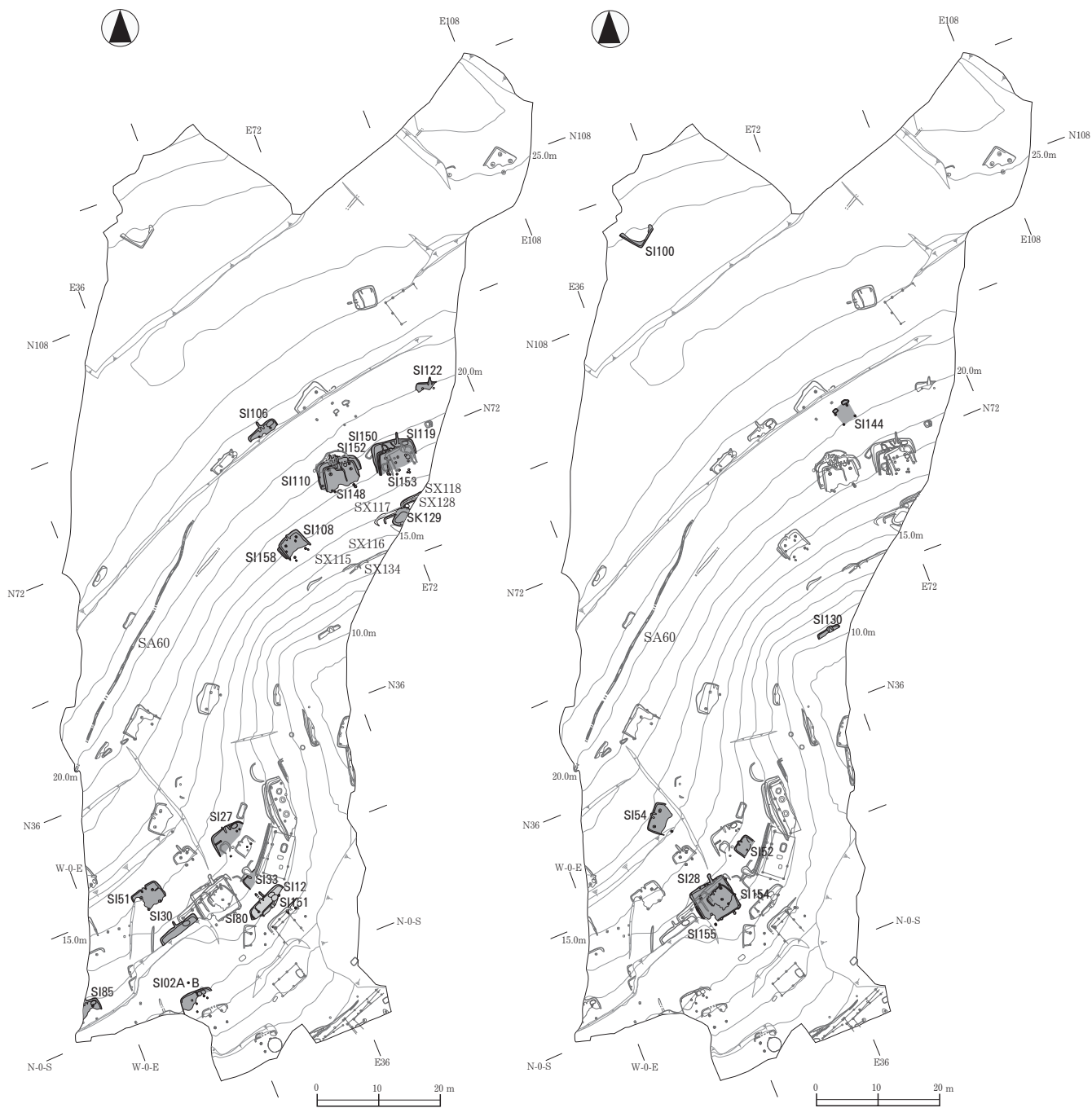
I期からII期の間、7世紀後半から8世紀初め頃に属するとみられる竪穴住居跡は検出されていない。集落はこの頃には一旦途絶えたものと考えられる。その後、8世紀前葉頃には再び集落が営まれることになる。関東系土器はこの段階の集落に伴うものとみられる。ただ、I期のように、集落の規模が大きくなることはなかったようである。

III期：9世紀～10世紀前半頃

その後も集落は継続して営まれているが、住居の数は少ない。9世紀初め頃には集落内に新たに鍛冶炉が出現する。集落は10世紀前半頃までは存続する。

IV期：10世紀半ば～中・近世以降

集落は10世紀半ば頃にはなくなるが、その後、ある時期にSX25などの鍛冶関連施設が置かれたものとみられる。掘立柱建物が建てられるのはこの段階かもしくはさらにそれ以降の



I期：6世紀後半～7世紀（前半）頃

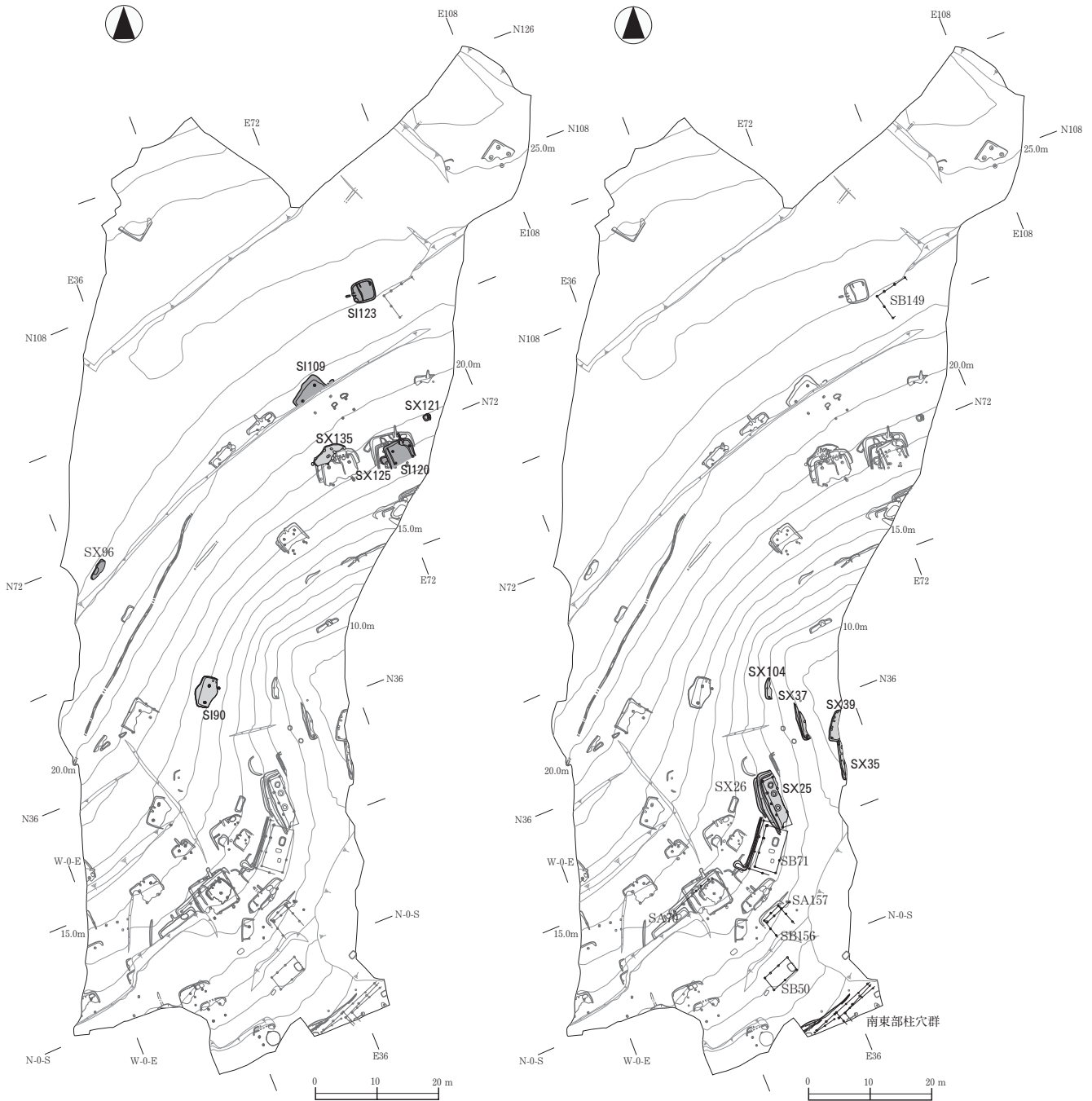
II期：8世紀前葉～後葉頃

第124図 I区遺構の変遷図敢

可能性が高い。

2. II区

低地部のII区は基本的には湿地帯（谷地）であるが、丘陵裾部に近い区域から水田跡と溝跡、河川跡が検出されている。SX40水田跡は全体が灰白色火山灰（10世紀前葉頃）に被われており、10世紀前葉頃には廃絶している。田面は4枚検出されたが、丘陵裾部を取り巻くように展開している。地形からみて水田域はごく限定された範囲と考えられる。この時期の竪穴住居はI区にも認められるが、



III期：9世紀～10世紀前半頃

IV期：10世紀半ば～中・近世以降

第125図 I区遺構の変遷図柑

当期の集落は丘陵の別地点にも分布している可能性がある。

SD41溝跡は灰白色火山灰層を切っており、また、堆積土から中世陶器片が出土していることから、中世期のものとみられる。溝跡は方形状に展開しているが、中世期の水田跡の区画が溝状に残っている可能性もある。

スクモ層が広がる湿地部の堆積層（スクモ混じり灰白色火山灰）からは墨書土器が2点出土している。土師器坏と須恵器坏の体部外面に墨書が施されたものである。底部の切り離しはいずれも回転糸切りで再調整は認められず、9世紀末～10世紀前葉頃に位置づけられる資料とみられる。

なお、古代の水田跡は近くの八幡遺跡（須田・相原 2004）でも発見されているが、当地域では数少ない検出例である。

3. Ⅲ区

Ⅲ区は、狭い丘陵頂部の一端が北へ張り出す区域にある。その丘陵頂部～北緩斜面にかけて、竪穴住居跡1軒・竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡5棟、柱穴列1条、焼成遺構1基が検出されている。

1) 遺構の年代について

SI1001竪穴住居跡からは比較的多く遺物が出土しており、これらの土器類の中には底部の切り離しが回転糸切りの土師器坏や底部の再調整に手持ちヘラケズリが認められる須恵器坏、内面に回転ハケメ調整をもつ土師器甕などが含まれている。堆積層上部には灰白色火山灰層がわずかではあるが確認されている。これらの特徴から、その時期については9世紀前葉頃と考えられる。

住居跡の可能性のあるSX1012竪穴状遺構は、このSI1001住居跡の床面下から検出されているので9世紀前葉かもしくはそれよりも古い。ただし、出土遺物がないので詳細は不明である。

SB1002～SB1004・SB1008掘立柱建物跡、SA1007柱穴列については、いずれも遺物の出土がなく時期は不明である。ただ、SB1010建物跡が灰白色火山灰を含むSI1001住居跡堆積土よりも新しく、このSB1010建物跡と同様に、ほかの建物跡も柱穴の大きさが30～40cmと小型で形状が不整円形や楕円形状を呈していることから、これらの掘立柱建物跡は中近世以降に位置づけられる可能性が高い。

北緩斜面で検出されたSX1006焼成遺構は、堆積層上部に灰白色火山灰層が含まれていることから、10世紀前葉よりは古い古代の遺構と考えられる。しかし、遺物が出土していないので詳しい年代については不明である。

2) 竪穴住居跡と焼成遺構について

SI1001竪穴住居跡はその半分が調査区外へと延びており、全体の状況は把握できない。主柱穴を4個配した住居跡とみられ、カマドはⅠ区の住居跡にもあるように、焚き口部分の側壁に角礫を芯材として利用している。焚き口部には大型の垂角礫があるが、カマドの構築材ではなく、台石などに利用されていたものであろう。SI1001住居跡の下からはSI1012竪穴状遺構が検出されたが、住居跡かもしくは工房などの可能性（床面に焼面）もある。

SX1006焼成遺構はこの竪穴住居跡から50mほど離れた北緩斜面にある。古代の遺構とみられるが、竪穴住居跡と同時期かどうかは不明であり、近辺から遺物も出土していないのでその性格についても明確ではない。少なくともⅠ区で鍛冶遺構としたもの（炉跡）とは形状が異なっている。Ⅰ区の場合は円形もしくは不整楕円形状で、断面形は皿状のものが多い。SX1006は隅丸長方形で、断面形は箱形である。

なお、竪穴住居跡や焼成遺構は、地形的にみるとこのⅢ区付近にはまだ点在する可能性がある。

3) その他

SI1001竪穴住居跡の堆積土から縄文土器の細片が2点出土している。時期などは不明であるが、Ⅰ区と同様、Ⅲ区の近辺にも縄文時代の遺構が存在する可能性がある。

る7世紀(前半)頃、この地域は東南北部と北部の狭間にあたり、両方の要素を持っていたことが明らかになっている(佐藤 2003c・2004)。既に述べたように、本遺跡のこの時期の住居跡出土土器類は、東南北部だけでなく岩手県北上川中流域など東北部と共通する特徴を持つ土器類が多く認められる。このような特徴はこの時期の集落の様相を端的に表すものであり、律令体制以前の時期には、集落が東北部社会と強い繋がりを持っていたことを示している。

本遺跡では、7世紀後半～8世紀初め頃に位置づけられる竪穴住居跡は検出されていない。集落は一旦途絶えたようである。これは、「牡鹿柵」の設置や「牡鹿郡」の成立などに関わり、律令政府の影響が徐々に及んできたことと連動しているのかもしれない。しかし、8世紀前葉頃になると再び竪穴住居が姿を現している。注目すべきことは、竪穴住居跡から出土した土器の中にわずかではあるが関東系土器が含まれており、前代とは変わって東北部の特徴をもつ土器がほとんどみられなくなるなど^(註11)、土器の様相も大きく変化していることである。官衙の造営やこれに関連した関東地方からの人的・物的な移動など、当地域の歴史的な動向(佐藤 2004)を背景として集落が再形成され、集落にも大きな変容があったことを示唆しているものと考えられる。

その後、9世紀に入っても竪穴住居は継続して営まれている。しかし、住居数は大幅に減少しており、以前のように規模が拡大することはなかったようである。ただ、9世紀段階の竪穴住居が丘陵北側(Ⅲ区)でも確認されており、竪穴住居はこの丘陵一帯に点在しているかもしれない。一方、この段階になると集落の中に新たに鍛冶炉が認められるようになる。10世紀前葉には複数の鍛冶炉が営まれており、集落での鍛冶作業が普及していたものとみられる。また、10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰に覆われた水田跡が丘陵の裾部で検出されており、限られた範囲ではあるが稲作も認められる。

集落の痕跡は10世紀前半頃をもって消えている。その後、この地区には前段階の鍛冶遺構とは規模・構造の異なる鍛冶施設(中・近世以降か)が置かれることになる。掘立柱建物もこの段階以降に建てられたものであろう。

角山遺跡の時期的変遷や特徴は以上のようにまとめられる。これらの中でも特に重要な点は、沿岸部地域では7世紀前半期の規模の大きい集落はこれまで未確認であり、この時期の集落の様相が明確につかめなかったことから、律令体制以前のこの地域の集落の様相を知る上で本遺跡の集落のあり方が貴重な事例になるということであろう。また、8世紀前葉以降の集落の様相の変化が律令体制による社会的変動の反映とも受け取れることから、この地域の歴史的動向と連動した集落の変容の一端が多少なりとも明らかになったことではないかと考えられる。

註1 以下でA類とした小型のものには「鉢」と器形が類似するものがあるが、これらには火にかけられた痕跡や内面に炭化物の付着などが認められるものがあることから、ここでは甕として分類した。

註2 この土器は、カマドの構築材として使用された「円筒形土器」に形態的に類似するが、外面調整はハケメ後にヘラミガキ、内面調整はナデであり、調整は他の土師器甕と同様である。また、円筒形土器が6世紀後半～7世紀代のものであるのに対し、この土器は8世紀後半のものであり年代的にも異なっていることから、ここでは土師器甕の一つの形態と考えた。

- 註3 赤彩された球胴甕は、岩手県の北上川流域などで数多く出土しており、年代的には7世紀～8世紀代に認められる(杉本 2001)。
- 註4 ただ、削平が住居床面近くまで及んでいたことや他住居跡との重複があることから、資料の一括性にはやや疑問が残るとも報告されている(小井川・手塚 1978)。
- 註5 本遺跡と共通する古墳時代後期の土器を出土する岩手県水沢市今泉遺跡、同市膳性遺跡、滝沢村高柳遺跡などでは、黒曜石製石器が出土している(佐藤 1998)。
- 註6 住居跡の新旧関係は、SI153→SI152→SI150→SI119である。7世紀代と推定されるSI119は、住居掘り方埋土などをみるとSI150廃絶後にこれをすぐ埋め戻して構築している可能性がある。また、これより古いSI152・SI153も住居の方向がSSI19・SI150と同じでほぼ同位置にあることから、それぞれの住居跡には時期差がさほどないものと考えられる。
- 註7 安間氏によれば、古代の鍛冶炉は地下構造を持たない、単に地面を掘り込んだだけのものが一般的であるという(安間 1995)。そうした点からみれば、後述するように本遺跡のSX25は年代的に下るとみても矛盾はない。
- 註8 矢本町赤井遺跡本谷地区SI200住居跡は主柱穴1個の構造で、他に壁柱穴とみられる柱穴が2個ある。年代は7世紀末～8世紀初頭頃と考えられている(佐藤・益子・菅原 2001)。また、カマド両脇にピット(柱穴)があるものは、志波姫町御駒堂遺跡第13号・第15号住居跡(小井川・小川 1982)などにみられる。これらは8世紀前半頃の年代が与えられている。
- 註9 鋸歯文は東北中部から北部の馬淵川流域、北上川流域を中心とした太平洋側に分布し、年代は7世紀を中心に8世紀前半までは存続するという(宇部 2000)。
- 註10 集落遺跡で検出される大型の鍛冶炉のうち、径が70cmを超えるような大型のものについては、鍛冶炉かどうか疑問があるという指摘もある(安間 1995)。長軸が1mを超えるSX121・SX125については、その性格を再検討する余地があるかもしれない。
- 註11 村田氏は、7世紀代の宮城県域は北の地域ほど東北部とのかかわりが深く、その南限が山王遺跡や栗遺跡が位置する仙台平野であり、東北部とのつながりを示す土師器はその地域に律令支配が及ぶと次第に消失すると指摘している(村田 2002)。角山遺跡でもその傾向が迎れる。

第V章 ま と め

角山遺跡は、宮城県北東部の太平洋沿岸部を流れる北上川下流域に位置する大規模な遺跡である。遺跡の時期は、縄文時代、(弥生時代)、古墳時代後期、奈良・平安時代、中近世以降にわたるが、主体は古墳時代後期と奈良・平安時代である。

三陸縦貫自動車道「矢本石巻道路」建設計画に伴い、平成13年度から当遺跡の調査を継続的に行ってきたが、これまで述べてきたように貴重な成果が得られている。以下、要点をあらためてまとめておく。

1. 標高25mほどの小丘陵の頂部～南斜面部（Ⅰ・Ⅲ区）にかけて、竪穴住居跡42軒、鍛冶遺構6基、焼成遺構1基、竪穴遺構4基、竪穴状遺構・周溝状遺構24基、柵列跡1条、掘立柱建物跡9棟、柱穴列7条、土壇32基、溝跡9条などが検出された。また、丘陵南側の低地部（Ⅱ区）からは灰白色火山灰（10世紀前葉頃）に覆われた水田跡が発見された。

竪穴住居跡は6世紀後半～7世紀前半頃のもの为主体であり、また、8世紀前葉～10世紀前半頃に位置づけられるものがある。鍛冶遺構の一部は9世紀初めかもしくは前葉頃および9世紀後半～10世紀前葉頃、水田跡は10世紀前葉以前のものである。ほかの鍛冶遺構や竪穴遺構、掘立柱建物跡などは10世紀半ば以降、中近世の可能性が有る。

2. 出土遺物には、土師器・須恵器・赤焼土器などの土器類、土製品（丸玉・支脚ほか）、金属製品（鉄鏃・刀子ほか）、石製品・石器（砥石・すり石ほか）、鍛冶関連遺物（羽口・鉄滓）などが出土している。

土器類は6世紀後半～7世紀前半頃を中心としており、その多くは竪穴住居跡に伴うものである。これらの中には、東北北部の土器類と共通する特徴を持つものが多く含まれており、当時のこの地域の社会を考える上で貴重な資料である。また、8世紀前半頃の関東系土器も含まれており、当時の動勢を知る上で注目すべきものである。

遺物はこれらの他、縄文土器（早期末）・石器、弥生土器、古墳時代中期の土器・石製模造品などが若干数出土している。

3. 遺構は小さな谷部を含む丘陵斜面部～頂部に分布しており、調査区外にもさらに広がっていると考えられる。集落は6世紀後半～7世紀前半頃を主体としており、7世紀後半から8世紀初め頃には集落は一旦途絶える。8世紀前葉頃には再形成されて、その後は継続的に営まれているが、規模は縮小している。集落は10世紀前半頃までは存続する。9世紀前葉および10世紀前後頃には鍛冶炉が設けられており、集落内で鉄製品の加工や修理なども行っていたものと考えられる。

4. 当遺跡が位置する北上川下流域は奈良時代には律令国家の北辺にあたり、東北北部や律令社会との関わりをみていく上で重要な地域である。当地域の調査例はまだ少ないだけに、周辺地域とあわせてさらに検討していく必要がある。

引用・参考文献

- 相原康二 1992 「古代の集落と生活－蝦夷の集落」『新版 古代の日本 ⑨東北・北海道』pp.137～160（角川書店）
- 相原康二・鈴木優子ほか 1982 「江釣子村鳩岡崎遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XV-1 XV-2』岩手県文化財調査報告書第70集
- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺に分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』第76巻第1号 pp.1～65
- 吾妻俊典 2004 「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第6号 pp.187～196
- 阿部正光・赤沢靖章 1983 『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集
- 阿部 恵・佐藤和彦 1998 『桃生城跡VI』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第23冊（宮城県多賀城跡調査研究所）
- 阿部 恵・吾妻俊典 2002 『桃生城跡X』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第27冊（宮城県多賀城跡調査研究所）
- 安間拓巳 1995 「古代の鍛冶炉－その形態および鍛冶工程との関連について－」『考古学研究』第42巻第2号 pp.88～102
- 2000 「古代の鍛冶遺構」『製鉄史論文集』pp.135～158（たたら研究会編）
- 飯塚武司 1991 「鉄鋳－その時代性と地域性－」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』X pp.251～273
- 石川俊英・相沢清利 1989 『柏木遺跡Ⅰ・Ⅱ－古代製鉄炉の発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第17集
- 稲野裕介・稲野彰子 1989 『藤沢遺跡』北上市文化財調査報告書第54集
- 今泉隆雄 1992 「律令国家とエミシ」『新版 古代の日本 ⑨東北・北海道』pp.163～198（角川書店）
- 岩見和泰・佐藤憲幸 1991 「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第140集
- 井上克弘・山田一郎 1990 「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田－大湯浮石”の同定」『第四紀研究』第29巻2号 pp.121～130
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題－」『山形県の考古と歴史』
- 宇部則保 2000 「古代東北地方北部の沈線文のある土師器」『考古学ジャーナル』No.462 pp.8～12（ニュー・サイエンス社）
- 2002 「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン－市川金丸先生古希記念献呈論文集－』pp.247～265
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』pp.277～329
- 加藤道男・阿部博志 1980 「桓観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書－Ⅳ－』宮城県文化財調査報告書第72集
- 菊地逸夫 1991 『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第4集
- 菊池利和・光井文行ほか 1986 『古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書 東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第103集
- 君島武史 2002 『立花南遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告書第49集
- 桐生正一 1987 『高柳遺跡』岩手県滝沢村文化財調査報告書第7集
- 工藤哲司ほか 1982 『栗遺跡』仙台市文化財調査報告書第43集
- 熊谷公男 2004a 『蝦夷の地と古代国家』日本史リブレット11（山川出版社）
- 2004b 『古代の蝦夷と城柵』歴史ライブラリー178（吉川弘文館）
- 小井川和夫・手塚 均 1978 「敢糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）』宮城県文化財調査報告書第53集
- 小井川和夫・小川淳一 1982 「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第83集
- 古代城柵官衙遺跡検討会（編）1998 『東北地方の古代集落』第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム資料集
- 後藤勝彦 1968 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚（Ⅰ）」『仙台湾周辺の考古学的研究』pp.1～20（宮城教育大学歴史研究会編）
- 後藤秀一・村田晃一・岩見和泰ほか 1994 『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第163集
- 後藤秀一・村田晃一ほか 2001 『山王遺跡八幡地区の調査2－古墳時代後期SD2050B河川跡編－』宮城県文化財調査報告書第186集
- 齊藤彰裕 1997 『住社遺跡』角田市文化財調査報告書第19集
- 齊藤彰裕 2001 『角田郡山遺跡Ⅸほか』角田市文化財調査報告書第26集
- 齊藤彰裕・中村方彦 1991 「住社遺跡」『住社遺跡・荒町遺跡・寺前遺跡・田町裏遺跡』角田市文化財調査報告書第

7 集

- 斎藤 淳ほか 1982 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—XVI—(猫谷地遺跡)』岩手県文化財調査報告書第71集
- 斎野裕彦・結城慎一 1994 『南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集
- 佐久間光平・山田晃弘・吉野 武 2003 『一里塚遺跡—吉岡東官衙遺跡—』大和町文化財調査報告書第12集
- 佐々木清文 1994 「岩手県の製鉄遺跡柑」『紀要XIV』pp.35~44 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木稔(編著) 2002 『鉄と銅の生産の歴史 古代から近世初頭にいたる』(雄山閣)
- 佐藤 洋 1997 『養種園遺跡発掘調査報告書—伊達家別荘跡の調査』仙台市文化財調査報告書第214集
- 佐藤敏幸 1993a 『須江窯跡群 代官山遺跡—奈良、平安時代の須恵器生産遺跡—』河南町文化財調査報告書第6集
- 1993b 『須江窯跡群 関ノ入遺跡—陸奥海道地方最大の須恵器生産地—』河南町文化財調査報告書第7集
- 2003a 「多賀城創建にいたる黒川以北十郡の様相—海道地方—」『第29回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.77~92
- 2003b 「赤井遺跡第29・34次調査」『第29回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.281~284
- 2003c 「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方敢—古代牡鹿地方の土器様式—」『宮城考古学』第5号 pp.97~124
- 2004 「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方柑—古代牡鹿地方の歴史動向—」『宮城考古学』第6号 pp.139~158
- 佐藤敏幸・益子 剛・菅原優子 2001 『赤井遺跡I—牡鹿柵・郡家推定地—』矢本町文化財調査報告書第14集
- 佐藤則之・佐藤憲幸ほか 1997 『山王遺跡V—八幡・伏石地区—』宮城県文化財調査報告書第174集
- 佐藤嘉広 1998 「東北地方—特に中・北部の古墳期の石器のあり方—」『考古学ジャーナル』No.433 pp.9~14
(ニュー・サイエンス社)
- 志間泰治 1958 「宮城県角田町住社遺跡発見の竪穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』第43巻第4号
- 集落遺跡検討会編 2004 『岩手県土師器集成(4~8世紀)』
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』pp.1~38 (宮城県多賀城跡調査研究所)
- 菅原祥夫 2004 「東北古墳時代終末期の在り地社会論」『原始・古代日本の集落』pp.148~168 (同成社)
- 杉沢昭太郎・半沢武彦ほか 2001 『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書 盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集
- 杉沢昭太郎・阿部真澄ほか 2003 『台太郎遺跡第23次発掘調査報告書 盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査 分冊
I・II』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第415集
- 杉本 良 2001 「赤彩球胴甕再考敢」『北上市立博物館研究報告』第13号 pp.1~8
- 鈴木勝彦・高橋誠明 1990 『国指定史跡 名生館官衙遺跡X—平成元年度発掘調査概報—』宮城県古川市文化財調査報告書第9集
- 鈴木 功 1996 「福島県内における鍛冶遺構について」『論集しのぶ考古 目黒吉明先生頌寿記念』pp.389~397
- 須田良平 2002 『沢田山西遺跡—三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書I—』宮城県文化財調査報告書第189集
- 須田良平・相原淳一 2004 『沢田山西遺跡ほか—三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書III—』宮城県文化財調査報告書第196集
- 高橋義介・金子佐知子・佐藤綾子 2001 『台太郎山遺跡第18次発掘調査報告書 盛岡市新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集
- 高橋誠明 2003 「多賀城創建にいたる黒川以北十郡の様相—山道地方—」『第29回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.59~75
- 高橋信雄 1992 「細越I遺跡」『農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書36
- 高橋与右エ門ほか 1982 『水沢市膳性遺跡—金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書—』
岩手県埋文センター文化財調査報告書第34集
- 高橋義行・吉野久美子 2004 『大貝窯跡群』利府町文化財調査報告書第12集
- 千田幸生ほか 2001 「杉の堂遺跡(第22次)」『水沢市遺跡群範囲確認調査 平成12年度発掘調査概報』
岩手県水沢市文化財調査報告書第35集
- 辻 秀人 1990 「東北古墳時代の画期について(その2)—7世紀史の理解をめざして—」『考古学古代史論攷』pp.323~347
- 寺島文隆・磐瀬清雄・松本武史・能登谷信康ほか 1997 『原町火力発電所関連遺跡調査報告VII』
福島県文化財調査報告書第336集
- 東北学院大学考古学研究部ほか 1979 『仙台市中田町 栗遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第14集

- 土佐雅彦 1986 「1塩・鉄の生産 B鉄」『日本歴史考古学を学ぶ(下)』pp.19~36(有斐閣)
- 仲田茂司 1994 「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその背景」『考古学雑誌』第79巻第3号 pp.56~91
1997 「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学』第4号 pp.109~120
- 中野裕平 2004 『関ノ入遺跡—工業団地・住宅団地用地造成に伴う発掘調査概報—』河南町文化財調査報告書第13集
- 西野 修 1997 『徳丹城跡—第42次発掘調査—』
1998 『徳丹城跡—第43次発掘調査—』
- 丹羽 茂・小野寺祥一郎・阿部博志 1981 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書—V—』
宮城県文化財調査報告書第77集
- 半澤武彦 2003 『飯岡沢田遺跡第3次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第418集
- 平沢英二郎・手塚 均 1980 「佐野遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第63集
- 藤村博之・伊藤 裕 1996 『米泉館跡』宮崎町文化財調査報告書第5集
- 益子 剛 2001 「赤井遺跡出土の東北地方北部の土師器について」『宮城考古学』第3号 pp.77~86
- 松本秀明 1984 「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」『宮城の研究1 考古学篇』pp.7~52(清文堂)
- 光井文行 1990 「岩手県にみられる古代の北海道系土器について—頸部に段を持つ壺形土器を中心に—」『紀要X』pp.1~10
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 三好秀樹・藤村博之 1999 『一里塚遺跡—第44・47次発掘調査報告書—』宮城県文化財調査報告書第179集
- 村田晃一 1995a 「宮城県における6・7世紀の土器様相」『東国土器研究』第4号 pp.1~13
1995b 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号 pp.47~72
1997 「陸奥中部にみる北との交流」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会秋田大会シンポジウムII
資料集
1998 「栗岡式土器の成立と展開」『考古学の方法』第2号 pp.36~41(東北大学文学部考古学研究会)
2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺—移民の時代—」『宮城考古学』第2号 pp.45~80
2002 「7世紀集落研究の視点敢—宮城県山王遺跡・市川橋遺跡を中心として—」『宮城考古学』第4号 pp.49~71
- 桃生町史編纂委員会 1996 『桃生町史』第5巻通史編
- 森 貢喜 1983 「佐内屋敷」『東北自動車道遺跡調査報告VIII』宮城県文化財調査報告書第93集
- 八重樫良宏・相原康二 1981 「今泉遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—IX—(水沢地区)』
岩手県文化財調査報告書第60集
- 八木光則 1998 「陸奥における土師器の地域性」『岩手考古学』第10号 pp.57~66
2004 「蝦夷考古学の地平」『古代蝦夷と律令国家』pp.3~46(高志書院)
- 柳沢和明・茂木好光・西村 力 2003 『新田東遺跡—三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書II—』
宮城県文化財調査報告書第191集
- 山口了紀・鈴木恵治・吉田 洋 1981 「II. 玉貫遺跡」『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書—I—』
岩手県埋文センター文化財調査報告書第18集
- 山田一郎・庄司貞雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』
pp.97~102
- 横山英介 1988 「擦文時代の開始年代修正について」『考古学ジャーナル』No.292 pp.33~38(ニューサイセンス社)
- 渡辺康弘 1986 「古代刀子の拵について」『史観』115冊 pp.34~46